
IS ~ world braker ~

山嵐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS world breaker

【Nコード】

N1074X

【作者名】

山嵐

【あらすじ】

『俺はどんなものでも受け止めきれぬ、めっちゃ広い心があるぜ！』

と、という人以外は見ないでください…。
頑張って書いていこうと思います

よろしく願いしますm) (m

12月3日、キーワードを増やしました

幼少時代、兵器として育てられた真宮 信 《まみや しん》。

実験中に研究所から逃げだし、親切で優しい老夫婦にひろわれ、なんとか人並みに生活していた。

しかし、高校受験の日、女性しか動かさないはずのパスワードスーツ、IS インフィニット・ストラトス に触れると、まるで自分の体のように動かせてしまう。

しかも、その日を境に予知夢を見始めるわ、育ての親が旅にでるわ、大変なことになる。

さらに強制的に高校はIS学園。

『何で俺だけ…』

もう一人、自分と同じ場所で、同じように意図せずISを動かしてしまった男がいるとも知らずに。

プロローグ（前書き）

宇宙規模の広々い心で読んでください m () m

プロローグ

体を震わして、

『寒い…』

そう思った。

少年は真っ白な小部屋にいた。

服は着ている。しかし、肌の露出が多いため、寒いと感じたのかも
しれない。

だが実際はこの部屋は快適な温度に調節されている。

少年が寒いと思ったのは、体が震えたからである。

震える＝寒い

こういう等式が、少年の中で成り立っているのだ。

そもそも《部屋》ではなく、《箱》と言った方がイメージ的には正
しい。

少年は、先ほどから熱心に 話し込んでいる自分の周りにいる人を
観察し始めた。

といっても、話をしているのは2人だけで、あとの人はパソコンの
キーボードを叩いたり、メモをとっている。

共通点はみんな同じ服を着ていることだ。

この場所と同じ色の。

「冗談は嫌いだ」

男の人だ。

「私だって同じよ」

今度は女の人。

「あり得ない。まずこんな実験から冗談みたいなものだったろ」

ジッケン？ なにそれ？

「そうね。でもここに、私たちの目の前に、成功例があるわ。それも予測以上の完成度で」

セイコー？カンセー？

「どうする？」

「決まってるじゃない。政府の方針どつりに、育てるのよ」

少年は首をかしげる。

それを見て女は笑顔で言った。

「兵器として」

少年に震えが走った。

兵器という単語の意味はわからない。

だが、わかったこともある。

震えるのは寒い時だけではない

プロローグ（後書き）

最後まで見ていただけて光栄です。

今後も時間の許す限り頑張っていこうとおもっているので、よろしくお願
いします。

1：やっぱり人間落ち着きが大事（前書き）

焦るな危険。

1：やっぱり人間落ち着きが大事

これからー、点呼をとるー。

鉛筆!…はい

消しゴム!…はい!!

定規!…はい

よーしみんないるなー?…あれ?

受験票はどーしたー?

あつ、昨日の内にバツクに入れてたんだつた。

と、朝の点呼を終える。受験道具の。

俺は真宮信^{まみやしん}。今日は受験当日です。

昔はいろいろあつたけど、今は元気な健全日本男子。

そう今日は受験当日…いやいやいやいやいやいやいや
緊張とか全然してないし、ただテンパってるだけだし。

とりあえず深呼吸して…スウーはあー

さて、早速会場にいくか。

遅刻はまずいからな。

「じゃ、いつてきまーす!」

玄関のドアをあけて、気付く。

パジャマのままだった。

「はあ…はあ…じゅ、10分前…ぎ、ギリギリ…」

会場までの道を全力ダッシュ。

幸い道に標識が出てて、道に迷うことはなかった。

会場について、自分の教室を探す。

しかし…

「どこのアトラクションだー！ー！！」

会場内で迷った。

「迷路だろこれ…。」

はぁーやっぱり遅刻する運命なのかなぁ、と肩を落とす。

そう、運命。

そのいたずら。

会場の外にも、中にも、標識はあった。

しかし、焦っている少年の目には大きく書いてある進行方向の矢印の下の、矢印に比べれば小さな文字までは、映らなかった。

1: やっぱり人間落ち着きが大事(後書き)

もう謝罪の言葉しかありませんm()m

どうか温かく見守ってください。

オリジナル主人公設定（前書き）

ちよくちよく付けたしとかするかもしれない

オリジナル主人公設定

真宮 信 まみや しん

性別：男

特技：見たものを一瞬で記憶可能

人間嘘発見器

一度見た人の動きを再現可能

など…

専用機：瞬光 しゅんこう

説明：

名前の通りわずかな時間だけ光速に近い速さがだせる。（但し、莫大なエネルギーが必要）

何もしなくても動きは速いが、エネルギー消費も早い。

背中だけでなく、両手両足にも小型スラスタが搭載され、360

°あらゆる方向への複雑な動きを可能とする。

相手を翻弄しながらのヒット&アウェイの戦術を用いた短期決戦を念頭に作られたらしいが、信が乗るとエネルギー量が理論上の四倍にはねあがり、様々な局面で長時間稼働が可能になる。

いつもはリミッターで力をおさえ、制御しやすくしている。

武器
隴火 おほろび

不定形で、展開途中のISの粒子のように見えるが、
実はエネルギーの塊。信のイメージによって形が変わるので、状況

に応じて様々な形になる。
与えるダメージも、使うエネルギーも、とてつもない。

2：他人の名前なんて結局は日々の生活の中で覚える（前書き）

ね、眠い…。

2：他人の名前なんて結局は日々の生活の中で覚える

どうしてこうなった…。

俺《信》はめでたく高校に合格。

やった！とか、よっしゃー！とか思ったよ。
通知きたときは。

でもニコニコして封筒開けたら、難しい学校説明と、
ISの写真が入ってて、前例がないとか、このままだと
混乱が予想されるとか、安全面を考慮してとか、いかにも
驚いて急いで作りました雰囲気の紙に長々かいてあって、
止めは『あなたをIS学園に入学させます』

……え、強制ですか？

そこは『あなたのIS学園入学を許可します』じゃないの？
とか俺が混乱してたら、制服届いた。サイズぴったりの。
そして一声。

「受験した覚えはないんですけどおおー！！！！！！」

あの受験の日、係員と思われる人に

「あー、君。その君だよ」

とか呼び止められて、

「じゃー時間ないから」

と、ちょいちょいと指で示された機械　ISとわかっていたがに、おもむろに触れてみた。眩しい光が部屋に満ちたと思うと、気付いたらISが俺を包んでいた。

その後はよく覚えていない。なんかみんな忙しそうだったのと、住所と名前聞かれて、帰されたということがかるうじて思い出されるくらい。

で、よくわかんないまま眠って起きたら通知と。

つーか志望してた高校も受験してねー、と気付いて結局IS学園に入学。

はあー、男でISって……　と思いに浸っている今日このごろ。場所？教室だよ、女の子だらけの。

とかなんとか思っている、自己紹介がはじまった。

あー、これで一年間のキャラ決まるんだよねー。

何言えば……。

と、ここで助けを求めるような視線が。

最前列のやつからだ。

あー、お前もか……。

ぐっ、と親指を立てて『気合い』と、アドバイス。もちろん視線で。

「え、えーつと……織斑一夏おりむらいちかです」

実は俺以外にもう一人、男がいるのだ。

本当助かったよ、仲間がいて。

うんうん。

「……………以上です!!」

ズコーー!!

俺以外の女子のクラスメートがずっとける。

ギャグのセンスはないようだ。

と言つかギャグなのか?今の?

と考える間数秒、戸惑っている一夏に後ろから
バシッ!!

「自己紹介もまともにできんのか、お前は。」

強烈な打撃と辛辣な言葉がかかる。

おそらく先生なのだろう、黒いスーツがピシッとして
似合っている。

そして、本能的に気付く。

ああ、この人に逆らってはいけない…………。

2：他人の名前なんて結局は日々の生活の中で覚える（後書き）

誤字脱字あるかもしれません。

読みにくくてすみません m () m

3・・・余計なことと言わないほうがいいというのがこの世のきまり（前書き）

このごろそう思う機会が増えました 何の話だ（笑）

3：余計なことは言わないほうがいいというのがこの世のきまり

「諸君、私が織斑千冬^{おじむら ちかゆ}だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聞き、理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は若干十五才を十六才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

凄^{すごい}い先生だな。

入学早々こんな挨拶かますなんて、なんと言うか、怖いもの知らずって感じ？

まあその通りだろう。

本当に怖いものなどないだろうから。

あまりテレビを見ない俺だが、この人は知っていた。世界最強のIS操縦者、織斑千冬。

正にその本人が目の前の教壇に立っているのだ。

「きゃーーーーー!!」

(ウワツ、何だ?)

周りの女子が突然叫びだした。

「ずっとファンでした!」

「お姉さまに憧れてこの学校に来ました!」

「私、お姉さまのためなら死ねます!」

ワイワイ、キャピキャピ
下手なアイドルより人気なんじゃないか、これ。

「ち、千冬姉…どういう…」

バシッ！！

「学校では織斑先生と呼べ」

あちゃー、本日二度目。

(あれ？今あいつ…)

「え……？織斑くんって、あの千冬様の弟……？」

ザワザワ、ヒソヒソ…

どうやら俺と同じ結論に達した奴は少なからずいるらしい。

(つまり、織斑先生は、自己紹介から叩かれまくったもう一人の男織斑一夏の姉ってことか。)

……ん？

ふと、窓側を見ると、やけに冷めた目で一夏を見ている女子がいた。髪は長く、髪型はポニーテールってやつだ。そういえば、一夏もちらちらあいつを見てたような、そうでないような。

(知り合いか？あの子、結構美人だよなあ)

キーンコーンカンコーン

チャイムが鳴った。

「さあ、ショートホームルームは終わり…おっと」

そこで先生が何かに気付いたように言葉をきる。
アレ？なんか嫌な予感。

「最後に もう一人自己紹介してもらおう。皆も気になるところだ
と思うのでな。真宮！！」

一斉に視線が俺に集まる。
くそっ、うやむやになって終わる感じだったのに。
っ！か皆こっち向いてるってことは、俺が真宮だって知ってるじゃ
ん。

渋々立ち上がって、

「真宮 まみや 信 しんです。えーっと、時間がないので、とりあえずよろしく
お願いします」

と当たり外れのない基本的な自己紹介をする。

「今年は二人、例外がいるが、仲良くするように。あと、私はどん
なやつにも手は抜かないからな。各人、覚悟しろ」

織斑先生はそう言って、教室から出ていった。
はぁー、帰りたい…。
そう思った。

「それにしても、凄いですよね、彼。」

口を開いたのは例外 男子 のいるクラスである一年一組の副担任、
やまだ まや
山田真耶。

「ん？真宮のことですか？」

応えたのは織斑千冬。一年一組の正担任だ。

ちなみに山田先生はさっきの時間ずっと教室にいた。
忘れてたとかそういうわけじゃない。

「あんな成績優秀な子、初めてですよ」

山田先生が続ける。

「学校のテストは常に満点、勉強だけでなくスポーツも万能だなんて…」

（おまけに背が高く、けっこう格好いいし…。ハッ！い、いけません！先生が生徒にそんな感情持つなんて！）

「まあ、送られて来た書類を見たときは私も驚きましたよ」

千冬の声で、山田先生は自分の世界から帰還。

「で、でも織斑くんも格好いいですよね!？」

焦って声が震えてしまった。

「山田先生？」

「はい？」

「いつから容姿の話になったんですか？」

「……………」

決まりの悪そうな山田先生をみて、ふうー、と千冬はため息をつく。

「まあ、私もあの二人を見て、確かにそう思いましたが」

「や、やっぱりそうですよねー。あっ、織斑先生、さりげなく織斑くんのことも誉めましたね！やっぱり弟さんですもんねー。は、ははっ……………」

と、場を和ませようと何とか笑い顔を作るがひきつってしまっ山田先生。

「……………そうだ、先生」

「はい？」

「後で久しぶりに少しだけ、模擬戦をやるつか、6時間くらい」

ニヤリと笑って職員室のドアを開けながら、千冬は言った。
対する山田先生は、半泣きだった。

3…余計なことと言わないほうがいいというのがこの世のきまり(後書き)

原作キャラの特徴掴めてるか心配です…

4：人間誰しも凄い能力を持っている（前書き）

今回は信が才能を披露します

4：人間誰しも凄い能力を持っている

(ひーーーーまーーーー だなーーーー)

2時限目の授業中に空を見上げて思った。

そんな先生に失礼なことを思っているのは、俺《信》だけだろう。勘違いしないで欲しいのは、先生は一生懸命授業してくれているということだ。

ちなみに授業してるのは山田先生。

初見の感想は、胸デカっ!だ。

そして、その様子を見ているのは、あの織斑先生。

ちなみに「夏は必死に授業についていこうとしている。

やっぱり男は大変だなー、俺も男だけど。

後で話しかけてみるか。

さっきの休み時間は、一夏と例のポニーテールの女の子が一緒にどっか行って、話しかけられなかったからな。

やっぱり知り合いだったらしい。

初対面の男子をいきなり連れ出す女子なんていないはずだからな。

「織斑くん、何か分からないところがありますか？」

優しく山田先生が問う。

まあさっきから『???』ってオーラ全開だったからな。

「ほとんど全部わかりません！」

「え……。ぜ、全部ですか……?」

おいおい、それは……。ちよつとひどくね？ほら、先生困ってんじゃん。

「……織斑、入学前の参考書は読んだか？」

「古い電話張と間違えて捨てました」

バシッ！！

さっすが、織斑先生。容赦ないぜ。

「必読とかいてあっただろつが馬鹿者。おい、真宮！！」

「はっ、はい！？何でしょうかあ！？」

驚いて変な声出た。

周りの女子が数人笑っている。

あゝ恥ずかしい……。

「まさかお前も捨てましたなんて言わないだろうな」

ギロリ。

先生の目付きじゃないっすよ、それ。

「ま、まさか、ご冗談を」

へらへら。

「では、なぜ教科書がないんだ？正直に言えば、こいつの参考書と一緒に再発行してやる」

と一夏を見て言う織斑先生。

そう、指摘された通り、俺の机の上には教科書が乗っていない。
うーん、あの出席簿アタックを食らうよりは…

「正直に言えば、いいんですね…?」

ゴクリ。

クラスメートが唾をのむ音が聞こえた気がした。

「重かったので、」

スタスタスタ。

先生が近寄ってくる。

「わあ！ストップ！！待ってください！最後まで聞いて！！」

ピタッ。あぶねー…。

先生はすでに目の前に来ている。

「ふうー…。まったく、手の方が早いなんて…」

「何か言ったか？」

「言っていない、言っていない！！じゃねーや、いや、言っていない！」

「！」

「なら早く理由を言え」

はぁー、初日から目立ちたくなかったんだけどなぁー。

仕方ない。

「重かったので、覚えてきました」

……………は？

発言者以外の教室中のみんな　山田先生と千冬姉も含め　が頭
上に『？』となって、固まった。

『覚えてきた』？

さすがにその嘘は、ばれるだろ…。

俺《一夏》はとんでもないことをいい放った真宮を茫然と見ていた。
すらつと背が高く、立つと目立つその少年は『やっぱり…』という
顔で周りを見ている。

「本当か？」

千冬姉が聞く。

声には疑いよりも、驚きの方が多く含まれている。

まるで、『知ってはいたが、ここまでとは…』って感じた。

「え？ええ…ま、まあ…」

長身の真宮は戸惑いつつ答える。

「……………」

千冬姉は無言で黒板の前に立つと、色々操作して、これまで出てい

た設計図（もちろん、ISの）を消すと、新たに長々とした文章を出した。

「えっ、先生それは…」

山田先生が驚きの表情を見せる。

「いや、試すにはこれくらいがちょうどいい」

そう言って、千冬姉は

「真宮。これはなんだ？」

と、真宮に聞いた。

「え？な、なにって…アラスカ条約の全文…ですか？」

「そうだ。これは教科書の何ページに載っている？答える」

「いやいや、千冬姉それは…」

「138ページ24行目から、146ページ38行目までです」

「そうだ」

周りで教科書を必死でめくりまくる音が聞こえた。
急いで俺もめくりまくる。

…………… 本当だ…行数までぴったり。

「では、参考書では何ページだ？」

「257ページ62行目から281ページ30行目までです」

参考書までわざわざ持ってきた、近くの女子が急いでページを探す。

「あ、あつてる…」

小さな呟きだったが、今の静まり返った教室には、十分すぎる大き
さだった。

「教科書で都合上省いた条約の説明があるが、参考書ではそれが何
ページに書いてある？」

「259ページ11行目から51行目の第21条です。内容は『I
スコアの無断制作の禁止とその理由』で、教科書の146ページ端
の注釈になぜ省いたか、理由の説明がかいてあります。2行だけ」

俺は教科書をめくり、注釈を探した。

…あつた。

と同時に真宮が読み上げる。

教科書があるかのように、すらすらと、迷いもなく。

「『現在、コアを作れるのは東博士のみのため、

この項目はあまり束縛力がない。』」

「全て正解だ。解答も私が考えていたレベルより高い。だが、明日
からは教科書を持ってこい。お前が学生である以上、授業はしっか
り受けなければならんからな」

「はい。すみませんでした」

静かに真宮が座る。

その時、目があった。

フツ、と真宮が笑って答える。

その笑いからは、得意になっている気持ちなど微塵も感じられず、慣れと、疲れと、罪悪感が入り交じっていた

4：人間誰しも凄い能力を持っている（後書き）

テスト前にこの才能がほしいなあっ
…

5：意外と心配ごとほど上手いく(前書き)

取り越し苦労って多いですね

5：意外と心配ごとほど上手いく

見たものを一瞬で記憶。そして、忘れない。

俺《信》はこの才能が嫌いではなかったが、かといって、好きでもなかった。

役に立つときはこれまで多々あった。

しかし、こうして人前で使うと、必ず今のような状況になるのだ。

(今回もやっぱり孤立すんのかなあ……)

と、再開した授業そつちのので、思いにふける。

『ねえ…あの人？噂の化け物って…』

『少しぐらい頭いいからってなあ、調子に乗んな!』

『ん…ああ、またお前か…どうした？また先生の教えたことの間違
いを見つけて来たのか？よくも毎度毎度飽きずに…。はあー、こつ
ちだって好きで間違えてんじゃねーのによお…』

恐れ、妬み、絶望…俺という人間を知ったやつはだいたいそういう
感情を抱く。

そんな人を見て、俺が抱く感情はただ一つ。
申し訳ない、という気持ちだ。

周りの人達の人生をねじ曲げるような力があって、申し訳ない。
みんなをそんな顔にして、申し訳ない。
だが、この気持ちさえ、誰かを傷つける。

『なにそれ？イヤミ?』

『お前のそういうところが嫌いなんだ!』

そんな言葉を浴びせられて、最終的に出す結論は
『俺は、他人を幸せに、出来ない』

キーンコーンカンコーン

終了を告げるチャイムが鳴る。

終わるのは、授業だけではないような気がしたが。

先生への挨拶が終わると同時に、ダツ!!と誰かが俺に駆け寄る。
織斑一夏だ。

さっきまでは仲良くしていこうと考えていた、俺以外にここ、IS
学園にいる唯一の男。

だが、もう無理だろう。

何せ

「お前、スゲーな!!!!!!!!!」

は？

キョトンとしている俺に構わず、一夏は話続ける。

「どんなことしてあんなめちゃくちゃ長くて難しいこと覚えたんだ
!?!もうなんつーか…スゲーよ、お前!!!!!!!!!」

「い、いや、これは才能で…」

勢いに気圧されていると、

「さ、才能ですって!?!」

「な!!!!なんと!!!!」

「凄い、凄いわー!!」

「写真撮らせてー!」

「わっ、私と付き合っ……てー!」

いや、いきなりすぎるだろ、最後の人。

「……ぶはっ」

なんだかさつきまで深く考えすぎてた自分が馬鹿みたいで、思わず笑みがこぼれる。

「わっ、笑った顔も……」

「……イケメーン……!!」

ノリが良さそうな女子が動きまで合わせて言っている。
みんな息ぴつたりだな。

気付くと、俺の机を中心に、大勢が集まっていた。
みんな、仲良いな。

本当に今日あったばかりか?

「ぶはっ、あはははっ……ごめん、みんな。さつきは驚かして。
改めて、これからよろしく……!」

元気よく、俺の周りの人に叫ぶ。

「……」

本当、息びったりだ。

「ちょっと、よろしくて？」

うん？誰だ？

声の方向をみると、正に『The いいとこの生まれ』みたいな
雰囲気のロールがかつた金髪の女の子が立っていた。

「わたくしのご存知ですわね、そこのお二方？」

「「…」」

チラッ、チラッ。

一夏とアイコンタクト。

「「？」」

「な、なんですの！？その、あからさまに『知らない』アピールは
！本来なら、わたくしに話かけられるなんてそれだけで光栄なので
すから、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

「いや、自己紹介途中で終わったし…」

「そう。だから、悪いな。俺たち、君が誰だか知らない」

と、俺、一夏の順。

「ほ、本当にわたくしを知らない？この、セシリア・オルコット
を！？イギリス代表候補生にして、入試主席の、このわたくしを
！？」

「ああセシリアっていうんだ。よろしく」

と、右手を出す。

ところが、

「『セシリア』！あなたがわたくしを名前で呼ぶなんて、思い上がりも甚だしいですわ！」

あれ、そっぽを向かれた。

なんだよー。仲良くしようぜ？

ちなみに、俺の『孤立するかも』っていうネガティブな考えは、周りの皆に払拭されていた。

みんな仲良く出来そうな人達ばかりだ。

『この人達なら大丈夫。上手くやっていける』
今はそんな気持ちだった。

「あー、質問いい？」

一夏が口を開く。

「ふん。よろしくてよ？答えてさしあげますわ」

「代表候補生って、何？」

ズコーーーーーー！！

女子がずっこける。

おおっ、またか。

俺は呆れるよりも、ここまで知らずに入学してきた一夏に驚いてい

た。

「し、信じられない。信じられませんか！常識ですよ……じ・よ・う・し・き……！よろしいですか、代表候補生というのは……」

ペラペラ、ペラペラ、うんぬん、かんぬん。

(なっ、なあ……)

一夏が俺に助けを求める。

(ん？ああ、よーするに、『エリート』ってやつだよ)

見事に要点だけ伝える俺。

「 ……でしてよ。お分かりになりました？あなた方は幸運なのでしてよ？… 」

「 そうか。ラッキーだ。ありがとう、えっと、代表候補生の……人 」

「 あっ、あなたねえ…… 」

ヤバイ。

つーか名前ぐらい覚えてやれよ。

ここで俺が割って入る。

これ以上話をこじらせてはいけない。

「 一夏もなんとなくわかったみたいだから、な？本当丁寧な説明、ありがとう。セシ……オルコットさん 」

どうだ？

「ま、まあ今回は許してさしあげますわ」

プイツと踵を返して、セシ…オルコットさんは自分の席に帰った。

(よし、よかった…)

ほっと胸を撫で下ろす、信であった。

この時、誰も気付かなかった。

信の『ありがとう』に、少し動揺して赤くなった、イギリスの代表候補生に。

5：意外と心配ごとほど上手くいく(後書き)

本当、ISの世界をぶっ壊しています

ごめんなさいm(――)m

6：拒否権って拒否できますか (前書き)

つーか使い所がわかりません。

6：拒否権って拒否できますか

「話はすんだか？」

こ、この声は…

「ち、ちふ」

バシッ！！

…一夏はまず、『学習すること』を学ぶべきだな。

「まったく…。チャイムがなったら席につけ。すぐつけ。いいな？」

織斑先生はやれやれ、という顔で教壇に立つ。

白熱した議論（セシ：オルコットさん一人だけだったが）のあいだにチャイムが鳴っていたらしい。

どうやら織斑先生は今回だけ見逃してくれたようだ。

「それでは、この時間は各種実践武器について説明を行う」

先ほどまでとは違い、織斑先生自信に教えていただけるようだ。

拜んどころかな。南無、南無。

「ああ、その前に再来週のクラス対抗戦に出る、代表をきめないと。まあ、クラス長だな。ちなみに一年間固定だ」

再来週！？

ずいぶんと急だな。

わざわざと教室が騒がしくなる。

「はいっ！真宮君がいいと思いますー！」

「私も！」

「私も！」

「じゃあ、私も！」

「」「」「」「」「」「」

まあ、やると思ったけどね。

なんてのんきにしてる場合じゃない！

「いや、俺は嫌ですよ！？」

「他薦された者に拒否権はない」

そ、そんな…。

職権乱用だー！

「じゃあ、一夏くんがいいですー！」

「わたしもー！」

「おっ、俺！？」

他薦の魔の手は一夏にまで…。

わーわーぎゃーぎゃー

パンツ！！

「冗談はそこまですわ！！」

机を叩いて、セシ…オルコットさんが立ち上がる。

「男が代表なんていい恥さらしですわ！」

ムカツ。

さすがにそれは言い過ぎじゃないか？

「代表とは、実力のあるトップがなるべきで…」

ペラペラ、ペラペラ、うんぬん、かんぬん

イラッ。

さすがに腹が立ってきた。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたしくしにとっては耐え難い苦痛で」

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一不味い料理で何年覇者だよ」

あ。

俺よりも先に一夏が切れたか。

「あっ、あなた、わたくしの祖国を侮辱しますの！？先ほどの態度

「といい、もう我慢できませんわ!!決闘ですわ!!」

へっ?

「いやいや決闘するのはさすがに…。」

「おう、いいぜ」

「いいのかよ!」

「おい二人とも!落ち着けて!」

俺がまた割って入る。

「あなたも!」

えっ、俺?

「この際ついでですわ!あなたにも私が勝つのですから、確実な実力が示せるというもの!」

カッチーン!!

「ついでで指名されて、その上俺が負けること前提!？」

あつたまきた!

「そこまでいうなら、やってやるよ!その代わり、負けたら何でも俺の言うことときけよ!」

と、俺も話に乗ってしまふ。

「もちろん、いいですわよ。わたくしが初心者風情に負けるなんて

あり得ませんわ!」

俺とセシリア、一夏とセシリアのあいだで、激しい火花が散った。

「さて、話はまとまったな。試合の形式は勝ち抜き、一週間後の月火に行く。3人は準備しておけ。順序は…そうだな、まずは織斑とオルコットだ。場所は第3アリーナだ。いいな？」

「…はい!」

何か先生楽しそうだな。

こっちは頭が痛いっすよ、ホント…。

「織斑先生、何か考えでもあるんですか？」

「いや、何もなし」

ええええー…と心の中で突っ込む。

山田真耶と織斑千冬は職員室までの道のりを歩いていた。

「だって、事実上、真宮くんがシード扱いじゃないですか？普通一番強い、オルコットさんがシードではないんですか？」

「普通はそう考えるのが妥当だが、勝ち抜きというものは、勝者が疲労していく状況でどれだけ戦えるかはかるためだ。オルコットは代表候補生だ。本人もその自覚があつて、実力を示したがってい

たからな」

(つまり、不利な状況でも勝てる人が本当に強い、と言うこと?)
真耶は自分なりに納得した。

「あと、先生」

「はい、なんででしょうか?」

「オルコットが一番強い』かもしれない』んですよ」

「あー…先が思いやられるな…」

「初日からこつじやな…」

ならんで歩く、二人の男子。

後ろには女子の大群。

俺《一夏》は学校の授業を終え、なんとか帰路 IS学園にある寮
までの道 についていた。

その間、セシリア(やっと覚えた)との対戦をどうか考えていた。

「そーいやさー」

ふいに、隣にいる信が俺に質問する。

「窓際のポニーテールの女の子？あれって、一夏の知り合い？ホラ、休み時間に」

「ああ、筈のことか。あいつは俺の幼なじみ」

「へー」

本当に興味あったのか？ってくらい、あっさりした返事。

「青春だね〜」

？なに言ってるんだ？

「まあ、それはさておき…どうする？」

今度は俺から信に質問。

もちろん、セシリアとの対戦についてだ。

「うーん…。どうする？」

質問に質問で返すなよ…。

「ま、一夏は先ず基礎知識からだな。何も知らずに戦うのはキツイだろ」

「だよなあ…」

「俺は…どうしよう、ホント」

ハァー。

二人揃って腹の奥底から深いため息。

結局、部屋に着くまで具体的な特訓方法や解決方法、勉強方法など、役立つアイデアは出なかった。

「じゃ、俺ここみたいだから」

「おう」

と、信は鍵をあけて、部屋のなかに入ってしまった。

「俺は…ここか」

なんだ、信はお隣さんじゃないか。

これは心強い。

困ったら助けてもらおう。

ガチャ。

部屋に入る。

まさか今日からいきなり助けが必要になるとは思わずに

6：拒否権って拒否できますか (後書き)

いかがでしたか？

次回も頑張ります。

7：羨ましい状況にいるやつはその羨ましさ気付かない (前書き)

信もー夏も、ズリーよ！

7：羨ましい状況にいるやつはその羨ましさに気付かない

『お前、スゲーな!!』

あの一言でどれだけ周りの空気が変わったことか。
あれがなきゃ、また一人だったろう。

俺《信》はベッドに横たわって、今日という人生最大の受難の日を
振り返っていた。

(あいつに、恩返ししなきゃな…)

織斑一夏。

本当に凄いのは、あいつだ。

一瞬で周りの人と打ち解けた。

『こいつはいいやつだ』と、他人が無意識に認識するのだろう。

そういう雰囲気があり、実際、いいやつだ。

それに……。

ハハッ、と笑い声を上げる。

今日だけで10人以上女を落としてた。

もちろん、恋ってやつに。

特に、あのポニーテールの…冴冴？だっけ？

あの女子は、他よりずば抜けてあいつに惚れてる。

幼なじみだって聞いたとき、ああー、としか思えなかったよ。

納得しすぎて。

そりゃー惚れるわ。

俺の才能はこういふところにも働く。

目で見たものは、忘れない。

だから、少しの変化も見逃さない。

膨大な記憶の中から、似たような記憶を探し、どういつときに、どういつ行動をとるか、結論を導き出せる。

それに、行動から気持ちを探することもできるし、気持ちから行動を探することもできる。

もちろん、その他にも、場所、雰囲気、気温、湿度、等々、そんな気にするか？つてくらい細かい情報から結論を導き出すことも可能だ。

まあ、要するに、そうだな、うーん…

難しいところだが、『名探偵』つてこと？

違うかあー！

なんて、下らないギャグを才能の説明に入れよう思えるのも、一夏を初め、クラスみんなの温かい心のおかげだからな。

(今までさんざん、人に暗い顔ばかりさせてきたんだ。そろそろ人を幸せにしなきゃな。過去に囚われずに。人を幸せにするためにどうするか……。よしっ、決めた！目標は『困っている人を助ける』だ！！)

と、一人ガッツポーズして、決意を固める。

(さて、シャワーでも浴びるか)

ちなみに俺は一人部屋。

一夏はどうかわかんないけど。

ん？までよ…？

ふと気付く。

(一人部屋以外だと、相部屋…。あいつが相部屋だと、女子と一緒に

！？っ、羨まし過ぎるー！ー！い、いや、いやいや、待て、待て。さすがにこの年の男女が、相部屋なんて…そこは学園側も考慮して…。いや、だがしかし、可能性はある…。いやー、しかし…)

どんなに凄い才能を持っていても、信は健全な一五才の男。

女の子 しかもES学園の子はかなりレベルが高い と相部屋になれば、非常にうれしい限りなのである。

もちろん、いきなり襲いかかるなんて、非道徳な真似は絶対しないが。

(あーっ！もう考えるのが面倒だ！さっさと汗流そう)

一方その頃、一夏は？

「ほ、ほ、篝」

まさに信が羨ましいと思うような光景を目の当たりにしていた。

なにせ、バスタオル一枚で前だけ隠した、幼なじみが、シャワーを終えて出てきたのだから。

／っおっ／

ん？何だ？

今、叫び声が聞こえたような…

／ざわざわ／

なんか、廊下が騒がしいな。

／ドンドン！／

ドアを叩く音。

誰だ一体…。

「うーい」

ガチャ、ドタッ

「わっ！」

一夏がいきなり俺《信》の部屋に転がり込んできた。
文字通り。

「たっ助けて…」

ドアノブに手をかけたまま、啞然とする。

「ほうした？いひか？（どうした？一夏？）」

ちなみに俺は今、歯を磨いている途中だったので、歯ブラシをくわえている。

そのため、喋りづらい。

「隣に逃げ込んだわ!」

「みんな、こつちよ!」

「黙って私に、ついてこーい!!」

どこから湧いたのか、女子が突然俺の前に現れた。

それも、一人二人じゃなくて、数十人も。

そして、ドアの前の俺を見る。

「えっ、えっ、えー！ー！ー！ー！！！！」

「ま、ママ、真宮くん!? な、何!? そ、その格好!？」

?

何焦ってんだ?

この女の子たち。

「はひって、はんふだけほ? (何って、パンツだけど?)」

ポリポリと頭をかきながら、事実を述べた。

さつきシャワー浴び終わったばかりだから、とりあえず下半身の必要最低限の装備品だけつけて、あとは何も身に付けていない。非常に聞き取りづらい言葉になったと思ったが、通じたらしい。

「は、破廉恥なっ!」

「だ、ダメだよ! そんな格好!」

「そ、そうだよ！反則だよ！」

「そういう格好は私だけに見せて!!」

「ぬ、抜け駆けは許さないわ！」

おい、後半のやつ、なに言ってるんだ？

口々に不平不満（？）をいいながら、みんな大体ポーズは同じ。両手で顔を覆いながら、目だけは覆わないようにしている。

それ、意味なくね？

ここで仕方なく、歯磨きを中止して、

「だって、この格好、海パンと同じじゃないか？」

と、俺の意見を言うと、

「「「「「違ーう!!」「」「」「」

全員一致かよ。

「わかった、わかった。今度から気を付けるよ」

渋々了解して、女子を追い払った。

少し残念そうな顔をしている人もいた気がするが、気のせいかな。

「まったく…一体どうしたって言うんだ？」

静かになったところで、一夏に問う。

今度はちゃんと服を着ている。
動き易い服装、いわゆるジャージ姿だ。黒に黄色のラインが入っている。

「いや、それが…」

かくかく、しかじか

「…」

「と、いうわけだ」

「お前…ズルいな」

「はあ！？何が！」

ハア、こいつ、鈍すぎる…。

好きでもない男にそんな姿みせて、『みつ、見るな！』
なんて言うセリフ、女の子がいうわけないだろ。
叫び出すのが普通、のはずだ。

「もーなんかさあ、ノロケにしか聞こえない。いいなあー、幼なじみかあー、俺も欲しいなあ！」

「何言ってるんだ！？危うく殺されかけたんだぞ！？」

ハア。

でもまあ、微笑ましい限りだ。
仲がいいってのは。

「わかったよ。もし、お前が本当に困ったときは、俺に言え。必ずお前を助ける」

と、握った右手の拳を前につき出す。

「?あ、ああ!よろしく頼む!」

一夏も同じように拳をつき出し、コンッ、と互いの拳と拳をあわせる。

「で、さっそくなんだが、どうやって部屋に戻ればいいのか?」

「心配すんな。おい、入っていいぞ」

俺は扉に向かって話しかける。

外に誰かいて、聞き耳立ててるのは、最初から気付いていた。ドキッ!と扉の向こうから聞こえた気がした。

ガチャ

「…一夏、帰るぞ」

「ほ、箒…」

「じゃ、また明日な。お休み。あっ、箒…さん?もおやすみ」

と、むすっとした顔の、剣道着を着て、片手に竹刀を持っている女の子に、挨拶する。

「ああ。同室のものが迷惑をかけた。すまない。いくぞ、一夏。では」

と言って、さっさと一夏と二人、行ってしまった。
再び静かになった部屋で、

「やっぱりズリーぞ、一夏！」

そう、呟いたのだった。

7：羨ましい状況にいるやつはその羨ましさ気付かない（後書き）

ホント…お前ら二人ともズリーよ！

8：悪い予感がよく当たる（前書き）

今回はちょっと長めかな？

8：悪い予感がよく当たる

太陽が容赦なく、降り注ぐ。
周りには瓦礫しかない。

「はあ、はあっ…くそっ！」

俺は手榴弾を後ろからしっこく追ってくる奴らになげつける。

ドンッ…！

後ろで爆発。

よし、これで

ドゴォー！

パン…！パン…！

ちっ、まだ兵士が残っていたか…！

どうする？

決まっている。

前に進むしかない。

後ろにいるのは、敵だけだ。

思い切り、地面を蹴って、大きく一步を踏み出す。

しかし、次の瞬間、自分の失敗に気付く。

あらかじめ調べておいた情報を焦りで忘れていた。

（ここは、地雷ポイントか…！）

足元にある、爆弾が、炸裂する

ドンッ！

「っ…はあっ！」

ガバッ…！！

「はあ、はあ…、はあ……………」

辺りはまだ明るくなっていない。

夢？だよな？

ドサツ。

体をもう一度ベッドに預けて、目を閉じる。

またか…。

俺《信》はため息をつく。

ISに初めて触ってから、昔の夢を見る。

俺は小さい頃、研究所で実験された。

何の実験だったのか、覚えていない。

ただ覚えているのは、『実験された』という事実と、研究所からな
んとか逃げ出した、ということ。

今見た夢は、逃げている途中のものだと思っただが、それが本当に
正確な記憶か、思い出せない。

そしてたまたま、育ての親である、じいさんとばあさんに引き取ら
れた、ということ。

(何で、今ごろ…)

まるで、何かを思い出せ、と言われていているかのようだ。

最近、夢の中の自分が地雷を踏んで、夢から覚める、というパタ
ーンが当たり前のようになっていた。

(まったく、嫌になるな)

今度はいい夢見ようと気持ちを落ち着かせ、また、眠りに落ちる。

スタジアムのような場所にいた。
ん？

（あれは…、一夏か？）

恐らく一夏と思われる、ISが、もう片方のISに急接近する。

（あれは…、セシ…オルコットさんだよな？）

一夏が斬りかかる。

これで決まりだ！俺には分かる。
理由は分からないが。

ビーツ！

ブザーがなる。

恐らく試合終了だろう。

だが、一夏の握った剣は相手に届いていない。

…あれ？

俺を初め、みんなきよんとんとしている。

俺が感じたのは、ただひとつ。

一夏の負けだ。

突然場面が変わる。

今度は織斑先生と、山田先生がいる。

織斑先生は、コーヒーに白い粉を…。

って、それ塩ですよ！

ガバツ！！

「…」

何だ？この夢…。
前半はまだしも、後半は意味わからん。
コーヒーに塩て…。

(うーん、でも妙にはつきりしてたし…アレかなあ)

俺が言う『アレ』というのは、いわゆる予知夢ってやつだ。
昔の夢を見初めてから、未来の夢も見ることがようになった。
それもどうしたわけか、みんなが俺の存在を知らないで生きていく
未来の夢を。

何でそんなことが分かるかって？

なんとなく感覚だ。

『ああ、この人たちは俺を知らない』ってわかるんだ。
なぜか。

(もういいや、少し早めに起きるか)

只今5時31分。

(本当は8時ぐらいまで寝たいところだが、遅刻するからな。三度寝
はよしておこう)

目を覚ますため、シャワーを浴びようと、立ち上がった。

朝食を食べに食堂に行くと、一夏を見つける。
朝から隣に座っている女の子に怒られてた。

「なあ、篤」

「名前で呼ぶなっ！！」

「……篠ノ之^{しのの}さん」

「ふんっ」

「はぁー」

へえー。

あの子の名字『篠ノ之』っていうんだ。

束博士の知り合いか？

ISを作った天才、篠ノ之^{しののたはね}束博士。

珍しい名字だし、同じってことは親族かな？

「よ。おはよう」

俺は一夏に朝の挨拶をする。

「あっ、信。おはよう」

「……」

「篠ノ之さんも、おはよう」

「……ああ」

ニコツと笑顔で篠ノ之さんに挨拶するが、相手はむすっとした顔のままだ。

うーん、強敵だ…。

「真宮くん、織斑くん、隣いいかなっ？」

見ると、女子が三人、トレーを持って立っていた。

「ああ、別にいいけど」

「おう」

一夏、俺の順に答える。

「「よしっ!」「」

後ろで答え待ちしてた二人がハイタッチ。
そんなうれしいのか。

「真宮くん、昨日はごめんなさい」

ペコリ。

三人のうち、俺の隣に座った子が頭を下げる。

「ん、ああ、別に俺は気にしてねーよ。むしろ俺があんな格好してて、ごめん」

と、謝罪に謝罪で返す。

「あ、あんな格好つて、ど、どんな？」

「昨日聞かなかったの？実は……」

「ええっ！私も見たかった！！」

とか後ろで言ってるけど、気にしない。

昨日のことというと、俺のパンツ一枚の姿を見たことだろう。

確かに、目の前の女の子には見覚えがあった。

大勢集まった女子の後ろの方で、背伸びして必死にこっちを見ようとしてた子だ。

（真面目だなあ）

「わざわざ謝ってくれて、ありがとな」

ぼん。

軽く女の子の頭に手を置いて、撫でる。
なでなで。

「「「「「ああっ！いいな——！！」「」「」「」

周りから声上がる。

ど、どうした？

何がいいんだ？

「わ、私もごめんなさい！！」

「すみませんでした！！」

「私もです！！」

「昨日部屋に押し掛けなくて、ごめんなさい！！」

いやいや、押し掛けなくてよかったんだよ。

わーわー！キヤーキヤー！！

一気に食堂が騒がしくなる。

パンっパンっ！！

突然、手を叩く音。

「いつまで食べている！食事は迅速に効率よくとれ！遅刻したものはグラウンド十周させるぞ！」

織斑先生の声で、女子たちは一斉に自分の席に戻り、食事を再開する。

誰かが言っていたが、織斑先生は一年生の寮長らしい。

「……織斑、私は先に行くぞ」

「あ、ああ。また後でな」

篠ノ之さんと一夏のやり取りを見て、さっき頭を撫でた女の子が俺に小声で質問。

「ねえ、織斑ちゃんと篠ノ之さんって……」

「ん？あいつら？幼なじみだったさ」

「そうなの！？」

「ああ。青春だよなあー」

あれ？

そういえば、さっきから…

「どうした？顔、赤いぞ？」

相手の顔に自分の顔をぐいっと近付ける。

「へやい！？ちっ、ちよつと風邪気味で……」

「嘘だろ」

「そ、そんなこと……」

相手の手首をつかみ、目と目を合わせて、もう一回。

「う・そ・だ・ろ？」

「あ、あの…その…」

じーーーーー

自分の顔が、相手の瞳に映っている。

それがわかるくらい、互いの顔が近い。

「おい、真宮。朝から女子を口説くんじゃない」

織斑先生だ。

「えっ、い、いや、これは…」

口説く、なんて言われると、急に恥ずかしくなってきた。

「おう、じゃあ行くござい」

と、一夏と二人で食堂を出ていく。

ちなみにその女子は1日中、夢心地だった。

信は自分のことをほとんど気にしないので、自分が異性からどう思われているか、わからないのだ。
わからないので、知ろうともしない。

ここ、IS学園に入学してきた男子は二人揃って、周りから見れば『カッコいい』のだ。
しかも、かなり。

問題なのは、二人とも自分の容姿もわかっていない。

IS学園の女子はみんな、彼らと友達に、もつと言えば恋人になりたい、と思っている。

一夏も鈍いが、信も自分に関して相当に鈍い。

他人から他人（女子 一夏）に対しての意識の変化には敏感でも、他人から自分（女子 信）への意識の変化には、気付かないのだ。

『鈍感』

この共通点を持つからこそ、打ち解けるのも早かったのかもかもしれない。

この二人に『唐変木の双龍』ダブルドラゴンという異名が付くのは、まだ少し先の

話…。

三年間女子だらけ生活 二日目。

今は昼休みだ。

午前中の授業は、山田先生がすっかり『ブラジャー』とか言っちゃって微妙な雰囲気になったり、やっぱ篠ノ之さんは東博士の親族（実は姉妹だった）と言うことがクラス全員にばれたり、本人はそれをよく思っていないかったり、いろいろあった。だが、一番のニュースは俺と一夏のISのことだろう。

『真宮、織斑。お前らは事情が事情だから、データ収集のため、専用機が用意される。準備ができるまで、まっっている』

だってさ。

教室ではセシ…オルコットさんが一夏にまた余計なことを言っている。

「まあ、訓練機では勝負が見えてしまいますから、フェアではありませんものね。専用機は本来、選ばれしエリート中のエリート、正にこのイギリス代表候補生セシリア・オルコットのような………」

ペラペラ、ペラペラ、うんぬん、かんぬん

またかよ…。

ああっ！またややこしいことになってる。

「あなた、馬鹿にしていますの？」

「いや、そんなことはない」

「だったらなぜ、棒読みなのかしら……………」？

「何でだろうな、篝」

何でさらにややこしくするんだ。

ほら、睨まれてるじゃないか。

あつ、なんかセシ…オルコットさんも睨まれた。

セシ…オルコットさんは怯んでうごけない！！

と思っていると、すぐに立ち去って行った。

さすが代表候補生。

回復が早い。

去って行く後ろ姿を見て

(なんか、モデルみたいだな。もう少し謙虚になれば、美人なのに…。もったいない)

ぐっ

ここで、俺の腹が食事を求める。

(さて、俺は飯食いにいくか)

席を立てて足を学食へ向けて踏み出す。

学食に行く途中、ふと、俺のESってどんなだろう？と思った。

(つーか、俺が使いこなさなきゃ、意味ないよな…。届くまで、何を練習しよう…。いや、練習じゃなくても何をすれば…。基礎と理論は完璧に理解したし…。となると、やっぱり経験が足りないから、そこを補うには…)

ピカーン!

突然、いいアイディアが浮かんだ。

(経験した『つもり』になればいいのか!)

だとすればやることは決まった。

よしっ! 今日からやるか!

ようやく、やるべきことがわかった。

なんかやる気出てきたぞー。

時を遡ること、3日

IS学園の職員室は入学式前日とあって、忙しく人が動いていた。

「えっ! 本当ですか!?!」

そんな中、電話機に向かっている山田真耶が、驚いた声を出す。

「はい、わかりました。よろしく願います」

ガチャ

「どうしました?」

織斑千冬が、話しかける。

「い、いや…、男子生徒の専用機ができたので、そちらに送ると…」

「!それは、どちらの生徒のですか?」

「えっと、真宮 信くんです」

早い…早すぎる…。

「いつ届くと?」

「明日か明後日だそうです」

いくら何でも時期が早すぎる。

「わかりました。格納庫の準備の手続きをしておきます。」

千冬はそう言って、職員室を出ていく。

真宮信の、事前報告書を思い出す。

全ての数値がずば抜けていて、他を寄せ付けないものだった。さらにIS適性はSランク。

こんなランクは世界中でも、数えるほどしかない。

ここまで恵まれているなんて、おかしい。異常だ。

それだけでもおかしいというのに、加えてこの専用機の準備期間の短さ…。

『最初からわかってたので、準備してました』という感じだ。
あり得ない、まるで

「まるで、ISに乗るために生まれたみたいじゃないか」

千冬は、すでに教師の顔ではなく、戦士の顔になっていた。

これから起こる、波乱を感じて

8：悪い予感がよく当たる（後書き）

信はまだまだ謎が多いですが、少しずつ、その謎を解いていきたい
と思います m () () m

9：どんな人でも笑った顔が一番素敵（前書き）

ようやくここまで来ました…

9：どんな人でも笑った顔が一番素敵

千冬はIS格納庫にいた。

目の前にあるのは、黒いIS。

真宮 信の専用機だ。

彼女は彼にすぐにこの専用機を渡すことは、しなかった。

どういう人間なのか、この目で確かめたかった。

もしも、自分の有能さを自慢して他人を見下しているようなやつであれば、専用機を持つ資格があると判断するまで、ここに置いたままにするつもりだった。

「あいつなら、大丈夫か…」

ふっ、と微笑む。

突出した能力を持ちながら、普通に生活を送れている。

他人を理解し、助け合いながら。

特に問題は無いだろう。

「見せてもらおうじゃないか、こいつをどれだけ使いこなせるか。お前の実力を」

遂に、月曜日。

今日はいよいよ、一夏VSセシ…オルコットさんだ。

一夏は結局、篠ノ之さんに特訓をしてもらったらしいが、毎晩毎晩、俺《信》の部屋に来ては

『ISのこと全然教えてくれないんだ、あいつ』
と愚痴ってた。
で、当日になって

「なあ、箒」

「なんだ、一夏」

「ISのことを教えてくれる話はどうなったんだ？」

「……」

「目をそらすな」

というやり取りをしている。

ま、お互い名前で呼び会えてるし、篠ノ之さんも内心、一夏と一緒に居られて嬉しいみたいだから、いいか。

ちなみに、ここは第三アリーナ・Aピット。

ただ、まだ必要なものがない。

一夏の専用機だ。

間に合わないときはどうするんだ？

「お、織斑くん織斑くん織斑くんっ！来ました！織斑くんの専用ISS！」

どうやら杞憂だったようだ。

山田先生と織斑先生がこっちに来る。

「織斑、フォーマットとフィッティング、その他の感覚はぶっつけ本番で身に付ける。いいな？」

相変わらず織斑先生は厳しいっすね。
実の弟なんだから、優しくしてあげましょつよ。

「これが、一夏くんの専用IS、白式（白）です」

目の前の搬入口から表れたISを、一夏は戸惑いつつ装着する。
カシユツ

「どんな感じだ？」

俺が質問する。

「ああ、悪くない。大丈夫だ」

しっかりした口調で答える一夏。

「じゃ、あいつに目にももの見せてやれ。勝つてこい」

「ああ！」

俺と一夏は右手を前にだして、
コンッ

互いの拳を軽くぶつけ合う。
そして、二人でニヤリと笑う。

「第」

「な、なんだ？」

「行ってくる」

おー、カッコいいぜ、一夏。
そして、ゲートが開いた

試合開始。

俺たちはアリーナの制御室で、モニター越しに戦いを見ていた。
山田先生が何か話しているが、俺の耳には内容まで届かなかった。
俺は真剣に、モニターのリアルタイム画像を目で追っていた。

(まったく、情けない…)

篤は、試合を終え、目の前で正座して織斑先生に説教されている幼なじみを見て思った。
ふと、隣にいる真宮と目が合う。

『まあしょうがないよ、気持ちはわかるけど』

やれやれ、という感じである。

(こいつはどれくらいやれるんだろうか…)

さっきの試合の間、ほとんど瞬きもせずにモニターを見ていた少年を見てそう思う。

結果をいうと、試合は一夏の負け。

だが、もう少し白式にエネルギーがあれば、逆転勝ちだった。

ゆきひらにがた
雪片二型

自身を守るシールドエネルギーすら攻撃に転化する、一撃必殺の諸刃の剣。

IS同士の試合では、シールドエネルギーが尽きた方が敗者となる。絶対防御という、全てのISに備わっている操縦者の死亡を防ぐ、シールドエネルギーを極端に消耗する能力。これを使用して大幅にエネルギーを削る、それが一夏の武器だった。

しかし、相手を斬る直前に白式のエネルギーが切れた。まったく、本当に情けない。

自分の使う武器の特性さえわかっていないとは。だが……

「これで、また一夏と二人で稽古できる？」

耳元で小さく囁かれた。

心臓が飛び上がる。

勢いよく振りかえると、ハハッ、と真宮が笑った。

こいつも、あの人と同じ天才。

しかし、あの人と違う何かを感じる。

安心感というのだろうか、この人懐っこい笑顔の少年には、何でも話してしまえるような、そんな感覚がわいてくる。

「安心してくれ。別に邪魔しようとか思ってないし、篠ノ之さんの気持ちを俺があいつに伝えるなんて野暮なことはいらない」

「……………ど、どうして」

「ん？」

「どうしてそう思うのだ？私と一夏は、その、なんだ…、あまり仲良く見えていなかったと思うのだが…」

「いやいや。そんなことなかったぜ？少なくとも俺から見たら、むしろ仲良く見えただけだな」

ニコッ

笑顔を見せられると、なんだか落ち着かなくて、うつむいてしまう。

「じゃ、俺は先帰るわ。やることもあるし。一夏をよろしく、篠ノ之さん。後は二人でゆっくり帰ってきてくれ」

「……きだ」

「へっ？」

「わ、私の名前は^{あしひ}篝だ。今度からは、名前がかまわない」

一瞬不思議そうな顔をしていたが、すぐに真宮は笑って、

「わかった。俺の名前は^{しん}信だ。これからは俺も名前でもいいぜ。よろしく、篝さん」

「『さん』もいらないつ！」

すっかり語調が強くなってしまった。

「ははっ、わかったよ、篤」

「ああ。よろしくな、信」

思わず、口元が緩む。

「やっとだな」

「は？」

「やっと笑顔になった。やっぱり笑った方が美人だぜ？篤。その顔、一夏の前で見せてやれよ？」

「／／………っ！！」

顔が赤くなったのがわかった。
また信が、ハハツ、と笑って

「じゃーなー、篤ー」

と自分に背を向けて去っていった。

「はぁー、やっと終わった……。ん？どうした？篤？」

ようやく、先生の説教から解放された一夏が近寄ってきた。

「／／っ！う、うるさいっ！この負け犬！！ええい！一から鍛えなおしてくれる！」

バシッ！！

持っていた竹刀で一夏を叩く。

「いてっ！…なんだよ、少しぐらいねぎらっつてくれてもいいだろ！」

「うるさいうるさいっ！これから放課後は空けておけ！私自ら稽古してやる…！」

バシッ…！

「いてっ！お、おい！」

バシッ、バシッ、バシッ…！

「ぎゃー…！…！」

……どうやら一夏に笑顔を見せるのは、まだ先になりそうだ。

俺《信》はみんなより先に、自分の部屋に戻ってきていた。

(やっぱスゲーな、一夏…)

正直、ぶつつけ本番であそこまで戦えるとは、思っていなかった。あいつはフォーマットとフィッティングも試合の中でもやり遂げた。試合こそ負けたが、後少して一夏が勝っていた。

先生に聞いたが、セシ…オルコットさんの勝ちだから、俺は明日、

あいつと戦うことになる。

それに、俺の専用機も届いたということ、試運転するか？と聞かれたが、断った。

一夏がぶつつけ本番だったのに、俺だけそれはずるいと思ったからな。

(それにしても…)

あの夢。

やっぱり正夢になった。

一体、どんな仕組みなんだ？俺の頭。未来がわかるなんて。

(いや、今回はたまたまだ。きっとそうだ)

そう言い聞かせて、明日のための準備を始める。

(仇はとるぜ、一夏…！)

(ああ、あの目…)

セシリア・オルコットはシャワーを浴びながら、一夏のことを思っていた。

心のなかには、これまで感じたことの無い気持ちでいっぱいだった。

(どの男性とも違う、あの強い意志のこもった目…)

「知りたい…。もっと、あの人を。織斑一夏を…」

「ま、今日はお疲れ様。ずいぶんいい線いってたぜ？」

「そんなこと言ってくれるのは、お前だけだよ、信。嬉しくて涙が出そうだ」

放送席、放送席。

俺《信》の部屋には本日、大奮闘をみせた、織斑一夏くんがきています。

ずっと愚痴ってるけど。

話を聞く限り、どうやら篤は放課後に一夏と二人だけで特訓できるようだ。

篤…。

よく頑張ったな。

うんうん。

「ところでさー、信。お前、大丈夫か？明日」

「ああ。やれることはやった。特訓もしたしな」

「お前の特訓って、何なんだ？すげー気になる」

「知りたいか？」

コク、コク
一夏が頷く。

「わかった。じゃあ、今日の最終確認の特訓に付き合え」

「えー！何でだよ！？もう今日は疲れたって！」

「安心しろ。めっちゃ簡単だから」

なんだ？その顔は？

『嘘だろ』見たいな目は。

「本当だって！騙されたと思って！な！」

「そこまで言うなら…」

渋々、了解する一夏。

「よし！じゃあ、始めるか！！」

早速準備に取りかかる俺。

泣いても笑っても、明日が本番。

悔いの無いように全力をつくす。

ただ、それだけだ。

9：どんな人でも笑った顔が一番素敵（後書き）

信の特訓とは！？

次回遂にその方法が明らかに！！

煽っておいてアレですが、あまり期待しないで下さい…。

10：男の魅力は意外性（前書き）

初めて6000字超えです。

10：男の魅力は意外性

スウー…はぁー…

遂にこの日が来た。

気持ち落ち着かせるため、深呼吸をする。

そういえば、受験の日も深呼吸してたな。

あれからずいぶんと時間がたった気がする。

俺《信》は今日も第三アリーナ・Aピットに居る。

昨日は観戦者だったが、今日は違う。

「じゃあ、開きますね」

山田先生がそう言って、ピット搬入口を開く。

ガガッ、ウーン…

なにか宝を守っているような強固な扉が開ききるのを、俺は黙って待った。

「なんだ？緊張してんのか？信」

後ろにいる一夏が俺をからかう。

「馬鹿言うな。俺は極めて自然体だぜ？」

そう。

自分でも驚くぐらい、落ち着いている。

深呼吸する前から、今日の朝目が覚めてから、ずっと。

「それにしても、口数が少ないぞ。本当に大丈夫か？」

篤も応援に来てくれた。

「俺は元々寡黙なんだよ」

「「嘘つけ」」

ダブルで否定かよ。

しかし、最初見たときより表情が柔らかくなったよな、篤は。少しだけ。

「おい、時間が無いんだ。早くISを装着しろ」

織斑先生に急かされる。

気付くと、すでに俺の専用機がその姿を現わしていた。ボディカラーは黒。デザインは、なんと言うか、固そう？かな。

「これが…俺の…」

「はい。名前は、『しゅんくわう瞬光』。真宮くんの専用機です」

山田先生の言葉を聞きながら、瞬光に近付き手を触れて、そのひやりとした装甲を感じる。

俺には、わかった。

俺はこいつが必要だ。

こいつも俺が必要だ。

お互いに、ずっと待っていた。

こうして向き合い、共に戦う時を。

「昨日織斑が装着していたのは見ていたな？あれと同じようにすればいい」

織斑先生に従い、昨日の一夏のように、装甲を開いている瞬光に背中を預ける。

カシユッ

俺と瞬光が一体となる。

「どうだ？」

「絶好調だ」

「まだ動かして無いだろ」

箒の質問に答える俺、それに ツッコむ一夏。
そして、俺は右手の拳を前に出す。

「勝ってくる」

コンッ、コンッ

「負けんなよ」

「負けたら、お前にも稽古をつけてやる」

俺たち三人は、拳を合わせる。

そして、ゲートが開く。

俺は笑っていた。

楽しかった。

嬉しかった。

この場所が、この瞬間が。
自分がいて、自分の理解者がいて、自分の対戦者がいるという事実
が

ゲートから飛び出した俺は、空中に浮かんでいた。

目の前には、いつもの偉そうな雰囲気がないイギリスの代表候補生。

「……」

「よお。俺より緊張してねーか？」

「そんなことないですわ」

セシ…オルコットさんが答える。

まあ、わかってたけどね。

見たらわかる。

緊張してんじゃなくて、本気で俺と戦う覚悟を決めてたってことは
昨日の対戦で、相手は男だ、となめてかかるとどうなるか、身をも
って体験したからだろう。

「手加減はしませんわ」

「そりゃありがたい。すぐ俺が勝っちゃったら、つまんねーからな」

「いつまでその強気が続くか楽しみですわね」

試合開始のカウントダウンが始まる。

「最後まで続かせ」

3

「わたくし、今回は本気ですよ」

2

銃口とビットが俺を狙う。

「悪いが」

笑わずにはいられなかった。

本気で俺と戦ってくれろ。

それが嬉しかった。

1

「俺もだ」

すぐ動けるよう、限界まで集中力を高める。

0

刹那、俺に向かって閃光が走る。

それも、一本ではなく、五本ほど一気に。

左に緊急回避、更に宙返りして、そのすべてをかわす。

（まだ遅いな…）

イメージと一致しない。

操作感に慣れるまで多少時間がかかるか…。

あらゆる方向から第二射がくる。

俺が最初の攻撃を避けていたほんのわずかな間に、最も避けにくい角度から射撃が行えるよう、ビット及び自身も移動していた。

流石、代表候補生。

最初から本気を出していれば、強いじゃないか。

こっちも全力出さないと負ける。

(だけどもまだだ…もう少し待ってくれ)

俺は『残りおよそ30分26.8秒』と表示されたフォーマットとフィッティングにかかる時間を確認しつつ、休むことなく機体を上下左右あらゆる方向に動かす。

攻撃を避けるため、そして、なるべく早くこの機体に慣れて俺のイメージ通り動かすために。

「すげえ…」

山田先生が呟く。

「ああ、初めての戦闘とは思えん」

千冬姉も感心している。

俺《一夏》は二人の機体のあまりの速さに驚愕して、声もなかった。

「い…か」

「」

「お…、…か」

「」

「一夏ッ！！！！」

「わっ！なんだよ、箒。そんなに大声だすなよ。びっくりするだろ」

「さっきから何度も呼んでいるのにお前が応えないからだ」

プイツ、と箒がそっぽを向く。

「ご、ごめん。試合に見入っちゃって。セシリアもだけど、信もスゲーと思ってさ」

間違いなく、セシリアは最初から本気だ。

昨日の対戦で、自分に手加減してたのがよくわかる。

(俺だったら瞬殺だったな、きつと。うっ…)

モニターには、無駄のない動きで激しい攻撃を避けきっている信が写し出されていた。

「でも、おかしいですね」

「ああ」

「信がまったく攻撃しないことですか？」

山田先生、千冬姉、篝の順。

そう、信は先ほどからビームを避けるだけで、自分から攻撃を仕掛けていない。

ただの一度も。

チャンスは少なからずあるはずだ。

でも、攻撃しない。

「もしかして、今が『準備期間』ってやつなのか？」

ポツリ。

意識せず、声が出る。

「どうした、織斑？なにか知ってるのか？」

それを聞いた千冬姉が俺に問いかける。

「いや、昨日の夜あいつの特訓に付き合わされたんだ」

「「「特訓？」「」」

三人の声が重なる。

俺は昨日の様子を語り始めた。

「そこまで言っただけ…」

俺《一夏》は渋々、了解する。

「よし！じゃあ、始めるか！！」

信はそう言つて、ノートパソコンとテレビの電源をつける。

なんだ、そんなに電化製品の電源をつけて。

同時に二つも使わないだろ。

節電しろ、節電。

そんなこと思っているうちに、信はパソコンで動画共有サイトを立ち上げ、検索欄に『IS 大会』と打ち込んで、検索を始めていた。

更に、クローゼットの中から大量のDVDディスクを取り出した。

段ボールに入つて、他人が見つけない場所に入っているということは…。

「言つとくが、お前が考えてるようなものじゃねーぞ。期待に沿えなくて悪いが」

見抜かれたか。

「別に期待してないって」

「あつ、そうだ。一夏がせっかく居るから、先にこれを見るか。えつと…これをこうして…よし、再生」

信が、机の上に置いてあつたDVDを取つて、再生する。

ザ、ザー。パツ。

ノイズが少し入って、画面が写る。

白と青のIS同士が向かい合っている。

……ん？これって……

「今日の俺の試合じゃないか!！」

「ああ。観戦してた女の子に頼んどいたんだ」

そう言って、信はテレビの隣にパソコンを置き、動画を再生する。

「こっちは第二回モンドグロツソ、一回戦だ」

「…で？」

「は?』で?』ってなんだよ」

「いや、特訓は?」

「これだよ。』過去のISの対戦を片っ端から見まくる』」

なに言ってるんだ?こいつ。

「見てどうすんだよ!」

「覚えて、自分の姿を重ねる。そうすると、まだ動かしたことの無いISを自分の中でイメージできる。自分があそこで戦っているという経験をした』つもり』になれる」

言葉が出なかった。

そんなことができるわけ……

「できるんだよ、俺には。それに、お前だって自分の姿から学べる
ことがあるはずだ」

こいつ、冗談じゃなく、本気で言っている。
目が真剣だ。

「でも二つもどうすんだよ」

「同時に見る。時間がないからな」

おいおい、目が二つ有るのはものを同時に二つ見るためじゃないぞ。
一つのを立体的に見るためだぞ。

「いいから早く見よう。まだ、見たい試合があるしな」

「何本くらい?」

「今まで6053試合みたから……あと146試合かな?」

「……見終わらねーよ!っーか、そんなに見たの!??」

「心配すんな。一夏の試合以外は、1.5倍速再生でみるから」

「で、本当に俺の試合以外1.5倍速で見てさ、しかも途中から
この状況を自分だったらどう打開するか」とか、メモ取ってんだぜ
?1.5倍速の試合見ながら」

そう言いながら、試合前に信から預かったメモの束を取り出す。

電話帳と見間違えた、あの参考書とほぼ同じ厚さだった。信は試合直前までに、記憶し忘れがないか全部見直していた。

「で、見終わつた後、信に本当にできるのかって聞いたら

『頭の中のイメージと体の動きが一致するまで、20分。本格的にISに乗るのは初めてだから、その感覚を理解するのに、10分。その後は、その2つを連動させて、だいたい32分くらいかな』

だつてさ。32分がISを完璧に動かせるために必要な『準備期間』
つて言つてた」

無意識に4人の視線が、タイマーに注がれる。
試合開始から15分が過ぎていた。
明らかに信の動きは良くなっている。

「これでもまだ半分の完成度だというのは…」

篤は愕然としている。

「あいつが凄いのは、才能があるからだけじゃない。確かに、あいつ以外には真似できないやり方だけど、勝つために頑張ってるんだ。必死で」

襲いかかる閃光をすべてを避けきっている信の姿を見る。

その表情は真剣で、余裕は無かった。

時間を忘れて、立ち尽くす。

彼が『天才』である以前に『努力家』であることをこの場にいる全員が強く感じる中、タイマーは20分を過ぎた。

(まだまだ…まだ一致しない……)

ビームの雨が絶えず降り注ぐ中、俺《信》は回避行動に専念した。

「攻撃しないなんて、随分余裕がありますのね！」

うわっ！今はギリギリだった。
体を捻って、かるうじてかわす。

「余裕なんか有るわけ無いだろ。全力で戦ってる」

「では武器の一つでも展開してはいいが？初心者になめてかかられるなど屈辱的ですわ！」

いや、そうしたいのは山々なんだが…。

武器の一覧を出す。

そこには一つだけ、おほろび 隴火と表示されていた。

『種別：その他』だつてさ。

その他ってなんだよ。

しかも展開しようとする時『武器 ロック中』と表示される。

(何で勝手にロックとかしてんだよ、まったく…)

もっと言うと、解除方法もわからない。

「まあいいですわ。出さざるを得なくして差し上げますわ！」

ビームがこっちに向かってくる。

それを必要最低限の動きでかわす。
試合開始直後と比べ、信の動きには無駄がなく、自分でもISSの操作感に慣れてきたのを感じていた。

(でも、もっとだ。イメージと一致させる。体を動かせ。速く…もっと速く!!)

ダメージをうけるギリギリのところまで回避しながら、俺に瞬光からメッセージが送られる。

『フォーマットとフィッティング完了まで残り5分です』

セシリアはなるべく気持ちを落ち着かせるよう努力していた。気持ちが乱れてしまえば、命中精度が落ちるからだ。しかし、そろそろ限界が来ていた。

(何で一回も当たらないんですの!?)

そう、そうなのだ。

自分は確実に本気。

昨日とは違う。

攻撃も直撃コースで非常に避けにくい角度からしている。それなのに、信にはすべて避けられてしまう。普通なら、少なくとも一回位は当たるはずだ。

試合開始からすでに30分近い。

それなのにまだ、セシリアも信もノーダメージだった。

信は攻撃すらしてきていない。

(まったく、腹が立ちますわ！)

攻撃を当てられない自分にも、攻撃しない信にも。ここで、信が笑ったのに気付いた。

「何がおかしいんですの？つくづく人を馬鹿にするのが好きなようですわね！！」

セシリアはそう言いながら、ビットのエネルギー補給のため、一度機体に戻す。

信は一度動きを止め、セシリアと向き合う。

「馬鹿になんかしてないさ。むしろ尊敬してるんだ。やっぱり、強いなお前。ほんと、本気で俺と戦ってくれてありがとう。感謝するよ」

信の突然の『ありがとう』に顔が赤くなる。

(なっ、何でわたくしが赤くなっていますの!?)

セシリアが少し動揺しているの知らず、信が再び話し始める。

「だから……待たせて悪かった。やっと終わったよ。俺の準備も、こいつの準備も」

一瞬、信の機体が光を放つ。

目をつぶったのは1秒ほど。

しかし、その一秒で、相手のISはまったく別なものへと変わっていた。

『フォーマットとフィッティング、及び一時移行ファーストシフトが終了しました』

「ああ。ありがとう、瞬光」

先ほどまでの固そうなイメージは欠片も残っていない。

一夏の白式が中世の鎧を思わせるなら、瞬光はどことなく東方の剣客を思わせる。

動き易くするためだろうか、無駄なものが一切ない。

俺《信》はわかった。

こいつは俺が思った通りに動く。

俺の考えを理解し、合わせてくれる。

（そうだろ？瞬光）

何も表示されることは無かったが、なんとなく肯定の意志が伝わってきた気がした。

「…ロック解除」

『了解。隴火、ロック解除。右手に展開します』

すぐさま、俺の右手に展開粒子が集まる。

そして瞬時に収束して……収束して……しない？

俺が呆気にとられて、右手を取り巻く粒子を見ると、驚きから復活したセシリアが攻撃を再開する。

「準備は終わりました？でもまだ不具合があるようですね！」

ここがチャンスとばかりにミサイルまで撃ち込んでくる。

いや、違う。

不具合じゃない。

瞬光は俺に合わせてくれる。

その武器も同じだ。

大切なのは正確なイメージを伝えること。

(欲しい力を、強く願うこと!!)

俺は、欲しい。

どんなものでも、どんな敵でも、すべてを斬り裂くことのできる、
剣つるぎが

勢いよく、粒子を纏う右手に左手をあわせて縦に振る。

一刀両断されたミサイルが、俺を通り過ぎて後ろで爆発した。

体の前に隴火を持って、構える。

俺の右手には、わずかに光輝く剣があった。

日本刀のように『斬る』ことを目的にした、鋭い形だ。

止めどなく流れるように粒子が動いているが、剣の形は崩さない。

「行くぞセシリア！」

俺は一気に加速して、相手に近づく。

「ッ!!させませんわ!!」

俺がいたはずの場所にビームがくる。

だが俺はすでにいない。

両手両足にも付いたスラスタで複雑で自由自在、縦横無尽に動いて相手を翻弄し、懐に入る。

「遅い!!」

剣を横に振り抜く。

手応えあり。

『相手機体、絶対防御発動。エネルギー消費、大』

よし!

体勢を立て直すため、再びセシリアと距離をとる。

「くっ! 近寄らせなければ!」

セシリアが今まで以上に激しい攻撃で俺を遠ざける。だが、悪いな。

「これは近接武器じゃないんだぜ!」

相手との距離は21メートル。

その距離から、再び勢いよく剣を振る。

俺のイメージを伝えながら。

「飛べ!! 隴火!!」

剣から出た衝撃波が、進路上にあるビームとビットを斬り裂いて、敵に向かって飛んでいく。

「なっ!」

驚きで判断力が鈍り、硬直したセシリアには避ける時間はもつ無かった。

そして、直撃。

ビーーーーッ！！

『試合終了。勝者、真宮信』

啞然。

アリーナにいる全員がそうだった。

前例のない、男のIS操縦者。

国の支援を受け、厳しい訓練に耐え掴み取ったであろう代表候補生、いわゆるエリートという地位。

そのエリートから一撃も攻撃を受けず、勝ってしまった。

バーフェクト・ゲーム
つまり、完全試合。

3人が試合する事が決まったとき、どこかで『あの二人が勝つのは無理よね、男の子だし』と皆が思っていた。
ところが、結果はどうだろうか。

一夏は負けたにせよ大奮闘し、セシリアを追い詰めた。
信に至っては、勝ってしまった。

「ふん。つくづく人を裏切るのが大好きなようだな、男子」

千冬は一夏にからかうような口調で言った。

「？何だよ、いつ俺たちがそんなことしたんだ？千冬ね」

バシッ！！

「織斑先生だ。あと敬語を使い」

近くにあったメモの束で一夏を叩く。

「…ご指導ありがとうございます…。織斑先生…」

「一夏、信を迎えに行くぞ」

「あ、ああ」

箒と一夏が部屋を出ていく。

「これで、クラス代表は真宮くんですね」

山田先生がアリーナ設備の点検をしながら話しかける。

千冬が笑顔で応える。

その顔はいつになく上機嫌そうだった。

「さあ、それはどうでしょうか。何せ、あいつは人の予測を裏切るのが大好きなようですから」

頭に『？』を浮かべている山田先生を背に、千冬は一夏達を追って、部屋を出ていった。

10：男の魅力は意外性（後書き）

頑張ってみました。

いつもより長くなったので、誤字脱字があるかもしれません。

これからはなるべく6000字ほど書くようにしようと思います。

11：道に迷ってる人は大体拳動不審（前書き）

鈴が登場です。

11：道に迷ってる人は大体拳動不審

「信！やったな」

「ああ。まさかここまでやるとは思わなかったぞ」

一夏と篤が俺《信》に駆け寄る。
瞬光を待機状態にして、笑顔をつくる。

「俺もびっくりしてるんだ。何せ、初めての实战だったからな」

俺の右手首には黒いブレスレットがついていた。
待機状態の瞬光は自分の存在を誇張するわけでもなく、俺の体の一部であったかのようにそこにあった。

「そうだ、セシリアは？」

「あいつなら、先にアリーナを出ていったぞ」

織斑先生が姿を現す。

「そうですか。じゃ、行ってきます」

「おい、どこ行くんだよ信！」

「決まってるんだろ。セシリアのそこだよ」

そう言ってアリーナを出る。

場所は、わかってる。

負けた人なら誰でも、特にプライドの高い人間が屈辱的な負け方をしたあと行くところは、何もかも包んでくれるような広い存在を一番近くで感じることができるところだ。海とか、空とか。試合が終わったときのあの顔から読み取った確信を胸に、俺は階段をかけ上る。

(負けてしまった)

セシリアは屋上で空を見上げていた。

そうしないと、泣いてしまいそうだったから。

一夏の試合は相手のミスにせよ自分が勝ったので、さほど精神的ダメージは大きくなかった。

しかし、信との試合は完全にセシリアの負け。

どんな言い訳もできない、完敗だった。

持てる力全てで挑み、負けた。

負けた。

負けてしまった。

負けてはいけなかった。

でも、負けた。

そう考えるともう、涙はこらえられなかった。

ダダダダッ！！

誰かがこっちに来る。

「セシリア！」

突然の声に驚いて、一瞬泣き止む。

「なっ、何かようですか？ 大方、わたくしを馬鹿にしに来たんでしようね？」

そう言つて、力が抜けたようにへたつ、と座りこむ。

幸い、屋上の入口とは反対方向を向いていたので、泣いている姿を信には見られていない。

「馬鹿になんかするわけ無いだろ？ つーか、初めからしてないさ」

信の足音が徐々に大きくなる。

本当なら『来ないで！』と叫びたかったが、今声を出せば泣いてることがばれてしまう。

足音がすぐ後ろで止まり、信が自分と背中合わせに座るのを感じた。

「言つたる。『むしろ尊敬してる』つて。お前ぐらいISの操縦が上手いのはそうそういない。少なくとも、俺が見た試合の中では、上位の方だぜ？」

「あ、あなたが見た試合の数なんて、昨日の一夏さんとわたくしの対戦だけでしょ？」

何とか気持ちを落ち着かせ、声を絞り出す。

「いいや、お前と対等に戦つたためにいろんな試合を見た。おかげで毎日寝不足で大変だった。でも、お前に勝つためにはお前以上に努力しないと駄目だつて思つたんだ」

「そ、それでも、数えるほどでしょうか？その程度で」

「6199試合。昨日の試合を入れると、その場で見たので一回、録画で見たのもう一回。全部で6201試合だ。まあ、数えられなくはないな」

「……！！」

「お前は気負い過ぎだよ。肩の力抜いて、勝ち負けだけじゃなくもつと大切なものを見る。勝ったときより、負けた時のほうがよく見えるぞ」

そうだったのか。

これで納得がいった。

この少年は努力を怠らなかった。

それなのに、自分はどうかだろうか。

油断して、本気になったのは今日だけだ。

思い上がっていた。

この学年で自分に勝てる人はいないだろう、と。

「…ごめんなさい」

「は？」

「あなたを下に見すぎていましたわ。わたくしが、努力を怠らっていました。それなのに、あなたに勝てる」と

ぷっ！

信の吹き出す声が聞こえた。

「ハハッ！お前本当にセシリアか？いつになく弱気じゃないか！俺が知ってるセシリアは、もっとこう、自信に満ち溢れて、偉そうな女子だぞ？」

「なっ！失礼ですわ！わたくしはイギリスの代表候補生、セシリア・オルコットですよ！常に」

「それだよ、それ。なんだ、もう回復したじゃないか。流石、代表候補生だな？」

ははっ、とまた信が笑い声をあげる。

一瞬むっとしたが、すぐにセシリアもつられて、ふふっ、と微笑んでしまう。

何だろう。

この少年と居ると心が休まる。

穏やかで、優しい気持ちになる。

「俺さ、こんな才能持つてるだろ？だから、今まで俺と本気で戦ってくれる人がいなかったんだ。みんな『あいつにはかなわないから、やるだけ無駄だ』って感じ」

信の声が不意に真面目なものに変わる。

すでにセシリアは泣き止んでおり、静かに信の言葉を聞いていた。

「でも、お前は違った。俺がどんなやつか知っても、本気で戦ってくれた。それが本当に嬉しかった。ありがとう、セシリア」

また、顔が赤くなる。

(は、反則ですわ…。そんなこと言われたら、困りますわ…)
必死に顔の火照りを消そうと頑張っていると、信が思い出したように声をあげる。

「あつ、大事なことわすれてた」

「なんですの？」

「お前、約束覚えるよな？」

「約束？」

そんなもの、しただろうか。
試合のことしか頭に無かった。

「『俺が勝ったら、何でも言うこと聞く』」

「あつ…」

そうだった。

自分が負けるわけないと、つい約束してしまった。

信は何をさせるつもりだろうか？

表情がこわばる。

とんでもないことだったらどうしよう？

頭の中にさまざまな『とんでもないこと』を想像して、信の言葉を待つ。

「そうだな、さんざんいろんなこと言われたしな」

絶対ニヤニヤしてる。

(も、もうヤケクソですわ！何でも来なさい！！)

セシリアは覚悟を決めた。

裸踊りだろうと、鼻でスパゲッティを食べることだろうと、かまわない。

「今度から、『セシリア』で」

「へっ？」

拍子抜けして、間抜けな声ができる。

「いや、だから。今度から名前で呼ばせるって言うてんだよ」

「そ、そんなこと……」

再び力が抜ける。

「そんなこととはなんだ。ずっと『セシ…オルコットさん』って言い直すの大変だったんだぞ」

「さっきおもいきり『セシリア』と呼んでいたではないですか…」

「うっ！…そうだったけ？は、はは…っ」

先ほどと違う、きまりの悪そうな笑い声がセシリアにはおかしくて、笑顔になる。

「ふふっ、しょうがありませんわね。よろしくてよ。そのかわり、わたくしも『信さん』と呼ばせていただきますわ」

「ああ、いいぜ。よし！セシリアも泣き止んだところで、そろそろ戻るか！」

「なっ、泣いてなんかいませんわ！」

二人は同時に立って、向かい合う。
信もセシリアも笑顔で、晴れやかな表情だった。

「うーん、やっぱりそうだよな……」

「？なんですか？」

「箒にも言ったんだけどさ、やっぱり美人なやつは笑ったほうが美人だよな」

「／／／なっ……」

ぼっ、と顔が赤くなる。

「ほら、行くぞセシリア。何モジモジしてんだ？」

「し、してません！わたくしを誰だと」

「ハハッ、完全復活だな、セシリア」

笑われたと思うと、自分の前へ信が拳を握った右腕を出す。

『？』となっていると、いきなり左手で右腕を捕まれ、拳を合わせ

られた。
コンッ

「改めて、よろしくな。セシリア」

「え？え？え、ええ…」

「あっ、あともうひとつ。俺めんどくさいこと嫌いだからさ、クラス代表、セシリアに譲るよ」

ニコッ、と笑って『そっちもよろしく』と言う信を見て、また顔が赤くなる。

「本当、反則ですわ…」

ポツリ。

そう言ったセシリアの顔はどこか嬉しそうで、それでいて楽しそうだった。

セシリアは一夏に抱いたあの気持ちを、信にも抱き始めた自分を感じながら、その後をいそいで追いかけていったのであった。

そんなことのと、クラス代表は…。

「では、一年一組のクラス代表は、織斑一夏くんに決定です！」

「ええっ！俺！？」

めでたく一夏に決定した。
何で？

俺も知らないけど。

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実戦してもらおう。織斑、オルコット。試しに飛んで見せろ」

俺たち三人の専用機持ち対決も終わり、今は織斑先生の授業を受けていた。

今日の内容は『飛行の基本』。
で、それを見せるためにセシリアと一夏が呼ばれたって訳だ。

セシリアは言われてすぐにISを展開したが、一夏はもたもたしていた。

(何やってんだ、一夏。ほら、織斑先生に叩かれるぞ)

と思っている間に、何とか展開を終わらせる一夏。

「よし、飛べ」

すぐにセシリアが上昇する。

おゝ速いなー。

あれ？

一夏は？

……遅っ！！

セシリアはもうあんなに高いところにいるぞ。

大丈夫か？

一夏……。

何とかセシリアに追い付き、並んで飛行する二人。
なんかしゃべってるみたいだけど、この距離じゃ聞こえない。
もし聞き取れる人がいるなら、あの人しかいない。
そう、地獄耳を持つ最強の鬼教官、織斑
バシッ！！

「何失礼なことを考えてるんだ」

……やっぱ鬼だよ、この人。
読心術まで持つとは。

「織斑、オルコット、急降下と完全停止をやってみせる。目標は十センチだ」

随分とハードルが高い要求だ。
あの高さから急降下して地上から十センチで止まるなんて、相当難しいはずだ。

（おっ、最初はセシリアか）

先ほどの上昇よりも速いスピードで一直線に降下してくる。
そして……上手い！
流石、代表候補生！
難なくクリアー。

（次は一夏か…）

おお！

心なしかセシリアより速い気がする。
代表候補生と張り合うなんて、すごいぞ一夏！

ズドオオンッ!!!

……勢いだけが。

いや、まてよ…。

そうか。

やっぱりお前はすごいぞ一夏。

きつと、織斑先生の『目標は十センチ』を地面から『上』じゃなくて、地面から『下』と思っただな。

その常識の通じない考え方、素晴らしいと思っぞ。

でも張り切りすぎだ。

二メートル位下なんじゃないか？

「そんな馬鹿なことあるか」

「……………そうっすよね」

織斑先生と心が通じあった俺は、先生と同じように『やれやれ』という顔をしていた。

「大体だな一夏、お前というやつは昔から」

「大丈夫ですか、一夏さん？お怪我はなくて？」

篤が心配の裏返しで小言を言おうとすると、そこへセシリアが割って入る。

「っーか、篤…。」

一夏が昔から何なのか知らんけど、お前も昔から素直じゃないんだろっな…。

人のこと言えないぞ。

(あれ?なんかセシリア楽しそうだな。笑ってるし。ん?あの顔はもしかして…。)

いや、きつとそうだな。

後で聞こう。

そんなこと考えてる間に、またややこしいことになってるし。

「おい、馬鹿者ども。邪魔だ。端っこでやっている」

織斑先生は相変わらず厳しいな。

生徒に馬鹿で。

「織斑、グラウンドを片付けておけよ」

ガクッ。

一夏が肩を落とす。

しょうがない。

「俺も手伝ってやるよ」

「し、信…。お前、いいやつだな…」

「今頃気付いたか?」

一夏がしてくれたことへの恩返しとしては、まだまだ足りないくらいだけだな。

困ってるならどんなことでも、出来るだけ助けてやるう。

とはいえ、しんどいだろうな…。

覚悟を決めて、どこかに余っている土がないか探す信であった。

（誰かいないかな。生徒とか、先生とか、案内できそうな人）

ポストンバッグを持った小柄なツインテールの女の子は『本校舎一階総合事務受付』を探していた。

その足は決して立ち止まることはなく、常に前進を続けていたが、いい加減イライラしていた。

（ああ、もう！もう少し詳しく書いたっていいんじゃないの！？）

何度もポケットから出し入れしたためにくしゃくしゃになった案内書を握りしめ、より一層くしゃくしゃにしながら歩を進める。

「だから、そのイメージがわからないんだよ」

ぴたっ。

聞き覚えのある声を耳にして、初めて足を止める。
心臓の鼓動が速い。

（ひ、久しぶりだけど、あいつ、あたしのことわかるよね？だ、大丈夫。大丈夫！わからなかったら、それくらいあたしが美人になっただってことだし！）

すうつと息を吸い、思いきって話しかける。

「いち」

「一夏、いつになつたらイメージが掴めるのだ。先週からずっと同じところで詰まってるぞ」

……誰？

言葉を遮られたことに対してと、見覚えのない女子が自分の知っている男子に親しげに話しかけているのに対して、苛立つ。

「あのお、『くいつて感じ』ってなんだよ」

「……くいつて感じだ」

「だから　おい、箒！」

そんな会話をしている二人の後ろを、苦笑いしながら歩いていたら知らない男子と目があつた。
すると、その男子が近付いてくる。

「で、どこいくんだ？」

「は？」

突然何を言ってるんだろう。

頭に『？』を浮かべていると、

「場所、わかんないんだろ。ええっと、ああ、事務受付ならこっちだ」

手に持った案内書を見て、そう言われた。

「ほら、行くぞ」

またまた突然、手を握られ、引きずられるように連れて行かれる。

「ちよ、ちよっと！誰なのよ、あんた！」

「ん？ああ、そうだったな。俺は真宮信。ここの生徒だ。君は？」

「ファン・リンイン鳳鈴音。今日からここの生徒よ」

とりあえず名乗られたので、こちらも名乗っておく。

「へー、転校生？これからよろしくな。でも、この時期に来るなんて珍しいな」

「よろしく。ま、いろいろあったのよ」

「代表候補生だもんな。大変だよな」

えっ？

あたし、名前しか言っていないよね？

「なん」

「『何で名前しか言っていないのにわかったのか』だろ。見ればわかるんだ、俺。知り合いに代表候補生いるしな」

「じゃあ、もう一つ。なん」

「だから言っただろ？見ればわかるんだって。『何で何かを探してる

ってわかったのか』なんて聞くなよ、フアン鳳さん。ほら、着いたぞ」

「えっ！あ、うん」

質問を先読みされたことに驚いて反応が遅れた。
何なの？こいつ。

「真宮信だ。じゃあな、鳳さん」

今度は心を読まれた。

ニコッ

少年が不意に見せた笑顔に、何故か顔が赤くなる。
立ち去って行く信の後ろ姿を見つめながら、何故か速くなった鼓動
を落ち着ける。

（なっ、何よあいつ）

でも、あの手。

力強くて、それでいて優しくくて

（／＼な、何考えてるのよ！あたし！）

「どうかしましたか？」

信の姿が見えなくなった後、愛想のいい事務員の人が声をかけてく
れた。

そうだった。

わざわざ『本校舎一階総合事務受付』まで来た理由を忘れていた。

「あっ、あの！入学手続きを…」

「ああ、凰鈴音さん？ではこちらに名前を…」

ひと通り手続きを済ませた後、さっきの少年について聞いてみた。

「あの、真宮信って誰ですか？」

「彼の知り合い？」

「い、いえ、知り合いつて程じゃないんですが…」

「彼ね、凄いのよ。見ただけでいろんなことを覚えられるんです。何でも見ただけでわかっちゃうし。しかもISの操縦も上手くて、この前は代表候補生に勝っちゃったのよ」

「へ。そうなんですか」

「以外と凄いやつなのね。」

「ま、同じ代表候補生でも、あたしと戦ったら負けてたでしょうけど。ふふん、と一人得意な顔をしていると、突然聞いたことのある名前が耳に入ってきた。」

「凰さんは二組だから、真宮さんと織斑くんの男子が二人いる、一組のお隣ね」

「お、織斑って、織斑一夏ですか!？」

「予想以上の食い付きに驚く事務員。」

「え、ええ。彼も凄いのよ。男の子なのにクラス代表に」

なっちゃったんだから」

「そうですか。ふーん…そうなんだ……」

ついさっきまですっかり忘れていた。

知らない女子と親しげに話す一夏を思い出し、ふつふつと怒りが沸き起こる。

「あ、あの……」

「二組のクラス代表って誰ですか？」

「えっ！き、聞いてどうするの……？」

「代わってもらおうかなって。それだけですよ」

ニコッ

不安そうな顔の事務員に笑顔を見せる。

しかしその笑顔を見れば誰でも、その心の内に秘めた怒りを強く感じるだろう。

「待ってなさい、一夏……」

その少女の周りには、なんとなく近寄り難い雰囲気があった。

パンパン……！

クラッカーが鳴り響く。

「おめでとう、織斑くん!!」

「やったね、おりむー」

わいわい

今は夕食後の自由時間。

それを利用してあるパーティーが開かれていた。

その名もズバリ、『織斑一夏クラス代表就任パーティー』。

良かったな、一夏。

パーティーまで開いてもらえるとは。

もちろん俺《信》も飲み物を片手にパーティーに参加している。

(うんうん。みんな楽しそうだ)

ただ一人を除いて。

パーティーの主役である一夏は非常に困惑した表情を浮かべていた。

「何でだよ！信がクラス代表だろ!?!」

「まあまあ」

俺は一夏をなだめる。

「説明してくれよ、信！納得できない!」

「えー…、めんどくさいな…。じゃあ順を追って説明しよう。まず、勝ったのは俺。ここまではいいか?」

「ああ、それは分かる」

「で、俺がクラス代表をセシリアに譲渡。これもいいか？」

「いや、そこが一番わかんない！！何で譲渡してんだよ！？」

「めんどくさいから」

「お、お前……。責任感のないやつだな……」

「ああ。だから、責任感のあるやつに任せただ。異論あるか？」

「……ない……わけでもない……けど……もういいや…………」

「一夏が降参とばかりに肩を落とす。

でも俺はともかく、セシリアまで辞退したのはなぜだろうか？
俺も正直セシリアに聞いてみたいところだ。」

「なあ、セシリア。どうして代表を辞退したんだ？」

隣にいたセシリアに、実際に聞いてみた。

「やはりIS操縦には実践が何よりの糧。クラス代表ともなれば戦いに事欠きませんもの。だから、三人の中で『一番下手な』、『一夏さん』にクラス代表を譲ることにしましたの」

グサツ！！

「一夏の心に、『一番下手な』が深く突き刺さる音が聞こえた。

一方俺には『一夏さん』のほうが気になった。」

やっぱり…。

「セシリア…お前…」

「なっ、なんですか?」

じーーーーー

うん、絶対そうだ。

耳元に囁き、反応を確かめる。

(惚れたな?)

「／／なっ…!」

「ハハッ、そうか。そうだよな。でもまさか、セシリアがなあー。
あははっ」

「し、信さん!」

「そう怒るなつて。(笑ったほうが美人ですよー)」

再び耳元で囁く。

「／／なっ…!」

「夏は『?なんでセシリア怒ってんだ?』という顔だ。
つくづくズルいな、一夏。
うらやましいぜ。」

「し、しかしですね、そ、その、一夏さんも魅力的ですが、し、し

し、信さんも…その、大胆で、気になる、というか……。モ「モ」

「ん、俺がどうかしたか？」

「ノノ！なっ、何でもありません！！」

？おかしなやつだな。

顔をのぞきこんただけで赤くなるなんて。

風邪か？

今日は早めに寝た方がいいぞ。

「ひ、人の気も知らないで…」

あれ？

心読まれた？

セシリアも結構すごいじゃないか。

「一夏は強敵だぞ？頑張れよ」

なでなで。

「ノノし、信さん…。そ、そんな…。人前で…」

「あー！みーやん、セシリア口説いてるー」

みーやん！？

誰それ！？

このゆつくりした話し方、人につける変なあだ名。間違いない。

のほほんさん（命名・一夏）だ。

「だっ、だから口説いてないって!」

「えー?むきになるところが、あやしーなー?」

「そっだ、そっだ」

「おい、一夏、テメツ、裏切るんじゃねーよ!」

「うるさい!どうせ俺は下手くそですよ。あは、あはは…」

駄目だ、心へのダメージが意外と深刻だ!
なんか、性格がおかしくなっている。

早急に手当てを!

俺は一夏の肩に手をおき、必死に揺さぶる。

「一夏!大丈夫だ!お前はやればできる男だ!戻ってこい!」

「は、ははは……ハッ!お、俺は一体…?」

「よし!戻ってきたか!」

ふう〜。

これで一安心だ。

「いつ、一夏さん?そんなに『下手くそ』なままが嫌でしたら、わたくしが直接」

グサツ!!

パンツ!!

また一夏の心に深いダメージが与えられる音が聞こえ、同時に箒が机を叩いて立ち上がった。

「あいにくだが、一夏の教官は足りている。『私が』、直接頼まれたからな」

バチバチっ！！

セシリアと箒の間で火花が散る。
そうか。

こいつら、恋のライバルか。

「お前も大変だなー、一夏」

「あは、あはは…は？ははっ、そうだ、俺は下手くそですよ。あれ？なんか、川が見えるぞ？あゝ、千冬姉だゝ。おい。楽しそうだなゝ、俺もそっちにいくよゝ。あははゝ」

「駄目だっ、一夏！その川を渡ったら戻れないぞ！！っーかキヤラ崩れてんぞ！！」

バシッ！！バシッ！！

「人を勝手に殺すんじゃない。あと不要な茶番もいらん」

いてえ…。

一夏、お前の姉さんをご存命だ。
この人、不老不死かもな。

「いつ、痛っ！！……ハッ！お、俺は一体何を！？」

「戻ってきたか…」

やれやれ。

今度からは織斑先生に叩いて直してもらおう。
そんなことを考えながら夜は更けていった。

11：道に迷ってる人は大体拳動不審（後書き）

以上でクラス代表決定戦は終了です。
信も一夏も鈍いやつだぜ。

12：『いつか』って突然やってくる

『織斑一夏クラス代表就任パーティー』の翌日、俺《信》は一夏とISの操縦について語っていた。

「だからさあ、箒も言ってたたる？」「くいつ」「って感じた」

「わかるわけないだろ！頼むよ、信。もっと詳しく教えてくれよ」

「充分詳しい説明じゃないか。」「くいつ」「って感じた（笑）」

「『（笑）』ってついてるじゃないか！真面目に教えてくれよ……」

「織斑くん、真宮くん、おはよー」

俺が一夏をからかっていると、クラスの女子が挨拶をしてくれた。ちなみに先ほどの会話は箒の耳に届かないようにある程度小声で話していた。

もし箒が聞きつけでもしたら、竹刀でボコボコにされるからな。

「ねえ、転校生の噂聞いた？」

転校生？

ああ、昨日の迷子の女の子か。

「俺昨日あつたぞ、その転校生に」

「本当!？」

「ああ。代表候補生で、名前は」

ファン・リンイン
「鳳鈴音よー！」

教室の入口を見ると、あのツインテールの女の子が腰に手を当てて立っていた。
バーン！！
つて感じに。

「鈴……………？お前、鈴か？」

なんだ？

一夏の知り合いか？

「そうよ。今日は宣戦布告に来たってわけ」

物騒なこと言うな。

ISだったら本当に戦争出来ちゃうんだから。

「よっ！また会ったな。無事転校出来たみたいで安心したよ。良かったな」

「へっ！？あ、ああ、もちろんよ！それと、昨日はありがとう」

「どういたしまして。よろしくな、ファン鳳さん」

ニッコ

「う、うん……」

？

何でうつむいたんだ？

「それより鈴。何格好つけてるんだ？ すごい似合わないぞ」

「んなつ……？ 何てこと言うのよ、アンタは！」

うん、間違いなく一夏の知り合いだ。

それに

バシッ！！

この聞くだけで痛そうなお出席簿の音は……！！

「ち……千冬さん……」

おお、たじろいでる。

「学校では織斑先生と呼べ。さつさと自分のクラスに戻れ」

「は、はい……。あっ、一夏、逃げないでよ……！」

「さつさと戻れ」

「は、はいっ……！」

一夏と知り合いということとは、織斑先生とも知り合いか。でも完全にビビってたな。気持ちよ〜くわかるが。

「っていつかアイツ、IS操縦者だったのか」

「なんだ、お前知らなかったのか？」

「ああ」

（ふーん、しばらく会ってなかったのか。何！？あの子も幼なじみだと…？）

一夏の表情からそんなことを読み取っていると

「一夏っ、信！」

「一夏さん、信さん！」

わっ！

いつの間にか目の前に箒とセシリアがいた。

「……………今のは誰だ？ずいぶん親しそうだったな」

「あっ、あの女性とはどういう関係ですのー!？」

「バシッ！バシッ！バシッ！」

「席につけ、馬鹿ども」

なんで俺まで…。

箒とセシリアと俺は、とぼとぼと席に向かう。

朝からついてないな、俺は…………。

「鈴、いつ日本に帰って来たんだ？おばさん元気か？いつ代表候補生になったんだ？」

「質問ばっかしないでよ。アンタこそ、ニュースで見たときびっくりしたじゃない」

昼休みの食堂で、俺《一夏》と鈴は互いに質問を投げかけていた。いやー、一年ぶりとなると聞きたいこともけっこうあるな。

「俺もまさか代表候補生が迷子になってるなんて、びっくりしたぜ」

信が話題に入ってくる。

ちなみに信はカレーライスを食っている。

『カレーが一番効率よく栄養補給ができるんだ』とか言って毎日カレーを食っている。飽きないのか？

「べ、別に迷子になんかなってないわよ！ただ道に迷っただけよ」

「それが迷子だろ」

俺と信がダブルで突っ込む。

バンツ！！

バンツ！！

「二人とも、そろそろ説明してもらおうか」

「そうですね！一体その方とどのような関係なのかしら？ま、まさかつ、つ、付き合って……。二股なんていけませんわ！鳳さん！」

二人ともどうしたんだ？

ていうか、テーブルを叩くな。

みんなこっち見てるじゃないか。

「は、はあ！？あたしは二股とかかけてないし、そ、それに、付き合ってるわけでも……」

？

鈴もどうしたんだ？

そんな焦って。

しょうがない、助けてやるか。

「そうだぞ、付き合ってなんかいないぞ。ただの幼なじみだ」

「俺は昨日道案内しただけだ。それ以上でもそれ以下でもない」

俺のあとに信が続く。

？

今度はなんか不機嫌そうだ。

鈴、一年の間に情緒不安定になったのか？

「幼なじみ……？」

「あっ、そうか。箒と鈴は入れ違いになったから、お互いのこと知らないのか。ほら、鈴、前に話した剣道の道場の娘。それが箒だ。」

で、筈。こいつはお前が転校したあと、小学校に転校してきて中学二年の終わりまで俺と一緒にだったんだ」

「ふうん。そう、あなたが……。よろしく」

「ああ、こちらこそ」

バチバチッ!!

あれ？

なんか火花が見えたような……？

「ンンッ!! わたくしを忘れてもらっては困りますわ!! イギリス代表候補生、セシリア・オルコットを!」

「誰? あたし、他の国に興味ないし」

「なっ…!?!」

セシリアが顔を真っ赤にしている。

確実に怒ってるな。

なんか、三人とも仲悪そうだな。

仲良くしろよ。

「お前、本当にズルいな」

信が小声で話しかけてくる。

「?何がだ?」

「そこか!?! お前のそういうところか!?! 自覚してないところがい

いのか！？それが原因なのか！？」

「信までどうしたんだ！？」

まったく、わけがわからない。

でもとりあえず、なんかややこしいことになりそうだ。

（何なんだ、あいつは。幼なじみキラーか！？）

俺《信》は今日の出来事を思い出し、一夏に嫉妬していた。

（完全に好きってわかるじゃないか。付き合ってる？って聞かれたとき動揺しまくってたじゃないか！？）

一夏は今、第三アリーナで練習してて部屋にはいない。
箒とセシリアに特訓してもらっているらしい。

このままだとそのうち専属コーチが三人になるぞ。

「いいなあ、まったく…」

なんか急に眠くなってきた…。

まぶたを閉じると久しぶりに夢を見た。

ん…。

どこだ？ここ…。

「どっ？」

「本当にやるのか？」

誰だ？

声に出そうとしたが、口に拘束具がされていて、出せない。
動こうとすると、首、両手、両足にも付いた拘束具が音を立てる。

「いいのか？まだ試作品プロトタイプなんだろう？下手をすれば、貴重な存在を二つも失うぞ」

「大丈夫よ。私が保証するわ」

「そうか、わかった…」

気が付けば、周りにはたくさんの科学者と医者がいた。
何をする気だ！？
嫌な予感しかない。
逃げ出したい。

「おい！暴れるんじゃない！」

知ったことか！

俺は必死で抜け出そうともがく。

「っ！くそ！」

バチッ！！

俺の全身に痛みが走る。
とたんに意識が遠のく。
ち…くしょう。

目の前が暗くなった。

次に目の前が明るくなったとき、今度は知っている場所にいた。
あれは…一夏と篤だな。

それと、誰だ？

顔は見えないが、髪は金髪でオレンジ色のIS？に乗っている。

三人は仲間のようだ。

だが、どうやらピンチらしい。

そこで俺は三人が戦っているやつに気付く。

真っ黒の塊が無理やり形を作って人型になる。

ちらつと、黒い塊に飲み込まれる銀髪の髪の長い女の子が見えた。

なんだ？アイツ…。

IS…なのか？

でもさっきの銀髪の女の子を取り込んだ…よな？

突然、一夏が黒いやつに突っ込む。

しかも、白式を展開してない。

馬鹿野郎！

死ぬ気か！！

そして黒い人形が一夏に刀を降り下ろして

ガバツ！！

「なんだよ、それ…」

俺は酷く混乱していた。

一つは自分の過去をまた見たせい。
そしてもう一つは……。

「一夏が…危ない？」

嫌な夢だ。

もしかして、俺がアイツに嫉妬したからか？
だとすれば…

「最低だな、俺…」

恩人があんな目に合う夢を見るなんて…。
自分が嫌になる。

(こんなにはつきりした夢を見たのは、入学式の夜の)

ピタツと俺の思考が一瞬止まる。
そうだ。

あの日の夜見たのは、予知夢だった。
確率は低いと思うが、これも予知夢だったら？
正夢になったら？

(いや、まさかな…。IS学園が簡単に敵を迎え入れるわけない。
それにあのときの夢では、あり得ない人があり得ないこととしてた)

織斑先生がコーヒーに塩入れるなんて。
ふふっと思わず笑ってしまう。

あの人がそんなアホなことするわけないじゃないか。
今のところ夢的中率は二分の一。

半々だ。
外れる可能性は充分ある。
でも……

「一夏。もしお前がそうになったら、俺が助けてやる」

一人でそんなことを呟く。

ここで、自分が大量の汗をかいているのに気付いた。
時間は……アレ？

三十分しかたつていない。

ずいぶん長い時間、寝た気がするんだけどな。

(まあいいや。シャワー浴びるか……)

ザアア……………

シャワーを浴び終えて、体を拭き、服を着る。

(ふう。すつきりした。これからどうしよ　　)

＼最つつつ低！女の子との約束をちゃんと覚えていないなんて、男の風上にもおけないヤツ！犬に噛まれて死ね！

なっなんだ！？

この声、鳳さんか？

いや、でも隣は一夏の部屋で……。

驚いてドアを開けると、ちょうど鳳さんも一夏の部屋から出てきた。
ドアを思い切り閉めて出てきた女の子は、泣いていた。

俺が呆然と立ち尽くしていると、ドアの前で涙を拭いていた女の子と目があつた。

「待て！ストップ！止まれ！」

「…まだ何もしてないじゃない」

「見たらわかる。どうせすぐ逃げ出すだろ？」

「……」

「はあー。ちよつと来い」

手を握って逃がさないようにし、俺の部屋に連れていく。

いきなり手を捕まれて、ただでさえ混乱している鈴は、更に混乱した。

「！ち、ちよつと、放してよ、変態！泣いてる女の子部屋に無理やりつれこむなんて、最低よ！」

「泣いてる女ほつとくよりマシだ！」

突然怒鳴られてびっくりする。

何よ、こいつ。

優しくしてくれたり、怒ったり、わけわかんない。

「いいから入れ。言っとくが俺は変態じゃないから安心しろ」

渋々、信の部屋に入る。

何も無い。

それが感想だった。

あるのはどの部屋にも初期装備されているものと、パソコン、テレビだけだった。

「ほら、これ飲め。そして少し落ち着け」

無理やり手渡されたお茶と信を見比べる…。

まさか…

「睡眠薬なんて入れるわけないだろ？俺をどんなやつだと思ってるんだ？少しは俺を信用しろ」

「ごめん…」

近くにあった椅子に座り、信と向き合う。

「どうしたんだ？いつたい？」

「見れば、わかるんでしょ…」

「じゃあ、俺から言っただいいのか？」

「……笑わない？」

「笑うわけないだろ」

それから鈴は、胸に抱えた不満も不安もすべて信に話した。

一夏との約束のこと、自分がどれくらい一夏に会うのを楽しみにしていたか、両親のこと、一夏との思い出……。
信は口を挟むことも、うなずくこともせず、ただ聞いてくれた。そのすべてを見抜くような視線と、吸い込まれそうな瞳は自分という人間を静かに見守ってくれた。
その目を見ていると何でも相談できる気がして、何もかも話した。ふと気付くと心がスッキリしていた。

「……そうか。頑張ったな」

もうこれ以上話すことはない位話したあと、信が言ったのは、それだけだった。

でもその一言にすごく救われた気がして、また涙が出てきた。

「おいおい、泣くなよ。もう大丈夫だろ？」

そう言っただけで顔を撫でてくれる人がいるのが、とても嬉しくて、よけい涙が出てきた。
今度は嬉し泣きだ。

「な、泣いて、なんか、いないわよ……。ばかあ……」

信はしゃがんで、座っている自分と同じ目線になる。
ただじっと見つめてくるその瞳から、目がそらせない。
顔と顔がこんなに近いのに、動けない。

「いいか、今回ばかりは一夏が悪い。お前が怒るのは当然だ。けどどな、アイツがどれだけ鈍いか知ってるだろ？」

信は鈴を見つめたまま、話を続ける。

「もし、今日みたいに泣きたくなったら、俺の部屋に來い。話ぐら
いは聞いてやる。いいな？」

こくり、とつなずく。

「よし、じゃあこれでこの話は終わりだ」

ニコツと笑った信の笑顔にドキツとする。

(な、何なのよ、まったく…)

「あー、あと…えっとな…」

「?何よ?」

「さ、さっきは怒鳴って悪かった、よ…。凰さん」

と信が手をあわせて謝る。

「……ぷっ」

別人のようにおろおろしている信がとてもおかしくて、吹き出して
しまった。

「あははっ！本当にわけわかんないわね、アンタ。突然怒ったり、
謝ったり。いいわ、許してあげる」

「あ、ああ。ありがとう」

「あと、その『鳳さん』ってやめてよね。気持ち悪い。『鈴』でいいわ」

「わかった。鈴。で、これからどうするんだ？」

「取り敢えず、一夏が謝るまで無視するわ。あたしがどれくらい怒ってるか、見せつけてやるんだから」

「そっか。まあ、あいつも一回痛い目みないとわかんないだろうからな」

二人は顔を見合わせ、ニヤリと笑う。子供がイタズラを考えているように。

「じゃ、お休み、鈴」

「うん！お休み！信！」

元気よく応えた鈴の顔はとても晴れやかだった。

（不思議なやつ。一緒にいると、気持ちが楽になって、なんだか、ずっと側にいたくなるような）

自分の部屋にダッシュで戻る途中、そんなことを考えて、頬が赤く染まる。

（なっ、なに考えてるの！あたし！あたしが好きなのは、いち）

「ノノノっ！なんなのよ！アイツら！」

言葉とは裏腹に、鈴は笑顔で廊下を駆けて行った。

ちなみに……。

「よお、一夏………」

「あつ、信！聞いてくれよ、鈴も箒も酷いんだぜ」

「いや……。お前が一番酷い………」

「ど、どうした、信？な、なんかおかしくないか？」

「お前のようなやつはできるだけ苦しんで地獄へ堕ちろ………」

「恐っ！どうしたんだ!？」

「お前、今度俺と戦え………」

「なっ、なんで？」

「俺が直々に地獄に堕としてやるよ………」

「は？や、やだよ………」

「うるさい！この鈍感野郎が！もう一度よく考えろ！約束の意味
」！」

「え、鈴とのか？タダ飯」

「……報われないな、あいつも……」

「なんだよ？ていうか、信。なんで鈴との約束」

「一夏、正直言つと今、俺はおまえをボコボコにしたい」

「はっ？な、何なんだよ！？怖い！ホントに怖い！」

「だが、その役目は鈴に譲ろう。いいか、一夏！いつか鈴がお前をぶっ飛ばすからな！」

一夏はまったく意味がわからなかったが、取り敢えず一番は信がなんで鈴との約束を知っているのか不思議でしようがなかった。

「まさか一回戦からあたるとは……」

ピットで一夏が呟く。

「そうだな。俺も同感だ」

俺《信》も本当にそう思う。

まさかこんなに早く『いつか』が来るとは……。

「はっ！信！まさかあのとき、すでにこれを知っていて……」

「俺が言ったのは、組み合わせ発表の前の日だったろ？」

「そうか……。やっぱり偶然か？」

クラス対抗戦^{リーグマッチ}、第二アリーナ、第一試合。

一組代表・織斑一夏 VS 二組代表・凰鈴音

まさか初戦からこうなるとは思っていなかった。

「鳳さんのISは『^{シエンロン}甲龍』。近接特化型ですわ。わたくしのとときは勝手が違いましたよ」

「緊張するな。練習の通りすれば勝てる」

セシリアと箒が一夏を激励する。

この二人は熱心に教えていたからな。

あのやり取りのあと、途中から俺も特訓に混ぜたんだが、どちらかと言うと一夏への憂さ晴らしの感が強かったので教えたことは何もない。

「一夏」

「なんだ、信」

「頑張つてこい」

「そこは『勝つてこい』じゃないのか？」

「複雑な心境なんだよ、俺は」

鈴も応援したいし、かといって一夏を応援したくない訳じゃない。

でも、あのとときの鈴の顔を思い出すと……なんかなあ。

「わかった。やるだけやってみる」

「おう」

コンッ

俺と一夏お決まりの、お互いの拳を合わせる儀式を終える。

「行ってくる」

そう言っで一夏は鈴の待つ戦場へと飛び出していった。

試合開始からしばらくして、不思議ことが起こった。

「なんだ、あれは……」

試合の様子がうつしだされているリアルタイムモニターを見ながら、
篤が呟く。

「ああ。なんで一夏がいきなりぶっ飛んだんだ？」

信も疑問に思っているようだ。

モニターにうつったのは、不適な笑みを浮かべる鈴と、『何か』に
吹き飛ばされた一夏の姿だった。

「あれは『衝撃砲』ですわね。ブルーティアーズと同じ、第三世代
型兵器ですわ」

セシリアが二人の疑問に答える。

「砲身も砲弾も見えないなんて、やりづらいな」

「しかも、あの武器、砲身の斜角がほぼ制限なしに撃てるようです」

「死角がないってわけか…」

信の意見に山田先生が捕捉を加える。

信が試合を見る目はいつも真剣だ。

まるで、細かい動作一つも見逃さないようにしているかのよう
に、瞬きすらしていない。

(一体、何を考えているのだろうか)

算はときどき、この少年がどのように世界を見ているのか、疑問に
思うことがある。

「ん？一夏のやつ、何かするつもりだ…」

「そうですね…。織斑くん、何をするつもりでしょうか」

「おそらく、『イケンニッション・ブースト 瞬時加速』だろう。私が教えた。上手く使えば、
あいつでも代表候補生と渡り合える」

信と山田先生の疑問に答えたのは、今度は織斑先生だった。

確かに、一夏の動きが相手を翻弄するように素早い動きになった。
確実に相手を仕留めるため、隙を作り出そうとしている。

「それに」

織斑先生が続ける。

「加速するタイミングがうまいやつとよく模擬戦をやっていたみたいだしな。イメージもしやすいだろう。そうだな、真宮？」

そうか！

一夏との特訓でときどき見せた、あの加速は瞬時加速だったのか。信は驚くほどISの操縦が上手くなっていった。

相手を翻弄し、わずかに出来た隙を見逃さず、かといって深追いつる訳でもなく。

そう、まさに『蝶のように舞い、蜂のように刺す』戦法をとってつもなく器用にこなすのだ。

しかも、一夏との特訓のときは『威力が有りすぎる』と隴火を使用せず、素手で雪片式型と戦っていた。

「そうっすね、何回も懐に飛び込んでやりましたから、突撃のイメージはあると思います。でも……」

「でも、なんだ？信」

信がモニターを見ながら何か考え始めたのを見て、篤は続きを促す。このまま考え込まれたら、続きが聞けないだろうと思ったからだ。

「セシリア、篤」

「なんだ？」

「なんですの？」

「俺と一夏の戦い見てたよな」

「ええ、もちろんですわ」

「あのとき俺が何回、瞬時加速使ったか、わかるか？」

「ああ、懐に飛び込むときと、離脱するときに一瞬速くなったやつだろう。それだったら、数えきれないほど」

「ゼロだよ」

「は？」

「あれは普通の加速だ。瞬光は普通のISより速いからな。瞬時加速は使ってない。だから、一夏に瞬時加速のイメージはない」

「ち、ちよつと待て！あの速さが普通だと言うのか！？」

箒は特訓の様子を思い出していた。

信の動きはただの移動一つとっても速く、攻撃と離脱はハイパーセンサーでなければ追いつけないスピードで繰り返していた。

明らかに通常のISの加速よりもケタ違いのスピードを出していた。瞬光が速いのは知っていたが…。

（あれが普通だと…！？）

セシリアもこれには驚いたようで、信じられないという顔をしていた。

山田先生は箒とセシリアを見て、『そ、そんなに速かったんですか！？』という顔をしている。

「ふっ、そうか。だが篠ノ之とオルコットの反応を見ると、心配は

「いらぬいようだぞ？」

織斑先生だけが落ち着いて話を進める。

「そうですか。弟さんのお役に立てて光栄です。今度俺にも教えて下さいよ」

「どうせ、やろうと思えば出来るんだろう？世界大会では当たり前
のテクニクだからな。動画で何回も目になっているはずだ」

「見るのと、実際にやるのは、違いますよ」

「ふっ。お前がそれを言うか？」

「ハハツ。そうですね」

二人とも、非常に楽しそうである。

前々からこの二人には共通点を感じていた。
それが今やつとわかった。

この二人は、強さの底が見えない

ズドオオオオン！！！！

突然の轟音と、強いゆれがアリーナを襲う。

「！？なんだ！？」

「あ、アリーナに侵入者！これは……」

モニターにうつったのは、一夏の白式でも、鈴の甲龍でもない、不

吉なオーラを放つ不気味なISだった。

13・塩と砂糖って間違えると大変(前書き)

戦闘シーンとかうまく書けない……

13：塩と砂糖って間違えると大変

「なんだあいつ!？」

俺《信》は突然現れた黒い全身装甲フルスキンのISを見て叫ぶ。

あんなIS見たことがない。

腕が異常に長いし、顔に付いているセンサーと思われる目のようなものが変に不規則だ。

バランスは悪そうだし、あんなセンサーの配置で視界もいいはずがない。

普通なら絶対使われないはずだ。

あんな機体が戦えるはずがない。

「試合中止！織斑、凰！ピットに戻れ！」

織斑先生が一夏たちに退避を命じる。

だが一夏たちはおるか、観戦していた生徒たちの避難すら間に合っかわからない。

なぜならば…

「ダメです！アリーナの遮断シールド、レベル4でロック！各緊急避難用通路の扉も同様です！」

山田先生がシステムを必死に調べているが、ロック解除には相当時間がかかるだろう。

『お前、何者だ！何が目的だ!』

一夏の声オープン・チャンネルが開放回線を通して聞こえてくる。

間違いないあの不気味なISにも届いているはずだ。
しかし、相手は答えない。

「織斑くん！鳳さん！今すぐアリーナから脱出してください！すぐに先生たちがISで制圧に行きます！」

「でも山田先生、シールドレベルが」

「安心しろ。すでに三年の精鋭に連絡して作業に当たっている。現在もシステムクラックを実行中だ。遮断シールドを解除出来れば、すぐに部隊を突入させるし、脱出も可能だ」

俺の言葉を遮って、織斑先生はすでに対策がたてられていることを知らせてくれる。
「だけど、裏をかえせば…」

「それまでは何も出来ないってことか…」

「先生」

「一夏だ。」

「先生たちが来るまで俺たちで食い止めます」

「何言ってるんですか！？ダメです！危険過ぎます！！」

「鈴、いいな？」

「だ、誰に言ってるのよ。そ、それより離しなさいよ！動けないじゃない！」

「織斑くん！鳳さん！聞いてます！？聞こえてますー！？」

山田先生の声はもう二人に届いていない。

すでに戦闘を始めた白式と甲龍に何を言っても無駄だろう。

「まあ、落ち着け。本人たちがやると言っているんだから、やらせてみてもいいだろう」

「お、織斑先生！？でも…！」

なるほど、さすが元世界最強。

とても落ち着いているように見える。

表面上は。

俺でも注視しなかったら、その内心の焦りを見ぬけなかったろう。

(やっぱり、一夏のことか心配なんだな。どうしてこう、あいつの周りの女性は素直じゃないんだろうか？)

知らず知らず、口元が緩む。

だが、次の一瞬で俺の顔から笑顔が消えた。

「山田先生、コーヒーでも飲め。糖分が足りないからイライラするんだ」

「……織斑先生、それ、塩ですよ」

「……」

山田先生の冷静なツツコミに顔を赤くする織斑先生。

対照的に、俺は青い顔をしていただろう。あり得ない、そんなわけないと思っていた。でも…これはあのとき見た夢の内容だ。これも事実になった。と、いうことは…

(一夏がやられる?)

所詮、夢だ。

それはわかる。

でもだからって、無視していいのか?

頭に、黒いISに向かって突進していく一夏の姿がよぎる。あのとときのやつとは、違う。

それもわかる。

でもだからって、結果も違つと言えるだろうか。

俺にはそう断言出来ない。

モニターには、四回目の攻撃を避けられ、明らかに攻めあぐねている一夏と鈴の姿があった。

そろそろシールドエネルギーも限界のはずだ。

今、俺がすべきことは

「二人を助けに行きます」

「えっ!ま、真宮くん!？」

動揺する山田先生を背に、俺は二人のもとへ急いだ。

「なあ？鈴」

「何よ？」

俺《一夏》は鈴が作ってくれた チャンスを計四回無駄にして、あの仮説が頭に浮かんだ。

「あいつの攻撃、機械じみてないか？」

「はあ？ISは機械でしょうが」

「いや、そうじゃなくて…。あれ、本当に人が乗っているのか？」

あの、不気味なIS。

何を考えているか、まったくわからない。

そこがおかしい。

今もまったく攻撃をしてきていない。

なぜだ？

普通、敵がこんなに話をするのをただ待っているはずがない。

「あり得ない。ISは人が乗らないと動かないようにできてるもの」

鈴が俺の意見を否定する。

だが、それ以外に説明がつかない。

「仮に、仮にだ。あいつが無人機だったら？」

「なに？無人機だったら、勝てるって言うの？」

「無人機だったら、全力で攻撃しても大丈夫だしな」

俺が少し笑ったのを見て、鈴が不思議そうな表情をする。

「何か作戦でもあるの？」

作戦ってほどでもないけどな。

でも、やってみる価値はある。

「ああ。鈴、俺が合図したら」

ズドオオオオン!!!!

突然の轟音に俺の言葉はかき消される。

「な、何!?!」

鈴が驚きの声を上げる。

敵のちよつど隣に、何が落ちてきた。

落下地点から黒い煙が上がる。

その立ち上った黒い煙の中で何が動いた。

ゆっくりと、もう一機のISが姿を現す。

よく見ると、いや、よく見なくても、間違いない。

今戦っているISと同じやつだ。

似ているとかそういうレベルじゃない。

同じだ、すべて。

「なっ…!!」

まずい。

こちらはエネルギーが限界。

対して相手側はほぼ無傷。

しかも、完全に無傷のやつが追加された。

恐らく、外見と同様に機体のスペックも同じだろう。

作戦でどうこうなる問題じゃない。

無理だ、勝てない。

(ダメだ！心まで折れたら終わりだ！)

必死で闘志を燃やす。

しかし、それはとても弱々しく、風が吹けば消えてしまうようなものだった。

「ど、どうすんのよ！一夏！」

バキッイイイン！！！！

俺が答える前に、ガラスが割れるような音が響いた。

俺も鈴も、敵二人も無意識にその方向を向く。

その一瞬がとてもゆっくりに感じられた。

だが、そこには何も無い

ドゴオオオオオン！！！！

わけじゃない、見えなかったんだ。

吹き飛ばされた二機の黒いISの代わりに、別の黒いISが一機、その場所に立っていた。

操縦者はいつものように人懐っこい笑顔をこちらに向けた。

その笑顔はいつもよりも優しく、頼もしく見えた。

「よっ、元気か？二人とも」

「「信！」」

我ながらナイスタイミング。

ちょうど敵機が追加された時にアリーナの観覧席に到着。

展開していた隴火で無理矢理シールドバリアを破壊し、同時に瞬時加速。

初めてにしては上出来だったと思う。

で、並んで立っていた敵を二機、まとめてぶっ飛ばした。

アリーナの脇まで飛んでいった未確認ISはしばらく動けないはずだ。

「大丈夫か？まったく、お前ら無茶にもほどがあるぜ」

「信、どうやってここに？」

俺《信》が一夏と鈴に近寄り、声をかけると、まだ立ち上っている砂ぼこりを見ながら、一夏が俺に質問をする。

「あー…、ここに来るまでロックされた扉を無理矢理ぶっ壊した。で、今シールドも壊した。正直、この戦いが終わったあとの織斑先生のほうが怖い…」

「「あー……………」」

二人とも苦笑い。

俺より織斑先生と付き合いが長いから、罰則の想像がしやすいんだろっ。

…俺もだいたいわかるけど。

「ま、今はそれより、あいつらだ。何なんだ？そろそろ立ち上ってきてもおかしくないぞ？」

先ほどの攻撃は所詮ただの蹴りだった。

当たりどころがいくら悪くても、倒れている時間が長すぎる。

「ああ。あいつらたぶん、人が乗っていない」

「……嘘だろ」

「ほら！そんなことあり得ないのよ、一夏！」

鈴がこぞとばかりに食って掛かる。

「一夏は『だってさあ……』と言い返している。」

「まあいいや。で、勝機は？」

「ある」

「言ったな？」

俺と一夏は顔を見合せ、ニヤリと笑う。

ピピッ……！！

熱源感知。一時の方向から射撃。

瞬光から送られてきた情報通り、すぐにビームがとんでくる。俺達は急上昇してそれをかわした。ユラリと二機のISが姿を現す。どうやら休憩時間は終了らしい。見れば見るほどそっくりなISだが、蹴りが頭に入ったやつは、頭が少しへこんでいた。

「俺は頭がへこんだやつ^{へこんだやつ}の相手をする。もう片方は任せた」

「わかった。鈴！」

「聞こえてるわよ！」

「俺が」

一夏の声は聞こえていたが、目の前のISは俺にその内容まで理解^{へこんだやつ}させるつもりはないらしい。再びビームを撃ち込まれた。

「っと！上等だ！覚悟しろよ！」

俺は体をひねって必要最小限の動きでかわす。セシリア戦でも使った、お得意のビーム回避法だ。

「うおおおおお！」

回避してすぐ、懐めがけて加速する。瞬時加速こそ使っていないが、普通なら反応できないであろう速度だ。

相手は無駄に長い腕を振り回し、俺を殴ろうとする。

俺は後退と前進、敵の死角に入っては出てを繰り返して、ヒラリヒラリとかわす。

でも、相手も馬鹿じゃないらしい。

タイミングをずらされ、避け損ねた拳が左からとんでくる。

この速さに反応してくるとは、やるじゃないか。

だけど……

「甘い!!」

俺は拳を両手でつかみ、右足を軸にして、体を勢いよく回す。

しかも、腕のスラスタで瞬時加速を部分的に発動させ、勢いをプラス。

「くらえ!!」

俺は黒いISをアリーナの地面に向かって投げ飛ばす。

ズドオオオオン!!

衝撃で地面がえぐられる。

「よし!いち」

「一夏!!」

「なっ!箒!?!」

俺の言葉を遮ったのは箒だった。

「男なら…男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとする!!」

どうやら俺の壊した扉を通してアリーナまで来てしまったようだ。

『…………』

キュイイ…………

まずい！

一夏たちの戦っているISが箒の方に照準を合わせ、ビームのチャージを始める。

「箒！逃げ」

ドンッ！

先ほど投げ飛ばしたやつが俺の脇腹に突撃した。

「ぐっ…！邪魔だ！」

俺は怒りにまかせて相手を殴ろうとする。

しかし殴るのよりも先に俺に光線が当たった。

腹に強力な熱線をくらって、その衝撃で気を失いそうになる。

「かはっ…………！」

思わず腹を抱え込むような体勢になり、視野から敵が消える。

気付いたときにはもう遅い。

もう一度視野にとらえる前に右から強烈な打撃攻撃をくらう。

何とかこらえたが、エネルギーを大分持ってた。

しかし一番の問題は、もう俺には箒を助ける時間がないということだ。

「くそ！」

再び突撃してきたISを踵落として地面に叩きつける。
敵は地面に激突。

落下地点から、砂ぼこりが上がる。

「一夏！頼む！！」

「任せろ！！」

そう言った時にはすでに一夏は鈴の龍砲を背中につけ、瞬時加速。
雪片式型で敵に斬りかかっていた。

ザシュツツ！！

雪片式型が敵の腕を切り落とす。

切り口からは血は出ず、オイルのようなものが吹き出した。

腕を失ったにもかかわらず、躊躇なく相手は残った腕で一夏を殴り
飛ばす。

そして、無防備な一夏のまさに目と鼻の先でビームのチャージを始
める。

「一夏！離れる！！」

俺の叫びを聞き、ニヤリと笑う一夏。

安心しろとでも言うように。

「狙いは？」

「完璧ですわ！！」

一夏の呼び掛けに答えたのはセシリアだった。専用IS『ブルー・ティアーズ』を展開し終えて、すでに攻撃体勢のビットの照準は寸分の狂いもないだろう。ビットから放たれるビームが敵に当たり、一夏から離れるように後退する。

「さすが！」

「当然ですわ！」

敵はよろめいて少し怯んだように見えた。ダメージが蓄積し、機体制御システムがうまく働いていないのだろう。

「もう一息だ！」

「セシリア、決めろお！」

「了解ですわ！」

俺と一夏に答え、手に持った銃器『スターライトmk?』の引き金を引く。

放たれた光線は敵の体の中心部を撃ち抜いた。

「やっばいい腕し」

『熱源感知。下方から射撃に注意』
瞬光からの情報に従い、素早くやや左斜め上に上昇、回避行動をとる。

「待ってる、信！今助けに」

「一夏！！まだあいつ動いてる！！」

鈴の叫びに、俺も一夏も先ほど撃破したはずのISを見る。

動けるはずのないほどのダメージを受けながら、腕の発射口だけを一夏に向けている。

「うおおおおお！！！！」

一夏が雄叫びを上げて斬りかかる。

頭の中でその姿が夢の内容と重なる。

駄目だ、間に合わない……！！

「やめろおおお！！！！」

刹那、白式が淡いピンク色の光線に包まれた。

ザシュツツ……！！

光線に包まれるのとほぼ同時に、雪片式型が今度こそ敵を仕留めた。

光線が消えると、白式も待機状態のガントレットに戻った。

「一夏！！！！」

鈴は倒れている一夏に駆け寄る。

うつ伏せから仰向けに体勢を変えさせ、無事を確認する。
どうやら気絶しているだけのようだ。

「鈴！」

信が敵を殴り飛ばしてから鈴の隣に来てしゃがむ。

「無事か？」

「うん、なんとか。ただ気絶してるだけみたい」

「そうか…」

不安そうだった顔が安堵の表情に変わる。

しかしそれは一瞬で、信はすぐ真面目な顔になった。

「セシリア。二人を頼む」

『えっ！信さんはどうしますの？』

オープンチャネルからセシリアの声が聞こえる。

鈴も同意見だった。

「あの子の言う通りよ。あんたどうするつもり？まさか、一人で戦うとか言うんじゃないでしょうね？」

「鈴」

「駄目よ。あたしも戦う。今ここで一番強いのは、あたしなんだから」

そうだ。

代表候補生の意地がある。

ここで退くわけにはいかない。

「…鈴、頼んだ」

「何言ってるのよ！私と一緒に戦う！」

信は今しがたダメージから回復し、立ち上がった敵と向き合う。

鈴の言葉など耳に入っていないようだ。

「ちよっと！無視」

「…鈴」

肩に手を掛けようと伸ばした腕が信と自分との間で止まる。

名前を呼ばただけなのに、体が動かなくなる。

相手のISもたじろいだように動きを止める。

「…俺はお前を守れるほど、冷静でいられる自信がない…」

信からは、刺すように鋭いプレッシャーと、押さえきれない怒りが止めどなく流れ出していた。

怖い。

別に信が怖い訳じゃない。

自分を助けてくれたあの少年が、どこか知らない場所に行ってしまう
いそうな気がした。

それが怖かった。

「……信」

返事はない。

ただと言っておかなければならない。

「あたし、信が来てくれて、すごく嬉しかった。助けに来てくれて、本当に嬉しかった。安心した。だから……」

絶対に聞こえるように、届くように、叫ぶ。

「ありがとう！」

一拍おいて、信がこちらを振り向き、笑う。

「どういたしまして」

鈴はその笑顔を見て、確信した。

理由はわからないし、根拠もない。

だけど、この少年は強い。

どこにも行かない。

きつとまた助けてくれる。

「今度絶対にお礼するからね！絶対よ！逃げるんじゃないわよ！」

そして、一夏を抱えてアリーナから出ていった。

俺《信》は皆がアリーナから出たのを確認し、ふうーと長い息を吐く。さっきまでは、一夏を守れなかった自分と、あのISに対しての怒りで感情的になっていた。

だけど、鈴の言葉で正気に戻れた。

俺に感謝してくれた。

俺が来て嬉しかったと言ってくれた。

その事が怒りを静め、俺に冷静さを取り戻させた。

「さてと……待たせたな」

右手に隴火を展開させる。

今回は形を指定せず、拳に纏ったままにしておく。

俺が武器を展開させたのを見て、相手は両腕の砲門からビームを放つ。

だが、発射されたときはすでに俺は上空にいた。

ビームが当たり、さっきまでいた場所が爆発する。

敵機が俺を探して頭を動かす。

数秒で上空の俺に気付き、もう一度照準を合わせるためにこちらを向く。

チャージが始まる。

（今だ！）

このタイミングで瞬時加速を発動。

数十メートルの距離を一気に詰められ、次の行動の選択にもたつく敵機。

だが俺にとってそんなことはどうでもいい。

何を今さらしたって、間に合わない。

懐に入り、拳を握り、腕だけ部分瞬時加速させて右ストレートを放

っ。

この間およそ二秒。
通常の何倍の威力にもなった隼火を纏う拳は、全身装甲の機体に風穴をあけた。

「じゃあな、化け物」

腕を引き抜き、剣状にした隼火で敵を叩き斬る。

ドオオオオンー！

真っ二つになったISは目の前で爆発した。

もちろん近くにいた俺も爆風に呑み込まれたが、まだシールドエネルギーが残っていたので俺自身にダメージが及ぶことはなかった。つくづくISって便利だ。

「よし、これで」

『お帰り………』

突然、頭の中で声が聞こえた。

同時に心臓を掴まれているような感覚が俺を襲う。
息が、出来ない。
苦しい。

「ぐっ……はっ……！だ……れ……だ？」

『また、戦うんだね………？』

目の前が真っ白になり、その中心に少女が立っている。

何だか昔から知っているような気がする。

少女は嬉しそうな、悲しそうな、あるいは困ったような不思議な顔をしている。

そして、俺に手を差し伸べる。

『必要になったら、呼んでね。助けるよ。君を』

そこで俺は気を失った。

14：友達の友達はやっぱり友達

「ん…？」

俺《信》が目を開けると、織斑先生が顔を覗き込んでいた。

「目が覚めたか」

先生は安堵の表情を浮かべる。

「俺は……」

「安心しろ、お前は勝った。敵は跡形もなく吹き飛んだよ」

そうだ。

俺が勝った。

でも、そのあと…

「俺はどうなつたんですか？それにここは…？」

「私にもわからん。部隊と共に駆け付けたときにはボロボロになったIS一機とお前が倒れていた。ここは保健室だ。怪我人をほかのどこへ運べというんだ？」

ISを吹き飛ばして、誰かの声が聞こえて、苦しくなって、気絶。自分でも訳がわからないなんて、情けない。

そんな自分を嘆いていると、一番大事なことを思い出した。

「一夏！一夏は？」

織斑先生は無言でちよいちよいと隣を指差した。
カーテンの隙間から一夏の顔が見えた。
どうやら寝ている。

「一時的な眠りですよね」

「私の弟がこんなことで永眠などするか、馬鹿者が」

「ですよね……」

はは……、とひきつった笑い顔を作る俺。

そうか、無事だったか。

よかった……。

「……がとう」

「は？何ですか」

いつになく小さな声の先生を不思議に思いながら、聞き返す。

「お前は弟を助けてくれた。ありがとう。感謝する」

そう言つて頭を下げる先生を見て、一瞬思考が停止する。

一瞬。

本当に一瞬で、俺の思考が再開される。

「な、何で頭とか下げてんすか！？やめてください！一夏を助けたのは鈴ですよ！？」

その通りだ。

俺は一夏を助けてやれなかった。

アリーナから運び出したのは鈴なのだから、助け出したのは鈴だ。

「鳳は『お礼なら信に言つてください』だとさ。まったく、私は誰に感謝すればいいのだ？」

そんな困ったような顔で言われても。

うーん、そうだな。

「一夏に言えばいいんじゃないですか？『よく頑張ったな、お前は私の自慢だ』とか」

「怪我の具合は随分いいようだな。グラウンドを三百周くらい走れば、体が暖まって、より早く回復が進むんじゃないか？」

「……」

くそ、鬼め。

照れ隠しとわかっていても、本気でさせられそうで怖い。

話題を変えるか。

「そ、そう言えばアリーナの扉の修理とかどうすんのかな？」

俺は発言途中で墓穴を掘ったことに気付く。

扉壊したの、俺だ。

ぐあゝ！しまった！

自分から罰則を受けるような話題をふってしまった。

ふわふわした感じで忘れてくれてたかもしれないのに。

「…ありがとうございます」

「なぜお前が感謝しているんだ？おかしなやつだ。でもまあその言葉、素直に受けとっておこう。どういたしまして」

保健室のドアが開き、そして閉じた。

「どういたしまして…か」

そんなこと言われたのも数えるぐらいしかない。
何だか嬉しくなった。

(そうだ…鈴とセシリアにも…お礼を…言わ…ないと…)

俺は襲ってきた眠気に身をゆだね、再び眠りに落ちていった。

性格に似合わず、鈴は控えめに保健室に入る。

そーっと一夏の寝ているベットに近付き、顔を覗き込む。

「まったく、気持ちよさそうに寝ちゃって…」

静かに寝息を立てる一夏を見て、笑みがこぼれる。

「一夏……」

もつと 顔を近付け、お互いの唇が

「鈴？」

「わあっ！？お、起きてたの！？」

「お前が起こしたんだろうが」

危なかった。

キスしようとしたことは気付かれてないらしい。

良かったような、残念なような。

「何焦ってんだ？」

ギクツ！

「あ、焦ってなんかいないわよ！勝手なこと言わないでよ、馬鹿！」

端から見たら完全に焦っているが、一夏にはばれなかったようだ。

「あのISは…」

「二機ともあんたと信が撃破したわ。心配しなくても、みんな無事よ」

「そっだ！信は！？」

鈴の言葉に反応し、一夏が勢いよく上体を起こす。

そのとき全身に走る痛みで一夏は顔を歪める。

「ち、ち、違わない、違わないわよ！！ホ、ホラ、料理って誰かに食べてもらうと上達するじゃない！？は、は、は、はは」

つい口から出てしまった言葉に後悔する。

もしかして、今が最後のチャンスだったかも。

あーあ…。

なに

「なにしてんだよ、鈴……」

カーテンで仕切られた隣のベットから声が聞こえる。

二人が声の方向を見るのと同時に、カーテンが開く。

「「信！」」

「ふあ……。おはよう」

まだ寝たりないようなあくびをして信がベットから立ち上がり、こちらに歩いてくる。

そして鈴の右隣で止まった。

「まったく、もう少しだったじゃないか。もったいない」

「う、うるさいわね……」

やれやれというポーズをとった信が一夏のほづを向く。

「お前も気付いてやれよ……」

一夏は『何が？』っていう表情をしている。

「あっ、そうだ！鈴、こっちに帰ってきたってことはまた店やるのか？親父さんの料理、うまいもんな」

突然、心が冷たくなる。

一気に体温が下がった気がした。
そうか。

一夏には言っただけだった。

「一夏」

「ううん、いいの、信。あたしが話すわ」

口を開こうとした信を止める。

信は少し心配そうな顔をしていたが、鈴の表情から心を察したのだろう、大人しく引き下がった。

「あのね、一夏……。あたしの両親、離婚したんだ……」

「えっ……！」

一夏が驚きの声を上げる。

そして、沈黙。

きつと、どう励ませばいいか考えているんだろう。

でも、そんなことしてほしくない。

どうしてほしいかもわからない。

「鈴……」

「何？」

長い沈黙を破ったのは一夏だった。

「今度、どっか遊びに行くか」

……え。

何？今の？

聞き違いじゃないよね？

男女がどこかに遊びに行くのって…。

鈴の硬かった表情がぱあっと輝く。

「そ、それって、デート」

バシユツ！

保健室のドアが勢いよく開く。

「一夏さん、信さん！具合はいかが？」

セシリアがニコニコして部屋に入ってきた。

「セシリア……」

「？なんですの？信さん？」

「タイミングが……」

そこで、セシリアは鈴に気付く。

さっきまでの笑顔はどこへやら、ムツとした表情で詰め寄る。

「何であなたが？お二人が起きるまで抜け駆けは無しと決めたでしょっ！？」

「そういつお前も私に隠れて抜け駆けしようとしていたな」

今度は筈が保健室に入ってきた。
どうやらセシリアを見張っていたらしい。

「~~~~っ！もう！二人とも出て行ってよ！」

せっかくあと少しでデートの約束が出来たのに！
心の中で地団駄を踏んでいると、信から思いがけない言葉が出た。

「そうだ、俺も鈴にお礼しなきゃと思ってたんだ。鈴、今度どっかに遊びに行こうぜ」

「えっ！」

ど、どうしよう。

ふ、ふふ、二人からデートに誘われるなんて……。

「あつ、でもお前は一夏と行くからいいか。じゃあセシリア、今度一緒に遊びに行くか。二人で」

「ほ、本当ですよ！？」

「ああ。今回のお礼しなきゃいけないからな」

「ちょっと！なによそれ！あたしを先に誘ったんだからあたしと行

きなさいよね！」

「だから、お前は一夏と」

「関係ないの！」

「鈴！一夏と一緒にどこに行くのだ？一夏！私も」

「それでしたらわたくしも一緒にしたいですわ、一夏さん！」

「別にかまわ」

「駄目！早く出てってよ二人とも！」

ギャーギャーとわめく女子三人を見て、男子二人は苦笑い。

「そういえばあのIS、どうなったんだ？」

「そうだな…。廃棄でもしたんじゃないか？そこらへんは先生たちが上手く処理するだろ」

一夏たちは唯一残った疑問についていろいろ考えずにはいられなかった。

学園の地下五十メートル。

限られた人間しか入ることが許されない、隠された空間。

未確認の無人ISはここで解析が行われていた。完全に機能を停止した無人機が台の上に乗せられ、遠隔操作のアームが止まることなく解析作業を行っている。

「解析、終了しました。やはり、登録されていないコアですね…」

「そうか」

画面の解析結果を見ているのは山田先生。

その後ろで腕を組んで立っているのが千冬だ。

「真宮くんの撃破したISは完全に解析不能でしたが、恐らくそちらも…」

「ああ、たぶん同じだろう」

千冬はいつもより更に厳しい表情だった。

その目はすでに最強のIS操縦者のそれだった。

「やはりな」

「心当たりでもあるんですか？」

確信じみた発言に山田先生は怪訝そうな顔をする。

「いや、ない。今はまだ　な」

「楽しそうだよな、お前ら」

「どこがだよ。なあ、信」

「まったくだ。弾、理想と現実はまったく別物だ…ぜ！」

「ぐあ！この距離で奥義とか逃げられないだろ！」

俺《一夏》は中学からの友達、五反田^{こしたんだん} 弾の家に遊びに来ていた。この前、弾に信のことを話したら『ぜひ一度会わせてくれ』と言われていたので、今日は信も一緒に来ている。

最初こそ互いに気を使っていたものの、俺がトイレでいなかった間に何があったのか、すでに名前で呼びあうまでに打ち解けていた。

曰く、『同じ悩みを抱えるもの同士、共感し合うものがあった』らしい。

悩みってなんだ？

二人とも無さそうだが。

今は三人で格闘ゲームの対戦中だ。

「これで決まりだああ！！」

ドオオオン！！

「「な、なにいい！！」」

二人同時にKOされて、嘆く俺と弾。

信は最初の数回ずっと俺たちに負けまくっていたが、今はトップに立っている。

くそ！

短すぎるぞ、準備期間！

「はっはっはっ。これでなん連勝目かな？二人とも」

「強すぎだぜ、信。さすが天才」

弾が部屋に大の字に寝転がって、天井を見上げる。

「天才じゃねーって。弾もかなり強いじゃないか」

「あー、こいつはゲームしかしてないからな」

「一夏！そんなこと言ってくれるな、悲しくなる」

あはは、と三人で笑いあう。

やっぱり友達が多いほうがいいな。

今度、鈴も連れてくるか。

鈴も中学時代は俺たちとよく遊んでいた。

きっと弾にも会いたいだろっ。

「いいなー、お前らは。ゲームとかする暇もないほど女の子に囲まれているんだよな。毎日楽園だろ？招待券ねえの？」

「「ねえよ、馬鹿」」

俺と信が突っ込む。

「でも鈴が転校して来てくれて助かったよ。話し相手本当に少なかったからなあ」

「ああ、鈴か。鈴ねえ……」

弾と信がニヤニヤして顔を見合らし、ガシッと握手する。

「弾さん、お互い苦労しますなあ」

「そうですねあ、信さん。悩みがつきませんなあ」

本当に今日あったばかりか二人とも。

すでに息ぴったりだぞ。

俺が突っ込もうとしたとき、ドアが勢いよくドカンと開いた。

「お兄！お昼できたよ、さっさと食べに」

俺の1つ年下、弾の妹である五反田蘭ごたんだらんが足をつきだして立っていた。ショートパンツにタンクトップの機能的重視の格好、かなりラフだ。だが、ラフな格好の女子が普通に廊下を歩くIS学園の寮で暮らす俺と信はこういう格好を見ることに慣れてしまった。慣れって怖い。

「い、一夏さん！？き、来てたんですか？」

一瞬俺の視界から消え、再び出てきたときは心なしに服装がただされていた。

「ああ、今日はちょっと外出」

そうですね…と返事をした蘭は信を見る。

「あ、あの…こちらの方は…」

「はじめまして、お邪魔してます。真宮 信です。よろしく。えーと…」

「あつ、ご、五反田蘭ですっ！あ、兄がいつもお世話になってますっ！」

わりと丁寧な自己紹介をされたので少し焦ったらしい。深々と頭を下げる蘭。

「そっか。よろしく、五反田さん」

信の言葉にぶっ！と弾が吹き出す。

「い、五反田さん』て…、信が『五反田さん』て…。なんか気持ち悪い」

「なに！ほんの数時間前までお前も『五反田さん』で呼んでたじゃないか！」

蘭が状況を上手く呑み込めず、キョロキョロしている。

「す、数時間前って…？」

「ああ、こいつら今日あったばかりなんだよ。俺が信を連れてきたんだ」

ドタドタと格闘技を掛け合っている二人を横目に俺が説明する。

「そ、そうなんですか！？私、てっきりお兄の友達の方だと…。そ

うですよ！一夏さんの友達のかたですよ、やっぱり！」

蘭は妙に納得したらしく、首を大きく縦に振る。

「やっぱり、類は友を呼ぶのね……。イケメンの友はイケメンだわ……」

「ん？類がなんだって？」

『お前、お兄って呼ばれてんのか？可愛いな、おい！』『うるせー！五反田さんてなんだよ、鳥肌たつわ！』とドタバタやっている二人にかき消されてよく聞こえなかった。

「な、何でもありません！一夏さんたち、お昼まだですよ？あ、あのよかつたらどうぞ」

「そうか、じゃあ、いただきますかな。おーい、信！」

振り向くと二人は大の字になって寝そべっていた。

「はあ、はあ……。やるじゃねえか」

「お前もな……」

「ほら、そういう小芝居はいらないから。信、蘭が昼飯どうかだつてさ」

信と弾は肩で息をしながらムクリと上体を起こす。

「信、食べてけよ。どうせ残り物だろうけど。あと蘭、別に呼び方

『蘭』でも気にしないよな？信が気持ち悪くて耐えられない」

弾がまだぜえぜえしながら話す。

「えっ！ま、まあ、いいけど…」

「気持ち悪いとはなんだ。まあ、俺としてもそっちの方が呼びやす
いからいいけど。よろしく、蘭。お昼、御馳走になるよ」

信がニコツと笑いかけると、蘭は赤くなって足早に『じゃ、じゃあ
先に下に行きますから』と言って部屋から出ていった。

「いい妹じゃないか、弾。お前が悩むのもわかるわ」

「……信、今また悩みの種が増えた…」

「なに！本当か！また一夏か！？」

何で俺が出てくるんだよ。

しかも『また』ってなんだ、『また』って。

「お前も一夏と同類だ、コノヤロー！！」

「はあ！？突然なんだよ！俺が何したんだよ！」

「うるせー！なんだよ、お前らチクショー！！」

あーあ、また始まったよ…。

なんとか二人を落ち着かせ、下に降りるまでに二十分ぐらいかかった。

ちなみに、やっぱり仲直りは『やるな…』『お前もな…』的な感じだった。

弾は最後に『絶対お前らを弟になんかしらないからな！』とか意味不明なこと言っていたが、何で『お前ら』だったのだろう。

俺は関係ないのに。

きつと言い争いしすぎて頭がおかしくなっただんな。

どうするんだ、弾。

ただでさえ馬鹿なのに。

「一夏、それはひどくないか…？」

信が俺の心をよんだ。

テーブルに座ると、蘭が水を持ってきてくれた。

「ど、どうぞ…」

「あれ？着替えたのか、蘭。どっか出かけるの？」

「あ、いえ、これは、ですねっ」

さっきまでのラフな格好はどこへやら、髪をおろし、半袖のワンピースを着ていて、その裾からは躍動感溢れる脚が伸びている。いわゆる外出用のおしゃれな格好だと思ったのだけ…。

「一夏、察しろ」

信の隣で弾がうんうんとうなずく。

ピカーン！

そうか！

「デート？」

ダンッ！

「違いますっ！」

あれ？違うの？

テーブルを叩いて即時否定された。

「弾……」

「言ってくれるな。もう、慣れたさ……」

信と弾はなんか悟ってるし。

お前ら打ち解けすぎだろ。

「ごめんな、蘭……。あとで一夏ぶっ飛ばしとくから」

「はい……大丈夫です……」

「その服、すごく似合ってるぞ。可愛さを二倍って感じた。だから自信もてよ？なっ」

信にそう言われて頭を撫でられた蘭は恥ずかしそうに手を組んで、もじもじしていた。

「あっ、ありがとうございます……／＼」

ビュッ　　パシッ

突然飛んできたおたまを素晴らしい反射神経でキャッチする信。

「あ、あぶなっ！」

「おっ…悪いな、兄ちゃん…。手が滑っちまってねえ…」

そう言って厨房から現れたのは五反田家の頂点に立つ最強の男、五反田ただけ敵その人だった。

弾と蘭の祖父であるが、蘭にだけかなり甘い。

蘭に男が触れようものならば、その拳骨ですべてをなぎはらうだろう…。

信、やっちまったな…。

今も顔こそ笑顔だが、完全に漫画とかで見かける怒りマークが二個ぐらいついている。

俺でもわかるんだから、信なら尚更だ。

一目見ただけで、この人に逆らわない方がいいと感じたはず。

「そ、そうですか…。お、お仕事ご苦労様です」

そこで止めとけばよかったのに、何とか機嫌をよくしようとして選択した言葉が悪かった。

「い、いやー、蘭さんはきつと美人なお嫁さんになりますね。相手の方が羨ましいいなー、な、なんて…」

ビキビキッ！

ヤバイ。

マークが十個ぐらい増えた。

やめる！信！

本気で死ぬぞ！

一緒に生きて帰ろう！

「そうかい…。そうだろ…。羨ましいだろう…。俺も羨ましいよ……………」

「で、ですよー」

「さつきは悪かったな、兄ちゃん…。また手え滑らすかもしんねえから気を付けてくれ……。今度は包丁使うんで…。ヘッヘッ……………」

再び厨房に戻る蔵さんを見ながら、信は青い顔をして固まっていた。

「一夏…。お前らきつと、すぐ仲良くなっただろうな……………」

「うん？まあ、弾ほどではないけどな。何でだ？」

「似てるからな…。鈍いところが」

その後はありがたく昼食をいただき（信は常に厨房の蔵さんを気にしていた）、俺たちは街に出てゲームセンターに行ったり楽しい時間を過ごした。

あとで弾から聞いたのだが、蘭はあのあと『お嫁さん…。美人の…………』と一日中夢心地で独り言を言っていたそうだ。

よほど嬉しかったんだろう。

ただ信はもう蔵さんの前に立てないな、きつと…………。

立つ前にぶん殴られるからな。

大変な運命を背負ったな信。

俺は信に同情しながら、寮への帰路についたのであった。

15・喋ってHISと同じくらい自己進化する(前書き)

恐らく一番人気であろう、フランスのあの人が登場ですd) | (!

登場するだけだけど) ^ - ^ ヽ

15：噂ってISと同じくらい自己進化する

「一夏、何なんだ弾のおじいさんは！織斑先生と同じものを感じた
！」

「たしかにあの人の拳骨は千冬姉にも劣らない威力だからな」

弾の家に行くのが怖くなった今日この頃、いつもと違って俺《信》
が一夏の部屋に遊びに来ている。

「何を震えているのだ、だらしがない。男子たるものもつと強気で
生きていくべきだぞ」

おいおい。

女子に男子の生き方諭されちゃったよ。

一夏の部屋ということは当然、箒もいるわけだ。

コンコン

「はい、どうぞー」

ドアのノックに一夏が応える。

ガチャッ

「失礼しまーす。あれ？真宮くん、何でここに？」

礼儀正しく部屋に入ってきたのは我らが副担任、山田真耶先生だっ
た。

「今は遊びに来てたんですよ。俺がいると話しづらい」とでしようか？」

「ええっ！何で話があるってわかったんですか!？」

「見ればわかるんですよ、俺」

「そうでしたか、そうでしたね、そうですね…」

まったく、そろそろ慣れてくれないのに。

山田先生はよく俺が特殊だということを忘れるらしい。

まあ、普通に接してくれるのは嬉しいんだけど。

いい方でも、悪い方でも、特別扱いされるのは苦手だ。

悪い方は精神的に堪えるし、いい方は反応に困る。

「で、先生、俺たちに何の話ですか？」

一夏が話の内容を聞く。

「ええ。あつ、別に真宮くんが居ても大丈夫ですよ」

「そうですか。じゃあ、ここにいます」

「はい！実はお引越すです!」

この部屋にいる生徒二人の頭の上に『???』が表示された。

俺は山田先生の表情から誰が引越すのか察したので別に『?』は浮かばなかった。

「先生、誰が、どこに、どうして移動なのか言わないとわかりませんよ」

俺が先生にアドバイス。

あれ？

そうすると俺が先生で先生が生徒の構図だな。

ややこしい。

「えっ！ああ、そうでしたね、すみません。えーと、篠ノ之さんが、別の部屋に、調整がついたので、お引越しです」

なんかこういうゲームあったな。

いつ、誰が、何を、どうした、ってやつ。

「ま、待つてください！それは今すぐじゃないと行けませんか？」

篤が突然の引越し話に動揺している。

『一夏と一緒にいい』か…。

恋する乙女だな、篤。

「ええ、篠ノ之さんもくつろげないでしょう？」

「で、でも…」

一夏を見る篤。

ここで一夏が『俺と一緒にいる』とか言えたら篤もかなり嬉しかっただろうに。

そうでないにしても一夏が『俺は別に一緒にでもかまわない』とか言えたらよかったのに。

だがそこは流石、織斑一夏。

「箒、俺なら大丈夫だぞ。箒がいなくてもちやんと起きれるし、歯も磨くぞ」

子供か！

いや、まだ成人してないから子供なんだが、高校生がそれぐらい一人で出来なくてどうする。

「…先生！今すぐ！部屋を移動します！」

あーあ。

怒らせちゃったよ。

箒はさっさと持ち物をまとめて、引越しの準備をすませた。

山田先生は勢いに圧倒されながら、『じ、じゃあ部屋の案内をします』と箒の後ろをついていった。

後ろでどうやって案内するんですか、先生。

「一夏」

「なんだ、信？」

「俺はもうツッコまない」

また頭に『????』とついている一夏を置いて、俺も自分の部屋に戻った。

戻ってからしばらくすると、廊下からとんでもないセリフが聞こえてきた。

／＼つ、付き合ってもらおう！！／

……え。

カチャツ、ソーっ

ドアをわずかに開き、細い隙間から声の方向を見る。

一夏の部屋の前に先ほど引越したはずの箒が、腕組みして立っていた。

相変わらず凜とした横顔だが、かなり勇気を振り絞っているのがわかった。

勇気を出して『付き合ってもらおう』なんて言う理由は一つしかない。

(今のは…告白？だよな…？そうだ！絶対そうだ！)

おお！

遂に自分から動いたか！

箒、随分成長したな。

あの鈍いやつとは大違いだ。

廊下の奥の角でチラツと人影が見えたが、気にすることはない。

対して、『あの鈍いやつ』の姿は見えなかったがきつと照れていることだろう。

(こんな美人に告白されるなんて羨ましいぜ、一夏)

明日はなんて声をかけようという考えながら寝る準備をする信であった。

翌日

結局どんなふうに接しようか一晩中考え『やっぱり普通が一番』という結論に達した俺は、いつものように一夏と教室に向かった。

二人ともちやほやされるのは困るだろう。
俺は山田先生を見習うことにしたのだった。

「なあ信、本当に大丈夫か？朝からずっとニヤニヤしてるけど」
だが意外とこれが難しい。

一夏にニヤニヤを指摘されたのは、これで七回目だ。

「ぜんぜんしてないって。何でもない、何でもない、まったく何でもない」

「本当か？なんか変だな……」

そんなやり取りをしながら教室に入ると、女子たちがいつものように様々な噂を楽しそうに話しているのだった。

「ねえ、聞いた？」

「うん、聞いた！本当なの！？」

「わたしも聞いた！」

「えっ！なにになに？わたし、聞いてない！」

「ここだけの話だけどね、今度の学年別トーナメントで優勝すると……」

「えーっ！お、織斑くんか、真宮くん！？」

女子の会話の中に思いつきり俺たちの名前が出てきたので、なんか

したかな？と二人で顔を見合わせる。

「俺と一夏が」

「何だつて？」

ドキッ、という効果音が聞こえた気がした。

「……な、何でもないよ！」「」「」

集まっていた女子が口をそろえてそんなことを言う。

「絶対なにかあるだろ。何だよ、別に隠すことないだろ？」

「へっ、あ、ち、ちょっと……」

俺は目の前の女子を捕まえて、目と目を合わせる。

じー

「あっ……………／／」

「私は嘘をついている」

瞳にチラッと映った肯定の意思を俺は見逃さなかった。

「やっぱり！嘘ついてるじゃないか！」

「ストーップ！！これ以上の詮索はダメ！真宮くん、これは女子同士の秘密なの！う、嘘だと思っんなら、た、確かめてみてよ！」

そう言って割って入った女の子はぐいっつと顔を近付ける。

「ちょっと、何いい思いしようとしてんのよ!」

「そうよ!どさくさに紛れて近付こうなんて卑怯よ!」

「いいじゃない、早い者勝ちよ!」

ギャーギャー、わーわー

いつの間にか俺の前には『私、嘘ついてます。確かめてください』という女子の列が出来ていた。

どんだけ嘘つきなんだよ、お前ら。

俺は何を信用すればいいんだ。

ちなみに、もう少し長く見ないと『何のための』嘘をついているか
は見抜けない。

人間は誰しも必ず、無意識に抵抗するからな。

一番大事な情報はなるべく守り通そうとするんだ。

だから、俺と一夏に嘘をついているのはわかったが、どんな内容か
まではわからなかった。

「うるさい。とっとと席につけ。ショートホームルームを始める」

鬼教官の一声で一気に席につく女子たち。

俺も一夏も女子の群れからようやく解放され、席につく。

「今日はなんと、転校生を紹介します」

山田先生が嬉しそうに報告する。

転校生？

鈴に続いてまたか。

こんなにポンポン受け入れていいのか、IS学園。

ガラガラとドアを開き、転校生が現れた。

もちろんIS学園の制服姿だ。

うーん、でもなんか違和感あるな…。

周りとちがうような…。

「初めまして。シャルル・デュノアです。フランスから来ました。皆さん、よろしくお願ひします」

非常に優しそうな印象を受ける、にこやかな顔でそう告げ、一礼する転校生。

「お、男…?」

そう！

それだ！

なんか周りの女子と違うなーと思ったのはそのためだ。

いやー、誰か知らないけどそれに気付いた人すごい。

……………?

え？

男？

「はい、こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を

」

きゃああああーっ！

鼓膜が割れるかというほどのクラスの女子たちの叫びが学園に響き渡る。

これは、アレだ。

初日の織斑先生の人気ぶりぐらいだ。

「男子！三人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！しかも守ってあげたくなる系の！」

「あと一人で四天王が揃うわ！」

揃わねーよ。

男子か。

周りが女子だらけだから、そりゃ違和感もあるわな。

(…あれ？でもまだなんか、違和感あるな…？俺の気のせいかな？いや、そんなはずはない)

新しく来たこの少年の雰囲気、どこか自分や一夏と違うことに疑問を抱く信であった。

「今日は二組と合同でIS実習だ。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。それと織斑、真宮」

「「はい」」

俺《一夏》と信は名前を呼ばれたのでとりあえず返事をする。

「デユノアの面倒を見てやれ。同じ男子同士だ」

なるほど、そうだな。

わからないこともあると思うし、最初は大変だからな。
経験者は語る。

「君たちが織斑くんと、真宮くん？初めまして。僕は」

「あー、いいからいいから。とにかく移動が先だ。行くぞ、信」

「……あ、ああ。そうだな、移動が先だな」

なんだ？

信のやつ、あんなに真剣にシャルルの顔見て。

そんなに転校生が気になるのか？

俺はシャルルの右手、信は左手を握り、小走りで教室を出た。

「俺たちはアリーナの更衣室で着替えるんだ。実習のたびこの移動だから、早めに慣れてくれ」

「俺たちって肩身せまいよな。なんとかならないかなあ」

俺は移動する理由を話し、信は愚痴をシャルルにこぼす。

「う、うん……」

なんだ？

さっきまでと違って妙に落ち着かなそうだな。

「トイレか？」

「ち、違うよ！」

「……………」

シャルルと反対に、信は妙に落ち着いてる気がする。
というか、いつもよりちよっぴり静かだ。

（なあ、一夏。なんか違和感感じないか？）

小声で信が話かけてくる。

俺も小声で返事をする。

（違和感？シャルルにか？…いや、特に）

（そうか……………）

「あつ！噂の転校生発見！」

突然現れた女子生徒の大群によって、俺と信の会話は中断。
ていうかも噂になってるの？

まだシャルルが転校してきてから十分もたってないぞ。
恐るべし、女子の情報網。

「ああつ！しかも織斑くんと真宮くんも一緒だ！」

「者ども、出会えであえい！」

あっという間に廊下が女子で埋め尽くされる。

「わあ！男の子三人も絵になるわ！」

「しかも手を繋いでる！」

ヤバイ。

このままだと完全に遅刻だ。

「一夏」

「そうだな、信。シャルル、走るぞ！」

全力で廊下をダッシュ。

後ろで『ああっ！写真だけでも！』と未練がましい声が聞こえた。ゴメン。

そんなことしてたら、俺たちの未来はが鬼教官の鉄拳が頭に降り下るされるといふものになってしまう。

「ど、どうしてみんな騒いでるの？」

「そりゃ今のところ男子でIS操縦できるのって俺たちだけだからだろ」

「……………？あつ！うん、そうだね」

？

何で『意味がわからない』とでも言いたそうな間があつたんだ？

「……」

信は口数少ないし。
何なんだよ、一体。

「はあ、はあ、…何とか振り切ったみたいだな…」

ようやく追跡から解放され、なんとか第二アリーナの更衣室までたどり着くことができた。

「ごめんね、いきなり迷惑かけちゃって」

「迷惑なんてかけてないって。気にすんな、男同士だろ」

シャルルの謝罪に信が答える。

「そうだぞ、むしろ仲間が増えて嬉しいんだ、俺たち」

一人でも男子が増えると、それだけで心強い。

「俺は織斑一夏。一夏って呼んでくれ」

「で、俺が真宮信。呼び方は呼びやすいほうでいいぞ」

「じゃあ、信って呼ぶよ。二人ともよろしく。僕の話はシャルルでいいよ」

しそびれた自己紹介をして、俺は時計を見る。

ヤバい！！
ギリギリだ！

「すぐ着替えないと遅刻だぞ！」

「落ち着けよ、一夏。こういう時こそ焦らず」

「遅刻したら千冬ね…織斑先生が」

「急げ、シャルル！みんなで生き抜こう！」

事の重大さを理解したのか、信の服を脱ぐスピードが気持ち二倍になる。

「うわぁ！」

「どうしたシャルル？」

「し、信、き、着替えるなら、その…」

突然叫んだかと思うと、俺たちに背を向け、顔を隠すシャルル。

「どうしたんだよ、シャルル。早く着替えないと遅れるぞ？」

「う、うん。着替えるよ？でも、あっち向いてて、二人とも……………」

「まあ着替えをジロジロ見る気はないが……………」

「ああ、そういう趣味はない」

俺と信はシャルルの方を見ないようにする。
おかしなやつだ。
そんなこと別に気にしなくてもいいのに。

「どつでもいいけど、早く着替えるよ?」

「な、何かな?」

「早っ!」

あれ?

もう着替え終わってる。

信のツツコミももつともだ。

「着替えるの超早いな。なんかコツでもあるのか?」

「い、いや、別に?は、ははっ、はははっ」

なんかひきつってないか?

気のせいならいいんだが。

「ISスーツってさ、着るとき裸って言うのが着づらいんだよな、引っ掛かって」

「そつだよな。男の宿命といつかなんといつか」

信が隣で首を二回ほど縦に振る。

「ひ、引っ掛かって?」

シャルルが顔をカーツと赤くしている気がする。
俺は最近気のせいが多い気がするんだが。
いや、それすら気のせいなのか？

「ところでシャルル、そのスーツ、着やすそうだな」

「うん、デュノア社製のオリジナルなんだ」

「へー。オリジナルか、すごいな。あれ？デュノアって……」

どっかで聞いたような。

「フランスのISの会社だな。そっちじゃ、かなり大きい会社じゃないか？」

そうなのか。

さすが信。

よく覚えてるな。

「で、お前もデュノアってことは……」

「うん、僕の父が社長をしてるんだ」

ということとは自動的にシャルルは社長の息子さん？
なるほど、道理で。

「なんかシャルルって気品があって、いいところの育ちって感じがするもんな。納得したよ」

「……」

シャルルが視線を逸らす。

何か触れられたくないところだったのだろうか。

「…ほら、急がないと大変なことになるぞ。二人とも逃げ！鬼教官が金棒もって立ってたら俺たち地獄行きだ」

信が雰囲気を変えようと冗談半分でそんなことを言う。
本当に信は頼りになる。

「行くぞ、シャルル！じゃあな、一夏。お先に！」

信はシャルルの手を握って駆け出した。

「う、うん。一夏、早くきてね」

「あ、おい！待ってくれよ！」

俺たちは更衣室を後にし、急いでグラウンドに向かうのであった。

正直言うと既に答えは出ていた。

『なぜシャルルに違和感があるのか』という問題の答えだ。
更衣室に入ったときに八割、そして、グラウンドに出るまでには確実な結論が出た。

出たのだが…。

それを信じられない自分がいた。

俺《信》はシャルルが『何か』隠しているのはすぐにわかった。同時に、違和感がそこから来ることもわかった。

教室から更衣室までの移動中、シャルルを観察して『何を』隠しているのかわかった。

だが、『何のために』隠しているかはまだわからない。

「シャルル…あのさ…」

「何？信」

いや、まだだ。

まだわからない。

ほんの僅かではあるが、俺が間違っているという可能性も無いわけでは無い。

俺は喉まで出かかった言葉を無理矢理心の奥に押し戻し、なんとか作った笑顔でこう言った。

「…後で俺の部屋遊びに来いよ。一夏と三人でいろいろ話しようぜ」

「うん！ありがとう、信。とっても楽しみだよ」

そうやって二人で手を繋いで走っていると、ようやく一夏が追い付いてきた。

「ふ、二人とも速いな…」

「お前が遅いんだよ。シャルル、遅刻したら一夏のせいにしてよう」

「ふふっ、そうだね。一夏、そのときはよろしく」

「そ、そんな！俺だけ織斑先生に殴られるのは嫌だー！」
いきなりスピードアップした一夏が俺たちを追い抜いていった。
俺とシャルルはその必死そうな後ろ姿を見て、ついつい笑ってしま
う。

たとえ九九パーセント以上当たっている可能性があっても。
自分を否定することになっても。

もし、俺が正しくても。

シャルルはシャルルだ。

それは変わらない。

こいつには笑っていて欲しい。

シャルルの輝くような笑顔を見てそう思った。

「本日から実習を開始する」

「「「はい！」「」」

なんとか間に合った俺たち三人は一組と二組の女子と共に整列して
いる。

一応言つとくが、鬼教官は金棒を持ってなかった。

「まずは戦闘を実演してもらおう。嵐！オルコット！」

鈴とセシリアが返事をし、前に出る。

完全に『やる気ないです』って顔に書いてある。

「お前ら少しはやる気をだせ。あいつらにいいところを見せられるぞ」

なんか織斑先生が二人の耳元でこそこそやってるな。
何だろ？

注意事項とか話てるのか？

「やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコックの出番ですわね！」

「まあ、実力を見せるいい機会よね！専用機持ちの！」

……注意事項じゃないな、絶対。

そんなん聞いてテンションがいきなり上がるやつがこの世界にいる
だろつか、いや、いない。

反語。

この二人がここまでテンション上げるってことは……。

「一夏がらみですか？」

「半分正解だ。お前も鈍いから、一生正解出来ないと思うがな」

ちよつど近くを通った織斑先生と小声で言葉をかわす。
半分正解で。

しかも残りの半分は俺が正解出来ないほど難解らしい。
すごく気になるんですけど。

キィィン……。

「ああああーっ！ど、どいてくださいーっ！」

上空から空気を裂く音と女性の叫び声が聞こえる。

上を見ると、ISに乗った山田先生が急降下　いや、落下　してき
た。
そして

ドカーン！！

墜落。

立ち込める砂煙が晴れると、とんでもない光景が眼前に広がって
いた。

なぜか一人だけ逃げそびれた一夏が、墜落した山田先生の上に覆い
被さっている。

しかも右腕が山田先生の胸の上にある。

ぱつと見たときに生徒が教師を襲っている構図に見えないわけでも
ない。

「お、織斑くん？そ、そのですね……困ります、こんな……。ああ、
でもこのまま行けば織斑先生が義理のお姉さんってことでそれはそ
れでとても魅力的な……」

満更でもない顔をしながら妄想し始める山田先生。

『このまま行けば』ってどこまで行く気ですか。

「うわあ！す、すみま　」

ビシユン！

やっと我に帰って山田先生から離れた一夏に、ビームが放たれる。
幸い当たらずに済んだが、先ほどまで一夏の頭があった場所を狙っ
た正確な射撃だった。

「残念。外してしまいましたわ」

ISを展開し終えたセシリアが銃を片手に微笑んでいた。笑顔だけど、かなりお怒りだ。

もう雰囲気というか、そういうオーラが全身から溢れだしている。

『外してしまいましたわ』 〃 当てるつもりでしたわ 〃 殺すつもりでしたわ』 ってことでしょ？

めっちゃめっちゃ怖いんだけど。

一夏、彼女は本気だぞ。

「いーちかーいー！」

今度は鈴か。

武器『そつてんかげつ双天牙月』を連結し、一夏に向かって投げる。

うわぁ…本気で命取りに来てるよ。
恋する乙女って怖い。

ドンッドンッ！

山田先生がライフルを展開し、射撃を行う。

双天牙月が銃弾に起動を変えられ、地面に突き刺さる。

「織斑くん、怪我はありませんか？」

いつもと違う雰囲気を一瞬だけ放った山田先生に啞然とする一同。
あの体勢からここまで正確な射撃を行えるとは……。
人って見かけによらないね。

「山田先生は元代表候補だ。今ぐらいの射撃は雑作もない」

なるほど、納得。

やっぱり代表候補生ってすごいな。

『む、昔のことですよ。代表候補生止まりでしたし……』と謙遜する山田先生を眺めていると、一夏が俺の隣に来た。

「酷い目にあつた……」

「当然の結果だろ。先生を襲う生徒なんて初めて見たわ」

「襲つてねーよ……」

もはや言い返す気力もないようだ。
やれやれ。

「お前は本当に『トラブルメーカー』って感じだな。いや『To
loverメーカー』か？」

「さて、小娘たち、さつさと始めるぞ」

下らないことを言っていると、織斑先生が鈴とセシリアに声をかける。

「え？あの、二対一で……？」

「いや、さすがにそれは……」

「安心しろ。今のお前たちならすぐ負ける」

相変わらず厳しさの塊みたいな人ですね、織斑先生。
人じゃなくて鬼か。

少しムツとした鈴とセシリアが山田先生と戦闘を始めるのを見ながら、織斑先生がシャルルに山田先生の機体の説明を求める。

「山田先生の使用されているISは」

俺はあまり説明を聞いていなかった。
覚えてるからな、そういう知識は。

（うまいな、先生。回避先を誘導して常に自分に有利な状況を作ってる）

さすが代表候補生だったことはある。
改めて先生という立場が敬うべきところであると認識する。

（あ。終わったな）

見事に回避先を誘導されたセシリアが鈴に激突、動きが止まったところを先生が見逃すはさすがなかった。

ドカーン！

山田先生が放ったグレネードが二人に命中する。

ヒュー……ドーン！

上空から青と赤のISが落下した。
二人とも互いの言い分を言いつているが、正直、みつともない。
こいつら、本当に代表候補生か？

「これで諸君にも教員の実力は理解出来ただろう。以後は敬意を持

って接するように」

俺は以前から敬意を持ってましたよ。織斑先生に対しては恐怖でしたけど。

「次にグループになって実習を行う。リーダーは専用機持ちがやること。では、分かれる！」

こういうときの女子の行動は速い。

あつというまに一夏とシャルルの周りには人だかりができた。

「あいつらにあれだけ集まったんだから、もう俺の出番は……」

「真宮くん、教えて教えて〜！」

「この前のオルコットさんとの対戦、かつこよかったよ！」

「真宮くんってどうしてそんなに強いのか？」

「真南くんはどんな女の子がタイプ？」

……ないわけではないか。

くそー、みんなあの二人に集中するから俺は楽できると思ったのに。

(まあでも、みんな俺のこと慕ってくれてる証拠か……)

照れ臭いやら嬉しいやらで顔が赤くなった。

「あれー？みーやん顔あかーい」

「そ、そんなわけないだろう」

のほほんさんに見抜かれた。
意外と人のこと見てるんだよな、この子。

「ほんとだろ、どうしたの？」

「もしかして私の美貌に見とれちゃった？」

「あんたのわけないでしょ！あたしよ！」

「違うわ！私よ！」

「私よ！」

「いえ、私よ！」

「じゃあ、わたしー」

「「「それはない」「」」

のほほんさんがみんなに全否定される。

そこは『どろどろどろどろ』じゃないのか。

この調子だと、そのうち熱々のおでんが出てきそつだ。

「そうかな。のほほんさんって可愛いと思うけどな」

全否定された少女の頭を優しくぽんぽんと叩き、さりげなくフォロ
ーする。

「えへへー。みーやんに可愛いつて言われちゃったー」

「お前たち全員何をやっているんだ。グループは八人ずつだ。面倒だから出席番号順で分かれる。次にもたつくようなやつはISを背負ってグラウンド百周させるからな！」

織班先生の鶴の一声で、俺に何か言いたそうにしていた女子たちもぱっと自分のグループに分かれた。

一夏とシャルルの回りに集まっていた女子たちも同様だ。

織斑先生ぐらい怖い人がいないと、こっちはいかないだろっな。

「よし！じゃあ始めようか！」

指導するからにはしっかりやらないと。

俺はグループの女子に声をかけて、早速実習を始めたのであった。

15：嗜ってEISと同じくらい自己進化する（後書き）

一夏の山田先生との絡みが羨ましかったので、原作通り鈴とセシリアにお仕置きしてもらいました（笑）

16：ケンカしたらとりあえず謝っつけ

「つかーれーたー……」

俺《信》は今日の授業を終え、部屋に戻ってベッドに寝転がっていた。

暇だな…。

まだ眠くないし。

よし、今日の出来事を振り返ろう。

まず、実習……

「あれ？これじゃあISに乗れないな」

「ほんとだ〜、どうしよ〜」

（完全にわざとだな…。視線が一夏に向いていると言っことは…）

「仕方ない、運んでやるよ」

「本当に！やったー！」

（そんなに面倒なのか。ISに乗るの）

昼食……

「し、信さんもよかったですら…ど、どつぞ…」

「そうか？じゃあ」

「信！セシリアの飯はな……すごいぞ」

「？そうか、一夏。そんなにうまかったのか？」

「ああ、すごいぞ……。びっくりする……」

パクッ、モグモグ……

(！！？！？！？こ、これは……！すごいな……！)

「い、いかがでしょうか……？」

(ど、どういう反応をすればいいんだ、俺は……？とりあえず……)

「う、うん、すごいぞセシリア。すごく……すごい」

「ほ、本当ですか？では残りもどうぞ！」

「えー？あ、ああ、い、いただきますかな」

「信……勇者だな」

「……………」

「あんたたちは甘過ぎんのよ。ホラ、信。あたしの酢豚も食べなさいよね」

「いいのか、鈴まで。それ自分の分じゃないのか？」

「だ、大丈夫よ。（信に食べてもらおうと思って多めに作ってきたんだから…）」

ひよい、パクツ。

（し、舌が麻痺している……。いやでも、これはうまいはずだ）

「うん、うまいよ。さすが鈴だな、毎日食べたいくらいだ」

「そ、そう？か、感謝しなさいよね！」

「ところで箒、俺の分の昼飯は…？」

「……」

すっ…

「おお、サンキュ」

「なんだよ一夏、箒に作って来てもらうとは。羨ましいな」

パクツ、モグモグ

「うまい！これって結構手が込んでないか？」

「味付けは」

あーだ、こーだ

(おお、篤が今までにない笑顔に！)

「あれ？でもお前のに唐揚げ入ってないじゃないか。ホラ」

(なつ、なにに！さすが彼氏と彼女、こんなことも堂々と人前でやるとは！見てるこっちが恥ずかしい！)

信はこの前の『っ、付き合ってもらおう』について、当然オツケーの返事だったと思っています。

「あ、これってもしかして日本ではカップルがするっていう『はい、あーん』ってやつ？仲睦まじいね」

「シャルル、こういうのは暖かい目でそっと見守ってやるもんなんだぞ」

「そうなの？」

「そういうもんだ。あつ、あとさ、今日の夜俺の部屋に来てくれよ。一夏の部屋の隣だからさ。いろいろシャルルに質問があるんだ」

「うん、わかったよ。じゃあ、時間は」

「う、うん？」

俺は目をこすって上体を起こす。いつの間にか寝てしまっていた。そうだ。

今日はシャルルを部屋に招待したんだった。

コンコン

／＼信？居る？／／

「ああ、いいぞ」

ガチャ

「失礼しまーす…」

ナイスタイミングでシャルルが部屋にやって来る。

「よっ、待ちくたびれて寝ちゃってたぜ」

「ほ、本当に？ごめんね」

ペコリと頭を下げるシャルル。

真面目だな。

「謝ることなんてねーよ。もっと楽にしていーぞ。俺たちは男同士なんだから」

「うん、ありがとう。信」

ニコツと笑うシャルルに思わずドキツとする。

やっぱ、そっだよな…。

それしか考えられないもんな…。

俺が今日シャルルを呼んだ理由はただひとつ。

シャルルの隠し事を聞くためだ。

（だけど、来ていきなりはまずいよな。もう少ししてからにしよう）
結局は問題を先送りにしただけなのだが。

「そういえば、シャルルはどの部屋になつたんだ？」

「一夏と同じ部屋だよ。だから、信とはお隣さんだね」

「本当か？これから楽しくなるな」

ニコツと俺も笑うと、シャルルは少し赤くなって下を向く。

「と、ところでさ。質問って何？何でも答えるよ」

「ああ、そうだったな。でもその前に俺の自己紹介をするよ」

それから俺は自分のことを話した。

俺が何でIS学園に入れられたか、俺の持っている才能、クラスのこと、あとたまに織斑先生や一夏のこと。

「そうなんだ。信ってすごいね！尊敬しちゃうよ」

「そ、そうか？それほどでもないよ」

シャルルは目を輝かせて俺を見ている。

まるで親に物語を聞かせてもらっている小さい子どものような。
尊敬するなんて言われると、少し照れくさい。

目の前にある瞳は澄んだエメラルド色で、とてもきれいだった。

……本当に言うべきなのか？
言ったあとにまた、シャルルはこんなふうにあれを見てくれるだろうか。

「じゃあ、今度は僕の番だね。何でも質問していいよ」

「……シャルル」

「何？」

一体なんの質問をされるのかと期待に満ちた笑顔を俺に向けている。

「俺こういう才能あるからさ、嘘ついてるとか、何か隠してるとか、わかるんだ。そういう人たちがどんな感じに周りと接するか、色んなパターンを覚えてるからな。それに、目とかの細かい動きも」

俺が真面目な口調になったので、シャルルからも笑顔が消える。

「言っていていいか迷ってたんだけど、やっぱり言うよ。でも、これだけは覚えておいてくれ。俺はお前の味方だ。どんな事情があっても」

「信？ いったいどうしたの？ そんなに」

焦っているように見えるシャルルの言葉を遮り、思いきって俺の結論を言葉にする。

「お前」

シャルルの目を真っ直ぐに見る。

「女だな？」

シャルルは心臓が止まった。

いや、実際は止まるわけないのだが、そんな風に感じた。いけない。

何とかやり過ぎさないと。

「し、信？冗談でしょ？あ、あんまり面白くないなあ…。ほら、さっきの一夏の話。あれの方が」

「冗談じゃない。お前は女だ。それはお前がよくわかってるだろ？」

そう言っただけで自分を見つめる少年は、今の動揺したシャルルと対照的にとても落ち着いていた。

「なあ、シャルル。もし、もしもだ。俺に理由を聞かせてくれてもいいなら、俺がお前を助ける。話したくないなら、それでいい」

優しい声で信が話しかけてくれる。

シャルルは信の目を見た。

何でも質問していいと言ったのは自分だ。だっただら

「今言っただら？」話したくないなら、それでいい。『答えるのが義務だ』とか、そういうのじゃないんだ。お前が決める」

「本当に何でもお見通しだね……」

一回深呼吸して気持ちを落ち着かせる。
初日からいきなりばれてしまうとは。

「そつだよ、信。僕は男の子じゃないんだ。女の子なんだよ」

言ってから急に怖くなった。

もし、信が助けてくれなかったら？

それどころか、先生たちに告げ口されたら？

それが、あの人の耳に入ったら？

「本当に？本当に助けてくれるの？」

不安で不安で、思わず子どもっぽい質問がでてしまった。

「お前が必要とするなら」

信は静かに言う。

不思議だ。

さっきまでの不安が一瞬で消し飛んだ。

信とは今日会ったばかりなのに、なんだか心から信頼できると助けてくれる。

そう思った。

「……あのね、信。僕は」

どれくらい長い間話しただろう。

自分が愛人の子供だということ、デュノア社のこと、ここに来た理

由、正体がばれたときの自分の運命
自分でも驚くぐらいスラスラと言葉が出てきた。
何もかも吹っ切れたからだだったのだろうか。
しかしシャルルは目の前の少年だからこそ、ここまで話せたのだと
思った。

「こんな感じかな？ごめんね、信。騙してて」

頭を下げる。

すつと服がこすれる音がした。

信が立ち上がったのだらう。

どうしよう…。

怒らせちゃったかな？

『お前みたいなウソつきは出ていけ』とか言われなかな…？
また出てきた不安と恐怖で、心が覆われそうになる。

「シャルル」

気付くと信が目の前にいた。

座っている自分の目の高さに合うようしゃがんでくれている。

顔がとても近い。

「し、信？」

ギュッ……

「~~~~っ?!?!?!?!」

返事の代わりに突然抱きしめられた。

頭が混乱してうまく思考ができなかったが、自分の顔が熱くなるの

はわかった。

「ごめんな、シャルル……。そんな辛いこと話させて……」

信はそう言ってますます自分を強く抱きしめる。

シャルルは鼓動が早くなるのを感じた。

（う、うわわわわ／＼ど、どどど、どうしよう／＼）

「絶対……絶対に、お前を助ける」

決意に満ちた言葉。

シャルルは『助ける』と言ってくれたのがとても嬉しかった。

信は温かくて、優しくて、力強くて。

シャルルはいつの間にか女の子の顔に戻っていた。

無意識に、シャルルも信をギュッと抱きしめる。

信の鼓動が聞こえる。

こうしていると、なんだかすごく安心する。

「……信、あのね、僕、名前も嘘ついてるんだ。信にはばれちゃったし、本当の名前教えるね」

返事はないが、かまわない。

こんなにお互いが近いのだから、絶対に聞こえる。

本当の自分。

母から貰った大切なもの。

「『シャルロット』。僕の本当の名前はね、『シャルロット』って言うんだよ？二人だけの時はそう呼んで……」

「そっか……。本当のこと話してくれてありがとう、シャルロット。絶対にお前を守ってやる」

「うん……」

シャルロットはとつても幸せで、優しい気持ちだった。もしできるなら、このままずっと

コンコン

／＼おい、信。シャルルいるか？／＼

はっと我に返る二人。

しばらく見つめあって、お互い顔をぼつと赤くする。そして、ぼつと勢いよく離れる。

「う、うめん…」

「う、うん…」

ぼつが悪そうにうつむく信とシャルロット。

ガチャ

「なんだよ。いるなら返事しろよ」

何も知らない一夏が部屋に入ってくる。

「あれ、二人とも顔赤くないか？」

「全然！」

二人の勢いにたじろぐ一夏。

「じ、じゃあ、シャルロット」

「し、信！」

いけね、とでも言うように信は両手で口を隠す。

幸い一夏にはばれなかったようで、信とシャルロットのやり取りを見て『?』となっている。

「お前からおかしくないか？」

「おかしくない！」

再びたじろぐ一夏。

「じゃ、じゃあシャルル？一夏も来たし、今日は……」

「えっ！あ、あ、ああ、そそ、そうだね。さっ行く、一夏」

「えー、せっかくだから三人で遊ぼうぜ？」

「「「いいから！」」」

三たびたじろぐ一夏。

「お、おやすみ、シャルル。と、一夏」

「う、うん。おやすみ、信」
「おやすみ、信。また明日な」

ボタン

「なあシャルル、なんかあったのか？」

「なっ、何で？」

「やっぱり赤いぞ、顔」

それはそうだろう。

あんなに突然、抱きつかれるなんて思ってたなかった。

恥ずかしいやら嬉しいやらで自分の頬が火照っているのはいやというほどわかった。

(で、でも、もうちょっとあのままでも…)

もう一度あのときの信と自分を想像して、さらに顔が熱くなるシャルロット。

「シャルル？」

「ひゃい！何かな！？」

「風邪か？」

「違っよー！」

その夜……

シャルロットの場合。

「俺が守つてやる」かあ……。ふふっ、信つてはカッコつけすぎだよ」

ベットの中で一人顔を赤らめながら呟くシャルロット。
抱き締められた感触がまだ残っている。

(あつたかかったなあ、信……)

信の代わりに布団をギュツとする。

(また抱き締めてくれないかな……)

自分の考えていることにますます顔が熱くなる。
何とか眠ろうと目を閉じるが、そのたびにあの映像が頭に浮かぶ。

(うっ／＼／眠れないよ／＼／)

どうやら朝まで眠れそうにない。

信の場合。

(なんてことしちゃまったんだ、俺は！女の子にいきなり抱きつくとか、完全に変態じゃないか！)

信は自分がしてしまったことに対する罪の意識で眠れていなかった。
(どうする、俺！明日からどうシャルロットと接する！？っーかシ
ヤルロットは俺とどう接するつもりなんだ！？ヤバイぞ…)

信が脳内で明日のシュミレーションを始める。

パターン1：無視

『よ、よお……』

『……』

『……お、おはよう、シャルル』

『……チッ』

『し、舌打ち！？…』

『どうした信、シャルル。なんかあったのか？』

パターン2：暴力

『よ、よお……』

バシーンー！

『…………変態』

『どうした信、シャルル。なんかあったのか？』

パターン3…とりあえずなんか怖い

『よ、よお…』

『あっ、信！ちよつどよかった』

『ど、どうした？』

『信ってさ、包丁と銃どっちが好き？燃やすのと沈めるのだったらどっち？やっぱり痛いのは嫌かな？』

『……………』

『どうした信、シャルル。なんかあったのか』

（駄目だ！どうしたって嫌われてるし、下手したら殺される！っー
か一夏、どんだけ気になってんだ！）

想像の中の一夏にシッコむ。

(で、でもなあ、あんなに悲しそうな顔してる女の子放っておけないよな……)

話をしている時のシャルロットの顔を思い出す。
やっぱり、あいつには笑ってほしい。

(シャルロット、いい香りしたな……)

はっ！

「何考えてんだ！ダメダメダメダメ！」

結局朝まで一睡もできない信であった。

「二人とも大丈夫か？」

「……」

「……」

俺《一夏》はなぜか無言の信とシャルルに挟まれ、教室への道を歩いていた。

なんか知らないけど、二人とも眠そうだ。

「なあ、信」

「……」

「おい、シャルル」

「……」

なんだこれ。

なんで俺がこんなに困ってるんだ？

(信。シャルルとケンカでもしたのか？早いとこ謝って仲直りしろよ)

この雰囲気能耐えきれず、信に小声でアドバイスを送る。

(…そうだな。このままずっとってわけにもいかないしな……)

(そうだぞ！早いとこ俺をこの状況から助けてくれ)

「あ、あー…。しゃ、シャルル？」

やっと信が口を開く。

シャルルが少しビクツとする。

「そ、そのだな……。あれは、あの一、何て言うか、愛情表現？と
言うか、何と言うか……」

「……愛情」

シャルルがボソツと喋る。

心なしか頬が赤いような…。

「い、いや、違う！愛情じゃなくて、え〜と……」

「……違うの？」

シャルル、なんかガツカリしてないか？

「い、いや、違うない！」

何であんなに焦ってるんだ？

いくら気まずいからってそんなに焦ることないだろ。

「あー、もう！と、とりあえずだな！ゴメン！シャルル！だから怒らないでくれ、なっ？」

手をあわせて深々と頭を下げる信。

「シャルル、こいつも反省してるみたいだから許してやってくれ。俺からも頼むよ」

「……ふふっ、いいよ」

信が顔をあげるとシャルルがクスクスと笑っていた。

「おお！わりとあっさり！よかったな、信！」

「あ、ああ……」

「ただし！」

シャルルが人差し指をビシツと信に突き付けて言う。

「ち、ちゃんと僕のこと、守ってよね！」

？

何言ってるんだ、シャルル。

誰かに狙われてるのか？

俺はいろいろ考えてみたけど、わけがわからなかった。

信も最初は目を丸くしていたが、徐々にその顔が笑顔になった。

「ハハツ、なんだそれ。安心しろ、任せとけ。いやー、焦ったー。あはははっ！」

「もー、信！……ぷっ、ふふふっ」

なんかよくわからないけど仲直りしたみたいだ。

二人につられて俺も笑ってしまう。

やっぱりこうやってみんな笑ってるのが一番だよな。

さっきまでの沈黙が嘘のように楽しく三人で喋りながら、教室へ入る。

それぞれが自分の席に座ると、ちょうど先生たちが入ってきた。

山田先生が教壇に立つ。

なんだか困っている雰囲気だ。

どうしたんだろ？

「えーっと、き、今日も嬉しいお知らせがあります。また一人、クラスにお友達が増えました」

は？

話がわからないでいると、長い銀髪の子が入ってきた。右目に眼帯をしている。

怪我のときにするやつじゃなくて、本物の。その風貌といい、雰囲気といい、『軍人』って感じた。間違いなく、学校に来るような人じゃない。

「ドイツから来た、ラウラ・ボーデヴィツヒさんです」

ひそひそ……

「どゆつこと？」

「二日連続で転校生だなんて……」

「いくら何でも変じゃない？」

女子が話し出す。

俺もまったく同意見だ。

「皆さんお静かに！まだ自己紹介が終わってませんから」

山田先生が少し強めに言葉を発する。

「挨拶をしる。ラウラ」

「はい、教官」

礼儀正しく答えるラウラ。

(『教官』ってことは千冬姉がドイツにいた頃の……)

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

.....
.....
.....

「あ、あの…以上、ですか？」

沈黙に耐えかねた山田先生が転校生に話しかける。

「以上だ」

バツサリ。

バツサリ過ぎて清々しい。

ふと、ラウラと目があつた。

「！貴様が…」

コツコツ…

ラウラがこつちに来た。

どうしたんだ？

バシッ！！

「…へ？」

いきなり殴られた。

それも無駄の無い平手打ち。

「私は認めない……。貴様があの人の弟など……認めるものか」

痛いやら、びっくりするやら、むかつくやらで頭が混乱して言葉が出ない。

ラウラの真っ赤な左目は色と対照的に、冷やかな眼差しを俺に向けていた。

16: ケンカしたらとりあえず謝っどけ(後書き)

17：突き通せる嘘なんてない

「お前、またなんかやったのか？」

「やってねーよ！」

俺《信》は一夏と一緒に廊下を歩いていた。

あのラウラ・ボーデヴィツヒの強烈な自己紹介のあったあと、殴られる心当たりがまったくないので、一夏はそうとう腹が立っているようだ。

というか立っている。

間違いなく。

もう土曜日になるというのにまだイライラしている。

「まあ、後でその事はボーデヴィツヒに聞くとして、今は訓練だから一回怒るのやめろ」

「そうだな…。カリカリしてたら、全部うまくいかなくなるよな…」

俺たちはISの特訓をすべくアリーナに向かっている。

なぜ、俺と一緒に向かっているかと言つと…

「でもなあ、あの三人の説明じゃわかんないんだよ。だからさ、頼むよ信。通訳してくれ！」

と、いうことである。

通訳って……。

どんな言語で説明してるんだ？

古代文明の今は失われし言語とかか？

悪いがさすがにそれだったら無理だ。

アリーナに着くと更衣室でさっさと着替えて、すでに待ち構えていた例の三人 篤、鈴、セシリア のところに行く。

「なんだ、信も来たのか。いいだろう、私が相手になってやる」

なんだとはなんだ、篤。

「何？あんたもあたしに教わりたいわけ？ふふん、いいわよ。そんなに言うなら教えてあげる」

鈴、まだ何も言っていないぞ。

「鈴さん、お二方はわたくしに教わりたいのですわ。自意識過剰ですわね」

人のこと言えないぞ、セシリア。

「俺は一夏のサポート係だ。というよりは見学者だな。俺に気にせず一夏を鍛えてやってくれ」

と、いうことで特訓が始まったのだが……。

「ズカッ、ドカッ、ガキーン！という感じだ！」

……。

「何となくわかるでしょ？感覚よ、感覚。はあ！何でわかんないのよ、馬鹿！」

……。

「防御の時は右半身を斜め上前方へ五度、回避の時は後方へ二十度ですわ！」

……。

(じゃ、頑張れー夏)

ぽんと肩を叩いて去ろうとすると、ガシツと腕を捕まれた。

(信！何のためにお前を呼んだと思ってんだ！)

(無理無理無理！通訳とかそういうの必要ないって！もう立派な日本語じゃないか！)

(じゃあお前、意味わかるのか！？)

(わかるわけねーだろ！どついうことだ！？これって説明って呼んでいいの！？説明の定義を俺に説明しろ！)

(なんで俺がお前に説明の説明しなきゃいけないんだよ！それを説明しろ！)

(なんだよそれ！じゃあ俺は説明の説明の説明の説明を要求する！)

(意味わかんねーよ！ややこしすぎるわ！)

小声でしばらくやり取りしていたら、三人に気付かれた。

「ちょっと、お二人とも！わたくしの説明を聞いていますの！？」

「あたしのすばらしい説明がわからないなんて言わないわよね？」

「二人とも、私のズバツとした説明が一番だろっ？」

何なんだコイツら。

説明ってわからない人にするものだぞ。

『わかってない他人』を基準にして話さなきゃならないんだ。

『わかってる自分』を基準にしてどうする。

と、言いたいところだったが、三人が三人とも『自分が一番！！』

と考えているところがまた難しい。

さて、どうやってかわそうか……。

「一夏、信」

シャルロット、ナイスタイミング！

すでに専用ISを展開させていたシャルロットが俺たちに声をかける。

「どうした？シャルル」

「ちょっと相手してくれる？白式と瞬光と戦って見たいんだ」

理由もまたすばらしい。

これなら三人も文句は言えまい。

「そうか、俺たちはオツケーだぞ。なっ、一夏」

「ああ！というわけだから、また後でな」

むむむ…と何か言いたそうにする三人。
おいおい、そんな顔すんなよ。

「じゃ、一夏からな。俺はまず見学」

「わかった」

「僕もいいよ。…じゃあ行くよ、一夏」

「おう！」

戦闘開始とともに一夏がいきおいよく飛び出す。
手には雪片式型。

シャルロットはそれを左手のシールドで防ぐ。
ガキン、ガキンと金属同士がぶつかりあう。

(シャルロット、うまいな……。おお！武器の展開が早い！)

左手に銃を展開するのに一秒もかかっていない。
ダダダダッ！！

銃弾の雨を白式のエネルギーシールドで防ぐ一夏。

(おいおい、ただでさえ雪片式型がエネルギー食ってんのになんかやっ
てんだ)

何とか間合いを詰めようとするが、シャルロットの射撃がそれを許
さない。

近接特化型の白式は懐に入れば強いが、入れなければ実力が発揮で

きない。

(あーあ。瞬時加速のタイミングも読まれてるし……)

結局何にもいいところ無いまま一夏が負けた。

ガツクリと肩を落とす一夏。

「そうガツカリすんな。今回は相手が悪かったんだって」

「うっ……」

「強くなりたきゃ、練習あるのみだ。…さ、シャルル」

「うん、準備万端だよ」

一夏を軽く励ましたあと、シャルロットと向かい合う。

あの武器の高速呼び出しは厄介だな。

気を付けないと。

俺は右腕に隴火を展開。

剣のイメージを伝え、体の前に持ってくる。

「よし、こい！」

「じゃあ遠慮なく！」

突撃してくるシャルロットをかわし、上空へ飛び上がる。

シャルロットは俺を追いつつマシンガンを手に追撃してくる。

照準を合わさせないために動き回る俺。

右右下左上上左右……。

突然、瞬時加速。

一気に間合いを詰める。

「甘いよ！そんなに簡単にはやらせない！」

距離を一気に詰めようとした俺を、両手に呼び出したショットガン二丁で牽制し、うまく距離をとるシャルロット。

(反応してくるか。さすが代表候補生)

距離があいたところで今度はライフルを撃ってくる。

それを体を回転させてかわすと、すぐさま追撃がくる。

シャルロットの手にはまたショットガンが握られていた。

「速いね！信！」

「まあな！」

互いに一步も譲らない。

(なるほど、一夏が詰められないわけだ)

そろそろ決めますか。

この間もお互いにある程度の距離を保ちながら絶えず飛び回っている。

こんなことしてても、らちが明かないな。

「これでどうだ！」

俺は斬撃が飛んでいくイメージを臙火に伝え、おもいつきり剣を横に振る。

隼火から出た衝撃波はまっすぐ敵に向かって飛んでいく。

「なっ！」

まさかそんな攻撃が来ると思っていなかったシャルロットはとっさに物理シールドでガードする。

一瞬、シャルロットの視界の一部がシールドで遮られる。

「いただき！」

一時的にできた死角から瞬時加速で接近。

スピード的には軽く残像ができてもおかしくない。

「それはどうかな！」

そう言ったシャルロットの左手にはナイフが握られている。

(カウンターを狙ってくるのはわかってる！だから……)

シャルロットが左手をつき出す。

このまま突っ込んだらカウンターをくらうだろう。

『このまま』だったら。

「かかった！」

シャルロットが勝利を確信する。

確かにこの速度でカウンターを食らったらその瞬間に負け、そうではないにしても大ダメージは避けられない。

「なーんてね」

瞬間、全スラスターを逆噴射、突撃の勢いを殺された瞬光がピタリと止まる。
完全に速度がゼロになる。

「!?!」

「残念、引つ掛かったのはシャルルの方だ」

俺に当たるはずだったナイフが空を切り裂く。
バランスを崩したシャルロットはとっさの判断ができず、空中でつまずいたように前のめりになる。
顔を上げると目の前には誰もいない。

「こつちだ、こつち」

すでに懐に入った俺はシャルロットを斬り上げる。
確実にシールドエネルギーを削り取った。

「くっ!」

シャルロットは体制をたてなおすために距離をとろうとする。

「逃がさねえ!」

衝撃波が相手が物理シールドを構える前に当たる。
シャルロットが自分のエネルギー残量を見て顔しかめた。

「もう一撃!」

今度は『振る』のではなく、『突く』。
隼火は攻撃対象に向かって伸びていく。

「なっ！本当にびっくりするね、その武器！」

シャルロットが物理シールドで防御しようとする構え。

しかし、この状態の隼火には物理シールドなど意味はない。

「曲がれ！」

シールドに当たる寸前、ほぼ直角に隼火が二度曲がる。
まるで自ら意思を持ってシールドを避けたかのように。
そしてシャルロットの心臓の位置でピタッと止まる。

「勝負あり」

「あー、負けちゃった」

シャルロットは『参りました』と肩をすぼめる。

「さっ、戻ろっぜ」

俺はそう言って、ゆっくりと地上に降下していった。

「やっぱり信は強いな。何なんだよ、お前の武器の万能性」

「まあな。でもなかなかイメージ保ち続けんの大変なんだよ」

「それでもあそこまで武器の性能を生かせるのは信だからこそだよ。最後のあれ、どんなイメージだったの？」

「そうだな……。形は『槍』で、動きは『蛇』かな」

すごい。

さっきの戦いを見て、感想はそれだけだ。

それ以外には何も言えない。

俺《一夏》も信みたいに戦えたらなあ……。

「一夏には一夏ならではの戦いかたがあるし、武器もすごいやつ使ってるじゃないか」

俺の考えていることを読み取る信。

こいつに隠し事は無理だな。

「でも勝てなきゃな……」

「一夏が勝てないのは単純に射撃武器の特性を把握していないからだよ」

「そ、そうなのか？一応わかっているつもりだったんだが……」

「うーん、知識として知っているだけってかんじかな。さっき僕と戦ったときも間合いを詰められなかったよね？」

「うっ……、確かに。瞬時加速も読まれてたしな……」

隣でうんうんと信がうなずいている。

「つまりな、直線的すぎるんだ。一夏は」

「そうだね。一夏のISは近接格闘オンリーだから、より深く射撃武器の特性を把握しないと対戦じゃ、勝てないよ」

と、いうことで…。

「じゃあ射撃武器の練習をしてみようか」

シャルルに手渡された五五口径アサルトライフル『ヴェント』を構える。

通常は他人の武器の使用は不可能なのだが、所有者が使用許諾すれば、登録してある人全員が使えるらしい。さっきシャルルが話してくれた。

「構えはこれでいいのか？」

「えっと……脇を締めて。それと左腕はこっち。わかる？」

シャルルは俺の後ろに回り込んで俺の体をつまぐ誘導する。

「よし…」

スコープの中心と的の中心を合わせる。

一度大きく深呼吸をして、引き金にぐつと力を込める。

バンッ！

予想よりも大きく響く火薬の炸裂音に驚く。
すぐさま別の的が表示される。

それに合わせて体の向きを変え、また引き金を引く。

バンツ！バンツ！バンツ！バンツ！

数回表示された的を撃ち、刀と違った感覚を直に感じる。
銃ってこんなに速いのか…。

「どっ？」

「お、おう。なんか、アレだな。とりあえず『速い』って感想だ」

「信もやってみる？……あれ？しーん！」

「あ、ああ、悪い。考え事してた」

後ろを振り向くと、信が腕を組んで立っていた。

「信もいくから見えてわかるって言ったって、銃の感覚確かめた方がいいんじゃないか？」

「そうだな…。じゃあ俺もやってみるか。シャルル、いいか？」

「うん。もちろんだよ」

俺から受け取ったライフルを今度は信に渡すシャルル。

信は受けとるとすぐに、銃を構えて照準を合わせている。

「「うっだよな」

「えっと……うん、そうだね」

なんか立ち姿が『スナイパー』って感じた。

「よし、いくぞ！」

バンツ！バンツ！バンツ！バンツ！バンツ！

うおー！

サポート無しに全弾命中させやった！

しかもほぼ中心を捉えている。

さすがだぜ、信。

「すごいね！初めてでこんなに正確な射撃ができた人なんて見たことないよ」

「シャルルの撃ち方見てたしな。お手本が上手かったおかげだ」

信はニコリとしてライフルをシャルルに返す。

シャルルは何だか照れくさそうにそれを受け取る。

ヒソヒソ……

「ちょっと、アレ見て」

「えっ！アレってドイツの第三世代型ISだよな？」

「確か、本国でのトライアル段階って聞いたけど……」

周りで始まった女子の小声の会話が耳に入る。
何だ？

アリーナのピットを見上げると

「……ラウラ・ボーデヴィツヒ」

俺たちの目線の先には銀髪の眼帯少女がいた。

「織斑一夏」

「……何だよ」

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話は早い、私と戦え」

「おい待てよ。何でそんなに一夏に突っかかるんだ？」

たまりかねた俺《信》は口を開く。

ボーデヴィツヒからは純粹な『敵意』しか感じられない。

一体なにが気に入くないのか、言わないと伝わらないこともあるはずだ。

俺が言っていると説得力ないけど。

「黙れ。貴様には関係ない」

完全に俺を見下している。

表情と雰囲気から読み取るに、『雑魚には用はない』だってさ。腹立つな、まったく。

「とにかく、お前と戦う理由がない。いやだ」

「貴様にはなくとも、私にはある」

「今でなくたっていいだろ。もうすぐクラス対抗戦だし」

一夏の言う通りだ。

別にすぐ戦いたいわけでもない相手とここで戦ったって意味がない。それならば意味ある戦いの場で決着をつけた方がお互い納得がいくだろう。

が、ボーデヴィッツとは違うらしい。

「そうか。ならば」

刹那、左肩に装備された大型の実弾砲が火を噴いた。

ドン！

素早くシャルルが二人の間に割り込み、シールドを構える。

しかし、俺が更に割って入る。

敵に向かって臙火を伸ばし、飛んできた砲弾はただ単に左手を使って弾く。

ガキン！

はじいた砲弾がわきに転がるのと同時に、臙火の槍がボーデヴィッツの喉元で止まる。

まさか雑魚がこんなことするなんて思っていなかったので、面くらっている。

「……！」

「止めとけつて。そんなに他人を見下していると足元すくわれるぞ」

「貴様……！！」

「真宮信だ。これ以上やる気なら、俺が相手になるぜ？」

『その生徒！何をやっている！』

アリーナにスピーカーからの声が響く。騒ぎを聞きつけてやって来た担当の教師だろう。

俺たちはしばらくにらみ合っていたが、ボーデヴィツヒがISを解除する。

「ふん、今日のところは引いてやる」

「最初っからそうすりゃいいんだよ」

俺の言葉を見無視し、アリーナゲートへときびすを返し去っていく。

「信、助かったよ」

「気にすんな。言ったろ？」お前が困った時は俺が助けてやる『」

拳を握り、前へつき出す。

条件反射のように一夏も拳を握り、俺のと合わせる。

「シャルルもな」

「えっ！いい、いいの!?!」

「いいに決まってるだろ。ちゃんと守ってって言われたしな」

「う、うん…。あ、ありがと…/」

「コンッ」

「よし、今日はもう戻ろうぜ」

「そうだな。あゝ疲れた」

「うん。そうしようか」

この二人が心配だ。

あとボーデヴィツヒも。

一夏とシャルルの射撃練習を見たとき、その後ろ姿があゆの夢と重なった。

あゆのときの金髪は間違いなくシャルロットだろう。

セシリアとは違う髪型だったし、何よりもISの色と形が今まさに俺の隣にいるシャルロットの専用機『ラファール・リヴァイヴ・カスタム?』と酷似している。

さらにこのタイミングで銀髪と言えば……。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ…」

黒い塊に飲み込まれる瞬間、アイツは苦しそうで、助けを求めている

た。

確かにム力つくやつだが、だからと言って助けを求めている人を見捨てるなんてしたくない。

「助けるさ、全員。見てるだけなんて、そんなこと俺自信が許さない」

拳を強く握り、小さく独り言を言う。

「む…。どうした、信」

「あんだ、目が怖いわよ」

「信さん、何かお困りのことでもありませんか？」

気付くと『一夏専属コーチ三人衆』が近くに来ていた。そういえば練習らしい練習出来なかったな。

まあ、コイツらの説明じゃ無理か……。

「いや、何でもない。悪いんだけど先に帰るわ」

「わかった。今日はもう休んだほうがいい」

「二人とも！あんなやつ気にすんじゃないわよ」

「一夏さんと信さんなら絶対勝てますわ！」

三人とも俺たちを心配してくれているのがよくわかる。

だが、その心配を見せて不安を煽るようなことを絶対にしないところがあるがたい。

「ありがとう。さて、着替えに行くか、一夏、シャルル」

俺たち男子三人は更衣室に向かって歩き出した。

あ、シャルロットは女か。

.....。

あれ？

(おい、いつつもどうしてるんだ?)

(え?なにが?)

そつだ、シャルロットは女だった。

一緒に着替えるというのは道徳的にまずい。

(着替えだよ、着替え。一緒に着替えるつもりか?)

(そ、そんなわけないでしょ!先に部屋に戻るよ)

そんなことを話している間に更衣室に着いた。

俺たち男子だけの貸し切りなので、無駄に広い。

「じゃあ、僕は先に部屋に戻ってるね」

「何だよ、ここでシャワー浴びてかないのか?お前いつもそつだよな」

シャルロットの隠し事を知っている俺としては『そりゃそつだろう』ということなのだが、一夏にとっては不思議なことであるのは間違いない。

男子同士だったなら何も隠す必要は無いのだからいい。
だが、シャルロットは女だ。

「たまには一緒に着替えようぜ」

肩を組んで何とか一緒に着替えようとする一夏。

正直、俺から見たらただの変態高校生だ。

シャルロットがめっちゃめっちゃ困ってる。

「あつ！そうだ、シャルル。射撃武器の特性教えてくれよ。俺も部屋でシャワー浴びるし、一緒に行こうぜ」

一夏からシャルロットを引き離し、手を握る。

多少強引だが仕方ない。
事情が事情だ。

「じゃーなーお先にー」

「あつ、おい！」

なるべく駆け足で更衣室を出て、そのまま部屋まで戻ってきた。

「ふー、危ねえ。大丈夫か、シャルロット」

一応周りに誰もいないのを確認し、名前を呼ぶ。

「う、うん。ありがと、信。でも、そ、その、手が……／＼」

手？

そっえば繋いだままだった。

表情はうつむいてて見えなかったが、離せてことか。

「ああ、ごめん。気付かなかった」

「あっ…」

ぱっと手を離すと、シャルロットが顔をあげてこちらを見た。

「なんで残念なんだ？」

「へっ！？い、いや！そんなこと…」

「？ま、いいや」

俺は部屋のドアを開ける。

「信！」

突然の大声にビクツとする。

なんだ？

なんか悪いことしたのか、俺。

「あの、ほんとにいろいろありがとう…」

「またかよ。気にしなくていいって。あんまり俺に気を使つな」

まったくシャルロットは真面目過ぎるな。

もう少し不真面目でいいのに。

優しくぽんぽんと頭を撫でる

「うん…／＼」

「じゃ、また」

俺は今度こそ部屋に入り、ドアを閉める。

(アイツは男装なんかしないで、普通の女の子になればいいのに…)
性格からして、嘘をつき続けるのはきつと苦しいはずだ。

……………。
ここで気付いた。

「一夏！お前また可愛い女子と相部屋じゃねーか！」

一夏の運のよさに嫉妬する信であった。

ザアア……………

シャルロットはシャワーを浴びながらずっと二人の男子のことを考えていた。

(また信に助けられちゃった…。本当に僕のこと守ってくれてるんだ)

顔が赤くなる。

(の、のぼせちゃったかな?)

キュッ

シャワーを止めて、ドアを開ける。
バスタオルは外に置いてあるのだ。

ガチャ。

ガチャ。

「シャルル、ボディークリームきれてるだろ。替えの

」

同時に洗面所のドアが開く。

そこに立っていたのは一夏だった。

「……………」

「……………」

お互い状況がわからなくて、無言。
いや、絶句と言ったほうが正しいかもしれない。
シャルロットは当然裸なのだ。

「うわあっ!」

我に返ったシャルロットがとりあえず大事なところを隠す。
ど、どうしよう。
み、見られた……………。

「えっと……………、これ……………」

未だ混乱している一夏は手に持っていたポディーソープを渡して
く
る。

「う、うん……。ありがとう……」

「あー…それじゃあ、な……」

ぎこちない動きで一夏が出ていく。

必死で状況の理解をしようとしているのだろう。

……。

「ばれちゃった…よね？」

俺《信》はベットに体を投げ出していた。

(……腹へったな。一夏たち誘って食べに行くか)

ドアを開けると、セシリアとバツタリ合った。

「なんだ、セシリアも夕食か」

「ええ。信さんとご一緒だと思います」

どうやら俺の能力には慣れたらしい。

驚く素振りはまったく見せない。

「いや、どうせなら一夏と二人で行ってこい。その方がいいだろ」

「そ、そんなことありませんわ」

コンコン

一夏とシャルロットの部屋のドアを叩く。

「おーい一夏、シャルル。入るぞー」

「一夏さん、デュノアさん、わたくしも入りますわよ」

ガチャ……

部屋に入ると、寝ているシャルロットに覆い被さるように一夏が布団をかけていた。

「お、おー。信、セシリア、どうしたんだ？」

……。

「……そっか」

「信？」

「いや、セシリアがお前と夕食一緒に行かないかだつてさ」

「一夏がいかにも迷っているという表情で返事をする。」

「で、でもなー。シャルルが風邪っぽいから心配でさ」

「なんだ、じゃあ俺がここにいるよ。俺の分の夕食、貰ってきてくれ。セシリア、一緒に行ってこい」

「そ、そうですか？（本当は信さんと二人きりのつもりでしたが、まあ、一夏さんとも……）信さん、今度はご一緒しましょうね」

「ああ、そうだな」

「では行きましょう、一夏さん」

セシリアが『そこそこ嬉しい』オーラを出して一夏と出ていった。ドアがボタンと閉まり、二人の足音が遠ざかる。

しばらく立っていた俺は、ふうーとため息をつき、空いてる方のベツトにドカッと座る。

「……ばれたか」

「……うん」

動揺してたし、表情から読み取ると、間違いない。

一夏は気付いたのだ。

シャルルが、いや、シャルロットが女の子だと。

18・要らないと思ったものってそのあと必要になる場合がある

俺《信》はシャルロットから一夏がどうやって秘密を知ったかある程度聞いた。
結論。

(一夏、あとでぶん殴ってやるよ……)

そんなこと思っているとは露らず、シャルロットは楽しそうに話を続ける。

「そしたら一夏ね、『ここにいろ』って言うてくれたんだ」

シャルロットはくすくすと嬉しそうに笑う。

……。
だよな。

それしかないよな。

「シャルロット、もしかして……」

「何？」

「一夏に惚れたか？」

「へっ!？」

シャルロットは俺と逆方向を向いているので、顔は見えないが、反応からすると図星だろう。
明らかに動揺している。

「やっぱりな。アイツの側にいる女はだいたいみんな惚れるんだ。でも一夏は鈍いから気付かないんだよ」

(信も人のこと言えないくせに……)

なんかボソボソとシャルロットが喋った気がする。

「なんか言ったか？」

「えっ！い、いやあ、どうしてそう思ったのかわかって。その、僕が一夏のこと、す、好きだって」

「裸見られたことを楽しそうに俺に話すべきじゃないとだけ言っておく」

(……信だから話せるんだよ……。ほんと人のこと言えないね……)

「さつきから何だよ？一人でボソボソ。気になるじゃないか」

「だから！僕が好きなのは……／／／なっ、何でもない！／／／」

何で不機嫌になってんだ？

意味わからん。

いや、それより……。

「あ、あーでもな、いきなりそういうことするんじゃない、なくてな、その、なんだ……段階というものを踏んでだな……」

「信？何言ってるの？」

「へ？いや、さっき一夏がシャルロットに覆い被さってたから……」

「……………」

あれ？

何この沈黙？

「え？深読みし過ぎた？」

「…信のえっち……………」

「なっ！」

さすがにひどくないか。

だってあんな体制見たら誰でもそう思うぞ。
きつと。

なんとか弁解しなければ。

「俺はエロくないぞ」

「そうなの？」

「……………嘘です」

そりゃそうだろう。

男ってそういうもんだ。

「ふふっ、信のえっち」

「か、からかうなよ…」

嘘をつくことから解放されて気が楽になったようで、その笑い声はなんだかいつも以上に優しく響いた。

「僕ね、信と一夏に合えてよかったよ。信は僕のこと守ってくれ
し、一夏はここにいていいって言ってくれた」

シャルロットが少し真面目な口調になる。

「本当に二人には感謝してるよ」

「なんだよ、急にかしこまって。だからもっと楽にしていんだっ
て。人に甘える。自分の中に抱え込むな。一夏だってそう思ってる
さ」

すると、シャルロットがこっちを向く。

布団で顔は半分覆われていて目しか見えないが、何かしてほしいと
訴えかけている。

「どうした？何してほしいんだ？」

「えっとね……。その……。なんかね、体が寒いんだ……。だから、温
めて……」

「は？」

何言ってるの？

レンジでチンしろってか？

んなわけねーよな。

「??どゆこと?」

「だ、だから!……あのときみたい……だ、抱き締めて……ほしいな……」

言葉の意味を理解し、俺の顔が熱くなる。

い、い、いやいやいやいやいいいややや。

ダメでしょ、ダメだろ、ダメなの?いや、絶対ダメだ。

何言ってるの?

ほんと何言ってるの?

「ば、バカ言うな!あれは不可効力でな……」

「嫌なの?」

「い、嫌じゃない!と、というかな、シャルロット、落ち着け。

そういうのはだな、好きな人……そう!一夏とかにやってもらえ!」

「ぼ、僕だって恥ずかしいんだよ?せつかく、甘えようと頑張ったのに……」

甘えるのってがんばってやるもんじゃないぞ。

そこ勘違いするな、シャルロット。

(くっ、だがあのシャルロットがここまで言ってるんだ、これは恥を忍んで叶えてやるべきか?)

必死に頭を働かせていると、シャルロットがベットから立ち上がり、

俺の隣に来る。

「ね？一回だけ……」

服の袖をつまんでねだってくる。

「ぐっ……！後悔しないのか？あとで訴えたりしないよな？」

「するわけないでしょ」

「……」

「……」

沈黙。

だあ！もう！

仕方ない、気合いだ、気合い！

これはそついうんじゃない、断じてそついうんじゃないからな！

「い、一回だけだぞ……」

ギュッ……

シャルロットを出来るだけ優しく抱き寄せる。

心臓がバクバクいつてる。

あー…頭がくらくらしてきた……。

ヤバイ、すげーいい香りする……。

あれ？

なんか眠たくなってきた……。

……。

はっ！

しっかりしろ、俺！

自分を見失うな、気をしっかり持て！

……。

……。

……。

……。

っーか長くないか!？

「あ、あのさ、もうそろそろ……」

「……もうちょっとだけ」

ギュッ……

離れたくないと言わんばかりにますます力を入れるシャルロット。

チラッと顔を見たら、すごく嬉しそうだった。

あんまり幸せそうだからこっちまで幸せになってくる。

(母親がいなくなってから、ずっと我慢してたのかな……)

きつと、甘える相手がいなくて無意識に耐えていたんだろう。

シャルロットのことだ、そくに違いない。

「……頑張ったな」

そう言って頭を優しく撫でる。

「……」

小さく返事をして顔をうずめてくる
シャルロットがとてもかわいくて、いとおしくて。

ガチャ…

「「！！！！」」

「た、ただいま……」

ドアが開いてから素早く離れた。

その速さといったらそれはそれはすごいものだった。

もしかしたら瞬時加速を超えたかもしれない。

入ってきた一夏が見たのは別々のベットに横になっている俺たちの
姿。

まさかさっきまでとんでもなく距離が近かったなんて夢にも思っ
ま
い。

「お、お、お疲れ一夏……」

「め、飯は？」

「？もらってきたけど……」

「そ、そっか、サンキュ！じゃ、おやすみ！」

食事を受け取り、さっさと部屋に戻ろうとする。

「までよ、信。……シャルルのこと、知ってたのか？」

シャルロットの分の夕食をテーブルに置いて、一夏が俺に話しかけ

る。

真面目な話だ。

声の調子でわかる。

「……初日からな」

「何で俺に言わなかったんだよ」

「シャルルが決めることだからだ。俺たちに決定権はない。それに、俺は口が固いんでね」

「……そうか」

「俺が『黙ってたほうが面白い』なんて考えるわけねーだろ。そして俺を一発殴らせてるさ。お前の希望通りにな」

一夏はいつもより真剣に俺を見つめていた。

こいつが今思っていることは本気だ。

俺が間違っていると判断した場合は、たとえ仲違いしても俺を殴るという覚悟がある。

「つくづく、お前が友達でよかったよ」

心底そう思う。

「俺もだ」

二人でニヤリと笑みを交わす。

コンッ

拳を合わせたあと、シャルロットが何やら苦戦してるのに気付く。すでにテーブルの夕食と向き合っているのだが、様子がおかしい。

「くっ………ふっ………」

スカッ、スカッ、ポロッ

「何だよ、箸使えないのか？」

「練習してはいるんだけどね………」

シャルロットが弱々しく微笑む。

「悪い、気付かなかった。俺、スプーンとフォークもらってくるよ」

バタン

一夏が再び食堂へ走っていった。

「………信」

………なんでそんなに『何かしてほしい』みたいな声を出すんだ。ここは振り向いたら負けの気がする。

「じゃー部屋に戻るから。おやすみー」

「待って!」

ぐあ！
手を捕まれた。

「そ、その、ね……」

「……何だよ今度は」

覚悟を決めよう。

今日は『シャルロットに甘えさせてやろう記念日』なんだ、きつと。そくに違いない。

そう思わないとやってけない。

「信が食べさせて……」

「……一夏がスプーンとフォーク取りに行っただろ？って言ってもムダなんだよな……」

シャルロットの顔を見たら断るに断れない。

何よりとても楽しみにしているので、期待を裏切れない。

「一夏が戻ってくるまでだぞ。いいな？」

「うん！」

結局、スプーンとフォークが到着するまで四分の三くらい食べさせたあと俺は部屋に戻った。

一夏が夕食の減りぐあいを疑問に思っていたが、なんとか誤魔化した。

ガチャ……

すー……、すー……

あれ？

寝息が聞こえるぞ？

電気をつけてみると……

「……鈴？」

俺のベットに横になって寝ていたのは鈴だった。

「なんでお前がここにいんだよ……」

だがこんなに気持ち良さそうに寝ているのに無理矢理起こすのも気が引ける。

ふとテーブルを見ると、何か弁当箱のようなものがある。

「のこさずたべなさいよ……むにゃむにゃ」

鈴が寝返りをうつ。

とりあえず弁当箱を開けてみる。

「……酢豚？」

なんで俺だ。

一夏に持ってけよ。

ん？

ああ、あれか？

この前の『料理は人に食べてもらつと上達する』って言ってたやつか。

「夏の前に俺で試そうとは。」

「……せっかく作ってくれたんだし、夕食もまだだから食べるか」

そのあと酢豚も含め、夕食を完食したあと、シャワーを浴びて服を着替える。

問題はここからだ。

「ベット減らすんじゃないかった…」

俺は部屋を広々使うために入学後ベットを一つにした。

今、残ったベットを鈴が使っているため俺の寝床が無いのだ。

「床で寝るか…」

一日ぐらい安眠出来なくても大丈夫だろう。

安易な考えでベットの隣に横になる。

いろいろ慣れないことをしたせいも、すぐに眠りに落ちた。

真っ白。

どこもかしこも、どの人も。

「肉体損傷は？」

「皆無です。あり得ないですね…。あれだけの爆撃をピンポイントで受けたのに…」

「システムはうまく作動してるみたいね。まったく、とんでもない天才がいたものね」

二人が話していると、もう一人の男が部屋に入ってくる。

「どうだ、調子は？」

「ええ、良好よ。このまま行けば、次のステップへ進めるわ」

「次って何するんですか？」

「それは」

場面が変わる。

IS学園のアリーナだ。

鈴とセシリア、それにボーデヴィツヒだ。戦ってる。

ボーデヴィツヒが二人を圧倒している。

…おい！

もうやめる！

鈴とセシリアが細いワイヤーのような武器で首を締め上げられている。

とても苦しそうだ。

このままでは……！

ボーデヴィツヒが笑う。

その笑みには自分のしていることに対しての喜びが入っている。

お前……！

自分がなにしてんのかわかってんのか！

このまま続けたら二人が死んじゃうんだぞ！

鈴！セシリア！

「……し……ん。しん。信！」

「はっ！」

ガバツ！

「はあ、はあっ……」

「どうしたの信？」

鈴が俺を覗き混んでいる。
俺を心配している。

お前は自分を心配しろ！

今、ボーデヴィツヒに……？

「あ……れ？」

アリーナではなく俺の部屋だった。

「信？大丈夫」

頭で考えるより先に体が動いた。

「鈴……！よかった……」

「ち、ちょ、ちょっと！信！？」

「ん？……あ」

気付くと鈴を抱き締めていた。

「う、うめんー」

「……／＼」

またやっちまった……。

どうして俺はこうなのだろう？

「本当にごめん……」

「べべ、べ、別に気にしてないからいいわよ……。あたしもここで寝ちゃったし」

「そつだ。なんでお前がここにいるんだ？」

「そ、それは……／＼」

「酢豚か？……うん、あれはうまいと思うぞ。わざわざありがとな」

鈴の考えてることはわかってる。
とりあえず褒めて、お礼を言う。

「そ、そつ？アンタが食べたって言ったから作ったのよ。どお？嬉しい？」

「ああ、すごく嬉しいよ」

ここに鈴が無事で居てくれて。

「う、うん／＼そ、それより！どうしたの？ずいぶんうなされてた

わよ？」

「嫌な夢見てな……」

またか。

必ず、過去と未来がセットで夢になる。
しかもすべて悪いものが。

「鈴。ひとつ、約束してくれ」

「何？」

「ボーデヴィツヒとは絶対戦うな。いいな？」

「いや」

「なっ……！お前なあ！」

「あたしが負けると思ってんの？ふん、なめないでよ！あたし、超強いんだから」

こいつ、素で言っただけやがる。

得意気な顔がまた似合っているところがなんとも言えない。

確かに、鈴やセシリアが簡単に負けるとは思えない。

山田先生には負けたが、先生なのだから当たり前だ。
でも、あの感じ……。

予知夢の感覚だった。

「わかった。その言葉、信じておく」

「ふふん。そうしなさい」

「ところで鈴。一夏に酢豚持ってかないのか？あれで十分うまいと思っぞ」

「へ？いや、えつとね……。そう！まず信に食べさせてもつと上手くなるうって思ったの！毎日食べさせるから、しっかり感想いいなさいよー！」

マジか。

やめてくれ。

やんわりと断ろう。

「でもさ、好きな人から言われたほうがやる気出んじやないか？」

(だからそれがアンタなのよ！)

？

なんか言いたそうだな？

「ほら、毎日俺が食べたならあの約束の内容、俺とになっちまっぞ」

「……………／／」

「なんで顔赤いんだよ」

「！なっ、なんでもないわよ、馬鹿！わかったわよ！たまにでいいわ！たまにでいいから、ありがたく食べなさいよ！いいわねー！」

「へいへい。じゃあそろそろ自分の部屋に戻れ」

そうやって鈴を追い出し、いろいろと準備をする信であった。

最近、鈴は自分の気持ちが変わってきているのを感じていた。

信に喜んでもらいたい、一緒にいたいと思うようになり、一夏よりも信を目で追うようになった。

そのたびに、鈴は『あたしは一夏が好き』と自分に言い聞かせるのだが……。

(前みたいにドキドキしない……)

そうなのだ。

以前はそう思うことすらできないほど胸がときめいたのに、今はまったくくない。

変わりに信を見ていると、鼓動が早くなる。

近くにいきたい、側にいたい。

(と、突然抱き締めてくるし……。い、意識するじゃないの！)

いつの間にか一夏の認識が『仲のよい男友達』になっていた。

だが信は……。

顔が熱くなる。

自分ではどうしようもないほど胸が苦しい。

実は信の部屋で寝ているときに夢を見た。

とてもいい夢を。

『しーん！ご飯よー』

『わかった、わかった。お！今日も酢豚か。これで1ヶ月連続だな。鈴の酢豚はほんとうまいんだよな』

『ふふん。そうでしょう、そうでしょう』

『俺にはもったいない奥さんだよまったく…。なあ、鈴……』

『うん……。いいよ……』

そして二人の唇が

つていう一番いい場面で目が覚めた。

(ああっ、もう！もう少して信とキ)

「 なっ、なに考えてるの！あたしが好きなのは 」

言いかけて、とまる。

本当に？

それが本当の気持ちなの？

「 好きなのは……信？ 」

「 呼んだ？ 」

「ひゃあっ！」

振り返るとまさに本人が立っていた。
とても不思議そうな顔をしている。

「な、ななな、な、何のよう？」

「いや、弁当箱忘れてたから」

綺麗に洗われた弁当箱を手渡される。

「どうしてそんなに顔赤いんだ？」

「全然！」

「？じゃあこれで」

背を向けて去っていく信を見ている鈴の頬はしばらく赤色に染まっ
たままだった。

／コンコン／

「はい」

ガチャ

「よっ、セシリア」

「し、信さん!？」

てつきりルームメイトが帰ってきたのだと思ったセシリアは思わぬ訪問客に焦った。

「どうしたんですの?も、もしかして、わたくしに会いに」

「ん?まあそうだな」

(ええっ!し、信さんそんな……。大胆ですわノノ)

「ホラ、昨日夕食誘ってくれたのに一緒に行けなかったじゃないか。だから今度一緒に行こうと思って、約束しに来たんだ」

「そうですか!わたくしはいつでも大丈夫ですので、信さんの都合がいいときに結構ですわ!」

「そっか。じゃあそうするよ。それともうひとつお願いがあるんだ」

「はい!何でしょうか?」

セシリアは信がわざわざ食事の約束をしに来てくれたことで有頂天になっていた。

「ボーデヴィツヒとは絶対戦わないでくれ」

「は?」

予想外の約束で頭に『？』が浮かぶ。

「いや、理由は言えないんだが、そうしてほしい」

「わかりましたわ」

別に断る理由も無いので約束をすると、信が突然手を握ってくる。

「セシリア……。やさしいやつだな、お前。鈴とは大違いだ」

「そ、そんな……とと、当然のことですわ!」

キラキラと目を輝かせている信を直視できず、顔をそむける。
心臓がこれ以上ないほど早鐘をうつ。

「と、ところで、なんで鈴さんが出てきますの」

僅かに冷静さを取り戻し、疑問点を見つける。

鈴と約束したなら、わざわざ自分とする必要は無いのでは……。

「鈴だけって訳にもいかないことなんだ。……そうだ。セシリア、もし鈴がポーデヴィツヒと戦いそうになったら止めてくれないか?」

「どうしてわたくしが?」

「お前を信頼してるからだ」

「…………… / /」

「と、いうことだ。じゃーな、セシリア、よろしく」

信は握っていた手をパツと離すと、そのまま振り返ることなく行ってしまった。

セシリアはまだ残っている繋いだ手の温もりを確かめながら、一人やさしく微笑むのであった。

19:ベットの下はもう常套手段なのであまり使われない(前書き)

気を抜くとシャルロットがらみの話が増えていく今日この頃……

(。□。)

だってかわいいじゃないですか！

19: ベットの下はもう常套手段なのであまり使われない

「そ、それは本当ですよ!？」

「嘘ついてないでしょうね？」

「本当だつて! 月末の学年別トーナメントで優勝すると、織斑くんが真宮くんと付き合えるの!」

「ちなみに織斑くん派と真宮くん派は五分五分ぐらいだよ!」

月曜日の朝、俺《信》と一夏とシャルロットが教室に入ると、女子がまた集まって何やら話し込んでいた。

あれ？

鈴もいるじゃないか。

お前二組だろう。

「なんの話？」

シャルロットが笑顔で話しかけると、女子たちはみな悲鳴をあげて散らばった。

「お前ら何してたんだ？」

一夏も不思議そうだ。

「またなんか隠し事か?……もうしないぞ」

周りの女子たちからチラッと『また嘘ついてるか確かめるの?』と

いう雰囲気が出ていたので、釘をさしておく。
みんな嘘つきだっていうことがこの前わかったからな。

「じゃ、じゃああたし自分のクラスに戻るから」

「わたくしも自分の席につきませんと」

そさくさと逃げるようにその場を離れる鈴とセシリア、あと他の女子。

「なんなんだ？わかるか？信」

「いや。どう思う？シャルル」

「さあ？どうだろうね？一夏」

質問が一巡してしまった。

三人揃って首をかしげていると、箒が目に入った。

（あいつ、なんか悩んでるな。あとで聞いてみよう）

そして今日もまた授業が始まるのであった。

（なんでこのようなんだ……）

箒の悩みの種は例の噂。

『学年別トーナメントの優勝者は織斑一夏、もしくは真宮信と交際できる』という内容だった。

(なんで信まで巻き込まれているのだ! だいたい、優勝したら一夏と付き合えるのは私だけのはずだ!)

あるとき等は

『学年別トーナメントで優勝したら……っ、付き合ってもらおう!』

と宣言したのだが、何故か歪みに歪んで学校中に広まってしまった。

「はあ……」

ため息が出てしまう。

「幸せが逃げるぞ、等」

うしろからの声に振り向くと……

「……いない」

「もう横にいるよ」

右側に信がいた。

何なんだろう。

悩み事や頼み事など、助けてほしいときに信が現れる気がする。

「困ってる人を助けるのが目標だね」

ニヤリと笑う信。

「どうしたんだ？まあ予想はつくが」

「……なんだと思う？」

「一夏だろ、一夏。『付き合ってるのに自分だけ特別に扱ってくれない』ってことだろ？……あれ？違うの？」

「ひとりで話を進めるな……」

心が読まれてしまうとどんどん話が進んでしまう。

「はあ……。実はな、信」

「なるほど。つまり『学年別トーナメントで私が優勝したら付き合ってたね、一夏』『学年別トーナメントで優勝したら付き合えるね、一夏』『学年別トーナメントで優勝したら一夏と付き合える』という図式で、お前はまだ一夏と付き合っていないわけか」

「そついつことだ……」

「……」

事のあらましを伝えると、信はガツカリしているようだった。

「お前さあ……もう『私と付き合って、一夏！』でいいじゃないか。俺はもうてっきり……」

「し、仕方がないだろう……」

「こうしている間にも着々と一夏を狙うやつは増えてんだ。どうすんだ？」

「う、うるさい……」

「なんでそんなに怖がるんだよ。箒みたいな美人に告白されて嬉しくないやつなんかないぞ？」

「なっ……！／＼」

突然『美人』と言われて照れてしまう。

しかし、ここでにやけては……！

「怖がってたらずっとこのままだ。それだけは間違いない」

「な、ならば、お前から一夏に言ってくれ。わ、私がすすす、す、……」

「好きだった？」

箒の言わんとしていた言葉を引き継いだ信がニヤニヤしている。

「~~~~~……！／＼」

コクコク

うなずくのが精一杯だった。

信はまだニヤニヤしている。

「馬鹿言うな。そんなんでお前が納得するのか？本当にそれが一夏に告白したことになるのか？簿が一番わかっているだろ」

確かにその通りだ。

そんなやり方で自分が納得するとは思えない。

「それにな、こういうのは第三者が介入するもんじゃないんだ。話がややこしくなるからな。俺は中立の立場で温かく見守らせてもらう」

（すでにややこしくしているではないか…。あの噂にはお前も含まれているのだぞ…）

「なに考えてんだ？」

「信……自分のことには鈍いのだな……」

多少あきれが混ざったため息をはく簿であった。

「あら？」

声に反応して鈴が振り向くとセシリアがこちらに向かってきていた。

「奇遇ね。あたしはこれから学年別トーナメント優勝に向けて特訓

するんだけど」

「わたくしもまったく同じですわ」

むむむ…

二人がいがみ合う。

「この際どっちが上かはつきりさせるのも悪くないわね」

「よろしくてよ。どちらがより強く優雅であるか、この場で決着をつけてさしあげますわ」

どちらも自分のほうが強いという点で譲らない。
いや、譲れない。

「もちろん、あたしが上なのはわかりきってるけど」

「弱い犬ほどよく吠えるとは本当ですわね」

「どつという意味よ?」

「自分が上だつてわざわざ大きく見せようとしているところなんか、典型的ですもの」

カチン!

鈴の中の何かにスイッチが入った。

「その言葉…そっくりそのまま返してあげる!」

鈴は専用IS『甲竜』を、セシリアも同じく専用IS『ブルー・テ

『イアーズ』を展開する。

すぐさま戦闘が始まるはずだったが、思わぬ横槍が入った。

ドオオンー!!

「「!?!」」

砲弾が二人の目の前を通り過ぎ、アリーナの壁面に当たって爆発する。

発射したのは

「ドイツ第三世代型IS『シュヴァルツェア・レーゲン』!」

「ラウラ・ボーデヴィツヒ……」

鈴とセシリアがそれぞれ表示された敵機の情報を確認する。

ラウラは不適な微笑を浮かべていた。

「どういつつもり!?いきなりぶっ放すなんていい度胸してるじゃない!」

「中国の『甲竜』にイギリスの『ブルー・ティアーズ』か。データで見たときの方がまだ強そうだったな」

二人がラウラの挑発にびくびくつと口元をひきつらせる。

「何?やるの?」

「り、鈴さん?あんなかた相手にする必要はありませんわ。先ほど言ったでしょう?弱い犬ほどよく吠えるのですわ」

鈴は完全に怒りに燃えていたが、セシリアは何とか平静を保とうと
していた。

信との約束がセシリアをかるうじてそうさせていた。

「貴様たちのようなものが私と同じ第三世代型専用機操縦者とは…
…。数だけが取り柄の真似事好きな国と、古いだけが取り柄の国
は、余程人材不足と見える」

ピピッ

鈴が最終安全装置を外す。

セシリアは踏みとどまったが、そろそろ冷静さを失いかけていた。

「この人、スクラップがお望みみたいよ！」

「そ、そうですね……」

ギリギリ。

まさに極限まで怒りがたまっていた。

「ふん！二人がかりで来たらどうだ？下らん種馬を取り合うような
メスに、この私が負けるものか」

ついにセシリアも安全装置を外す。

信との約束が頭から吹き飛ぶほど、このドイツの候補生に腹が立っ
た。

「今何て言った？あたしの耳には『どうぞ好きなだけ殴ってください
い』って聞こえたけど？」

「この場にいない人間の侮辱までするとは……。その軽口二度と叩けないようにしてさしあげますわ！」

ラウラは両手を広げ、ちょいちょいと自分側に向けて振る。

「とつとと来い」

「上等！」

「あー、めんどくさいな……」

俺《信》はゆっくりと自分の席から立ち上がった。

一夏とシャルロットは先にアリーナに向かった。

『信！今日こそISのこと教えてくれよ！』

と、一夏に頼まれたのだが……。

「教えんの面倒なんだよな……」

だが頼まれては嫌とも言えず、はいはいとうなずいてしまった。

出きるだけ教える時間を短くするために教室で暇を潰していたが、そろそろ行かないとまずい時間になった。

のろのろとあるっていると、女子数人が慌ただしく廊下を走っていた。

「どうしたんだ？」

たまたま通りかかった同じクラスの鷹月たかつき 静寐しずねさんに声をかける。

「あつ、真宮くん！大変なの！第三アリーナで代表候補生三人が

」

「わかった。ありがとう」

表情からなにがあつたか読み取り、最後まで話を聞かずに走り出した。
まさか

アリーナの観客席に着いたとき、最初に飛び込んできたのは白式を展開し、雪片式型を構える一夏とその隣にいるシャルロットと篝の姿。

次に飛び込んできたのは最も現実で見たくなかった、あの夢の内容だった。

首をワイヤーブレードで絞められ、身動きが取れない二人にラウラが一方的に拳を叩き込む。

すでに鈴とセシリアのISはすでに操縦者生命危険域に入っている。デッドゾーン
二人の苦悶の表情とボーデヴィツヒの愉悦に口元を歪めたのを見て、余計な考えが無くなった。

「一夏！鈴とセシリアを頼む！」

「ああ！」

俺は瞬光を展開すると同時に右手に朧火を剣の状態で呼び出す。

バキィツツン!!

アリーナを取り囲むバリアーが二カ所、音をたたてて破壊される。その裂け目を出ると同時に俺は瞬時加速でボーデヴィツヒの目の前に現れる。

「ッ! 貴様…!!」

「退け、ボーデヴィツヒ。最終通告だ」

「誰に物を言っている…!!」

ボーデヴィツヒが俺に対応するため、ワイヤーブレードを戻し、鈴とセシリアを解放する。

「一夏! 二人を連れて離れてろ!!」

「わかった!!」

その間にもボーデヴィツヒは両手のプラズマブレード、さらにワイヤーブレードを器用に使って攻撃をしかけてくる。

「他人の心配をしている余裕があるのか?」

ピタッと俺の動きが止まる。

見えない力で全身が押さえられているようだ。

「A I Cか……」

アクティブ・イナーシャル・キャンセラー。
慣性停止能力。

通称『AIC』。

第三代型の武器として紹介されていたのを前に見ていた。
なるほど、確かに身動きを封じられると厄介だな。

「はっ！所詮貴様も」

「いいのか？」

「何？」

言葉を遮り、聞く。

自分でも驚くぐらい、冷たく黒い感情が心にある。

ボーデヴィツヒも察したのだろうか、少し怯えの表情が現れていた。

「止めるのが俺だけでいいのか？思い出せ、ボーデヴィツヒ。この前お前の喉元に武器がとどいたとき、俺は動いていたか？」

ボーデヴィツヒが俺の右手に視線を移すのが非常にゆっくりに見えた。

今度は完全に恐怖の表情を浮かべた目の前の眼帯少女はすぐさま回避行動を取ろうとする。

だが隴火はもう俺のイメージを反映し、光の粒子が動いている。

ジャキン！！

「……！！」

隴火は今までで一番大きく、広く、そして禍々しく形を変えていた。

俺の右腕から伸びたそれは一本ではなく何十本とボーデヴィツヒの首や心臓、両手両足に突き付けられている。

更にはボーデヴィツヒの回りにも槍状の朧火が展開され、見た目には『槍がボーデヴィツヒを刺さないようにした』というよりは『ボーデヴィツヒが槍の展開される場所にいなかった』という方が正しい。

針山地獄。

この状況はまさにそれだった。

「真宮、その辺にしておけ」

織斑先生がこちらに歩いてくるのを目の端でとらえた。その目と声には有無を言わせぬ強制力があつた。

「……わかりました。ただ、一つだけいいですか？」

「……かまわん」

朧火を解除し、ボーデヴィツヒと向き合う。

「……怖がらせて悪かった」

「……！私は……！」

「『怖くなかった』ってか？嘘つけ、震えてるじゃないか」

「き、貴様……！私を馬鹿にしているのか！？いいだろう！……」

「そこまでだ、ボーデヴィツヒ、真宮。文句があるなら、その決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか。これ以上騒ぎを起こさずには困る」

織斑先生の声の調子はいつもと変わらないが、先ほど以上に強制力があつた。

「……教官がそうおっしゃるなら」

渋々了解し、ISを解除するボーデヴィツヒ。

「俺もそれでいいです」

決着を着けるなんてつもりはさらさらないが、ここで『いいえ』なんて言えるやつはいない。

「では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止する。解散！」

「あの男……」

ラウラは信のことが気になっていた。

あいつは強い。

それも自分の知らない強さを持っている。

あのときは冷静さを欠いていて、考えることができなかったが、今になって思うことがある。

『怖がらせて悪かった』

「……敵を心配するような甘いやつが、なぜあれほどまでに……」

ラウラは軍人だ。

敵に情けをかけるのはすなわち自らの甘さが招くものであり、強者には程遠いものだと考えている。
だが……

「真宮信……。お前は何を持っているんだ？」

「……………」

俺《信》は今保健室にいた。

俺から見て右手に鈴、左手にセシリアがそれぞれベットに寝ている。二人とも怪我をして包帯が巻かれていて、見るだけでも痛々しい。対する俺は椅子に座って二人と向き合い、かれこれ三十分は何も喋っていない。

シャルロットも一夏も不安そうだが、そんなことは関係無い。

「……………」

「な、何よ？ さっきからジロジロ……」

「そ、そうですね。言いたいことがあるならハッキリと行ってくだ

「えい……」

言いたいことなら山ほどある。

ありすぎて何から話していいのかわからない。

「鈴、セシリア……」

「何？」

「なんですの？」

「ごめん」

予想外の言葉に目を丸くする二人。

「なんであんたが謝んのよ！」

「そうですね！信さんは悪くないですわ！悪いのは」

「違う。ポーデヴィツヒじゃない」

一旦話し出してしまうと、意外とスラスラと言葉が出てきた。

「お前らを信じた俺が悪い。お前らをかいかぶり過ぎてたよ」

「……！ちょっと、どついでいごとよ……」

「言葉通りの意味だ」

「それは聞き捨てなりませんわ！それではわたくしが弱いみたいで

「はいですか！」

「そつよー！」

「コイツらは本当に……！」

沸々と怒りがわき出てくる。

「違うのか？約束を守れないやつと、人の助言を聞かないやつがよく言うじゃないか」

二人ともぎゅつと唇を噛み締めて、感情が流れ出すのをこらえている。

「き、今日はたまたま」

「たまたま？たまたま何なんだよ！」

突然俺が上げた怒鳴り声に保健室にいる全員が凍りつく。もう駄目だ。我慢できない。

「お前らわかってんのか！？死にかけてたんだぞ……！」

状況がよくわからず、混乱している鈴とセシリアに構わず続ける。

「あんなに苦しそうで、こんなに怪我して……！今更『たまたま』！？ハッ！冗談よせよ！」

「ちよつと、信」

シャルロットが俺を止めようとするが、もう止まらない。

「なんで負けに理由をつけて逃げようとするんだ！？なんで素直に謝れないんだ！？」「ごめん」ですむことだろう！？何強がってんだ
「！！」

一気にしゃべったせいで息が荒くなる。

だが言いたいことをすべて吐き出し、気持ちが落ち着いてきた。

「嫌なんだよ……。誰かが傷つくのを見るのは……。笑って欲しいんだ、みんなに」

俺が話すのをやめると、部屋が静まり返った。
どれくらいたっただろう。

鈴が初めに口を開いた。

「わ、悪かったわよ……。ごめん……」

セシリアがそれに続く。

「も……申し訳ありませんでした……」

……。
……。
……。
……。

あれ？

鈴とセシリアってこんなんだっけ？

「……ぶっ、あははははー！」

今度は四人とも目を丸くする。

先ほど同様、何が起こったかわからないという顔をしている。

「な、なんだよそんなにしんみりして！なんか、変だなお前ら！」

「なっ！なによ！あんたが謝れって言ったんじゃない！」

「その通りですわ！信さん！失礼ですよ！」

不愉快そうな二人を見ながらしばらく笑い、一段落してからまた話し出す。

「悪い、悪い。いやー、お前らが素直に謝るイメージが無かったからさ、面白くて」

「確かに」

「うん、そうだね」

一夏とシャルロットが隣で同意してくれた。

持つべきものは男友達だな。
シャルロットは女だけだ。

「あ、あんたたちねえ……」

「みなさんひどいですわ……」

「二人とも、もともと可愛いのもったいないんだよ」

…あれ？

二人とも横を向いてしまった。
笑われ過ぎて怒ったか？

（な、なんでそうなるのよ…／＼）

（反則！反則ですわ！／＼）

なんで顔を背けているか聞こうと信が口を開こうとしたとき。

ドドドドドドドド……

「な、なんだ！？」

バァァン！！

地鳴りが聞こえたかと思うと、突然ドアが勢いよく開いた。

「織斑くん！」

「真宮くん！」

「デユノアくん！」

「……これ……！！」「……」

突然雪崩れ込んできた女子の大群に気圧されていると、バン！と目の前に案内が突き付けられる。

「『今月開催する学年別トーナメントでは、より実践的な模擬戦闘

を行うため、二人組での参加を必須とする』」

なるほど、IS学園では珍しい男子生徒と組むために必死なのか。女子って大変。

「私と組もう、織斑くん！」

「私と組んで、デユノアくん！」

「私は真宮くんがいい！」

ギヤーギヤー

どうする？

ピカーン！

そうだ！

「俺は」

「悪い！俺はシャルルと組むから諦めてくれ！」

ぐあー！

シャルロットを一夏に取られた！

（悪いな、信）

（くっ！あとで覚えとけよ……）

「そ、そうなの？まあ他の女子と組まれるよりは……」

「じゃ、じゃあ！真宮くん！真宮くんは？」

「えー？俺！？えーと、俺はだな……」

「考える、考える、考える、考える……」。

「こ、これでどうだ！？」

「お、俺が入ると人数合わないから、織斑先生に一人で出場しろって言われてるんだ」

「……どうだ？」

「お、織斑先生が言うなら……」

「そうね……」

「ざわざわ……」

「パタン。」

「……ふう。」

「行ったか……」。

「信……」

「嘘に決まってるんだろ？」

「じゃあどうすんだよ？」

「案内に当日までペアが決まらない生徒は抽選って書いてあったか」

ら、それでいいよ。くそー、俺もシャルルとペアがよかった」

「えっ！ほ、ホント？／＼」

「ああ、そりゃもちろん」

シャルロットがもじもじしていると、そこに怪我人が割り込んできた。

「だったら信！あたしと組みなさい！」

「いえ、信さん！わたくしとぜひ！」

「駄目ですよ」

おお、我らが副担任、山田先生だ。こいつらに言っちゃってください。

「お二人のIS、ダメージレベルがCを越えています。トーナメント参加は許可できません」

「「で、でも……」」

二人を見れば何を考えているか一目でわかる。コイツらは本当にこんなときでも……。半ばあきれつつ、二人に小声で話しかける。

（安心しろ。俺が一夏たちのどっちかが優勝すれば問題ないだろ？）

（えっ！し、信、もしかしてあの噂……）

(聞いた聞いた。一夏と付き合えるってやつだろ?)

(それだけ?)

(あれ?違うのか?)

(違くは無いのですが...)

(?まあいいや、だからゆっくり休んどけ?いいな?)

(わかったわ...)

(仕方ないですわね...)

「あんたたち!絶対優勝しなさいよ!」

「わたくしたちの分まで頑張ってください!」

いつもの調子に戻った二人を見て、安心する信だった。

「いやー、疲れたな今日も」

「そうだなー。それにしても信が怒ったの初めてみたよ」

「そりゃ、ここに来てから怒ったの始めてだからな」

俺たち三人は保健室から寮へ戻る途中、いろいろと他愛もない話をしていた。

「でも信って優しいね。あんなに他人のこと思っってはっきりものを言う人っていないよ」

「そ、そうかな？」

「うん。そうだよ」

シャルロットが見せる笑顔に照れてしまう。
さて…

「あっ！ごめん二人とも。職員室に用があっただった。先帰って
てくれ」

「わかった」

「うん。気を付けてね、信」

二人とは逆方向に走り出す。
しばらく走って、二人の姿が見えなくなった。

「……出てこいよ。何のようだ？」

「……」

木のかけからボーデヴィツヒが現れる。
保健室からずつつけていたらしい。

「……聞きたいことがある……」

「なんだ？」

「なぜお前は強いのだ？」

「強くなーよ」

「嘘をつけ！実力が有りながら、どうしてこんなところにいるのだ
！」

「その質問、そっくりそのままお前に返す」

ボーデヴィツヒは強い。

戦い方は非常に気にくわないが、実力は間違いなく一年生トップクラスだ。

「……」

「別に答えなくていい。だけど……」

確かに気にくわない。

気にくわないが、見捨てる気にもなれない。
夢で見たボーデヴィツヒの表情を思い出す。

「助けて欲しいときは俺に言え。今日のお詫びに助けてやるよ」

「……」

「じゃあな。あと、聞きたいことがあるならまどろっこしいことしないで直接聞きに来い」

そう言っただけ俺は再び帰路についた。

(一夏には悪いけど、信とペアになりたかったな……)

シャルロットはそんなことを考えながら、着替えを始めた。

一夏に気を使い、自分の部屋を出て別なところにいる。その別なところとは……

(信ってこのベッドで寝てるんだ……)

隣の部屋、つまり信の部屋である。

まだ信は帰ってきてないので、さっさと着替えてしまえば問題ないだろうと判断したのだ。

ところがいざ入ってみると信の部屋に一人きりということ、いろいろと気になる点が出てきてしまった。

(ベッドの下……)

ちょうど下着の状態になったときに、その隙間が気になった。

(……お、男の子ってこいついつとこころにそういつの隠すんだよね

…)

しばらくじーっと見たあと、ついに好奇心に負けた。

キョロキョロと辺りを見回し、耳を澄ます。

誰もいないし、足音も聞こえない。

(確かめるだけ、確かめるだけだよ?)

よつん這いになってベッドの下に手を入れて、動かしてみると……。

コツン

何か平べったいものに当たった。

どうやら本のようなのだ。

(……………/ /)

恐らく当たっているだろう自分の想像を思い、顔が赤くなる。

「し、信のえつち……………/ /」

ここでシャルロットは迷った。

このままそつとしておくべきか、それとも事実を確かめるか。

(で、でも普通だよな?男の子が興味持つのって……………。そう!これは男の子になりきるための勉強だよ!勉強なんだよ!?)

ゴクリ。

本らしきものを掴んだそのとき。

ガチャ

「ふぁ……。ねむ」

部屋に入ってきた信とベットの下に手を入れているシャルロットが
お互いを見る。

ここでシャルロットは気付いたのだが、まだ自分は着替えの途中で、
胸を隠すための男装用コルセット、下は淡いピンク色のパンツのま
まだった。

しかも四つんばいでお尻をつき出すような格好だったので、パンツ
がきゅっと食い込んでいる。

「よ、よぉ……」

「お、お邪魔してます……」

「あ、ああ、じゅっくじゅ……」

ギィ……パタン

(う、うわぁ！ど、どうしよう！すごいとこ見られちゃった！……
でも信なら別に……はっ！なに考えてるのさ！！／＼)

／し、シャ、シャルル……／

ドアの向こうから信の音がする。

「な、何？」

「い、いろいろと言いたいことはあるんだけどさ、とりあえず、早く着替えてくれ…」

「そ、そうだね。すぐ終わらせるよ…」

ぱぱっと着替えて、ドアを開ける。

「どつぞ…」

「いや、俺の部屋なんだが…」

そのあと、信は洗面所で着替え、シャルロットはその間ベットに座ったままだった。

信が着替え終わり、自分の隣に座る。

怒っている様子は無い。

「……何してたんだ？」

「……わかってるくせに」

「まあな」

「信のいじわる……」

「で、何してたんだ？」

とても楽しそうに、いたずら好きの子供っぽい笑顔を向けられたシャルロットはドキドキしっぱなしだった。

「そ、その、ベットの下のね……。そういつのが……」

「そついつのつてなんだよ?」

ニヤニヤ。

「そ、それは……。そ、そこまで言わせないでよ! / /」

「ハハツ! ごめんごめん。でも、そんなの無かっただろ?」

「えっ……!」

でもあれは確かに……。

信が首をかしげる。

そしてベットの下に手を入れて何かを探す。

「ん?なんだこれ?……あっ!」

「なにになに?」

信が引つ張り出したのは、何度も読み返してボロボロになった童話の本だった。

「こんなところにあつたのか。ずっと探してたんだよね」

「何なの、これ?」

「これはな、俺が小さい頃に親にもらった本なんだ。お守りみたいなもんかな」

「そ、そうなの……?……信のお父さんとお母さんってどんな人?」

「うーん……。優しくて、強い人、かな？」

「そうなんだ……」

親らしい親が今は一人もいないシャルロットにとって、そんな信が羨ましかったり。

「まあ、今は旅に出て家にいないけどな」

「旅？どこに？」

「どこにでも、かな？行き先とか目的地がないほうが楽しいんだと」

「ふうん。いつから？」

「IS学園の入試の日から。入試から帰ってきたらさ『宝くじが当たりました。早速旅に出てきます』ってテーブルに置き手紙があったんだよ」

「すごいお父さんとお母さんだね……」

「まあ、どちらかと言うとおじいさんとおばあさんって感じだけだな。……血が繋がってないんだ、俺は」

「えっ………」

「小さい頃にな、拾われたんだ」

そう言って弱々しく笑う信は、なんだか悲しそうだった。

「悪い。なんか重い話になるな」

信は手に持った本を指差す。

「これ読んでみるよ、面白いんだぜ？」

手渡された本を早速読み初めるのと同時に信が大きなあくびをする。

「じゃあ俺は寝るよ。おやすみー」

信は布団に潜り込む。

「うん。おやすみなさい。読み終わったら帰るね」

薄い本だからすぐ読み終わるだろう。

信はひらひらと手だけ振り、目を閉じた。

「ふう……。終わったー」

思いの外長くかかった。

信はすでにくつすりと寝てしまっている。

その寝顔はなんだか無邪気で、子供のようだった。

（たまに子供みたいなところがあるよね、信は）

シャルロットは信の隣に横になり、その幸せそうな寝顔をじっと見つめた。

「ふふっ……」

頬をツンツンとつつく。

「うーん？……むにゃむにゃ」

ツンツン。ツンツン。ツンツ、ガシッ！

（うわあっー！）

調子に乗っていたら腕を捕まれた。

「……すー……すー……」

どうやらまだ寝ているようだが、これでは逃げられない。

（どっしりよう……）

「……すー……ははっ……」

信は本当に幸せそうだ。

その笑顔を見ていたら、なんだか安心して眠くなってきた。

「おやすみ……し……ん……」

眠気に身をまかせ、目を閉じる。

シャルロットはそのまま夢の世界へと入っていったのだった。

19:ベットの下はもう常套手段なのであまり使われない(後書き)

くっそおおお！

シャルロット以外にも鈴とかセシリアとかラウラとか箒とか書きた
いのこ……………！

指が、指が勝手にいい！ (T—T)

200・ジャンプって必要なときに無いものひよっ

窓からまぶしい朝日がさし込む。

「うーん……。ん？」

目を擦って視界がハッキリしてくると、とんでもないものが目に飛び込んできた。

「……」

「すー…ふふっ……」

俺《信》は自分のおかれた状況を分析する。

まず昨日は眠かったので、自分の部屋のベットで寝た。

普通だ。

シャルロットはあの本を読み終わったら帰ると言っていた。

ところが、シャルロットはまだ俺の部屋にいる。

普通だ。

いや普通か？

まあ百歩譲って普通だとしよう。

隣で寝てるのは普通か？

異常だ。

「うわぁー！…」

ようやく状況を理解した俺は一気に目を覚まし、ベットから飛び起きる。

(お、俺、へ、変なことしてないよな?)

いろいろと確認するがそういう痕跡は見当たらない。

「う?うーん?……あつ、信。おはよう……」

シャルロットは寝ぼけ眼でははと笑って挨拶をする。

「お、おおお、おま、お前……」

俺はかなり動揺してシャルロットを指差す。

最初は『?』となっていたシャルロットも自分の状況を理解したらしく、かああつ…と顔を赤くする。

「いいい、いや、こじじ、じ、これは……」

「……なんかおかしなところないか」

一応シャルロットにも確かめておこう。

絶対に、確実に!

そんなことをした覚えはないが!

もし、万が一、そういうことが起こった最悪の場合もある。

「なにもないけど……。な、なんかしたの……?」

なんで自分の体を抱き抱えるようにして俺を見るんだ。

俺はそんなことするやつに見えるのか。

「してない!絶対に!」

(してないんだ……)

「とにかく！そういうことはだな、一切してない！お前も無防備過ぎるぞ！女の子が隣で寝てたら」

そこで口をはつと閉じる。

自分の想像したことに顔が熱くなる。

「なに？女の子が隣で寝てたら何なの？」

「い、いや……何でもない……」

「信って嘘つくのは下手だね。何考えてたの？教えてよ」

シャルロットは赤い顔のままニヤニヤと楽しそうに笑っている。
く、くそ……。

『昨日の仕返し』だと……？

「いいだろそんなことは……」

「良くないよ。ねえ、なに？何なの？」

「だ、だからだな……可愛い女の子が隣で寝てたら……俺も健全な男子高校生なわけで……そういうあれが……」

「へー、そんなこと考えてたんだー」

ニヤニヤ。

ぐっー！

この笑顔は怒るに怒れない……！

「い、いいから！早く部屋に戻れよ！ほら！」

俺はドアを開けてシャルロットが帰るように促す。

「ふふつ。ごめん、ごめん。戻るよ」

シャルロットはどつやら満足したようで、ニコニコと立ち上がり、部屋から出る。

「信」

部屋から一歩出たところでシャルロットが振り向く。

「……………えっち」

「……………」

今回ばかりは否定できない。

シャルロットはそのまま笑顔で戻っていった。

「しかし、すごいなこりゃ……………」

俺《一夏》はモニターから観客席の様子を見る。

わきのテロップには来賓の職業、所属する会社、名前がズラズラと

流れていた。

「三年にはスカウト、二年には一年間の成果の確認にそれぞれ人が来ているからね。一年生には今のところ関係ないみたいだけど、それでもトーナメント上位入賞者にはさっそくチエックが入ると思うよ」

シャルルの説明に信が補足を加える。

「それに今回は珍しい例外が一年生にいるからな。興味しんしんなんだろ」

信だけにか？

「つまんねーよ、馬鹿」

「僕もそう思うよ、一夏」

「シャルルまで!?!」

下らないやり取りで三人が笑いあい、緊張がほぐれる。

「しつつかし、本気で一人で出場することになるとは……」

信が言ったあの嘘はなんやかんやで千冬姉の耳に入り、

『真宮』

『はい?』

『お前の希望通り一人で出場させてやる』

となった。

まさに嘘から出た誠だな。

と、ここでトーナメント表がモニターに表示された。

「おっ！俺、シードだ。ラッキー」

最初に信が自分の名前を見つけた。

「あれ？お前ら俺の隣じゃないか」

「本当だ。対戦相手は」

対戦相手はよく知っているやつだった。

学年別トーナメント

Aブロック一回戦 一組目

織斑 一夏

シャルル・デュノア

VS

篠ノ之 箒

ラウラ・ボーデヴィツヒ

俺《信》は背筋が凍った。

(この組み合わせは……！)

この前の嫌な夢を思い出す。
どうする？

トーナメントを中止にする権限なんて俺にはないし、理由が理由だ。
『夢で見ました』なんて気が狂ったやつだとあしらわれるのは目に見えている。

「一夏、シャルル。……危ないと思ったらすぐ逃げろ」

「は？なんだよいきなり」

「信？心配してくれてるの？大丈夫だよ、僕たちなら」

違う。

試合の勝ち負けとかそういうことじゃないんだ。

だが誰に言っただって『そんな馬鹿な』で終わらせられてしまうだろう。

くそ！

俺はどうなるか知ってて仲間を危険にさらすのか……？
自分の無力に腹が立つ。

「まったく、信は心配性だな」

そう言って笑う一夏とシャルロットと比べ、俺の表情はとても固かった。

「一戦目で当たるとはな。待つ手間が省けたというものだ」

「そりゃあなによりだ。こっちも同じ気持ちだぜ」

俺《一夏》は雪片式型を強く握りしめる。

試合開始のカウントダウンが始まる。

5、4、3、2、1

0

「叩きのめす!!」「」

俺とラウラが同時に叫ぶ。

刹那、ラウラに向けて瞬時加速を行う。

試合開始直後にシールドエネルギーを大幅に削ることが出来れば、

一気に有利になる。

だが

「はっ!」

ピタッ!

ラウラのAICが俺の動きを止める。

「開幕直後の先制攻撃か。わかりやすいな」

「そりゃどうも。以心伝心で何よりだ」

ガチャン!

『シュヴァルツェア・レーゲン』の大型レール砲が俺に向けられる。
絶体絶命。
だけど。

「させないよ」

シャルルが俺の頭の上を飛び越えて現れる。

同時に六一口径アサルトカノン『ガルド』による射撃が、ラウラのレール砲に当たる。

「ちっ………！」

照準が僅かにずれ、俺の左頬すれすれを砲弾が飛んでいく。

「逃がさない！」

シャルルがすぐさま左手にアサルトライフルを呼び出し、急後退して間合いをとるラウラに追い討ちをかける。

「私を忘れてもらっては困る」

ラウラへの追撃を遮るように量産IS打鉄うちがねを纏った筈が現れる。

「それなら、俺も忘れられないようにしないとな！」

俺と筈、互いの近接ブレードがぶつかり合って、火花を散らす。ここで負けるわけにはいかない。

「絶対勝つ！」

俺《信》は一人、更衣室のモニターで試合の様子を見守っていた。先程、シャルロットが箒を戦闘不能にし、二対一の有利な状況に持ち込んだ。

このままだと一夏とシャルロットが勝てるだろう。そうなってほしい。

「今のところ問題は何も無いようだが……」

だが俺の願いはかなわなかった。

バリバリバリッ！！

『シュバヴァルツェア・レーゲン』から激しい電撃が放たれる。ボーデヴィツヒのISがドロドロに溶ける。

そして、黒い塊に姿を変えボーデヴィツヒを飲み込んだ。

ボーデヴィツヒを飲み込んだ『もの』はさらに形を変え、どこかISの雰囲気を漂わせながら、まったく別物の『何か』に変形した。その時すでに更衣室には誰もいなかった。

俺は電撃が放たれるのを見た瞬間、すぐさま助けに向かっていた。

「何だよ、あれ…!？」

先程、俺《一夏》は勝利を確信した。

シャルロットの奥の手、盾の装甲の下に隠してあった第二世代型最強と謳われる六九口径パイルバンカーグレイ・スケール『灰色の鱗殻』
通称『盾殺し』シールド・ヒアーズ。

まさにそれがラウラに直撃し、吹っ飛ばす。

さらにそれを続けざまに三発撃ち込まれ、すでにシールドエネルギーは空に近かったはずだ。

しかし、今日の前ではラウラのISは動いている。

だが、これはISなのか？

ISと呼ぶには不気味で、奇妙だった。

この前の未確認ISは完璧にISの形をしていたので、不気味は不気味でも想定内の不気味だった。

今回は違う。

ISという概念に無理矢理収まるうとしているような、そういう感じが不気味だった。

その時俺は敵の手に握られた武器を見た。

それは

「『雪片』……………!」

千冬姉のかつて振るった刀。

世界最強の、俺の姉の武器。

俺は無意識に『雪片式型』を握りしめ、中段に構えた。

「!」

刹那、黒いISが俺の懐に飛び込んで来る。

居合いに見立てた刀を中腰に引いて構え、必中の間合いから放たれる必殺の一閃。

それは紛れもなく千冬姉の太刀筋だった。

キーン！

『雪片式型』が弾かれ、俺から武器がなくなった。まずい。

そして相手は止めとばかりに刀を高く掲げ、降り下ろす。

何とか直撃は避けたものの、左手に衝撃が走った。

同時に限界を超えた白式が光の粒子になり、俺の体から消えた。左手からじわりと血がにじむ。

(今の技……千冬姉の！)

もう冷静ではいらなかった。

千冬姉の真似なんかしやがって！

その技は千冬姉だけのものなんだ！

「うおおおお！！」

こいつを殴れば、俺はどうなったってかまわない。

ただ拳を握って突っ込む。

俺を迎え撃つべく、相手が再び刀を振り上げる。

そして

ガキーン！

「ぐっ……！ 篤！ シャルル！ 一夏を落ち着かせろ！」

瞬間、後ろにぐいつと引つ張られる。

「一夏！信の言う通りだ！落ち着け！！」

信は瞬光を身に纏い、右手の朧火で相手の斬撃を受け止めていた。

「俺がこいつを助ける！早く逃げろ！」

「待ってくれ、信！こいつは俺がやる！俺がやらなきゃいけないんだ！いや、やりたいんだ！」

信が相手を遠ざけるように剣を降り、間合いが空く。

「もう白式のエネルギーは　ッ！あーくそ！わかった、俺が時間を稼ぐ。その間になんとかしろ」

俺の覚悟が揺るぎないものだと感じたのだろう、信は渋々了解した。

「先生方、すみません。ここは俺たちに任せていただけませんか？」

信がオープンチャネルで駆けつけた教師部隊に話しかける。

いろいろと言われているようだが、俺には聞こえない。

それよりも白式のエネルギーをどこから持ってくれば……。

「一夏、無いなら持ってくればいいんだよ」

シャルルがそばまで来ていた。

ケーブルのようなものをリヴァイヴから伸ばし、白式に接続する。

「リヴァイヴのコア・バイパスを開放。エネルギーの流出を許可……」

……」

体の中に力が溢れてくる。

その力を溢さないように、逃さないように終わるのを待つ。

「絶対に勝つ……」

試合の勝敗とはまた違った覚悟が俺の中にあつた。

『ダメよ！あなたたちは生徒。そんなワガママは聞けない』

俺《信》は必死で先生たちを説得するが、まったくちががあかない。内心やきもきしながらも、何とか穏やかな口調をつくる。

「お願いします。これだけは譲れないんです」

『ダメ。もしもあなたたちに何かあつたら』

『いいだろう。真宮、お前たちに任せる』

回線に織斑先生が割り込んできた。

『！織斑先生！』

『指揮権は私にあります。教師部隊はその場で待機してください。責任は私がとります』

思わず笑みがこぼれる。
カツコいいな織斑先生。

『真宮……頼んだぞ』

『安心して下さい。先生に責任なんか取らせませんよ』

そう言つてオープンチャネルを切り、今度はプライベートチャネルに切り換える。

「……聞こえてるか？」

『ザアア……』

ノイズしか聞こえない。

俺の声があいつに届いているのかわからない。

「目を覚ませ！ボーデヴィツヒ！」

瞬間、敵が攻撃してきた。

激しく、そして素早く。

まるでボーデヴィツヒに声をかけるのを止めさせようとするように。

「お前言つてたよな！？どうして俺が強いのかって！」

激しい剣撃を受け流しながら、話しかけ続ける。

「俺は弱い！他人を守れないのが怖くて怖くて、だからがむしゃら

に戦ってるだけだ!」

『ザアア……』

避けきれなかった斬撃が肩のアーマーを切り落とす。

「お前も怖いんだろ!? 一人になるのが、暗闇にいるのが!」

『ザッ、ザアア………』

「言ったはずだ! お前がそうしてほしいなら、俺が助けてやる! お前を一人になんかしない!!」

『ザザッ、……けて……ザザザッ』

「ボーデヴィッヒ!」

『ザッ……助けて!………』

ノイズの中に確実に声が聞こえた。
いつものボーデヴィッヒの冷静沈着なものではなく、助けを欲した
小さな少女の声だった。

「任せろ!」

そう答えて思いきり相手の武器を弾き、隙を作る。

「一夏! やれえ!」

「うおおおお!」

ザシュツ……！

右腕だけに部分展開された白式と、雪片式型を持った一夏が黒いI Sを切り裂く。

しかし寸前、相手が後方に回避行動をとり、致命傷は与えられなかった。

（まずい！）

そして、一夏に刀を降りかざし

ドンツ……！

とっさに俺は横から一夏にタックルをし、場所を代わる。

同時に、俺の左肩に刀が降り下るされた。

ミシツ！

骨が鈍い音をたてる。

絶対防御が発動し、腕が切り落とされることはないまでも、激痛が走る。

「ぐづつ……！てめえ！」

先程、雪片式型がつけた裂け目をさらに朧火で切りつけ、広げる。

「ぎ、ぎ……ガ……」

黒いISからボーデヴィツヒが半分出てくる。

しかし、まるでこの黒いやつが離さんと掴んでいるかのようであと少しのところで止まっている。

「あつ………！」

ボーデヴィツヒと俺の目が合う。

助けてほしい、ここから抜け出したいと心の叫びが聞こえた。俺はまだ動く右腕を少女に伸ばす。

「来い、ボーデヴィツヒ！」

気を失う限界で、ボーデヴィツヒも俺に向かって手を伸ばす。あと少し、あともう少し！

「ラウラ……！」

叫ぶのと同時に手を掴んだ。

そして思いきり引き抜く。

ラウラを自分の方に引き寄せ、抱き抱える。

力なく倒れるように、ラウラは俺の腕に収まった。

「あ……りが……と……う………」

ラウラは辛うじて聞き取れるほどの大きさを囁やいたあと、気を失った。

「………最初からそのくらい素直でいる」

「う……ん……？」

「ここは？」

「よお、気が付いたか？」

左を向くと信が天井を見ながらベットに横たわっていた。
そういつ自分もベットに横たわっているのだが。

「私……は……？」

「全身に無理な負荷がかかったことで筋肉疲労と全身打撲だとさ。
さつき織斑先生が言った」

「……お前は？」

「左肩脱臼。いや、あのときは骨が折れたかと思っただぜ」
少年は楽しそうに笑っていた。

「何が…起きたのだ……？」

「重要案件である上に機密事項」

「……お前は知っているのか……？」

「……ヴァルキリー・トレース・システム、通称VTシステム。機
体の蓄積ダメージ、操縦者の精神状態、そして操縦者の願望。それ

らが揃ったときに発動するようにお前のISに組み込まれていたんだと」

「……機密事項をそんなに簡単に話して」

ははつと笑い声をあげて、信は言葉を続ける。

「本人に秘密にしてどうすんだよ？」

「……」

「……確かに織斑先生は強いさ。でも、その強さは織斑先生だけのものだ。お前はあの強さを目指すことはできても、それになることはできない」

ぎゅゅつとシーツを握りしめる。

「すまない……」

「お前が謝らなきゃいけないやつは他にいるだろ？……さて、行くか」

信がベットから立ち上がる。

「あ、そうだ。もうひとつ。眼帯、とったほうがいいんじゃないか？少なくとも俺はその方が好きだな」

いつもは眼帯で隠れている金色の右目を指差し、ニコツと笑って、信は保健室を出ていった。

「す、好き…… / /」

残されたのは軍人でも、ドイツの代表候補生でもなく、十五歳の恋する乙女だった。

「おーっす……」

「あっ！信！」

「大丈夫なのか？」

俺《信》は食堂に来ていた。
先に食事をしていたシャルロットと一夏に声をかけ、同じテーブルに座る。

「余裕、余裕。まだ少し痛いけど、そのうち治るだろ」

二人とも俺の言葉に安心して、食事を続ける。
ここで、何故か視線を感じる。

「優勝……チャンス……消え……」

「交際……無効……」

「……うああああんっ！」

バタバタと泣きながら走っていく女子たち。
……もしかして。

「なあ、トーナメントってどうなるんだ？　そうか、わかった」

「一人で話を進めるな。ああ、そうだよ。中止だったさ」

『トーナメント中止』試合なし』優勝とかない』あの噂が無効に
つてことだな。

みんな張り切ってたのに残念だな。

「でもね、個人データを取るために一回戦は全部やるんだって」
シャルロットが補足説明を入れる。

「そっか。じゃあ俺は関係ないな。シードで二回戦から参加だし」

正直もう戦う気に慣れない。
怪我したし。

シード万歳、シードって素晴らしい。

「……」

「あ、ほら、一夏。あそこに箒がいるぞ」

「ん？本当だ……あっ！そうえば！」

思い出したか。

トーナメントは無くなったが、箒の告白はどうなるのだろうか。

まあ、答えは決まっているのだが。

一夏が箒に駆け寄り、口を開く。

「箒、先月の約束だが」

ゴクリ。

他人なのに息を飲む俺。

「付き合ってもいいぞ」

「ほ、本当か？本当に、本当なのだな！？」

身長さなど構うものと箒が一夏を締め上げる。
しばらくして、箒が冷静さを取り戻した。

「お、おほん！な、なぜだ？理由を聞こうではないか……」

ここ大事！

すぐく大事だぞ、一夏！

早く箒を安心させてやってくれ！

「幼なじみの頼みだからな、付き合っさ」

「そうか！」

い、一夏……。

ついに、ついに……。……。

俺はうれしい、うれしいぞ。

今日はパーティーだ！

「買い物くらい」

バカヤロー！

きつと目の前にちゃぶ台があったらひっくり返してただろう。(ノ)

-o-(ノ)

バキッ！

箒が一夏を殴る。

うん、俺もそんな気分だ。

気が合うな、箒。

「そんなことだろうと思ったわ！」

どげしっつ！！

うめく一夏のみぞおちにつま先がささる。

うわ、痛いなアレ…。

あんまり足を振り上げたので見てはいけないものが見えた。

「白か……」

「?どうしたの、信？」

「な、何でもないぞ！うん！し、しっかしあいつも鈍いよな。普通すぐ気付くよな？」

「信には言われたくないと思うよ……」

何かシャルロットが言っていたが動揺を隠すために必死だった俺には聞こえなかった。

「あつ！織斑くん、真宮くん、デュノアくん！朗報ですよ！」

「何ですか、山田先生？」

「今日から素晴らしい場所が解禁になったんです！」

やけに引っ張るな。

「どこですか？」

「はい！男子の大浴場なんです！」

「ふいー。…いててて……」

山田先生のお言葉に甘えて、風呂に入ることになった、俺たちだがそこにはとてつもない問題がある。

『シャルロットどうすんの？』問題だ。

まさか三人一緒に入るなんて真似出来ないし、俺たちは考えた。解決法として上がったのは『みんなバラバラに入るう』というものだった。

『俺は二人に助けられたからな、最後でいいよ』

『僕はいつでもいいよ』

『俺もいつでもいいんだが……。まあ、最初に入るか』

という各々の意見を反映した結果、

1：信

2：シャルロット

3：一夏

となった。

「あー……。肩いてー……」

ザバアと湯船から立ち上がり、シャワーのところまで行き、髪を洗う。

スカッ…、スカッ、スカッ

「シャンプー切れてるじゃないか…」

カラカラ……

控えめに大浴場のドアが開く音がした。

誰が入ってきたらしい。

というか、一夏しかいないか。

どうしたんだろう？

まあ、ちようどいい。

「悪いんだけどさ、シャンプー取ってくれ」

「……………」

無言で手渡される。

「どうしたんだよ、一夏。シャルロットに変わってもらったのか？
あいつ、優しいからなあ……」

わしゃわしゃと髪を洗いながら隣にいらるであろう一夏に話しかける。

「男のふりなんかしなけりゃ、もっと可愛いのがな。今も充分可愛いけど」

「……………」

「……………違うぞ？男が好きとかそういうのじゃないからな。勘違いすんなよ？俺はシャルルを女の子として見た感想を述べているんだからな」

「……………」

「一夏？」

さつきから様子が変だ。

一言も喋っていない。

キュツ、ザアア……

シャンプーの泡を落とし、顔を上げようとすると

「本当に？」

「は？」

ギョツ…

突然横から抱きつかれた。

「!?!?!?」

「僕って可愛いかな？」

一夏の声じゃない。

それに一夏は『僕』なんて言わない。

もっといえ、俺の腕に柔らかい感触が当たっている。

「まさか…シャルロット？」

「なに？信？」

俺の目に飛び込んできたのは、薄手のスポーツタオル一枚を体に当たったシャルロットだった。

ギリギリ。

ギリギリだ、いろんな意味で。

「お、おまおまおま、おおお、ま、お前！」

「なに？」

「ど、どどどど、どつしてだ!?!?」

「その、早くお風呂に入りたいなあって思って……」

「だ、だからってな！男と一緒にいるやつがあるか！」

「僕と一緒に嫌？」

「ひ、ひとつだけ言っておこう。こういうことは、大事なときのために取っておくもんだ」

「大事なときって？」

「じ、自分でかんがえる！それより、早く離せ……！」

直に感じる胸の感触に耐えられない。

薄手のタオル一枚なんて、あるようで何も無いようなもんだ。

そうえば『裸の付き合い』なんて言葉があるが、この場合は意味合いがとらえようによっては非常にまずいものになる。

「待つて。僕の話聞いて？……僕ね、ここにいたい……。この学校でみんなと一緒にいたい……」

その声には切実な願いがこもっていて、長い間ひとりですっと寂しい思いをしてきたことがよくわかった。

「……それなら、いればいいじゃないか。一夏も俺も、それにクラスのみんなも、お前と気持ちは一緒だ」

知らぬまにシャルロットと見つめあっていた。
その綺麗な瞳に思わず見入ってしまう。

「本当に？本当にそう思う？」

「ああ。ただもう少し、自分に正直でもいいんじゃないか？」

シャルロットは人に気を使いすぎる。

そこがいいところでもあるし、悪いところでもある。

「自分に正直、か……。うん。ありがとう、信」

「別にお礼を言われることのほどでもない。気にすんな」

「信って優しいね、すごく」

シャルロットが微笑み、俺も微笑み返すのだが、ここで状況を再度確認。

なんだかこのままだと大変なことになりそうなので、今度は俺の切実な願いを口に出す。

「と、ところでな、シャルロット？そろそろ離れてくれ」

「えっ？あ、ああっ、うんっ！そうだねっ！／＼」

よかった、おとなしく離れてくれた。

シャルロットの顔は湯気でぼやけていたが、その中でも赤く染まっているのがわかった。

「じゃ、じゃあ俺が先に上がるからな、ごゆっくり」

のぼせたのかそれとも別な理由なのか、頭がくらくらしている状態で、辛うじて風呂から上がった。

それからシャルロットが上がってくるのを外で待ち、一緒に帰った。
『シャルロット、俺は全然気にしてないからな。別に気を使わなくていいぞ』というのをわからせるためだ。
また気を使わせるような雰囲気を出してしまったら、くつろげないだろう。

案の定、シャルロットは『しまった……』という感じだったので、不安を取り除こうと部屋に戻るまで他愛のない話を続けた。
そのかいあってか、部屋につく頃にはお互いいつものように笑いあえる仲に回復していた。

「おやすみ、信」

「ああ、おやすみ」

そうして、波乱の一日が幕を閉じたのであった。

翌日

「えーとですね……今日は転校生を紹介します」

「……………」

IS学園、どんだけ広い心もってんだ？

そのうち転校生特別クラスとかできるかもな。

「あつ、信！そういえば昨日、一緒に風呂から帰って来たよな！」
いらんこと言うな！
今度は俺にみんなの視線が集まる。

「み、みみ、みんな！？なに考えてんだよ？ぐ、偶然シャルロットと帰りに一緒になったんだよ！なっ！シャルロット？」

なんとか平静を保ってシャルロットに話題をふったのだが……。

「……………（ボツ）／／／」

なんで無言で顔を赤くするんだ！

そして、うつむくな！

なんだか俺まで恥ずかしくなるだろ！

「なっ、なんで！？なんで二人とも顔赤いの！？」

ギヤーギヤーギヤー！

「お、落ち着け！みんな」

ドゴゴオオオンー！！

「しーんー……………」

「げっ、鈴！」

ドアを吹き飛ばして入ってきたのは『甲竜』を展開した鈴だった。

「死ね!!」

「なんで俺だ!?!それはいち」

「うるさーい!!」

両肩の衝撃砲がフルパワーで開放される。

「うわあぁー!!」

.....あれ?

目を開けると、目の前で衝撃砲が止まっている。

「A I C?なの...か?」

ということとは.....

「ラウラ!お前大丈夫 ツ!」

チュツ.....

いきなり引き寄せられ、キスされた。

一瞬の判断で顔をずらし、直撃は防いだものの、頬にラウラの唇が当たる。

「なぜ避けるのだ.....」

『残念で仕方がない』っておい!

ディスプレイに表示された新たな情報を眺め、すぐに処理する。

「二つとも『稼働率 100%』になったらどうなるんだろ？うん、たーのしみー」

そう言うてにんまり笑う彼女は、とても不思議な格好をしていた。空のように真つ青なブルーのワンピース。それはさながら童話『不思議の国のアリス』のアリスである。

エプロンと背中の大きなリボンが目を引く。

それ以上に目一（特に男の）を引くのは、今にもはち切れそうなくらいまで引つ張られている白いブラウスの隙間から見える、豊満な胸の膨らみだ。

頭にはウサミミのカチューシャ。

端的に表現すると一人『不思議の国のアリス』状態。

「やっぱり、実物を見てみたいになっ それに」

と、ここでどこことなく和風テイストの着信音となる。それはずつと前から彼女が待っていたものであった。

「こ、この着信音は……！！」

ピッ

「もすもす、終日？はぁーい！みんなのアイドル、篠ノ之^{しのの}東^{たはね}だよ

」

ブチッ！

電話こそ切れなかったが、何か血管が切れるような音が聞こえた気

がした。

何も言わないと今度こそ電話を切られる気がして、というかもう切りそうだったので、必死で相手をひき止める。

「わあ！待って待って！切らないで篝ちゃん！」

「……………姉さん」

「やーやーやー、我が妹よ。うんうん、用件はわかっているよ？欲しいんだよね、君だけの専用機が」

束は電話の向こう側にいる篝に話しかけながら、後ろを振り向く。

「もちろん用意してあるよ。最高性能にして規格外、そして白と並び立つもの、その機体の名は」

「あかつはぎ
紅椿」

21：お化けなんてないさ

『久しぶりだね』

ああ、あのときの…

『調子はどう？』

ぼちぼちかな。

『戦いは好き？』

嫌いさ。でも、やりたくないじゃ済まされない。

『そう。……助けは必用？』

助け？誰の？

『君が昔自分の中に閉じ込めた、いや封印したものの』

じゃあいらない。わざわざ解く必用なんて、無いだろう？

『ふふっ、そうだね。……君は変わらないね』

変わったさ。自分を理解してくれる人がたくさんできた。

『いや、心の底ではずっと変わってないよ。助けるばかりで、助けられようとしない。自分は特別だから、他の普通を守ろうとする。それが当たり前と思ってる』

なんでわかるんだよ。

『君がわかっているからさ』

は？

『君がわかることはわかるし、君が知っていることは知っている』

待ってくれ。意味がわからん。まず君は誰だ？

『君がよく知っていないながら、会わないようにしていたものだよ。……そろそろだね。そうそう、君はね、まだ全力じゃないよ。人つてさ、いつつも全力出してたら体が耐えきれないから無意識に力を制御してるんだ』

待てよ、わかるように説明してくれ。

『わかってるのさ、もう。わからないように思っているだけで、ずっと前から』

……パチッ……

…………？

夢？

「ふあ……！んんー！……！変な夢見たー！……！」

俺《信》は背伸びをして目を覚ました。

(なんだよあれ。女の子に囲まれて頭おかしくなったか?)

夢の内容を思い出す。

考えれば考えるほど、おかしい夢である。

(ま、下手に嫌な夢見るよりいいか……)

まだ朝は早いが、かといって二度寝する気分でもない。

「ん……」

声が聞こえる。

無論俺が発したのではない。

誰だ?

ここは俺の部屋だぞ。

しかも一人部屋。

「……ユレイ?」

「……うー……ん……」

周りを見渡す。

誰もいない。

だけど声は聞こえる。

カーテンを閉めているせいで、若干薄暗い。

その感じがよりいっそう雰囲気をそれらしくする。

「……べ、別に!……ここ、怖いとか、そんなないじゃないからな!?」

そう言いつつ布団を頭から被る。

これは…あれだ。

人は限られた酸素でどれくらい耐えられるかの限界にチャレンジしてるだけだ。

ごそごそ……

プニッ

「ん……」

なんだ？

思いのほか出所不明の声が近くで聞こえるぞ？
それにこの柔らかいものは……？

プニプニ

「ん……ん……」

これか！

なんだよこの柔らかいものが発生源だったのか！
あー安心した。

このやろ、ビックリさせやがって。

プニプニ

「ん……はっ……」

あれ？

でもなんでこんなものが布団のなかにあるんだ？

「……………あ、朝から大胆だな／＼」

「しゃ、しゃべった!?」

「い、生き物…だと…!?」

「だ、誰だ!?」

ガバツ!!

「私だ」

「お前だったのか　　って！何してんだお前!!」

勢いよく布団をめくると、ラウラが顔を赤らめて寝ていた。
しかもその格好が

「なんで裸だ!!」

そう、全裸なのだ。

いや眼帯と『シユヴァルツエア・レーゲン』の待機状態のレッグバンドはされてるが……………ってなに冷静に分析してんだ!

「夫婦とは包み隠さぬものだと聞いたぞ?ましてお前は私の嫁……………」

「……………間違ってる!お前はいろいろと間違ってるぞ!」

顔を手で覆いながらブンブンと手を横に振る。

「と、とりあえず、ホラ、これ着ろー!」

近くにあった制服の上着を投げる。
服を着ているらしい音がカサカサとなる。

「着たぞ。しかし動きにくいなこれでは……」

おそろおそろ目を開けると自分の服装を不思議そうに眺めるラウラがいた。

だがすぐにまた目を閉じた。

いや、開けていられなかった。

俺の制服のサイズは小柄なラウラにはブカブカで、手が袖から出ていない。

さらに着たと言っていたわりにボタンなどは閉めず、そのためいろんなどころが見えそうで見えないという感じだった。

なんというかそれでこっちに『これでいいのか?』と首をかしげられると……。

ぐっ!とくる。

「やっぱりいい、やっぱりいい!脱げ!」

「脱げ?仕方のないやつだな。見たいなら見たいと言えばいいのに

…… / / 「

「そうじゃない!というかなぜここにいる!」

そこだ。

一番の問題はそこだ。

鍵はかけていたし、なぜだ!?

「い、言っていたらろう？『お前を一人にしない』と……／＼」

「何　！？」

ガシツ、ドサツ！

突然押し倒された。

押し倒されたんだ、俺が。

押し倒したんじゃないからな。

「そういえば、この前避けられたからな。ここで夫婦の誓いをしよう

……」

ラウラの顔が近付いてくるのを感じる。

「や、やめる！こ、この！」

もうなりふり構ってられない。

俺は目を開け、なんとかこの体勢から抜け出そうとした。

「む！やるな……。我が軍に入隊させたいぐらいだ」

「断る！」

しばらく取っ組み合いをする。

ドンドン、バサバサ、ギシギシ、バシバシ

「はあ、はあ……」

ドカアアアアーン!!!

俺の部屋が完全に元通りになったのは一週間後だった。

パクパク……

「あー……ひどい目に遭った……」

俺、鈴、ラウラは今食堂に来ている。

怒っている鈴を落ち着かせ、なんとか説明したのだが、まだじろじろこつちを見ている。

あ、目があった。

「ふん！」

プイツとそっぽを向かれる。

なんでそんなに怒ってんだよ。

隣に座るラウラを見ると、あんなことがあった割には落ち着いて食事をとっている。

これだけ落ち着いているのだから、俺の予想は外れているだろう。外れていてほしい。

（なあ、ラウラ）

（なんだ？）

(あ、あのさ、朝俺がつついたのって……)

(…あ、あんなに激しく触られるとは思わなかったぞ…… / /)

(と、言つと…胸か?)

(胸だ)

ガン!

テーブルに思いきり頭をぶつける。

「あなた、何やってんのよ」

「……鈴、やっぱり俺は死んだ方がいいのかもしれない」

不慮の事故とはいえ、嫁仏前の箱入り娘に無許可でそんなことをしてしまうとは。

一気に気持ちがブルーになった。

「俺、死んだら地獄行きかな……」

「なに変なこと言ってるのよ」

「ラウラ……許してくれ」

謝って済む問題ではないが、とりあえず謝っておこう。

「別に構わないぞ。お前は私の嫁なのだからな。た、ただな……次からは、や、やさしくしてほしい……」

「や、やさしくする！？あ、あんたまさか……！」

「……おまえの想像とは違う。あれは不幸な事故だ。あとな、女がそういうこと人前で考えるもんじゃないぞ」

「~~~~っ！／＼あんたねえ！わかっててもそういうのは黙っとく

」

「わああっ！ち、遅刻っ……遅刻するっ……」

慌ただしくバタバタとシャルロットが食堂に駆け込んできた。

「よお、シャルロット……」

「あっ、信。お、おはよう。どうしたの？元気無さそうだけど……」
適当に残り物をとって、俺の隣に座る。

「大丈夫だ……ただちよつと死にたくなってるだけだ……」

「それって大丈夫なの？」

シャルロットは俺を心配しつつ、早速朝食を食べ始める。

「ほら、あんたいつまでそうやってんのよ！早く食べなさいよ」

「っー……」

鈴に急かされて渋々朝食に食べ始める。

のろのろと手を動かしていると、なんだかチラチラと視線を感じた。

「シャルロット？」

「はひっ！な、なになな！？」

「……………？いいや……………なんか俺のこと見てる気がしたんだけど」

「か、勘違いじゃない？は、ははは、はは……………」

キーンコーンカーンコーン

朝食をちょうど食べ終えたときに鐘がなった。

「ヤバッ！今の予鈴よ！」

鈴が焦った声を出す。

「いいさ……………遅刻したって……………」

そう言ってゆっくり立ち上がると、さっきまでいた女子三人がテーブルにいない。

すでに食堂を出て猛ダッシュしている。

「信！あんた織斑先生のクラスでしょ！？遅刻したら本当に死ぬかもしれないのよ！」

織斑先生か……………。

……………。

「うわあ！待ってくれ！やっぱまだ死にたくない！人間、生きててなんぼだ！」

ここに来て貪欲なまでの生きることへの執着心が罪悪感に勝った。
まだまだやり残したことがたくさんあるんだ。

まだだ、まだ終わらんよ。

俺も三人のあとを必死で追いかける。

時計を見ると、もう間に合う時間では無かったが最後まで諦めてはいけない。

何かしらの奇跡が起こる可能性だって、少なからずある。

「ほら、信っ」

靴を履き替えていると突如手を握られる。

シャルロットだ。

ほら、奇跡が起こったぞ！

仲間が助けに来てくれた！

「信、飛ぶよ」

「いや、俺が飛ばさう」

こうなったら最終手段だ。

最悪の場合でも、俺を助けようとしたシャルロットに迷惑をかけるわけにはいかない。

瞬光を部分展開し、シャルロットを抱き抱えて一年一組の教室まで飛翔する。

あっという間にクラスに到着。

なんとか

「朝から随分と元気そうだな」

……。
危惧していたことが起こった。
まだ本鈴がなる前なのに織斑先生が教室にいる。

「本学園は」

「『IS操縦者育成のために設立された教育機関であり、どここの国にも属さず、故にあらゆる外的権力の影響を受けない』ですよね？ わかってますよ……」

「そこまでわかっているなら、最も重要な点も理解しているな？」

「……『しかし、敷地内でも許可されていないIS展開は禁止されている』」

バシッ！

俺の頭に出席簿が叩きつけられる。

避けようと思えば避けられるが、完全に俺が悪い状況で、罰を逃れることはできない。

「真宮とデユノアは放課後教室を掃除しておけ。二回目は反省文提出と特別教育室での生活をさせるのでそのつもりでな」

「え！ちよ」

ギロリ！

うっ！

睨まれた。

『とつとと席につけ、それ以上口を開いたら釜茹でにするぞ』とい

う感じ。

キーンコーンカーンコーン

本鈴がなりシヨートホームルームが始まる。

臨海学校の話でクラスはかなり盛り上がっていたが、俺はほとんど聞かず、ただただ溜め息をつくだけだった。

「シャルロット、お前は何にも悪いことしてないんだから休んでていいんだぞ」

信が机を運びながら話しかけてくる。

「ううん、いいよ。もともと僕が信を抱えて飛んでいくつもりだったし」

「お前、ほんっ……………とに優しいやつだな。心からそう思ってるなんて」

「ためすぎだよ」

あははと二人で笑う。

今は放課後、夕暮れ色に染まる教室でシャルロットと信は掃除をしていた。

本来ならIS学園の清掃は業者の人がやってくれるのだが、生徒への軽い処罰として使われるときもある。そのときがまさにこのときである。

「ごめんな。IS展開したのが俺だけだったら、もし見つかったもシャルロットに罰則はないと思ったんだ」

優しい。

とても優しくくて、温かい。

ほんのり顔が赤くなる。

ところで今日、頭からずつと離れないことがある。

(わわわ……。ど、どど、どうしよう…これって、今朝の夢と同じシチュエーションだよ…)

今日の朝に遅刻しそうになったのは夢を見たからである。

その夢もこんな感じの夕焼けがさしている、放課後の教室でのことだった。

『シャルロットってさ、好きな人とかいる?』

『へっ!?し、信!?いきなりどうしたの!?!』

『いいから。いるの、いないの?』

『い、いるよ……って、信!顔が近いよ!』

『……なるほどね。わかったぞ、お前の好きな人』

『えええっ!そ、そんな……』

『安心しろ。そいつもお前のことが大好きだよ……』

『へっ!?!それって……』

『ああ。俺はお前が大好きだ』

『信…』

『シャルロット…』

で、もう少し、あと一センチでキスできたってときに起きてしまった。

そのときシャルロットは

（今寝れば、続きが見られるかも！続きはもうちょっと、え、えっちな内容でもいいかな…／＼）

結果、シャルロットは無謀にも二度寝はもちろん、三度寝までをもちろつとしたが、たまたま目に入った時計を見て飛び起きた。

急いで身支度をし、食堂に駆け込んで、なんやかんやで今に至っている。

「どうした？どんな変な夢を見たんだ？」

「ひゃあー！」

しまった。

気付くと信が顔を覗き込んでいた。

とっさに顔を背ける。

「な、なんでもないよ！かつ、勝手に心をよまないでよー！」

「お、おお…悪い」

つい語調が強くなってしまった。

「……」

「……」

無言。

(うつ、気まずい……。信、ビックリしたよね……)

どうやってこの沈黙から抜け出そうかといういろいろ考えを巡らすのに夢中で、注意力が散漫になったために、運んでいた机の重量に負けて足を滑らせる。

「うわっ!」

シャルロットは教室の床に体が打ち付けられるのを覚悟し、衝撃に備えて体を強ばらせた。

しかし背中に感じたのは冷たくて硬い床ではなく、暖かくて優しい信の感触だった。

「ったく、なに焦ってんだよ。別に俺は気にしてないぞ」

信に抱き締められるような格好になって、さらにお互いの顔が近い。まさにキスできそうな

(だ、ダメダメ!また心を読まれちゃうよ!それはまずいよ!)

「なんでまずいんだ?」

「だから読んじやダメ！」

「？変なやつだな。とりあえず離れるぞ」

そう言っつて信がシャルロットから離れる。

「あっ……」

「何が残念なんだ？」

「し、信！三回目だよー！」

「あはは！ごめん、ごめん。いやー、シャルロットって面白いな」

とても面白そうに笑う信を見ていると、怒りが消えて、その笑顔をずっと見ていたいという気になってくる。

「ふふっ。信、次は許さないからねっ」

とは言うものの、きつとその『次』が来ることはないだろう。

「そういえばさー、もう性別のことはいいのか？」

「ふえっ！？な、なんで！？唐突過ぎない!？」

「いや、まあそうだけど。ここで聞かないと聞くチャンスがないからな。多分」

「あ、え、えつとね、それは、その……」

不意にそんなことを聞かれて、うろたえる。
なんて答えればいいだろうか。

「さ、察して…… / /」

「お前、さっきまでなんて言ってたっけ？」

「う……。そ、そうだけど……」

信がニヤニヤしている。

このイタズラっぽい顔にも、ドキドキさせられてしまう。

「ま、別にいいけどさ」

「別にいいの？」

「本人が言いたくないなら深くは詮索しないさ」

うつむいて足下を見つめるシャルロット。

しばらくしてから、意を決して口を開く。

「……その、ちゃんと女の子として……ね。信に見て欲しかったから……」

なんとか言葉を繋いだが、同時に顔が痛いほど熱くなる。

内心を悟られないように信の目は直視しないようにしていたが、真っ赤な自分の顔を見てなにも思わないはずがない。

「そうだったのか？俺は最初からシャルロットを女の子として見て

たし、今も変わらないぞ」

「ほ、本当？」

「だって、シャルロットはこんなに優しく可愛いらな」

ボン！

シャルロットは自分の頭が爆発したような気がした。

恥ずかしさと嬉しさと照れくささが入り乱れて、これまでにないほど顔が赤くなる。

頭に血が上りすぎたのか、足がふらつき、もつれて転びそうになる。

ガシッ！

「危ないって！どうした？熱でもあるのか？」

信に再び抱き抱えられるようにされ、いろいろと混乱している頭がさらに混乱する。

「信……ずるいよ……／＼／」

「は？」

なんだか幸せすぎて、目に写るすべてが輝いて見えた。

「本当に今日は変なやつだな。……あっ！そうだ！シャルロット！」

「は、はいい……？」

顔をぐいっと近付けられ、真剣な眼差しで目を見られる。

(ま、まさか……！で、でもあれは夢だし……そっ、そうだよね……残念だけど夢なんだよ？それに信は心が読めるくせに僕の気持ちに気付いてないし……どうせ『なに赤くなってるんだ』とかだよ……)

信がシャルロットを見つめていたのは一秒ちよつとの間だったが、その間に様々なことを考えて気持ちを落ち着かせようとした。

(きつと今回も)

「付き合っしてほしい」

「……………え？」

その言葉を聞いた瞬間、シャルロットの思考がすべて止まった。

「乙女の純情をもてあそぶ男は馬に蹴られて死ぬといいよ」

「……………？なんで怒ってるの？」

「怒ってないよ！ふん！」

俺《信》は来週からの臨海学校の準備もあつて、シャルロットと街に来ている。

なんだか知らんが、シャルロットは今、『本当に怒ってるんだから

ねっ！』だそうです。

何でだろうか？

あれか？

誘い方がまずかったか？

『付き合ってくれ、買い物に』っていう倒置法を使ったのがダメだったのか？

仮にそうだとして、倒置法を使うのっていけないことか？
うーん、女の子ってわからん。

「なあ、シャルロット」

プイッ！

「なあ……」

プイッ！

どうやっても徹底抗戦の姿勢はくずさないらしい。
え？

『期待外れだよ、まったく……』だって？

……。
ピカーン！

そうか！

「もしかして誘いを勘違いしてた？」

「ふえっ！いいいや……」

「凶星か」

「…………… / /」

誘ったときは、そこまで考えてなかった。
女子の思考回路ってすごいな。

「ごめんな。そうだよな、一夏と行きたかったよな。好きな人と一緒に行きたいのは当然のことだからな、うんうん」

「……………」

「あれ？』一夏に』付き合ってくれ、と勘違いしてたんじゃないのか？」

「…もう知らないっ！」

プイッ！

えー、違うの？

こうなると本当に何がなんだかわからない。
困った。

「えーと、ごめん…」

じ……………

なんだその目は。

まあ、なに考えてるかはわかるんだが。

「わかったよ。俺が悪かった。なんでもしてやるから、機嫌なおせよ」

「じゃあ、はい」

「ん、わかった」

シャルロットが差し出した手を握り、再び歩き出す。

「行くぞ、シャル」

「へっ！？な、何それ？」

「ん？俺が考えたお前の呼び方だ。シャルロットだと長いだろ？それにみんなもう知ってるしな。だから、新しく二人だけの呼び名を考えたんだけ。そうだな……ささやかなプレゼントってやつかな。嫌か？」

「ううん、全然！いいよ！すごく嬉しいよ！」

「あ、ああ、そうか」

意外にもものすごく食い付いてきたのでビックリした。気に入ったみたいだし、機嫌もなおしてくれたようだ。よかったよかった。

「じゃ、行くぞ」

「うん！」

そうして、いつもよりニコニコしているシャルロットと一緒に買い物始めたのだった。

22： 試着室は案外広い

「……………」

「……………」

信とシャルロットの仲睦まじい姿を物陰から見つめる二つの影。ひとりは躍動的なツインテール、もうひとりは優雅なブロンドヘア。

鈴とセシリアだった。

「……………あのさあ」

「……………なんですか?」

「……………あれ、手え握ってない?」

「……………握ってますわね」

死んだ魚のように虚ろな目は二人の手がしっかりと繋がれているのを感じて見ている。

「そっか、見間違いで、白昼夢でもなく、やっぱりそっか。」

よし、殺そう!」

ISを部分展開した鈴は、すでにやろうと思えばいつでもターゲットを撃破することができる。

女を怒らせると怖いのだ。

「ほう、楽しそうだな」

「!?!」

驚いて振り返ると、先月鈴とセシリアが敗北を喫した相手　ラウ
ラが立っていた。

「ラウラさん！」

「そう警戒するな。今のところお前たちに危害を加えるつもりはない」

「信じられるものですか！」

それはそうだろう。

危うく殺されるところだったのだから。
するとラウラはペコリと頭を下げた。

「悪かった」

ラウラがそんなに素直に謝るはずがないと思っていたので、二人は
言葉につまってしまふ。

「何よ、いやに素直じゃない」

「嫁に言われたのだ。『鈴とセシリアに謝っておけ。お前はそれが
できないような弱いやつじゃないだろ?』とな」

「そ、そう。信が言うなら、まあ、仕方ないわね」

「そ、そうですね。少しぐらいは許して差し上げますわ」

「そうか。では私はこれで」

すたすたと歩き出すラウラを慌てて止める。

「ちょっと、待ちなさいよ！」

「どうするつもりですか？」

「決まっているだろう。あの二人に混ざる。それだけだ」

あっさり。

あっさりすぎてなんだか返す言葉が見つからない。
それでもなんとか鈴が口を開く。

「ま、待ちなさいよ！未知数の敵と戦うにはまず情報収集が先決で
しよー！」

「そうですね！ここは追跡ののち、二人がどのような関係にあるの
か見極めるべきですね！」

こういうときに限って意見が合う二人。

「ふむ、一理あるな」

というわけで、鈴にセシリア、そしてラウラも加わった追跡部隊が
結成されたのであった。

「えーと、水着売り場、水着売り場……あつた」

俺《信》はシャルロット いや、シャルの手を引き、今日の目的の場所に着いた。

「ところでシャルも水着買うのか？」

「そ、そうだね……あの、信はさ、その……僕の水着姿見たい？」

「ん？まあな」

「そ、そうなんだ。じゃあ、せっかくだし新しいの買おうかなっ」

なんだか最初の不機嫌が嘘のようにやたらと上機嫌だ。

「じゃ、俺はあっちだから」

「あっ……」

ぱっと手を離したら、シャルが妙に心残りのあるような声を漏らした。

そして、俺のことをじーっと見ている。

……………
なるほどね。

「わかったよ。あとで一緒について行ってやるよ」

「うんっ！じゃあ待ってるね」

「いや、その代わりお前も俺に着ついて来てほしい」

再び手を握り、男性用水着売り場に歩き出す。

中学時代はアルバイトしたりなんだから、結構貯金はある。だから金の問題は無いのだが……。

「俺、水着買ったことないんだ」

「え？そうなの？」

「ああ。だからシャルに選んでもらおうと思ってな」

「いいよ、まかせて」

なんと頼もしい。

それから何分か二人で見て回った結果、シンプルな黒の水着に決定した。

「以外と早く終わったな」

「信が即決過ぎるんだよ」

「そうか？水着の種類が少なすぎるからじゃないのか？ほら、女性用の水着なんて倍以上あるし」

そう言って、女性用水着売り場を指差す。

「そうかな？じゃ、信、僕の水着も選んでよ」

「うーん……。まずシャルが好きなものを選んでこいよ。そこから絞ってこい」

「わかった。ちょっと待っててね」

シャルは意気揚々と大量に用意されている水着の中に消えていった。

(『待て』と言われても……)

正直、場違い感が半端ない。

早くシャルが帰ってきてくれないかなとキョロキョロと目を動かす。

「そこのあなた」

ドキッ！

(変質者と思われたか?)

振り向くと、二十代後半くらいだろうか、女性が立っていた。

容姿は………うん。

まあ………あれだね。

その………ね?

いやいやいや!

俺が悪い!

IS学園の女性と比べた俺が悪い!

………とりあえず『動物園にいたらゴリラの檻にぶちこまれそう』とだけ言っておく。

「そこの水着片付けておいて。男なんだから」

「えええ……………お断りします」

どういう理由だ。

男は他人の水着を片付けなければならぬのか？

それが今時の流行りなのか？

だとしたら俺はその流行りには流されないぞ！

「はあ？あんだ、誰に物言ってるわけ？」

「いや、あなた誰ですか？俺たち初対面ですよね？」

「そうよ。でも、私は女であんたは男。だから私の言うことを聞く義務があるの」

おお…………。

ぎ、義務、だと…………！

すごいこと言い出すな、オイ。

「すみません、ちょっと意味がわからないので失礼します」

「あんだ、そんなこと許されると思ってるの？いいわ…………」

大声で店員を呼ぼうとする性格の悪い女性。

一体何が彼女をここまで歪めてしまったのか…………。

「いい加減にしろよ。お前が不利になるだけだぞ」

「なに」

「一般女性とIS学園話題の男子生徒。さて、世の中はどちらの味方をするか、見物ですね？」

「！」

女性は『そういえばこの顔、テレビで……』と冷や汗をたらす。

「ふ、ふん！き、今日はもういいわー！」

無駄に強がってスタスタと歩き去っていく女性の後ろ姿を、呆れの混じった溜め息について見送る。

「信？どうかした？」

「ああ、シャル。なんでもない。ただ、IS学園ってすげえと思っただけだ」

どこがすごいって、よくもまああれだけの美人たちを集めたなあということだ。

選抜基準に『顔』ってあるんじゃないか？

あ、あと『性格』も。

「なにそれ。変なの」

シャルがくすくすと笑う。

それにつられて俺も笑みがこぼれる。

「じゃあ、信。水着持ってきたから、選んでよ」

「わかった」

「えっと、試着室はこっちだよ」

「試着なんてできるのか！すごいな」

さすが女尊男卑。

女にはとことん気を使ってるな。

まあそれに伴って先程のように自分は偉いと思い込んでしまう女性も出てきてしまうのだが……。

待遇の違いに感心つつ、シャルに手を引かれ一緒に試着室に入る。

……………え？

『一緒に』？

「ひとつ質問いいか？」

「な、なに？」

「試着室って二人で入るもんだっけ？」

「ち、違うんじゃないかな？」

「だよー。じゃ、俺は外に出」

ぐいっ！

「ま、待って！それはダメ！」

「何だよ。……………ああ、鈴とセシリアとラウラか？」

「気付いてたの！？」

「いや、あの三人がまとまって行動するなんて、ずいぶん仲良くなつたなーと……」

「もう！信！」

シャルが『なんでもっと早く言わないのさ！』と俺をにらんでくる。

「『邪魔される』ってなにをだ？流石に着替えを邪魔するわけ」

「そ、そういうことじゃなくて！と、とにかく、すぐに着替えるから待っててっ！」

そう言っていきなり上着を脱ぎ出すシャル。

「うわあ！馬鹿！なにやってんだ！」

とりあえずシャルに背を向ける。

なにこれ！？

どんな状況！？

だ、だめだ、落ち着け、信。

ま、ま、まずは何が起こっているか、問題はなにか、冷静に分析すべきだ。

えーと……。

シャルが後ろで水着に着替えてる。

(これじゃないか！これが大問題なんだよ！)

つまりだな、シャルが水着に着替えてる＝服を脱いでいる。

ということとは裸になる……………裸？

(ええっー！後ろで女の子が裸になってるのか！？それは見たい……………はっ！イカンイカンイカン！！戻ってこい、理性！どっか行け、煩惱！)

ひとり心の中で必死に戦っていると、後ろから声がした。

「い、いいよ……………」

心臓がひときわ大きく跳ねた。

恐る恐る振り向くとそこには水着のシャルが立っていた。

(うう…へ、変な子って思われたかな……………。でも信って人の考えることわかるくせに、僕が一夏のこと好きって勘違いしてるし……………これ位しないと……………)

シャルロットは信の視線を感じてもじもじと背中中組んだ指を動かす。

対しての信は、とてつもなく動揺していて、感想を言うのはもちろん、心を読むとかそういう余裕はまったくなかった。

「……………」

(し、信ったらなんで黙ってるんだらう……………。み、水着が変だったかな？あ、改めて見ると、結構大胆な水着だよ……………)

セパレートとワンピースの中間のような水着で、上下に分かれているそれを背中でクロスして繋げるといふ構造になっている。色は夏を意識した鮮やかなイエローで、正面のデザインはバランスよく膨らんだ胸のその谷間を強調するように出来ているのだった。

「変……かな？」

沈黙にたまりかねて口を開く。

「へ、変じゃない、変じゃない！つ、ついな！つい可愛くて見とれちゃって……は、ははは……」

シャルロットはもうかなりテンパっていて、信の『可愛い』が聞き取れるとそれで満足だった。

「じゃ、じゃあ、これにするねっ」

「ま、待て！まだ着替えるな！お、俺が出てから」

「お客様？」

ドキッ！

二人が仕切りの奥から聞こえる声に過剰に反応する。どうやら店員のようだ。

「ど、どうす」

途中で仕切りが開けられる。

「うわあ!」「」

見つかった人がさらに悪かった。

二人の目の前に立っていたのは店員だけではなかった。

「ま、ま、真宮くん!? デュノアさん!?!」

「何をしている、馬鹿者が……」

そこにいたのは、一年一組の先生方 織斑先生と山田先生だった。

「いいですか? いくらクラスメイトといっても、試着室に二人で入るのは感心しませんよ。ケジメはしっかりつけなきゃいけません。そもそも」

俺《信》とシャルは床に正座し、山田先生に説教をされている。なんで店内で正座だ。

せめてもうちよつと人気が無いところでも良かったんじゃないですか、先生。

周囲の視線が痛い……。

「です。わかりましたか?」

「はい……すみませんでした……」

シャルが頭を下げる。
とりあえず正座を抜け出そうと話題を変える。
もう足が痺れてきた。

「ところで、先生方はどうしてここに？」

「私たちも水着を買いに来たんですよ。あ、もし気を使っているなら、無理に先生って呼ばなくても構いませんよ。今は職務中では無いですから」

いや、別に気を使っているわけではないのだが…。
ほら、ケジメってやつですよ。

今さっき先生が言ってたじゃないですか。

「気持ちはいがたいんですが、逆になんて呼べば言いかわからないですよ……………」。「真耶さん」とかですか？」

「そ、そうですね…それもいいかもしれませんが……………／／」

なんで照れてんだ？

自分がかまわないって言ったくせに…………。
女の人ってわからないな。

「織斑先生は…………『織斑先生』で」

「なぜ私はそのままなのだ」

うっ！

なんかムツとされた。

だって……………ねえ。

なんか名前とかで呼んだらぶち殺されそうじゃないか。

「そんなことはしない。私をなんだと思っているのだ」

鬼。

「ほづ………」

ほら！

なんかぶち殺そうとしてません！？
ていうか、なんで心が読めるんだ！
俺が言うことじゃないが。

「わ、わかりましたよ、ち、『千冬さん』………？」

「うむ。まあ、いいだろう」

おお、出た。

ポーカーフェイス。

内心は照れてるのに決して表に出さない。
これを見てとれるのは俺ぐらいしかいないはず。

「ところで、ちょっといいですか？」

「なんだ？」

「おーい、鈴、セシリア！出てこいよ」

ギクギクッ！

柱の影から鈴とセシリアが恐る恐る出てきた。

「た、タイミングを見計らってただけよ」

「そ、そうですね。別に尾行とかしてませんわよ」

「あれ？ラウラは？」

「あら？さっきまでいましたのに……」

「それにしても、三人とも仲良くなってくれてよかったよ。一緒に買い物に来るなんて」

ほんと、あのときはこんな風になるなんて思わなかったよ。

『喧嘩するほど仲が良い』ってやつだな。

……あれ？

二人とも『違う！』だと……！

じゃあなんで三人で行動してたんだ？

「信さんにはわからない理由ですわ」

「あんたって、本当に……」

なんだよこの二人。

「あ、あー。私ちょっと買い忘れがあったので行ってきます。えーと、場所がわからないので凰さんとオルコットさん、ついてきてください。それに、デュノアさんも」

？

突然どうした、山田先生。

「どこに行きたいんですか？さっき地図見たんで、俺が案内しますよ？」

「い、いえ！大丈夫です！」

全力で『ついてこないでください！』と拒否された。
うーん、女の人って……いや、もういいや。

山田先生と三人が人混みに消えると、俺と織斑先生が二人きりになった。

「……まったく、山田先生は余計な気を遣う」

織斑先生がやれやれと頭を抱える。

「？」

「前にな、山田先生に『真宮と二人で話がしたい』と私が言ったのだ」

「一夏のことですか？あいつはかなり頑張ってますよ。きっと、もっと強くなるでしょうね」

織斑先生もなんだかんだ言っただが心配なのだ。

決してそんな姿を見せないのは、最強の女としてのプライドなのだろうか。

「それもあるが、お前自信のことだ」

「俺……ですか？」

なんだろう？

特に問題を起こした覚えは……ない、と言いたい。

「お前は何者なんだ？すべてにおいて常識はずれだ。おかしいくらいにな」

「……普通ですよ、俺は」

なんだか俺の過去を探ろうとしているようだが、それは無理だ。俺だって覚えてないからな。

「……そうか。ならいい」

あれ？

意外とあっさり。

「それでいいんですか？なんか、身構えた俺が馬鹿みたいじゃないですか」

「いや、気にしてないならそれでいい。前々から、お前が周りとの差異を気にしているのではと思っていたんだ」

「はあ……」

「だがな、覚えておけ。誰かを助ける人間は必ず、誰かに助けられている。お前だけが特別な存在じゃないんだ」

「わかりました。肝に銘じておきます」

俺は胸に手をあて、笑って答える。

「よし。ところで話は変わるんだが……」

「はい？」

織斑先生が俺の前に水着を二着、突き付ける。

片方はスポーティーでありながらメッシュ状にクロスした部分がセクシーさを演出している黒水着。

もう片方はこれまた対極で、一切の無駄を省いたかのような機能性重視の白水着。

どちらもビキニで肌の露出具合はかなり高そうだった。

「どっちがいいと思う？」

「………なんでこう、俺が選ぶ羽目になるんでしょうね」

「なんだ？私とも一緒に更衣室に入るか？」

「冗談よしてくださいよ……」

はあー、この人一応先生だろう？

ま、しょうがない。

指名された以上俺の意見を言うか……。

「うーん……」

白のほうは……そうだな。

なんか織斑先生のビシツとした感じが全面に押し出されて近寄り難

そうだな。

黒は………いっつも黒いスーツ着てるからなあこの人。
たまには違う色着てもいいんじゃないか？

「……うーん…」

はっ！

待てよ………。

一夏ならどうする？

実の姉が着るとしたらどちらがいいと思うんだ？

あいつのことだ、『黒は変な男がよって来そう』とか思うに違いない。

一夏も姉思いだからな。

しかし、白か？

白が合うのかこの人。

なんかこれ来て海辺歩いてたら浮きそうだぞ。
雰囲気か。

「……うーん…」

「いつまで悩んでる。さっさと決めろ」

そうはいいましてね………。

とりあえずシュミレーションしてみるか。

・その一 白の場合

『おい見ろよ、あそこにチョー美人がいるぜ』

『でも話しかけるなって感じじゃね?』

『……………』

ヒソヒソ……………

『なにあの人…怖い…』

結論：なんか寂しい海辺になりそう

・その二 黒の場合

『おい見ろよ、あそこにチヨ―美人がいるぜ』

『うほっ！ほんとだ！ねえ、かーのじよ！俺たちと遊ばない?』

『……………』

『ねえ、ねえった』

バキッ、バキッ！

『……………私に触れるな…』

ヒソヒソ……………

『なにあの人…怖い…』

結論：なんか寂しい海辺になりそう

結局変わんねーじゃん！

「決まったか？」

「あ、あと三十秒ください！」

こうなったらもういいや。

俺が似合うと思うほうを選ぼう。

うー……………。

よし！

「黒で

「ほう。なぜだ？」

「俺が見たかったからです」

それしか理由がない。

というか、それに頼るほかない。

「そうか。やはり面白いやつだな、お前は」

ふふっ、と笑う織斑先生は別人のようだった。
いっつも厳しいからなこの人。

「ところでお前、彼女はつくらないのか？」

「俺と付き合おうなんて、そんな物好きな人はいませんよ。みんな一夏の虜ですからね」

「そうか？お前もなかなか罪な男だと思うがな」

「あははっ！先生って意外と冗談が好きなんですネ」

これはスクープだ。

学校ではあんなに恐れられている先生が冗談好きとは。
さっそく新聞部に売り込もう。

「俺にはもったいないくらい可愛いですからね、みんな」

「ふっ、そうか」

なんだ？

なんか『やれやれ…』って感じ。

「というか、織斑先生はどうなんですか？先生くらい美人なら、どんな男もイチコロでしょ？」

「手のかかる弟や生徒がいるのでな。まだそういうことは考えてない」

織斑先生らしいな。

「水着、選ぶのに時間かかってすみませんでした」

「いや、かまわんさ。すまなかつたな」

最後にニコリと笑って織斑先生がレジに歩いていく。

なんだかいつもと違った織斑先生を見た気がして、不思議な気分だった。

ブルルル…ブルルル…ガチャ

「クラリツサ、私だ。緊急事態発生」

『ラウラ・ボーデヴィツヒ隊長。なにか問題が起きたのですか？』

「う、うむ。例の、『真宮信』のことなのだが…」

『ああ、隊長が好意を寄せているという彼ですか』

「そつだ。お前が教えてくれたところの、いわゆる私の『嫁』だ」

ラウラは腹心の部下であるクラリツサ・ハルフォーフ大尉に電話をかけていた。

理由はただひとつ。

「実は今度、臨海学校というものに行くことになったのだが、どの

ような水着を選ばないか、選択基準がわからん。そちらの指示を仰ぎたい」

そう。

軍隊の訓練しかしてこなかったラウラにとって、水着など縁のないものだったのだ。

ところが先程

『水着、気合い入れて選ばなきゃね!』

『他のことが全部百点でも、水着がダメだったら致命的だもんね』

と言う会話を聞き、『このままでは…』ということ、ここは様々な日本文化を知っているクラリッサに聞こえたのである。

ちなみに、ラウラもクラリッサも気付いてないが、基本どこか日本に対しての認識がずれている。

『了解しました。この黒ウサギ部隊シュバルツェ・ハーゼは常に隊長と共にあります。ちなみに、現在隊長が所有している装備は?』

『学校指定の水着が一着のみだ』

私はそれで充分だと思っただが…と言うのを抑えたのは正解だった。

『何を馬鹿ことを!』

「!?!」

突然の大声に、携帯を耳から遠ざける。

『たしか、IS学園は旧型スクール水着でしたね？それも悪くはないでしょう……』

なんでお前がそんなこと知っているんだと聞きたかったが、クラリツサの本気で自分のことを考えてくれているのを感じ、続きを待つ。

『だが！しかし！それでは！』

「そ、それでは……？」

『色物の域を出ない！』

「なっ……！ならば、どうすれば？」

『フツ。私に秘策があります』

その自信に満ちた発言に、ラウラはゴクリと唾をのむのだった。

23・遊びと本気の境界線は見えにくい(前書き)

十二月なのに海の話……orz

23：遊びと本気の境界線は見えにくい

「海っ！見えたあっ！」

トンネルを抜けたバスの中で女子が歓声を上げる。

臨海学校の初日、見事な快晴でまさに海で泳ぐのにぴったりの天気だった。

「ふわぁ……！」

俺《信》は大きくあくびをする。

「なんだよ、信。眠そうだな」

通路を挟んで隣の一夏が俺に声をかける。

「昨日は楽しすぎて眠れなかったんだよ」

「子供だな」

「うっせー」

なにせ海で泳ぐのは初めてなので、わくわくして朝方まで眠れなかった。

「信ってたまに子供みたいなところあるよね」

一夏の隣の席のシャルが俺をからかう。

ふと、俺の目がシャルの右腕にとまる。

「あっ、シャル、それつけてくれたのか？よく似合ってるぞ」

「うん、ありがとっ えへへ〜」

昨日、買い物に付き合ってくれたお礼に白いブレスレットをシャルにプレゼントした。

『ほら、これ』

『えっ！これなに？』

『今日のお礼だ。俺の色違いでお揃いのやつ。厳密に言えばデザインはちょーっと違うが』

『わあ！ありがとう！』

『それにな、白式と同じ色だから一夏と』

『信とお揃い……えへへ』

『……聞いてねえな』

と言うわけだ。

今日の機嫌の良さは恐らく、一夏の隣の席を勝ち取ったからだろう。全面から『僕って幸せだな』オーラが出ている。

良かったな、シャル。

因みに俺の隣は……。

「そっだ、ラウラも泳ぐの初めてじゃないか？楽しみだよな、海」

「……………」

朝からずっと無言のラウラ。

一体どうしたというのだろう。

いつもはもつと冷静さのある沈黙なんだが、今日はそわそわと落ち着かない沈黙だ。

「聞こえてますかー？」

「……………」

ツンツン

「な、何をする！ち、近い！」

「ぐえ」

頬をつついたら顔を思いつきり押し戻された。

「どうした？何が不安なんだ？」

「こ、心を読むんじゃないっ！」

なんかめっちゃくちゃ動揺してるな。

なんだろ？

心なしが顔も赤いし……………。

「ずるいですわ……………シャルロットさんだけプレゼントなんて……………」

後ろの席ではセシリアが若干むすつとした顔で文句を言っている。

「なんだ、セシリアもほしいのか？この前のお礼もしてないし、言ってくれたらよかったのに。今度なんか買ってやるよ」

「ほ、本当ですか!？」

「ああ」

セシリアは『今から楽しみですわ!』という顔になった。

まあ喜んでくれるならいいのだが、流石にブランド品とかは無理だな。

セシリアはお嬢様だからな、あとでちゃんと言っておかないとまずいことになりそうだな。
金額的に。

「向こうに着いたら泳ごうぜ。箒、泳ぐの得意だったよな」

一夏が箒に話しかけている。

「そ、そう、だな。ああ。昔はよく遠泳をしたものだな」

遠泳で……。

察するに箒は一夏を落とすための奥の手を用意してきたらしい。ふと、箒と目が合った。

(頑張れよ)

(う、うむ……)

アイコンタクトで言葉をかわすが、なんだかまだ決心がついてないようだ。

なにする気だ、等。

「そろそろ目的地に着く。全員ちゃんと席に座れ」

織斑先生の言葉が騒がしいバス内に響き、全員がさっとそれに従う。この辺は流石と言うべきだろう。

言葉通りほどなくしてバスは目的地である旅館に到着。

IS学園一年生がわらわらと出てきて整列する。

「ここが今日から三日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の方々の仕事を増やさないように注意しろ」

「「「よろしくお願いしまーす」「」」

「はい、こちらこそ。今年の一年生も元気があってよろしいですね」

旅館の女将さんらしき人が丁寧にお辞儀をしてくれた。

こういうのを大人の女性と言っただろう。

「あら、こちらが噂の……」

俺と一夏を見て女将さんが織斑先生に尋ねる。

ていうか噂になってたの？

なんか恥ずかしいな。

「ええ、まあ。今年はいいつらのせいで浴場分けが難しくなってしまっただけです。申し訳ありません」

「いえいえ、そんな。それに、いい男の子たちじゃありませんか。しっかりしてそうな感じを受けますよ」

「感じがするだけですよ」

「またまた。本当は生徒を誉められて嬉しいくせに　おっと！」

俺が話に割って入ったら織斑先生の鉄拳が横から飛んできた。

ガン！

「痛っ!?!」

悲しいかな、俺に当たるはずだった鉄拳は無実の一夏にヒットした。

「あぶねー。あっ、真宮信です。よろしくお願いします」

「いって…。お、織斑一夏です。よろしくお願いします」

俺が挨拶をすると一夏もそれにならない、頭を擦りながらお辞儀をする。

「うふふ、仲がよろしいんですね。清州景子きよすけこです」

丁寧なお辞儀をする女将さん。

なんだか気品があって穏やかな雰囲気だ。

うーん、大人。

「まったく……。見苦しいところをお見せしてしまいました。申し訳ない」

「いえいえ。賑やかでなによりですよ。それじゃあみなさん、お部屋の方へどうぞ」

女将さんに促され、わらわらと旅館の中に入る女子たち。初日の自由時間を無駄には出来ないと素早く散っていく。

「ね、ね、ねー。おりむぐ、みーやん」

「……その呼び方やめないか？」

「俺も信に賛成だ」

「えー。意外と呼びやすいよ？」

のほほんさんがいつも通りの眠たそうな顔で近付いてきた。

「それよりさ、ふたりとも部屋どこ？一覽に書いてなかった。遊びに行くから教えて」

「別にいいけど……」

……。

あれ？

周りの女子がなんか急に静かになったな？
どうした？

「俺の部屋は……」

.....
.....
.....

「.....一夏、俺の部屋ってどこだ？」

「知らねーよ。俺だって自分の部屋知らねーからな」

「だって」

「え〜。そっなの〜？」

(((((ガクッ)))

心なしかガツカリしたのがのほほんさんだけでなかったような気がするんだが。
気のせいだろう。

「織斑、真宮。お前らの部屋はこっちだ。ついてこい」

織斑先生からお呼びがかかる。
早く行くかないと。

のほほんさんに「じゃ、あとで」と言い、一夏と一緒に駆け足で織斑先生についていく。
しばらくして、先生の足が止まる。

「お前はここだ、真宮」

「はい」

指差された部屋のドアを開ける。
どうやら二人部屋らしい。
広々として快適そうだ。

「で、織斑。お前はあっちだ」

「え？信と一緒にじゃないんですか？」

「お前は私と一緒にの部屋だ。真宮は一人部屋になるな」

「おお！やったぜ！」

一人というのは楽だ。

贅沢に部屋を使えるしな。

「ええー！どうして信だけ…」

「最初はお前らをまとめる予定だったのだがな、それだと絶対に就寝時間を無視した女子が大量に押しかけるだろうということになったのだ。結果、お前より真宮のほうがしっかりしていそうだからこゝういう部屋割りになった」

お、さりげなくしっかりしていると誉められた。

「だってさ。いいじゃないか、あとで遊びに来いよ一夏」

『そんなあ…』と肩を落とす一夏に励ましの言葉をかける。
たまには家族水入らずで過ごすのもいいと思うんだが。

「そういえば、さっき聞かれたんですけど、俺の部屋って教えていい

「んですか？」

「お前はさっきの話を聞いていたのか？」

「聞いてましたよ。就寝時間を無視させなければいいんですね？」

織斑先生が頭を抱える。

「わかった。ただ騒がしくするなよ」

「え？いいんですか？」

冗談だったのに。

「ああ。だが変な気は起こすなよ？」

「なに言ってるんですか。俺はしっかりしてるんですよ？」

大げさに胸を張ってみる。

「信、これから海に行くだろ？荷物置いたら迎えに行くからな」

「わかった。じゃ、また」

織斑先生に軽くお辞儀をして扉を閉める。

さて、俺も準備をするか。

「そういえば信って海に来るの初めてなんだっけ？泳げるのか？」

「安心しろ。昨日、世界水泳のビデオ見ておいたから」

俺《一夏》は信と男子更衣室を目指し、並んで歩いていた。だがここが結構苦難の道のりだ。

『わ、美香ってば胸おつきー。また育ったんじゃないの〜』

『きゃあっ！も、揉まないでよおっ！』

『ティナって水着だいたーん。すっごいね〜』

『そう？アメリカでは普通だと思うけど』

一番奥の男子更衣室にたどり着くまで、女子更衣室からとんでもない会話が耳に入ってくる。

「」「」

ちらっ

ちらっ

「なんだ？興奮してんのか？」

「そ、そんなわけないだろ」

何とか男子更衣室までたどり着き、さっと着替えて海に出る。すると、丁度山田先生の声が聞こえた。

「今、十一時です！夕方まで自由時間、夕食に遅れないよう旅館に戻ることに！いいですね？」

「「「はい！」「」」

山田先生に女子たちが元気よく返事をする。
と、いきなり俺たちはすぐさま女子に囲まれた。

「あたし、おりむーたちと遊びたい」

「ビーチバレーしようよ！」

「ああ、いいぜ。なっ、一夏？」

「おう！」

信の問いかけに答えてさっそく準備体操を始める。

「お前、真面目だなー」

「なんだよ、準備体操しないと怪我するぞ」

「大丈夫だっ」

ガバツ！

「うわー！」

「おー、高い高い。やっぱり遠くまでよく見えるわー」

信に飛び乗ってきたのは鈴だった。
昔は俺がこの飛びつきの被害にあっていたのだが、どうやら背の高い信にターゲットを変えたらしい。
ちなみに、鈴が着ている水着はスポーティーなタンキニタイプ。
オレンジと白のストライプで、へそが出ているやつ。

「ばっ……お前、下りろ！」

「えー、いいじゃん」

そう言っつて信の目を隠す鈴。

現在、信は鈴を肩車しているような形になって右往左往している。

「いいなー！わたしもやりたーい！」

「その次あたし！」

のほほんさんを筆頭に周りに人が集まってきた。

これだけ密着したら、普通だと当たってはいけないところが当たるのだが、鈴にはそれが無い。

どことは言わないが。

この女の子たちはそういう自覚がないのだろうか？

「あっ、一夏がやってくれるってさ」

「なぜ俺に振る！？」

「本当、織斑くん！？」

「よろしく願います！」

さっそく女子たちが反応する。

くっ！

なにやってくれてんだ、信！

「ちょっと！鈴さん！な、何をしていますの！？」

「見ればわかるでしょ？移動監視台ごっこ」

鈴がえへへと笑って信にしがみつく。

大変だな、信。

「し、信さん？先程の約束を忘れました、のっ！」

ざくっ！

セシリアがパラソルを砂浜に刺す。

なんか怒ってるぞ。

怖っ。

「信、なんの約束したんだ？」

やっと鈴から解放されてほっとしている信を見る。

「え？ああ、サンオイル塗ってくれってさ。……ところでサンオイルってなんだ？」

「知らないのかよ！」

「いや、聞いたことはあるんだが……」

そんな会話をしているうちに、セシリアは準備を終えていた。しゅるりとパレオを脱ぎ、首の後ろで結んでいたブラの紐を解くと、水着の上から胸を押さえてシートに寝そべる。キレイな背中が妙に輝いて見えた。

「さあ、どうぞぞ？」

「……だつてさ、一夏」

「信、諦める」

何をするかわかったらしい信は最後の抵抗を試みるが、俺に一蹴されてあえなく観念した。

「信さん、レディとの約束を違えるなど紳士のすることではありませんわよ？」

「ぐっ！……わ、わかったよ……やればいんだろ、やれば」

信はサンオイルを手にはひろげ、さっそくセシリアの背中に触れる。

「ひゃっ！し、信さん、サンオイルは少し手で温めてから塗ってくださいな」

「お、おう。初めてでやり方がわかんねーんだ、悪い」

「そ、そう。初めてなんです。それでは、し、仕方がないですね」

「あんだ、なんで嬉しそうなのよ」

鈴のいう通り、セシリアは心なしか嬉しそうだ。

又リ又リ……

一通り背中にサンオイルが塗られる。

「よし、これでいいよな？」

「い、いえ、せっかくですし、手の届かないところは全部お願いします。脚と、その、お尻も」

「はあ！？そ、それは無理だ！え、えーと……あつ、鈴！バトンタ
ッチー！」

「はいはい、あたしがやったげる。ふふふ……」

信の言葉を待つてましたとばかりに鈴が割り込み、セシリアの体にサンオイルを雑に塗っていく。

「あはは、ははは！く、くすぐった……！り、鈴さん！いい加減に

「

怒って体を起こすセシリア。

そうすると体から離れていた水着が離れてそのまま下に落ちて

「」「うわあ！」「」

男子二人が突然の出来事に固まってしまふ。

「きゃああっ!?!」

ガンツ!!

信がISを部分展開したセシリアの文字通り鉄拳をくらふ。
やばっ!

俺も逃げないと!

俺はさっと立ち上がり、一目散に海にかけていった。

「いてて……。俺のせいじゃないだろ、あれ……」

信は鼻の辺りを擦りながら涙目で海に浮いていた。

「信!向こうのブイまで競争ねー!負けたらかき氷奢んなさいよー」
「!」

「なんで」

信の反論を聞かず、鈴はザブンと海に潜ってさっそく目標に向かって泳ぎ始める。

(セシリアには悪いことしたけど、今回は譲ってもらおうよ。セシリアやラウラには負けてられないんだから!)

鈴は気合いを入れて、ついつい足で水を蹴るのにも力が入ってしま
う。

それがいけなかった。

ビキッ！

(！？！？)

「ぶはッ！あ、足が……つって……！」

一瞬海上に頭を出したのち、なすすべもなく海中へ引き込まれる。

反射的に手を伸ばして助けを求めるが、その手をつかんでくれる人
はいない。

だんだんと意識が薄れていく。

ガシッ！

誰かに伸ばしたままだった手をつかまれる。

大きくて、温かい。

(これ、信の手だ……)

導かれるままに、海面へと浮上する。

「ぶはっ！おい、鈴！大丈夫か!？」

「げほ、げほっ……」

少し飲んでしまった海水を吐き出す。

「まったく……心配ばかりかけんなよ」

「い、ごめん」

「ま、とにかく無事でよかった」

と、ここで信と自分が抱き合っているような形になっていることに
気付く。

「な、何してんのよ！あんだ！は、離れなさいよ！／＼」

「駄目だ。離さない」

『離さない』なんて言われると、顔が赤くなった。
胸がドキドキする。

「ほら、背中に乗れ。運んでやるよ」

「大丈夫よ、それくら」

「乗れ」

「わ、わかったわよ……。乗ればいいんでしょ、乗れば」

信の背中に身を預けると、なんだかとても安心できた。
すべてを受け止めてくれるような大きな背中だった。

「お前は一夏を見習うべきだな。ちゃんと準備体操したのか？」

「あ、あんたはどうなのよ……」

「……………あ、してないや」

そう言っつてあははと笑う信がとても輝いて見えた。

「ま、でもお前らみたいに互いの欠点を補えるカップルもいいのかもな」

「……………まだそんなこと言っつてんの？」

「は？何が？お前は一夏と結婚したいんだろ？」

(……………ちよつとずれてるのよね、こいつ…)

鈴は少し呆れながら、信にささやく。

「わかったわ。あなたの欠点、補ってあげるわ」

「はははっ！生憎だがお前に補われるような欠点はねーよ」

あるのよ！

ちよつとむすつとして、だけど心の中ではそんな信が気になって、鈴はずつとドキドキしていた。

「おい、本当に大丈夫か？」

砂浜に戻ってきてもまだげほげほと咳き込んでいる鈴に問いかける。

「だ、大丈夫よ……」

鈴は俺《信》を心配させまいと強気で振る舞っている。

「鈴さん！ 災難でしたわね。わたくしが旅館までお送りしてさしあげますわ」

セシリアが鈴に声をかける。

「おう。そうしてもらえ、鈴」

一夏もセシリアに賛同する。

やはり、少し休憩をはさんだほうがいいというのが客観的な意見だろつ。

「え？ い、いや、待って！ あたしは信と」

「高月さん、ちょっと手伝っていただけませんこと？」

「わかった。手伝うわ！」

ガシッ！ ガシッ！

両方の腕をつかまれ、鈴がつれていかれる。

「た、助けてー！ しーんー！」

もう助けてやっただろ。

俺はヒラヒラと手を振って鈴を見送った。

「あっ、信！ここにいたんだ！」

振り向くと、シャルと全身をタオルで包んだ人が立っていた。

「な、なんだよそれ！」

一夏が驚きの声を上げる。
無理もないか。

「なに恥ずかしがってんだよ、ラウラ」

「わかるの？信」

「こんなときでも眼帯つけてるしな」

「だってさ、ラウラ。ほら、出てきなつてば。大丈夫だよ」

「だ、大丈夫かどうかは私が決める……」

「せっかく水着に着替えたんだし、信に見てもらわないと」

「わ、私にも心の準備が……」

なかなかタオルの繻から出てこようとしないラウラ。
いつもと違って優柔不断だな。

「ふーん。じゃあ僕だけ海で信と遊んじゃうけど、いいのかな？」

「そ、それはダメだ！え、ええーい！」

数枚のタオルを投げ捨て、水着姿のラウラが表れる。

ラウラは黒の水着、しかもレースをふんだんにあしらったもので、一見するとそれは大人の下着にも見える。

髪も左右で一对のアップテールになっている。

さらにもじもじと落ち着かなそうにしている様子がとても可愛い。

「わ、笑いたければ笑うがいい……」

「おかしなところなんてないよね？信」

「お、おう。なっ、一夏？」

「困ったときに俺に話題を振るのやめろ」

「うっ！ばれたか。それはさておき……ラウラ、よく似合ってるぞ。メチャクチャ可愛いよ」

「なっ……！そ、そうか。わ、私がかっ、かか、可愛いのか……そんなこと言われたのは初めてだ……／＼」

照れて赤くなっているラウラも可愛い。

願わくばずっと見ていたいな。

「織斑くん、真宮くん！さっきの約束、ビーチバレーしようよー！」

ポーンと飛んできたボールを受け取る。

「俺と一夏は別のチームの方がいいな。どうするっ？」

「じゃあ俺があっちいくよ。のほんさん、戦力になってるかどうか、怪しいとこだし」

「そっか。ま、三対四で大丈夫だろ」

さっそくみんなで線を引いたり、ネットを広げたりと準備をする。試合と言っても勝ち負けは関係なく、遊びでやるので、本気でやる必要はない。

「織斑くんしっかり〜！」

「真宮くん〜！」

女の子の声援に軽く答え、試合開始。

「ふっふふ…、七月のサマーデビルと呼ばれたこのあたしの実力をみよ〜！」

バシッ！

なに！

は、速い！

「任せて〜！」

シャルがうまくレシーブでボールを上げる。流石優等生、何をやらせてもうまい。

「サンキュー、シャル〜！よっ〜！」

「甘いぜ、信！」

む！

一夏もなかなかやるな！

「ほっ！アターック！」

この角度は…！

「ラウラ！そっちに行くぞ！」

ぼけー……

あれ？

心ここにあらず？

つて、やばっ！

バシッ！

「ラウラ！」

「む！？う、うわぁ！」

ザシユ！

砂浜でボールがバウンドする。

「あーあ、一点取られちゃった。おい、ぼーっとすんなよ、危ねえぞ？」

俺はラウラの脚を払い、いわゆるお姫様抱っこという状況になっている。

まあ恥ずかしいが、あのままだったらラウラの顔面直撃だったからな。

背に腹は変えられない。

とここで、俺に抱え込まれているラウラの顔がみるみる赤くなっていくのに気付く。

「どっした？」

「……………う／＼」

「うっ？」

「うわぁ……………!!／＼」

ラウラは叫び声を上げると、ぱつと俺の腕から飛び降りて海に駆けていってしまった。

「なんだ？あいつ？追いかけた方がいいかな？」

「ほつといてあげた方がいいと思うよ」

シャルが言うならそうなのだろう。
ほつとくか。

「ビーチバレーですか。楽しそうですね」

山田先生が近くに来た。

なんとというか、水着がどうこうじゃなく胸がでかい……。
いやいやいや！
見ちゃダメだ！

「先生も一緒にどうですか？」

「ええ。いかがですか？織斑先生」

現れた織斑先生はかつこよさと美しさを兼ね備えた、まさにモデルのようだった。

俺が選んだ黒の水着は織斑先生にピッタリな感じだ。
思わず見とれてしまう。

「信ってさ、織斑先生がタイプなの？」

「ん？いや、別に？ただ美人だなーと思って」

「そう……。そうなんだ……」

「あ、でも一夏は織斑先生がタイプみたいだな、ほら」

そう言っつて織斑先生に釘付けになっている一夏を指差す。

「信だっつて見とれてたくせに……」

「うん、まあ、な……」

否定はできない。

「はあ、ライバル多いなあ……。そこに織斑先生まで入って来るなん

て……」

「そうだな。だが俺は中立の立場からお前らを応援しよう。頑張つて一夏をものにしろよ?」

えーと、箒にセシリアに鈴にシャルか……。
で、一夏は織斑先生が好みと。
複雑だな。

「信、なんでそういうことになるの……?」

あれ?

なんであきれてるんだ?

「ほら、シャル、元気出せ。織斑先生は強敵だぞ!」

「信が一番の強敵だよ……」

なんだそれ。

あれか?

一緒のチームでよかったってことか?

「いや、それほどでも」

「誉めてないからねっ!」

なに!

ひどいな、おい。

先生二人が新たに加わり、山田先生がこちら、織斑先生はあちらのチームになった。

「サーブ、来ますよ！」

山田先生の優しい声が聞こえる。
サーバーは織斑先生だ。

ヒュッ、バシッ！！！！！

「な………に！？」

ザシュ……！

「……速すぎませんか？」

う、動けなかった……。

「どうした？真宮。今日は不調か？」

「そ、そんなことないっすよ？」

「ほう？では私のサーブを止められるかな？」

「は、はは……。努力はしますよ……」

こうして、遊びだったはずのビーチバレーがどんどん本格的なものになるのであった。

23：遊びと本気の境界線は見えにくい（後書き）

いかがでしたでしょうか？

まだまだ、ほのぼののムードですね。

嵐の前の静けさというか。

照れるラウラが微笑ましい限りです（＾―＾）

24：お酒を飲むと気が大きくなるけどあんまり無責任なこととは言っちゃ駄目

織斑先生との激闘からはや数時間。

今は夕食の時間だ。

「豪華だな。俺たちが食べていいのか？」

「そりゃあ、目の前に出されてるんだからいいただろ」

夕食のあまりの贅沢さに俺《信》はたじろいでしまう。

一夏は俺ほどたじろぐことはなく、刺身にわさびをつけて、口に運ぶ。

「うまい！さすが本わさ！」

「本わさ？」

一夏の隣に座っているシャルが『なにそれ？』と不思議そうな顔をしている。

そして、視線が刺身に添えられた緑色の物体に移る。

「あつ！ちよつと待て！そういう食べ方じゃ」

俺の制止もむなしく、シャルがわさびの山を食べる。

「~~~~~！！」

「ない…って遅いか。一夏、これ、シャルに渡せ」

「ああ。ほら、お茶だぞ」

俺から一夏に、そしてシャルに湯呑みが手渡されていく。それにしてもシャル、お前のチャレンジャー精神は素晴らしい。そこは認めよう。

「っ……っ……」

ぱくぱくと食事を食べ進めていると、隣から女の子の苦しそうなめき声が聞こえた。

ちなみに席順は、シャル、一夏、俺、セシリア、の順番。つまり、このうめき声はセシリアのものだ。

「セシリア、もうあきらめてテーブル席に行ったらどうだ？正座、苦手なんだろう？」

「い、いえ……へ、平気……で、です……わ……」

俺に笑顔を向けるセシリアだが、完全に無理をしている。だが譲れない何かがあるようで、かたくなに動こうとしない。余談だが、俺も正座は苦手なので、今はあぐらをかいている。多少使う面積は広くなるが、足が痺れて立てなくなるよりはいい。

「でもさ、料理冷めちまうぞ。誰かに食べさせてもらうわけにもいかないだろう？」

びくっ！

セシリアがほんのわずかに反応した。

ちらりとこちらを見る瞳には、わずかに期待の気持ちは見えた。

……。

「誰かに食べさせてもらいたいのか？」

「そ、そうですね。せっかくの料理が傷んでは、シェフに申し訳がありませんから、その、『誰か』に食べさせてもらうことにしましようか」

「そっか。じゃあそうしろ」

俺を見つめているセシリアは無言で何かを主張している。

じー

「……………」

じー

「……………」

じー……………!!

「え？俺？」

「はい！よろしくお願いします！」

そう言っつて箸を手渡される。

うーん…頼まれたからにはやったほづがいい……………のか？

「仕方ない……………ほら」

「は、はい……あー……む」

モグモグと刺身をつまそくに食べるセシリア。
すると、周りの女子が騒ぎ出した。

「あああーっ！セシリアずるい！」

「セシリアの卑怯者！」

飛び交うブーイングもなんのその、セシリアは「次、お願いします
！」と訴えている。

バンツ！

後ろのふすまが勢いよく開く。

「お前たちは静かに食事をする事ができるのか！」

「お、織斑先生……」

さっきまでの騒ぎはどこへやら、全員一気に静まり返る。

「真宮、騒動を起こすんじゃない。一人部屋を取り消しにするぞ」

「す、すいません……」

ぱたん

そして織斑先生は静かに去っていった。

「「「はあ」」」

緊張がとけ、全員がほっと安堵の息をはく。

「真宮くんって一人部屋なの？」

近くにいた女の子が質問する。

なんか『遊びに行かなきゃ！』という思いがひしひしと伝わってくるんだが……………。

それも女子全員から。

でもこの人数で押しかけられたらまずいな……………。
やっぱり、場所は教えないでおこう。

「ああ、まあな。ちなみに一夏は織斑先生と一緒に部屋だぞ」

びし……………！

あ、固まった。

『織斑くんの部屋には行けないわね……………』で全員一致だそうです。
さすが、鬼教官。
効果絶大だぜ。

「で、セシリア。また怒られるのはごめんだから

……………」

なんだよ、そんなに『不満ですわ』って顔で見るなよ。
頬を膨らませて、まさにふくれっ面をしている。

(怒るなよ……あとで埋め合わせはしてやるから、なっ?)

(……『今日中に』お願いします)

(今日中!?!うーん……何とかしよう。じゃあとりあえずあと部屋に来てくれ)

(部屋……?……し、信さん、もしやそれは……/ /)

食事を取りながら小声でやりとりしていると、セシリアが急に手を握ってきた。

「信さん！わかりましたわ！じゅ、準備がありますので少々お時間をいただきますが、必ず！」

なんかよくわからんが、機嫌をなおしてくれたらしい。

さて、埋め合わせて言っても何をしよう……。

俺は新たな問題に頭を悩ませるのだった。

「ひ、ひどい目に会いましたわ……」

信との約束のあと、セシリアは入念に体を洗いいわゆる『勝負下着』に着替えたのだが、それをルームメートに見つかり、なんとというか、まあいろいろされた。

(し、しかし！これでやっと……!)

知らず知らず、早足になる。

信はセシリア『だけ』に部屋の場所を教えてくれた。

『場所がわかったら一気にみんな集まってくるから』だそうだ。

(し、信さんだったら……ふ、二人っきりで何をなさるつもりかしら？やはり……／＼)

顔が赤くなる。

(ね、念には念を入れておいた甲斐がありましたわ！)

気付くとすでに信の部屋にっていた。

／＼こんこん／

「し、信さん？来ましたわよ？」

／＼おー、入っていいぞー／

すっ…と、にこにこしてふすまを開けたセシリアだったが、部屋の中を見た瞬間表情が固まった。

「私の番だな。』6』だ」

「えっと、』7』…」

「……』8』よー」

「ダウト」

「なっ!?!い、いいの?本当にそう思うの?変えるなら今のうちよ、信!」

「お前、出す前に手札全部眺めたる?つまり『出すべきカードが手札のどこにもない』ってことだ」

「ほづ…なるほどな」

「ふふつ。わかりやすい性格なんだね、鈴は」

「さ、全部持ってけ」

「くう…!あ、あとで大逆転してやるわ!見てなさいよ!」

「はいはい」

信の部屋には、ラウラ、シャルロット、鈴がすでにいた。しかも、ダウトの真っ最中。

「な、なんで皆さんがここに!?!」

信は自分『だけ』に場所を覚えてくれたのに!

「いやなんかさ、みんなISのコア・ネットワーク使って俺の部屋割り出したらしいんだ」

しまった!

その手があったか!

ISは元々宇宙開発用。

お互いの位置を恒星間距離においても正確に把握する必要があったため、それぞれがお互いの位置を認識しあえるという特徴を持っている。

以前シャルロットと信を尾行したときに使った特徴でもある。

しかも、鈴とラウラは一緒に行動していたし、あとから聞いたのだが、シャルロットもこの機能を応用させて尾行に気付いていたらしい。

この四人がこの方法を使わないはずがない。

「なんだよ、セシリア。『うかつだった……』って何がだ？あ、もしかしてトランプ最初からやりたかった？別に大丈夫だぞ？」

「信さん……もういいですわ……」

がつくりと肩を落とし、力なく椅子に腰かけるセシリア。
こうなったらやけだ。

「わたくしも参加しますわ。言っておきますけど、鈴さんとは違いましてよ？」

「なっ！み、見てなさい！今からが本番よ！」

「はいはい」

さらっと鈴の言葉を流し、トランプを回収し、切り始める信
そしてトランプが配られ、再びゲームが開始される。

「じゃ、俺からな。『1』だ」

「『2』だ」

「じゃあ僕は『3』だね。はい」

「……『4』よー！(ちらっつ、ちらっつ)」

「引っ掛かるか、馬鹿。セシリア、次いいぞ」

「わたくしは……『5』ですわね」

「待った！ダウトよ！」

「……残念でしたわね、鈴さん？正真正銘、『5』でしてよ？」

裏返しに出したカードをペラッとめくる。

「な、なんで！手札全部眺めてたじゃない！ね、信！」

「フェイクだよ。お前、今やってたじゃないか」

「ぐっ……！セシリア、覚えときなさい……」

「ほら、続けるぞ。初めからな。『1』」

「『2』」

「ダウト」

「むっ……さすが私の嫁だな。私の考えはお見通しというわけか」

「だからいろいろ間違ってるぞ、お前。シャル、『1』からな」

「えっ！う、うん。えっと……」

「ダウト」

「えー！まだ出してないじゃない！」

「動揺しすぎだ、シャル」

「あたしの番ね！えっとー……そうね……『1』……かな？（ちらっ、ちらっ、ちらっ、ちらっ）」

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

「ちょっと！何よその可哀想な人を見るような目は！」

「いや、なんかもうこっちが恥ずかしい」

「私の番ですわね。『2』ですわ？」

「ダウト」

「なっ！し、信さん！強すぎませんか！？」

しばらくトランプに夢中になっていると、信が立ち上がった。

「そうだ！せっかく集まったんだし、一夏の部屋で大トランプ大会でもやるか？」

人数が多いほうが盛り上がるだろ、と続ける。

「うん。僕、行くのかな」

「私も一緒に行こう」

「わたくしも」

「一夏なら勝てそうだしね」

ということ、全員で部屋をあとにするのであった。

「ん？」

「……………」

俺《信》たちは一夏の部屋の前に張り付いている筈にばったりであった。

「なんだ、筈。何してんだ？」

「！し、信！い、いや？別になにも？」

「嘘つけ」

「な、なんでわかるのだ！」

何を今さら。
俺に隠し事は無理だぞ。

「なに？部屋の中でなんか面白いことでも話してるの？」

鈴がそう言ったのを皮切りに、女子が全員ふすまに耳をくっつける。

「……………／＼……………」

「……………何考えてんだよ、お前ら」

ほんのり顔が赤くなった五人に声をかける。
俺もふすまに近付こうとするのだが……

「わ、わわっ！し、信はダメ！」

と、シャルに追い払われてしまった。

仕方なく引き下がり、少し離れたところで聞き耳をたてる。

『……はどっ？』

『はあ……ん……！そ、そこはやめ……っ！』

『大丈夫だよ。すぐに良くなるって。大部分溜まってたみたいだしね』

『あああっ！』

……………。
なるほどね……………。

「……お前らの考えは間違ってると思うぞ。家族でそんなことするわけねえだろ」

とは言ったものの、俺も同じことを考えてしまった。ほんの一瞬だけ。

「べ、別にそんなこと」

筈が否定しようとして口を開くと同時に、想定外の負荷がかかっていた。ふすまが奥に倒れた。

ガコツ！ドシーン！

女子たちはふすまと一緒に一夏の部屋に倒れこみ、俺はただ立ち尽くしていた。

「あれ？みんなどうしたんだ？」

一夏はこの光景が不思議でたまらないという感じである。うつ伏せになっている千冬さんもわずかではあるが『？』となっていた。

「えーと……」

『なんで？』と思われましても……。とりあえず右手に握っていたものを見せて、へらっとなつた。

「トランプしよつぜ」

「まったく、なにをしている。馬鹿者が」

千冬はなかば呆れて目の前で正座している五人に声をかける。その五人とは篤、セシリア、鈴、シャル、ラウラである。

「マツサージ…だつたんですか」

どうやらいろいろと深読みしていたらしい。

「当たり前だろ。お前ら考えすぎなんだよ」

信が『やれやれ』と首を横にふる。

「？みんな何考えてたんだ？」

「一夏。そこは聞いてやるな」

信が一夏を止めるが、ほぼ同時にラウラが口を開いていた。

「それはもちろん男じよ」

ばばばばっ

他の女子四人がラウラの口をふさぐ。

「と、特にどうというわけでは……」

「お、おほほほ……」

一夏は相変わらず不思議な顔で、信は苦笑いだった。

「こいつはこつ見えて、マッサージが上手いんだ」

千冬は一夏を横目で見ながら全員に話す。

「へえ、以外な特技だな、一夏」

「信だってやろうと思えばできるんじゃないか？」

「うん？まあ、マッサージしたことはないが、テレビの特集で見たことはあるな」

「じゃあできるだろ？」

「うーん、多分……」

信が腕を組んで首をかしげている。

「ほづ。ではやってみろ」

面白そうだったので、千冬は信のマッサージを見たくなくなった。

「ムチャ言いますね、千冬さん。今ですか？誰に？」

「誰でもいいぞ。好きなやつを選べ」

『好きなやつ』という言葉に女子四人が反応する。

「えー……じゃあ、セシリアで」

「ほ、本当ですか！？な、なんででしょうか……／＼」

「ほら、埋め合わせ。まだだったから」

「……ああ、そ、そういうことですか……」

少しがっかりした様子でセシリアがうつ伏せになる。

対して鈴、シャルロット、ラウラは安堵の表情を浮かべている。

「えっと……こう、か？」

ぐっ、ぐっ

（ふむ。なかなかだな……）

さすが、見ただけでできることはある。

セシリアも気持ち良さそうに目を閉じている。

ふと、イタズラ心がわいて、千冬がセシリアのお尻を下からすくい上げるようにつかみ、浴衣をめくってみる。

「きゃあああっ！ー！」

「ほう。マセガキめ。年不相応の下着だな。しかも黒か」

「せつ、先生！離してください……！」

セシリアは恥ずかしさで顔を真っ赤にしながら懇願する。
チラッと見えたらしく、信も少し赤くなった顔をセシリアから背けて
いる。

「やれやれ、教師の前で陰行を期待するなよ、十五歳？」

「イ、インコっ……!？」

「冗談だ。……おい、一夏、信。ちょっと飲み物を買ってこい」
信が顔を千冬の方に向ける。

「……えー…俺も話に参加しちゃダメですか？ものすごく面白そう
なんですけど」

どうやら勘づいたようだ。
そして、小声で話を続ける。

(だってどうせ、一夏のことですよね?)

(……半分正解だな)

(またそれすか……)

どうしてこいつはこうなのだろうか？
自分のことも含まれているのにまったく気付いていない。

「しょうがない……おい、一夏。行こうぜ」

「なあ、なんか俺のこと言ってなかったか？」

「気のせいだ」

そう言つて男子二人が部屋を出ていく。

残つたのは全員女子。

うち、教師一人、生徒五人。

……………。

「おいおい、いつもの馬鹿騒ぎはどうした？」

奥の冷蔵庫からとつてきたビールを片手に、千冬が話しかける。

「い、いえ、その……………」

「お、織斑先生とこうして話すのは、初めてですし……………」

「そう緊張するな」

プシュツ！と景気のいい音をたてて缶ビールを開け、ごくごくと喉をならしてそれを飲む。

「ぶはっ！くう〜！！」

いつもと違う『織斑先生』を目の当たりにした女子全員が、ぼかんとしている。

「おかしな顔をするなよ。私だって人間だ。酒くらいは飲むさ。それとも、私は作業オイルを飲むような物体に見えるか？」

ぶーっ!!

そこで、ふすまの向こうから吹き出す声が聞こえた。

／＼あははは！鬼でしょ？千冬さんは／

「おい、信……。あとで覚えておけよ……」

／＼はいはい。……ぶっ、作業オイル飲む物体……あははは！／

ドタドタと廊下を走っていく音が聞こえ、再び静かになった。

「……やれやれ、私もなめられたものだ。手のかかる生徒だ」

そう言いながらも、わずかばかり楽しそうな微笑みを浮かべる千冬を、どこか疑うような目で見る女子たち。

「さて、邪魔物もいなくなったし、本題に入るか。まず、篠ノ之。一夏のどこがいいんだ？」

ドキッ！と体をこわばらせる筈。

「わ、私は別に……以前より腕が落ちているのが腹立たしいだけです」

「そうか。なら、一夏にそう伝えておこう」

「言わなくていいです……」

さらっとそんなことを言われて、筈はぎょっとしてから詰め寄る。

「ふつ、冗談だ。……さて、残りの四人。言われることはわかっているな？」

四人が四人とも、小さく首を動かす。

この流れからいうと、聞かれることは決まっていた。

「……信のどこがいいんだ？」

なにを聞かれるかわかっていても、やはりいざそうになると、四人とも上手く言葉がでない。

「そうだな……鳳。まずお前からだ」

「あ、あたしは……その、そ、側にいてくれるとなんか、こう……心が温かくなるような……」

「お前、最初は一夏が好きだっただろう？」

「そ、そうですね……気付いたら一夏は男友達として好きって感じで……な、なんか……そ、そういう感じですよ」

後半がしどろもどろになって、鈴は無理矢理会話を切り上げる。

「そうか。……オルコットも一夏が気になっていたんじゃないかなか？」

「……わ、わたくしは……信さんに本気で怒られたときの……そのときの目がつっても本気で……」

「あいつも怒るのか。意外だな」

「……まるで、自分のことのように親身になってくれて……そういう主張がハッキリしている、意思の強い男性が……」

「好きだ、と」

千冬が言葉を引き継ぎ続けると、セシリアは顔を赤くしてこくこくとうなずいた。

「お前は？」

シャルロットをあごで指す。

「ぼ、僕　あの、私は、信に『絶対にお前を守ってやる』って言われて……それで、とっても幸せで……」

シャルロットが恥ずかしそうに、でも嬉しそうに話を続ける。

「だ、だから、これからもずっと隣にいて守ってほしいって……」

「なるほどな。ほら、最後」

ラウラがびくつと身をすくませながら、言葉を紡ぎ始めた。

「し、知らない強さを持っているから……でしょうか……」

「どんな強さだ？」

「そ、それがわかりません……。だ、だからもっと信のことを知り

たい……です……。それに、信は私を……ぜ、絶対に、ひ、独りに
しない、と……」

もじもじとしながらラウラが消えてしまいそうな声を出す。

「まあ、あいつは何をさせてもそつなくこなすだろうし、思いやり
もある。しかも強いな。ほぼ完璧だ。一夏だって、そこらの男より
はいい方だ」

女子たちの真剣な眼差しが向けられ、それを見た千冬がニヤリと笑
う。

「どうだ？あの二人、ほしいか？」

とたんに五人の目が輝く。

「……………くれるんですか!?!……………」

「やるか馬鹿」

「……………ええ……………」

全員、あからさまにがっかりした声を出す。

それを見た千冬が満足そうに笑う。

「女ならな、奪うくらい気持ちで行かなくてどうする。自分を磨
けよ？ガキども」

グビツとビールを口に流し込む。

「あ、あの……ところで先生」

控えめに口を開いたのは筈だった。

「ん？なんだ？一夏のことでもまだなにかあるのか？」

「いつ、いえ！信のことなんですが、いつもは『真宮』って呼んで
ませんでした？信も『織斑先生』でしたよね？」

「ああ、そうだが？」

それがどうしたというのだろうか？
別に気にすることもないだろうに。

「ちつき……」

「お互いに名前で……」

「『信』、『千冬さん』と……」

「呼んで……」

「ましたよね？」

女子全員が詰め寄る。

「そうえば、そうだったな」

「ど、どうしてですか？」

「そうだな……。互いに気を許している証拠じゃないか？」

そんな言葉に哑然とする一同。

その顔が面白くて、さらにからかいたくなった。

「もたもたしていると、私が貰ってしまっぞ？」

そう言って笑い声を上げる千冬はやはり、いつもの『織斑先生』とは別人だった。

24：お酒を飲むと気が大きくなるけどあんまり無責任なこととは言っちゃ駄目

千冬さーん!!

酔ってる!

酔ってるよ!

25：へらへらしてる人って実は切れ者（前書き）

やっぱり人数が多いときは大富豪が一番ですね（・・）

25：へらへらしてる人って実は切れ者

翌日。

俺《一夏》と信は旅館の廊下を歩いていた。

「いやー、昨日は盛り上がったな。大富豪」

「お前、強すぎんだよ。あのタイミングで革命されたら勝てないって」

あのあと、飲み物を買って部屋に戻り、信の持ってきたランプで大富豪をしたところ、全員が全員（千冬姉はまず参加しなかったの除外）、信に一勝も出来なかった。

「そりゃー出たカード全部覚えてるからな。いいタイミングで出せるさ。それに俺はもともと運がいいんだ」

『運も実力のうち』というが、実力があってこそ、運がついてくるのだ。

信はそれだけ強いということだろう。

でもそれを差し引いたって、手札にジョーカーが二枚、2が四枚、残りがエースってどうよ……。

「まあ、あれは俺も驚いたな」

「俺は軽く怖かったよ……」

そんなことを言いながら廊下を進んでいくと、箒がしゃがんで何か

をじつと見ていた。
その目線の先には『ひっぱってください』という立て札と、ウサミ
ミがあった。

「なあ、箒。これってもしかして……」

「知らん。私に聞くな」

そして、すたすたと歩って行ってしまった。

「まったく、そんなに姉が嫌いなのか？あいつは」

「信、わかるのか？」

「まあな。さ、引つ張れよ」

信に促され、ウサミミに手をかける。

よし、せー……のっ！

スポッ！

あれ？

「うわっ！」

思いの外軽く抜けたので、勢い余ってしりもちをつく。

「あら？何していらっしやいますの？」

「いや、気にすんなセシリア」

信とセシリアが俺の横に立っていた。

「人が地面に埋まってるわけないだろ。何アホなこと考えてんだ」

「いや、あの人ならやりかねない……」

「そうなのか？随分とハチャメチャな」

キイイイン……

う？

なんだ、この、何かが高速で向かっているかのような音は

ドカーン！！

深く考える暇もなく、謎の飛行物体は地面に突き刺さる。
しかも、形が……。

「にんじん……？」

「にんじんだな」

「にんじんですわね」

俺、信、セシリアの三人ともこの形がにんじんであると認定した。

／＼あっはっははは！うふふ！／／

プシューッ！パカッ！

中から笑い声が聞こえたと思うと、突然にんじんが真っ二つに割れ、噂の天才、篠ノ之しののたばね 束さんが出てきた。

「ひっかかったね、いっくん！バイバイ！」

「お…お久しぶりです。束さん……」

「うんうん！おひさだねー。ほんつとうに久しいね〜。ところでいっくん、篝ちゃんはどこかな？」

「えっとー……」

「ま、私が開発したこの篝ちゃん探知機ですぐみつかるよ」

どうやらさっきのウサミミはその『篝ちゃん探知機』だったらしい。ダウジングロットのように使うものではないと思うのだが…。

「あつ！君だね〜！いっくんの他にISを操縦できちゃう男の子って。名前は？」

「……真宮 信…です」

「ふうーん。じゃあ今日から君は『しーくん』だ！はい、決定！じゃあね、二人とも。またあとでね〜」

ビューッと走り去っていく束さん。

メチャクチャ速い。

ふと信を見ると、固まっていた。

「やっぱり初めての人は驚くよな。……あれ？でも東さんが興味を見せるなんて、滅多にないことだな。良かったじゃないか、信」

「……………」

「……………信？」

「……あつ、ああ、悪い。す、少し驚いてな……………」

ニコツと笑ったつもりなんだろうが、何だか顔色が悪く、ひきつった笑顔だった。

「大丈夫か？」

「あ、ああ。すぐ元気になるよ」

まあ、信が大丈夫なら大丈夫なんだろうが……。

「あ、あの一、一夏さん？さっきの方は……………」

「篠ノ之 束さん。篝の姉さんだ」

そう。

篝の姉にして、天才。

ISの開発者、篠ノ之 束。

今回は何しに来たんだろうか……。

しかも顔面。

それでも構うことなく、東さんは飛びかかるつもり。

「やあやあ！ちーちゃん！会いたかったよ！さあ、ハグハグしよう！愛を確かめよ」

「うるさいぞ、東」

「相変わらず容赦のないアイアンクローだねっ」

すっと拘束から抜け出し、今度は隠れるようにしゃがみこんでいる
箒に話しかける。

「じゃじゃーん！やあ！」

「……どうも」

「えへへ、久しぶりだね。こうして会うのは何年ぶりかなあ。大き
くなっただね、箒ちゃん。特におっぱいが」

「がんっ！」

箒がどこからともなく木刀を取り出して、思いっきり東さんを殴つ
た。

「ていうか本当にどこからでてきたんだ、その木刀。」

「殴りますよ」

「殴ってから言ったあー……。箒ちゃんひどーい！ねえ、いっくん、
ひどーいよねっ」

俺に振らないでください。

「東、自己紹介くらいしろ」

「えー、めんどくさいなあ。私が天才の東さんだよ、はるー。終わりー」

うわ、適当だな。

「うっふっふっ。さあ、大空をご覧あれ！」

ビシッと直上を指す東さん。

全員がそれに従って上を見上げる。

ひゅー……ズズーンっ！

突然、金属の塊が落ちてきた。

「じゃじゃーん！これぞ篝ちゃんあかつはなの専用機、紅椿！全スペックが現行ISを上回る、東さんお手製だよ！」

東さんがリモコンらしきもののスイッチを押すと、金属の塊が消えた。

代わりに、その中身であろう、真紅の装甲のISが目の前に現れた。

「なんとって紅椿は天才東さんが作った『第四世代型』ISなんだよー！」

「第……四……？」

「各国でやつと第三世代機の試験機ができた段階ですわよ……?」

「それが……もう……?」

「そこがホレ、天才東さんだから。さあ、篝ちゃん、今からフィッティングとパーソナライズを始めようか」

ピッピッ、ピッ……

「ほい、フィッティング終了。ちょー早いね流石私!んじゃ、試運転もかねて飛んでみてよ。篝ちゃんのイメージ通りに動くはずだよ」

「ええ。それでは試してみます」

篝がまぶたを閉じて意識を集中させると、ふわりと紅椿が浮いたと思うと、次の瞬間にはもの凄い速度で飛翔した。篝の姿を白式のハイパーセンサーが捉える。

「なにこれ……速い……」

「これが、第四世代の加速……ということ?」

鈴とシャルロットが驚きの声をもらす。

俺は驚き過ぎて、声が出なかった。

「どつどつ？ 箒ちゃんが思った以上に動くでしょ？」

『ええ、まあ……』

ISのオープン・チャネルでの会話が飛んでくる。

「じゃあ刀使ってみてよー。右のが『あめつき雨月』で左のが『かひわれ空裂』ね。武器特性のデータ送るよん」

データを受け取った上空の箒が、しゅらんと二本の刀を同時に抜き取る。

そして箒が雨月を振ると、周囲の空間に赤色のレーザー光がいくつもの球体として現れ、そして順番に光の弾丸となって漂っていた雲を穴だらけにした。

『おおー……』

箒の感嘆の声が聞こえた。

「うんうん、いいねー！ じゃあ次はこれね」

束さんが言うなり、いきなり十六連装ミサイルポッドを呼び出す。

光の粒子が集まって形を成すと、次の瞬間一斉射撃を行った。

ミサイルが箒に向かって飛んでいく。

今度は空裂を箒が振ると、帯状の赤色のレーザーがミサイルを撃墜した。

「なんか信の隴火に似てるな？」

「……………」

信の表情は硬く、俺の言葉は耳に入っていないようだ。

「うんうん！いいね、いいねー！あはははー！」

嬉しそうに笑う束さんを見つめている千冬姉の表情も硬い。二人とも、敵を見ているみたいだ。

「えっと、次はー……………しーくん！！！」

ビシッと指差す束さんを見て、信はさらに表情を硬くした。

（何なんだ、この人は！）

俺《信》は混乱していた。

いつもなら、見ただけで人が何を考えているか、大体わかるけど、この人は違う。

わからないのだ、まったく。ひとつとしてわかることがない。

「お、俺は遠慮します……………」

「ええー、いいじゃーん。瞬光のデータ取りたいんだもーん」

それに、この人が怖い。

怖くて仕方ない。

なぜだ？

こんなに笑っているというのに、なぜだ？

「ねえねえ、いいでしょ？」

ずっと俺の体に触ろうとする。

「ッ！触るな！」

反射的に叫んでしまった。

突然出した大声のために全員の注目をあびる。

東博士はちよつとだけ驚いたような顔をしていたが、すぐにまた笑顔になった。

「もー、照れちゃってー。大丈夫、許してあげるから」

うふふと笑いながら、俺の耳元に口を寄せる。

そして、俺だけが聞き取れるくらい小さな声でささやく。

「でも次は気を付けてね。君は私の手のひらの上にいるんだから……」

「？何を　　！？」

ドクン…

キイイイ！！

突如、心臓がわし掴みにされているような感覚と、激しい頭痛が俺

を襲つ。

「がつ……………!?!?」

「信!?!?」

膝をついて四つんばいになる。

頭が割れる……………!

苦しい……………息ができない……………!

「ぐうっ……………なんだ?」

びたっ……………

そしてすぐに、始まったときと同じくらい突然、痛みが無くなる。

「信!?!大丈夫!?!?」

顔を上げるとみんなが心配そうに俺を見ていた。

東博士を除いて。

「東!お前何をした!」

「なーんにも?ね、しーくん?」

東博士は織斑先生を意に介さず、俺に笑顔を向けた。
よろよろと俺は立ち上がる。

「だ、大丈夫です……………先生……………ちょっとめまいがしただけです……………」

みんなに心配はかけたくない。
そんな不安そうな顔はさせたくない。
そう思つて精一杯の笑顔をつくつた。

「じゃあ、しーくん？瞬光の性能、見せてくれる？」

「……………」

俺は無言で、瞬光を展開させる。

そして、戻つてきた筈と入れ替わりで上空へ飛び立つのだった。

「信、大丈夫かな……………」

俺《一夏》の後ろでシャルロットがポツリと言う。

束さんが何かボソボソと信に言ったあと、急に信が苦しみ出した。

あれは一体なんだったんだろうか……………。

みんなと一緒に、空を飛んでいる信を目で追っていると、束さんが信に指示を出した。

「はぁーい、もういいよー。じゃあ次は隴火でミサイル撃破してね
」

『……………わかりました』

先程よりは元気を取り戻したらしい信が右手に隴火を展開した。

「よし、いつけえ！」

号令とともに、十六連装ミサイルポッドキャストから再びミサイルが放たれる。

信はそれを隴火を一振りして、撃墜する。

「流石、空裂と雨月のモデル！やっぱオリジナルは攻撃範囲も威力も違うね」

『……………』

「説明しよう！『霞がかつた隴火のように変幻自在、そして不透明。燃え上がる火のようにその勢いはとどまるところを知らず、知らぬ間にすべてを焼き尽くす』。これが隴火の特徴なのだー！」

「姉さん、隴火がオリジナルというのは……………？」

すでに紅椿を待機状態に戻した篤が束さんに聞く。

「うん！紅椿はね、瞬光の機体特性とか武器データを参考にしているところがあるんだよ、篤ちゃん。束さんがいろいろいじったら瞬光使いづらくなっちゃってね。スペックはずば抜けてるのに、お蔵入りになっちゃったんだ。うーん、残念」

そのときのことを思い出しているのだろうか、しみじみと首を縦に振る束さん。

「でもね、しいくんがうまいこと使いこなしてくれたからいっぱいデータが取れたんだ！それをもとに篤ちゃんが使いやすいように考えて作ったのが紅椿ってわけ。しいくん、ありがとっ！」

『……かまいませんよ、別に。そろそろいいですか？』

ミサイルを早々に撃墜したので、暇をもて余していたらしい。それに、どこかよそよそしい口調だ。

「えー！まだまだ！ところでしーくん、リミッターは外せるの？」

『……………なんのことですか？』

「またまた〜。この天才東さんが自ら手掛けた機体のことを知らないはずないでしょ？わかってるくせにー、もー」

『なんでもお見通しですか……………』

「まあね〜。じゃ、今のところの全力でこれ撃墜よろしく」

先程までのミサイルポッドが消え、代わりにミサイルポッドが出てきた。

ただし、八一連装×……………あれ？

「ちょっと東さん！？何個あるんですかあれ！」

「えっと、百くらい、かな？」

てことは……………8100発！？

『……………』

信が左手を横に振ると、右手にあるのと同じように、剣状の隴火が

「これで満足ですか？」

「あー、またそんなこと言って。東さん怒っちゃうぞ、ぶんぶん！」

笑顔の束さんとは真逆に、信はいつもとは別人のような顔だった。まるで、強敵と対峙している戦士のようだった。強い警戒心と懐疑心。それが全面に押し出されていた。

「お、織斑先生〜！」

山田先生がこちらに駆けてきた。何やら急用らしい。

「こっつ、これをつっ！」

「特命任務レベルA、現時刻より対策を始められたし……。テスト稼働は中止だ！お前たちにやってもらいたいことがある」

え？

俺たち？

してもらいたいこと？

何させられるんだ？

「なんか面倒くさそうだな」

信が俺の隣に立つ。

少し微笑むその横顔は、いつも通りの信だった。

「お、元に戻ったな」

「最初から俺はこんな　ああ、そうだな、あの人の前では違かったな」

俺の表情を見て、『確かに』とうなずく。

「心配いらねえよ。もう大丈夫だ」

「そうか？ならいいんだが……」

俺と信は先に歩き出した織斑先生を見失わないうちに、その場をあとにする。

しかし、やけに千冬姉が厳しい表情な気がする。

まあいつも厳しいのだが、今回はまた違う雰囲気が出ていて、なんだか不安になった。

「……気を付ける。箒、浮かれてるぞ」

信が突然ボソツと言った忠告が、さらに俺の胸をざわつかせるのだった。

25：へらへらしてる人って実は切れ者（後書き）

東さん登場！

ISの物語はこの人なしでは語れませんよね／（^^）／

26・戦いでは一瞬の油断すら許されない(前書き)

バトルシーンが下手くそなのはスルーをお願いします……………orz

26：戦いでは一瞬の油断すら許されない

「では、現状を説明する」

俺《信》たち専用機持ちは全員、一つの部屋に集められていた。

周りには畳に似合わない電子機器が集められ、IS学園の教師たちがパネルに表示される情報を食い入るように見ている。

照明を落とした薄暗い室内の中心に、ぼうつと大型空中投影ディスプレイが浮かんでいる。

「二時間前、ハワイ沖で試験稼働にあつたアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型軍用IS『シルバリオ・ゴスベル銀の福音』、通称『福音』が制御下を離れて暴走。監視空域より離脱したとの連絡があつた」

大変なことがあるもんだな、と聞き流せたらどんなによかつただろうか。

先生と各国代表候補生の厳しい顔、それにこのはりつめた雰囲気から導き出される結論はただひとつ。

「俺たちで何とかしろってことですか？」

「そつだ。衛星による追跡の結果、福音はここから二キロ先の空域を通過することがわかつた。時間にして五十分後。学園上層部からの通達により、我々がこの事態に対処することとなつた」

(はぁ……面倒くさ……)

「教員は学園の訓練機を使用して空域及び海域の封鎖を行う。よつて、本作戦の要は専用機持ちに担当してもらつ」

「ええっ！」

「うっせーぞ、一夏」

隣で一夏のが『何言ってるんだ？』と困惑しているが、丁寧に説明してもさらに困惑しそうだったのでスルー。

「それでは作戦会議を始める。意見のあるものは挙手するように」

「はい」

セシリアが手を挙げる。

「目標ISの詳細なスペックデータを要求します」

「わかった。ただし、決して口外するな。情報が漏洩した場合、諸君には査問委員会による裁判と最低でも二年の監視がつけられる」

「了解しました」

ピピピッ

ディスプレイに表示された福音のデータをもとに、早速代表候補生たちが相談を始める。

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型……わたくしのISと同じく、オールレンジ攻撃を行えるようですね」

「攻撃と機動の両方を特化した機体ね。厄介だね……」

「この特殊武装が曲者って感じはするね。連続しての防御は難しい気がするよ」

「このデータでは格闘性能が未知数だ。偵察は行えないのですか？」

いつものような和気あいあいとしたお喋りではなかった。

なんでこんなに、女の子に似合わない会話をしているんだろうか？

そんな厳しい顔をせずに、笑っていてほしい。

俺はそんなことを思っていた。

「無理だな。この機体は現在も超音速飛行を続けている。最高速度は時速二四五 キロを超えるとある。アプローチは

「俺が行ってきますよ」

考えるよりに口が勝手に動いた。

視線が俺に集まる。

うつ……！

驚きの表情を見せるみんなに一瞬圧倒させられる。

いや、負けるな俺！

「俺ならこいつに追い付けます」

「真宮、相手は軍用ISだ。わかっているのか？」

「わかっています。だから、俺は偵察だけ。あとは確実に撃墜できるやつに任せます」

「……？なあ、信。それって誰だ？」

「一撃必殺の威力の攻撃力を持った機体を持つてるやつだ」

「ここまで言ってもまだわかっていない。

しっかりしてくれよ、一夏。」

「俺は偵察。お前だよ、お前。瞬光は追い付くのでエネルギー的に限界だ」

「え……？」

「一夏、あなたの零落白夜で落とすのよ」

「それしかありませんわね」

「問題はどうかやって一夏をそこまで運ぶかだね。エネルギーは全部攻撃に使わないと難しいだろから、移動をどうするか」

「信以外の目標に追いつける速度が出せるISでなければいけないな。超高度ハイパーセンサーも必要だろう」

「どんどん作戦に必要な具体的なものが出てくる。」

「ちよっ、ちよっと待ってくれ！お、俺が行くのか！？」

「……当然」「……」

「ユニゾンで言うな！」

「織斑、これは訓練ではない。実践だ。もし覚悟が無いのなら、無理強いはいしない」

「一夏、聞こえはいいが『逃げるんなら今のうちだ』ってことだぞ？男が逃げ腰じゃ、かつこつかないよな？」

こんなこと言われて黙って引き下がるような一夏じゃない。それは一夏自身も知っているし、俺もわかってる。

「当たり前だ。……やりませう。俺が、やってみせます」

「よし、それでは」

「待った待ったー！！」

天井から声が聞こえた。

「とっつ」

くるりと空中で一回転して着地したのは東博士だった。自然と体がこわばる。

「ちーちゃん、ちーちゃん。もつといい作戦が私の頭の中にナウ・プリンティングー！」

「……出て行け」

頭を押さえている織斑先生を揺すりながら話を続ける。

「聞いて聞いてー！ここは断・然！紅椿の出番なんだよっ！」

「なに?」

…………… 本当に束博士は何を考えているんだろうか。
俺は言い知れぬ不安を胸に抱いていた。

『真宮、聞こえるか』

「はい」

ISのオープンチャネルを通して織斑先生の声が聞こえる。
束博士の進言により、俺による敵機の偵察のあと敵機を撃墜する、
と言ったものになった。

『やっぱり少しでも情報は多い方がいいからね。頼むよ、しーくん!』と言われた。

撃墜組の構成は一夏と箒。

一夏はもちろん攻撃力を、箒は速さで選抜された。

『どうした?緊張してきたか?』

「ははっ!からかわないでくださいよ」

『……………真宮、今回のお前の任務は偵察だ。あわよくば撃墜してやる、
なんて思っなよ』

いつも厳しい織斑先生が心配してくれていると思うと、普通より人

の優しさが感じられるのだった。

「さあ？どうですかね？」

あはは、と笑いながら冗談を言ってみる。

『ちょっと！あんた何言ってるのよ！』

『信さん！しっかり偵察してきてくださいね！』

『手柄、横取りしようなんて思ってないよね？』

『まあ、お前なら一夏ほど弱くはないから大丈夫だろう』

『ええっ！ラウラひどくないか！？』

『一夏、本当のことだろう？さっ、早く準備に取りかかるぞ！』

なんか調子狂うな……………。

一応実戦だからね？
わかってる？

『と、いうわけだ。お前からの情報をもとに最終調整を行い、撃墜作戦を開始する。頼んだぞ、真宮』

「了解です……………リミッター解除」

リミッター、解除。

「……………よし、行くぞ！」

そうして俺は暴走した敵機のもとへむかうのだった。

ディスプレイには福音の現在地が赤色で、瞬光の現在地が青色で表示されていた。

それに加え、瞬光のリアルタイム映像が画面に映し出されている。

「これ……速すぎ……よね？」

「まだ何分もたつてないよ……」

青色の印は氷の上を滑るように素早くなめらかに動いている。すでに赤色の印は目前だ。

『目標確認。接触まであと残り二十秒です』

オープンチャネルから信の声が聞こえる。

『あと』

ピピピッ……

「織斑先生！後方から未確認ISが高速で接近中！この速さは……」

山田先生が焦りの表情を見せる。

ディスプレイにふつとわいて出たような新たな点滅が、信に迫る。

「真宮！後ろだ！」

『後ろ？こちらに反応は』

ヒュッ、ドンッ！……！！

『！？ぐっ……！！』

何かがぶつかるような音がして、瞬光が吹き飛ばされた。

「えっ……！！？なに、この数……！」

全員の視線がディスプレイに向けられる。

青色の印を、四つの新しい赤い印が取り囲んでいた。

「！！作戦中止！真宮、離脱しろ！」

『いてて……。織斑先生、聞こえますか？』

「聞こえている！真宮、離脱するんだ！」

千冬が大声を出す。

『……ダメだ、繋がらない』

「真宮くんがいるエリア全域に特殊な妨害電波を感知！こちらからの通信は不可能です！」

「なんだと……!?!」

『何なんだよ、お前ら。懲りずにまた来たのか?』

信が未確認のISたちに話しかける。

モニターに敵が映る。

「あいつは……!」

敵は全部で四機。

この前のクラス対抗戦のときに現れた無人ISが、無表情に立ちただかっていた。

『無駄だ。お前らの攻撃パターンはもう通用しない。俺には勝てないぞ』

バチッ、バチバチバチッ!

突然相手のIS四機のうち、目の前に立っている一機から電撃が発せられる。

どろどろした黒い塊になり、新たに姿を変える。

『……おいおい、冗談だろ……』

全員、特に一夏とラウラは背筋が凍った。

「ヴァルキリー・トレースVTシステム……!」

世界最強の操縦者、織斑千冬のコピー。

部屋にいる全員が固まる。

誰も、何も言えない。
言葉が見つからない。

『ちっ！こりゃ、偵察…無理そ…だ……』

「！？ぼ、妨害電波、強くなってきました！完全に遮断されそうです！」

信が両手に朧火を展開する。

そして体の前で光る剣を二本、構える。

それを最後に映像が途絶えた。

『み…な……めん……福……は…頼ん……』

ザッ、ザーザッ……

「……通信、映像、完全に遮断されました……」

ノイズの音が沈黙によく響いた。

「そ……んな……」

いくらなんでも四対一では無事に済むはずがない。

「妨害電波の解析急げ！通信が回復しだい、増援を向かわせる！」

千冬の命令が沈黙を破る。

「ま、待ってください織斑先生！それっていつまでかかるんですか？もしも……」

もしも、間に合わなかったら。

何に間に合わないのか、想像もしたくなかった。

「教官！私が増援に向かいます！」

「僕たちも！」

ラウラとシャルロットが叫ぶ。

「見る。現在地の特定すら不可能になっている。これ以上、危険をおかすわけにはいかない」

ディスプレイに表示されているのは、何事もなかったように動いている赤色の印一つだけだった。

「でも……！」

「織斑、篠ノ之。すでに福音は作戦空域に入った。作戦を変更し、福音の撃墜にあたる」

「信は！？信はどうするんですか！」

「あいつなら大丈夫だ、一夏。見たらどう？あいつは紅椿よりも強いのだ。きつと何とかしてくれる」

篤が一夏の肩を掴み、さらに言葉を続ける。

「今回は福音の撃墜が目的だ。今、福音を落とせるのは私たちだけ、そつだろっ？」

「箒の声にはわずかに、本当にわずかだが、『早く実戦で力を発揮したい』という願いがこもってた。その心を読み取れるとしたら、それは信だけだろう。内に秘めた箒の気持ちに誰も気付かないまま、織斑先生が命令を下す。」

「これより福音の撃墜に移る！準備が出来しだい、作戦を開始する！」

そして、再びモニターに視線を戻す。

一夏も箒もセシリアも鈴もシャルロットもラウラも信のことを気にかけながら、それぞれの出来る精一杯のことをするため、部屋をあとにしたのだった。

「まったく、面倒なことばっかだ……」

俺《信》は苦い表情をする。

実を言うと、息をするたびにわき腹が痛む。

先程の突撃であれば骨が何本か折れたか、少なくともヒビが入っているはずだ。

絶対防御のおかげでなんとか耐えられたが、代わりにエネルギーをこっそり持っていかれた。

「仕方ない。売られた喧嘩は買うしかねえよな」

相手は四体。

対するは手負いの自分一人。
まったく嫌になる。

「来いよ。『量より質』って言葉、証明してやる」

とたんに、無人機三体が素早く動いた。

一機は突進、残りが正確な射撃で俺の行動範囲を制限する。

「くっ！」

突進してきたやつにカウンターをくれてやると、そのISはすぐさま離脱し、後ろのやつらの援護射撃が俺を襲う。

瞬光から送られて来たデータの値は、かなり俺を焦らせた。

(まずい……………かなりスペックが向上してる)

ビームの出力も機動力も、この前と同じと思っていたら、負ける。
放たれたビームのわずかな隙間をぬいながら、衝撃波を飛ばす。

ヒュンヒュンと二機が回避行動をとり、目標を失った斬撃は空中で消えた。

「ちっ！距離がありすぎる……………！」

一気に縮めるため、瞬時加速を行うと、ミシミシと体とくにわき腹の骨が悲鳴をあげた。

(リミッターを解除した瞬光に俺がついていけない……………！)

痛みで機体の制御がぶれ、降り下ろした隴火が空を裂く。

その隙を見逃さず、敵がゼロ距離で熱線を浴びせてくる。反射的に手を交差し防御体制をとるが、ただの気休めでしかない。次の瞬間、俺の視界が大きく揺れた。

「ぐうつ……！」

絶対防御発動、エネルギー消費大

「くそっ！わかってる！」

ビームの直撃による衝撃で吹き飛ばされながら、隼火の形を槍に変えて伸ばす。

グサツ！

今しがた光線を撃ったやつを、光の槍が貫く。刺されたところからオイルのような液体が流れ出す。

「ギ、ギギギ……ガ……」

不気味な声をあげながら、再びチャージを始める。

「いい加減諦めろ！」

もう一本、今度は頭部に槍が突き刺さる。

とたん、隼火の先端から無数の針が飛び出す。

その針に全身を貫かれ、力を失ったISの腕がだらりとたれる。今度こそ、完全に動きが止まった。

「まず一機」

臙火を剣に戻すと、槍の支えを失ったISはそのまま海へ落下。

ドオオオーン!!

落下地点から水柱が上がる。

だがゆっくりと勝利の余韻に浸かる暇はなかった。

ピピピッ!

斜め右から敵機接近

頭上に高エネルギー反応を検知

瞬光の情報が届くと同時に急降下し、敵の右ストレートをかわし、照準をずらす。

ビシユウウ!

俺の数センチ右をほのかに赤みがあった光線が通り過ぎる。

「なめんな!」

高速で急上昇、敵と直線上に俺が並ぶ位置に到達する。

とっさに迎撃しようとして振り向いた敵のセンサーアイがとらえた太陽は、ほんのわずかな間だけ敵の視界を真っ白な光で埋め尽くす。そのわずかが欲しかった。

ザシユ…!

「!?ギギ……!」

突如上空から飛来した俺に反応しきれず、真つ二つにされる。

「遅えよ、デカブツ」

ISの破片が爆発により広範囲に散らばり、爆煙が俺の視界を遮る。

バシユ!

「!?ぐつ……!」

とつさに体を捻るも避けきれず、左手が熱戦に包まれる。

左腕装甲、ダメージ大

瞬光が被害状況を伝えてくる。

「最大出力!一気に決める!」

瞬時加速で相手に近付き、交差した剣を振り抜く。

爆煙のおかげで、相手の反応するタイミングがコンマ一秒くらいずれた。

それで充分だった。

「うおおおおお!」

降り下ろした隼火を伝わる確かな手応えと、後ろの爆音が俺に勝利を知らせ、同時に瞬光の活動限界を伝える警告が表示された。

警告。エネルギー残量15%

「はあ……はあ……はあ……っ痛……！おい、そのラスボス。次はお前だ」

それらしく腕を組んで仁王立ちしていた織斑先生のコピーが右腕を前につき出す。

展開粒子の光が収束し、『雪片』のコピーが現れる。こちらも本体と同じく、真っ黒だ。

「エネルギーが限界なんでね……」

エネルギーはすでに底が見えていた。

今までに無いほど長時間の高速戦闘、及び朧火の使用が堪えている。このままだと最悪の場合、生身で海へ落ちるか、そのまま一刀両断されるか。

どちらもごめんだ。

俺は剣を右手だけに展開し、構える。

双剣を構えていられるほどのエネルギーはもうない。

(相手にダメージを与えられる回数は……二、いや、一だな……)

互いに剣を構え、にらみ合う。

生暖かい向かい風が俺の集中力を乱そうとしているようだった。

ピピッ……

敵ISから信号受諾。

数字が『3』と表示された。

どっちらカウンタダウンのようだ。

「親切にどうぞも」

3

「」
「」
「」
「」

2

「」
「」
「」
「」
「」

1

(…来るっ!!)

「」
「」
「」
「」
「」

突如、相手が無言で斬りかかってきた。
まばたきをしていたら間違いないくやられていただろう。
そのくらい速かった。

「!!」

ガキイイン!!

「」のっ…!!

チリチリと重ねた剣同士が小刻みに動く。

力が拮抗していて、気を抜いたら負ける。
それがひしひしと伝わってきた。

「おらあああ!!!!」

雄叫びと共に無理矢理敵を退けると、相手が一度距離をとろうと後退する。

「逃がさねえ！」

瞬時加速ですぐに間合いを詰めるが

ゴスッ!

「!?!ごはっ……!!」

みぞおちを思いきり剣の柄でつかれた。

いや、『置いてあった剣の柄に俺がぶつかっていった』と言っほっが正しい。

相対速度の関係でダメージと衝撃が通常よりも大きく、意識の手綱を手離しそうになる。

(こいつ……これが狙いでわざと距離をとりやがったのか!?)

瞬間、全身の毛が逆立った。

恐怖、危険、回避

三つの単語が頭の中を駆け巡り、すぐさま離れる。

そのあとすぐに俺の頭があった場所を黒い剣が通り過ぎ、さらに突きをかましてくる。

「うお!？」

耳元で鋭い剣先が風を切っている。
敵は執拗に俺の頭を狙ってきていた。
まるで、ここで仕留めたいかのように。

ビッ!

わずかにかすった頬から血が流れる。

「何!？」

後方に瞬時加速し、間合いを空ける。

おかしい。

IS操縦者は絶対防御により生身の体は保護される。

それなのに、肉体に直接ダメージが与えられるだと……? ?

確かに、そういう武器があるとは聞いたことはあるが本当に実在するとは……。

ぐいっと右手で頬の血を拭う。

「……現在のダメージレベルは？」

ダメージレベルC・オーバー。シールドエネルギー、残り8%

高速戦闘活動限界予測、およそ十秒

隴火、具現化限界到達まで十五秒

このエネルギー残量ならあっても無くても変わらないだろう。
覚悟決めるか。

「…………全シールドエネルギーを臙火に」

了解。……………エネルギーの変換、完了しました。具現化限界到達まで残り二四秒

これで俺を守るものは何もない。攻撃が当たれば『死』あるのみだ。だが、なにもしないで死ぬよりはいい。

「…………でも死ねない。俺には…………」

輝きが薄くなつた臙火を構える。

敵も武器を構える。

再び風が俺を撫でた。

「待ってくれてる人がいるんだ!!」

再び瞬時加速で相手に近付く。

相手も瞬時加速を使って俺に突きを放ってくる。

高速戦闘限界まで残り九秒

相手との距離が剣の攻撃範囲に入ったと同時に、世界が遅くなったような感じがした。

ゆっくり。

ゆっくりと相手の突きが俺に向かって飛んでくる。

切っ先が俺の腹に当たる直前

(今だ!!！)

手足のスラスタを全解放して最大出力の瞬時加速。
前後ではなく左右に移動するための。

高速戦闘限界まで残り八秒

相手の左側に回り込み、がら空きの懐に狙いを定める。

「落ちろー!!」

ズバツ!

「ギが……?ガ……」

両断されたISに紫電がはしる。

(終わった……)

つい、気が緩む。

そして、とっさの反応が遅れた。

ズブツ……

右わき腹の鋭い痛み。

相手が最後の抵抗として、俺を刺したのだった。

「ぐつ……!?て……めえ……!」

ポタポタと赤色の液体がはるか下の海面に落ちる。

熱源反応検知。離脱行動を最優先。

指示に従い、退避する。

ドオオオーーン！！

刹那、敵が爆発の中に消えた。

「ゴホツ、ゴホツ……うつ……！はあ、はあ……くっ！」

IS本体が消えたというのに、剣は俺に刺さったままだった。だがこれは不幸中の幸いだった。

もし消えていたら、大量出血ですぐ意識を失っていただろう。

俺はとりあえず可能な限り動きやすくするため、ある程度の長さで真っ黒な剣を切り、短くする。

それで臙火に回したエネルギーが底をつき、光の粒子は霧散した。

『ザツ……！ザザ……ま……くん……ザツ！……みやくん！聞こえますか！？』

山田先生の声が聞こえてきた。

どうやら回線が繋がったらしい。

『真宮くん！！聞こえますか！？』

「聞こえています……」

なるべく元気な様子を装って、返事をした。そう聞こえたかはわからないが。

「よかった……！本当によかった……」

山田先生が涙目になりながら安堵する。

『すみません、心配かけて……。全機撃墜しました……。ゴホッ！』

「真宮、怪我は無いか？」

千冬が山田先生の代わりに信の無事を確認する。

『大丈夫……です……。かすり傷……ですよ……。？』

変に息切れしている信を怪しく思ったが、あえて口には出さなかった。

「……真宮、まだ動けそうか？」

『どうか……しましたか？』

「……織斑と篠ノ之が撃墜された」

沈黙が広がる。

いやな沈黙だ。

『助けに行きます……どんなことがあっても……ポイントは……？』

「今座標を送る。真宮、頼んだ」

オープンチャネルの向こう側で信がふふつと笑った。

『…こんなときでも先生は変わりませんね……素直に言ってくださいよ……水くさいな……』

千冬は心を見透かされたように思って、なんだか目頭が熱くなった。だがぐつとこらえて、言葉を絞り出す。

「……頼む、信……あいつらを、助けてくれ……」

『わ……かりました……千冬……さん……。位置座標を確認……これよりポイントに向かいます』

ピピピッ……！

先程まで遮断されていた信のデータが送られてきた。

「お、織斑先生！！真宮くんのIS、ダメージレベルCを超えてます……これは……！！」

「……わかっている」

無理に明るく振る舞おうとしていたことなど。

みんなに不安を与えないように、笑顔を作ってたことも。

「救護班は？」

「すでに海岸へ向かっています！」

「私も向かう。あとは頼んだ」

千冬は画面から目を離し、きびすを返して部屋からでていった。

織斑先生の言葉が俺《信》に再び活力を取り戻させた。
不安と憤りと痛みと。

あらゆる感情が俺を突き動かしていた。

警告。稼働率低下

ピピピッ！

ハイパーセンサーが海上に浮かぶ二人をとらえる。
俺は絶句した。

一夏は全身に火傷があり、箒は体にダメージは無いものの絶望の表情が表れていた。

「一夏、箒！」

痛みを忘れ、二人のもとに降下し声をかける。

「信！一夏が……一夏が……！」

「わかってる。さ、捕まれ」

混乱している筈をなだめ、右腕に筈を、左手に一夏を抱える。
可能な限りのスピードで、海面すれすれを飛ぶ。
しばらくして、筈が俺のわき腹を流れる液体に気が付いた。

「信……！お前、怪我を……！」

「たいしたことはねえ。心配しなくても、途中で気を失ったりしない」

「違う！私が心配してるのは」

「筈、わかってる。わかってるから、頼む。そんな顔、しないでくれ……」

それを聞いた筈は黙って、下をうつむいた。

それから、筈が俺に話しかけてきた。

正直、内容もわからないほどに意識が朦朧としていたので、『ああ、そうだな』『心配するな、そんなことはない』しか答えてやれなかったが、それでも筈が話しかけてくれたことで何とか気絶せずに入った。

海岸につくと、俺は一夏を寝かせ、筈をおろした。

「ぐう………！」

俺自身もとうに限界だったので、瞬光もが粒子となって消えると、その場に四つんばいになった。

「信……！しっかりしろ………！一夏………！目を開けてくれ………！」

涙目になって懇願するような声を出す筈と、ひどい怪我を負った一

夏を見て、俺は腹立たしかった。
二人をこんな風にしたやつが許せなかった。
こみ上げる怒りが俺から再び痛みを忘れさせていた。

「信!!」

ちょうどそのとき、救急隊と織斑先生、それにセシリア、鈴、シャル、ラウラが走ってきた。

「信!大丈夫!?!」

「信さん!?!お怪我は!?!」

シャルとセシリアが俺に駆け寄る。

それに続いて鈴とラウラを俺の横に座る。

「しっかりしなさい!もう大丈夫だから!」

「信!私はここにいるぞ!」

みんなが来て安心したのか意識が途切れそうになる。
必死で意識を留めようとするが、視界がぼやけてきた。

「大……丈夫だ……それより、一夏と箒を……」

俺は隣の二人をあごでさす。

すでに一夏は担架にのせられ、箒も毛布をかけてもらっていた。

「真宮……」

顔を上げると、織斑先生が、立っていた。

自然とみんなの顔も目に入る。

なんだ、みんな。

そんな不安そうな、それでいてつらそうな顔をして。

誰だこんな顔をさせてるのは。

俺がぶつとばしてやる。

こいつらを不幸な顔にしやがった、元凶を。

沸き上がった怒りを力にかえ、立ち上がるうとするがうまく力が入らず、倒れる。

「信！？その怪我……！」

俺をとっさに支えたシャルの手のひらに、べっとりと血糊がつく。

「先……生……ふ、福音……は？」

「わからん。いいから」

「いいわけないじゃないですか……！みんなを悲しそうな顔にしたやつを、俺は許せない……！」

できるだけ大声を発するが、いつもの話し声ぐらいの大きさが限界だった。

「はあ、はあ……俺が撃墜してきます……！」

ぶるぶると膝を震わせて立ち上がる。

腹に力を入れたからだろうか、血の流れる量が少し多くなった。

脚をつたって生暖かい液体が砂浜に染み込む。

気付くと俺が四つんばいになっていた場所は大きな赤色の染みがで

きていた。

「ぐっ……！ぞ、座標は……？」

「信！もうやめて……！」

シャルが俺の足にしがみつく。

「わ、わたしも行かせないわよ！絶対！絶対！行かせない！」

鈴が逆足にしがみつく。

それに続き、セシリアとラウラがガツチリと腕をホールドする。

「信さん……！いけません……！」

「信！これ以上は無理だ！」

すでに俺の視界は何もかもはつきりと見えていなかった。
果たしてこれが現実なのかもわからなかった。

「俺は……大丈夫……。だから……！」

ドクン……！

キィー！

『ダメだよ……みんなの言う通り……これ以上は命にかかわる……』

あの心臓をわし掴みにされるような感覚と、頭痛、さらに見知らぬ少女の声が聞こえてきた。

「なっ！ま……た……！ぐっ……！」

頭を押さえて膝をつく。

周りで俺を呼ぶ声がしたが、答えられない。

『一端休んで……それから話をしよう……』

「うっ！うあああ！……！」

あまりの痛みに叫び声を上げると、目の前が真っ白になった。
そこに立っている一人の少女。

『大丈夫……すぐに会えるよ……』

そこで意識が途切れた。

26・戦いでは一瞬の油断すら許されない(後書き)

男子二名、重傷。

彼らはどうなってしまうのか？

いよいよ次の話で信の過去が明らかになります。

『あり得ない』は禁句だぜ、ダンナ……………(・・)

27：重要なのは戦う意思

「停止していますね…」

モニターに移った福音の現在地を示す印は同じ場所で点滅し続けている。

「本部はまだ私たちに作戦の継続を？」

山田先生が少し批難めいた声を出す。

「……解除命令が出ていない以上、継続だ」

「ですがこれからどのような手を……！？生徒が二人、重傷を負っているんですよ？」

千冬も当然知っているはずのことを口走る。

山田先生の口調はいつもよりわずかに強かった。

こんこん……

＼＼失礼します…／／

「誰だ？」

＼＼デュノアです／／

「待機といったはずだ。入室は許可できない……！」

答える間もモニターからは目を離さない。
千冬が何をどのように考えているのか、誰にもわからなかった。

シャルロット、鈴、セシリア、そしてラウラは作戦本部の目の前にいた。

今さつき入室を断られ、どうしようもなく立ち尽くす。

「教官の言うことを聞くべきだ」

「でも、先生だって二人が心配なはずだよ！」

ラウラの意見に対し、シャルロットがそうじゃなきゃおかしいと言わんばかりに反論する。

「まだ目覚めていらっしやいませんのに……」

「手当ての指示を出してから、一度も様子を見に行っていないなんて……」

何とか二人とも一命をとりとめたものの、依然意識がもどらない。織斑先生も作戦室にこもり、全く出てくる気配がない。

「教官だって苦しいはずだ。苦しいからこそ、作戦室にこもっている。一夏や信を見舞うだけで、福音が倒せるとでも？」

ラウラの言っていることは正しい。

正しいが……。

三人は言い返す言葉が見つからず、視線を落とす。しばらく黙っている、すっ……と隣の部屋が開き、白衣を着た女性が出てきた。

女性は見ただけで医師だとわかるような雰囲気を放っていた。

「す、すみません！あの……二人は……」

「……あなたたちは？あの子達の友達？」

女医がシャルロットたちに話しかける。

「は、はい。そうです……」

「そう……。織斑くんのほうはとりあえず落ち着いてるわ……でもまだ油断を許さない状態ね」

「し、信は……？」

とたんに女医の顔が曇る。

いい答えが返ってこないのは容易に想像できた。

「正直、生きてるのが不思議ね……とんでもない生命力よ。右わき腹の刺し傷からの大量出血に加えて、内臓破裂、左腕複雑骨折、右足粉碎骨折、あばら骨も二本骨折してる……」

どんだん声がかくぐもっていく。

聞いている四人は言葉がなかった。

「あなたたちみたいな若い子にこんなことを言うのは本当に嫌なん

「だけど……覚悟はしていた方がいいわ……」

そう言っつて女医は白衣を翻して去っていった。

「そん……な……」

あの屈託のない、人懐っこい笑顔。

たまにイタズラっぽい笑顔も見せる、あの少年が死にかけている。

信じられなかった。

信じたくなかった。

……。

沈黙が続く。

今何をすべきか、必死で頭を巡らせる。

行き着く先は皆同じだった。

視線を交わせば、互いの考えが不思議とよくわかる。

皆が無言でうなずいた。

もしかしたら、この選択は間違ってるのかもしれない。

信や一夏のそばにいたべきなのかもしれない。

だけど、いてもたってもいられなかった。

「ただ問題は」

「はっ、はっ、はっ……」

篤は一心不乱に砂浜を走る。
何かから逃げるように、必死で。
自分のせいで一夏が怪我をした。
福音を取り逃がした。
いつのまにか強さに酔いしれていた。
過信していた。
さまざまな罪悪感が篤の心を覆う。

「はっ…はっ…はっ……………」

息が整ってくる、昔のことを思い出した。
小学生の頃の忘れられない思い出だ。

『おい、男女〜！今日は木刀持ってないのかよ〜？』

男女。

篤のことだ。

『うつせえなあ。お前ら暇なら帰れよ。それが手伝えよ』

『なんだよ織斑。お前こいつが好きなのか？』

『こんな男女が好きなのかよ？だよなあ、お前ら、夫婦だもんな〜。
知ってるんだぜ俺。朝からイチャイチャしてるんだろ？』

呆れ顔の一夏に構わず、いじめっ子が続ける。

『だよなー。この前なんか、こいつリボンしてたもんな。男女のく
せに、笑っちゃうよな？』

バキッ！

気付くと、一夏の拳がいじめっ子を殴り飛ばしていた。そのせいで一夏はいろいろ面倒なことになり、学校でもちよっとした騒ぎになった。

『バカだな、お前は…』

剣道の稽古のあと、顔を洗っている一夏にそんなことを言う。

『あんなことをして、あとで面倒なことになるとは思わなかったのか』

『思わねーな。許せないやつはぶん殴る。だからお前も気にすんなよ？前にしてたりボン、似合ってたぞ』

『ふ、ふんっ！私は誰の指図も受けない！』

つい乱暴に言い返してしまっ。

『じゃあな、篠ノ之』

『まっ、待て！』

『？』

『わ、私の名前は箒だ！こ、この道場は父も母も姉もみな篠ノ之なのだから、紛らわしいだろ……次からは名前で呼べ』

今思つと、あからさまな照れ隠しの言い訳だった。

『じゃあ、一夏な』

『なに？』

『名前だよ。織斑は二人いるから、紛らわしいだろ？これからは一夏って呼べよな？』

ニコツとこちらに笑いかける一夏が今でも鮮明に脳裏に焼き付いている。

笑顔

『笑った方が美人だぞ？ 箒』

優しさに溢れた信の顔も頭に浮かんできた。

また、助けられた。

いつも、いつも、いつも。

力を、専用機を、紅椿を手にいれた今でさえも。

私はあいつを助けてやれない。

私は誰も助けられない。

「私は」

海を見つめる箒の髪が風でなびく。

リボンは福音の攻撃を受けたときに焼けてしまった。

「箒」

鈴の声だ。

いつもと変わらない、元気で強気な声だ。

「はぁー……わっかりやすいわね……。落ち込んでますってポーズ？……ふざけんじゃないわよ！」

ぐいっと胸ぐらをつかまれ、無理矢理二人が向き合つ。

「やるべきことがあるでしょうが！今戦わなくてどうすんのよ！」

やるべきこと……。

あつたとしても、私は……。

「……もうISは……使わない……」

「ッ……！」

バチッ！！

頬に鋭い衝撃が走る。

鈴の平手打ちをつけ、砂浜に倒れる。

「甘ったれてんじゃないわよ！専用機持ちっつーのはね、そんなワ
ガママが許されるような立場じゃないの！それともあんたは」

「戦つべき時に戦えない臆病者なの！？」

この言葉で、篝の消えかけていた心の奥底に眠る闘志に火がついた。

「どつしると言うのだ……！もう敵の居場所もわからない！戦えるのなら、私だって戦う！」

やっと自分の意思で立ち上がった箒を見て、鈴が表情を緩める。

「やっとやる気になったわね。あゝあ、面倒くさかった」

鈴の視線の先にはセシリア、シャルロット、ラウラが立っていた。

「な、なに……？」

「みんな気持ちは一緒ってこと」

「負けて終わりでもいいはずがないでしょう？」

箒の顔がぱあっと輝く。

（そうか……）

まだ私には仲間がいた。

だったら、それで充分だ。

「ラウラ、福音は？」

「確認済みだ」

ラウラの右手に『シユヴァルツエア・レーゲン』が部分展開される。

「ここから三十キロ離れた沖合いに目標を確認した。ステルスモードに入っていたが、どうも光学迷彩は持っていないらしい。衛星に

よる目視で発見した」

「さっすがドイツ軍特殊部隊。やるわね」

「お前たちの方はどうなんだ？準備はできているのか？」

「当然。甲龍の攻撃特化パッケージはインストール済み」

自信満々で答えた鈴にセシリアとシャルロットが続く。

「わたくしも完了していますわ」

「僕もオツケーだよ。いつでも行ける」

「まっ、待ってくれ！行くと言うのか…？命令違反では無いのか？」

篤が不安そうな声を出す。

しかし鈴が意味ありげな微笑を浮かべて言い放った。

「だから？あんた今、戦うって言ったでしょ？」

「お前はどつする？」

ラウラが最後の決断を迫る。

その口調は逃げたって誰も責めはしないという感じだった。

「私は……」

ぎゅっと、右手につけられている待機状態の紅椿を握る。

そっだ……私は

「……私も戦う……！今度こそ負けはしない！」

「決まりね。今度こそ確実に落とすわ」

そっだ。

私には仲間がいる。

共に戦う仲間が。

そのための力だ。

今度こそ、一夏を、信を。

みんなを、助けたい………！

「うん！……信だけいいところ取りはないもんね！」

「そうですね！そんなのひどいですわ！」

「嫁のことだ。きっと我々が帰る頃には目覚めているぞ」

「目が覚めたら私たちに心配させたこと、後悔させるてやるんだから」

四人がニヤリと笑う。

「……行くっ」

そして撃墜に向かう専用機持ちたち。

箒は胸に手をあて、自分に再び言い聞かせる。

この力はみんなのために

パチッ……

「……………ん……………」

俺《信》が目を覚ましたのは、真っ白な場所だった。寝たまま首を動かし左右を確認するが、誰もいないし何も無い。ただ、もう一度正面を向いたとき、小さな女の子が俺を覗き込んでいた。

「良かった……！大丈夫？お兄ちゃん」

ぐっと上体を起こす。

「君……誰？」

少女はただにこっと笑い、俺の隣に座った。

真っ黒な髪に真っ黒な瞳、さらに真っ黒なワンピースのような服を着ていた。

ただ、その黒はすべてを包み込むような柔らかい黒だった。

「はあ……………良かった。私、お兄ちゃんが死んじゃうかと思ったんだよ？」

ニコニコと嬉しそうに微笑み続けるこの子にはなんだか見覚えがある気がした。

見たこともないのに見覚えがあるなんて変な話だが。

「俺は……一体……？」

「覚えてないの？」

とたんに今までの出来事をすべて思い出した。
そうだ。

俺は腹を刺されて
無意識に腹の辺りを押さえるが、そこに傷はない。

「あれ？」

確かに、いや間違いなくここに刺さったはずだ。
それで血が出て……。

「まさか、俺死んじゃった？」

ここ天国？

そう言われればそうとも思える。

真っ白で神聖そうだからな。

すると、クスクスと面白そうに少女は笑う。

「言ったでしょ？『死んじゃうかと思った』って。だから、お兄ちゃんはまだ生きてるよ」

「そうか。……ありがとう」

口をついてお礼の言葉が出た。

なんでかわからないが、この女の子に救われた気がする。
何回も、何回も。

そして今日は特に。

「ううん、私はなにもしてないよ」

小さな手を振って否定する女の子の体をよく見ると、至るところに傷ができていた。

火傷のようなあとや、打撲傷、切り傷まであった。

「君……！その怪我……！」

「えっ？ああ、平気だよ。気にしないで」

少女は笑顔を作ったが傷が痛むらしく、少しひきつっていた。俺が呆然としてしていると、少女が再び口を開いた。

「……それよりもお願いがあるの」

「お願い？」

「うん………きいてくれる？」

「ああ。俺なんかで良ければ」

少女は嬉しいですと無言で答えた。

「実はね、どうしても会いたい人がいるんだ」

「会いたい人？」

「うん。その人とお話ができるんだけど、一緒に遊べないの」

「なるほど……どこにいるんだ？」

少女が後ろを振り返って、空間を指さす。

その先には大きな扉が見えた。

その扉は何かを守っているような、何かが閉じ込めているような、そんな感じがした。

「あそこだね？」

隣の少女はこくりと首を動かす。

「行こうか」

立ち上がり、手を握って一歩ずつ扉に向かって歩き始める。
最初にかなりあるなと思っていた扉までの距離が妙に短く感じた。
いざ扉の前に立ってみると、とても大きく、重厚で、一人では開けられそうになかった。

「ここを開けるのか？」

「うん。お兄ちゃんお願い」

「わかった。任せろ」

扉に両手を押しあて力を加えるが、扉はびくともしない。

「くっ……！開け　！」

……ギ……ギ……ギ……ギギギギ……

俺の願いを聞くように、ガコンという音を立てて扉が開ききった。

「ふう……………よし。これでいいのか？」

だが隣には誰もいなかった。

すでに少女はタタタ、と駆け出していた。

ガン！

「あつ！」

俺は叫び声を上げて、少女に駆け寄る。

まるで見えない壁にぶつかるように、少女が後方へ押し戻されたのだ。

「大丈夫か！？」

「いててて……………。えへへ、いつもこうなんだよね……………」

小さなおでこをさすりながら、力なく微笑む。

「大丈夫？ごめんね、いつも……………」

俺でも、この少女でもない声が頭上から聞こえた。

俺が顔を上げると

「君は……………」

「言ったでしょ？』すぐまた会える』って……………」

俺の前に立っていたのはあの真っ白な女の子だった。

海上数百メートルの位置に福音が胎児のように膝を抱えて浮かんでいた。

？

不意に銀の福音が頭を上げる。

直後、超音速で飛来した砲弾が頭部を直撃、大爆発を起こした。

「初弾命中！」

ラウラが叫ぶ。

しかし煙が晴れて見ると、福音はまったく無傷だった。

ゆっくりと翼を広げる様子は、まるで赤子が眠りを妨げられて怒っているようだった。

「続けて砲撃を行うー！！」

五キロ離れた場所に浮かんでいるIS『シユヴァルツェア・レーゲン』とラウラは、福音が反撃に移るよりも早く次弾を発射した。しかし砲撃を全て回避し、福音はスピードを上げ、さらに接近してくる。

「くっ！予想より速い…！」

そして福音は右手を伸ばしてラウラの首を掴もうとするが

「はああああ！」

急降下してきたセシリアがその右手を弾く。

さらにレーザーライフルで追撃を加えるが、なおも福音は超スピードを保ち、そのすべてをかわす。

「かかった！！！」

空高く舞い上がり回避を行った福音に、今度はシャルルが強襲をしかける。

ショットガン二丁による近接射撃を背中に浴び福音は姿勢を崩す。

さらにシャルロットは得意の『フレット・スウィッチ高速切替』によってアサルトカノンを呼び出し、更なる追撃をねらう。

しかし、福音が光の弾丸を射出し応戦する。

「！！！」

その弾丸を防御特化パッケージ『ガーデン・カーテン』を使い防御するシャルロット。

「このくらいじゃ、落とせないよー！」

再び射撃を開始する三人。

次第に消耗していく福音に、海面から突如現れた鈴と箒が追い撃ちをかける。

「はあああ！！！」

箒が斬りかかり、バランスを崩したところで鈴が砲撃を叩き込む。
しかしこれも当たらない。

「くっ！逃がさないわ！」

「「「「「ここで落とす！！」「」「」」」」

全員、気持ちは一つだった。

俺《信》はじっくりと目の前の真っ白な少女を見た。
隣の女の子と対照的に、髪は真っ白、着ているワンピースも真っ白。
ただ、目だけは金色だった。
そのためだろうか、妙に瞳が大きく感じられた。

「どうしてここに？」

「ふふっ。ずっとここにいたよ。わかってるくせに」

何なんだろう。

わからないのだが、わかる気がする。
心のどこかに、この場所やこの少女を知っているところがあるよう
な。

「教えてくれよ。君は一体…？」

白い少女が俺に向かって手をさし出す。

「思い出す覚悟はある?」

「思い出す?何を?」

「君の過去。君の記憶。そして、それは私のもある」

言ってることはわからないが、何をすべきかは理解した。

俺は少女が差し出した手に、自分の手を伸ばす。

俺は何を思ったのか、最初にこの女の子を見たときと場面が重なった。

そして、あ那时的の言葉が頭に響いた。

「…………俺を、助けてくれ」

俺たちの手と手が重なって

「喜んで……」

突然、世界が変わった。

気絶させられていたらしい。
たしか無理矢理、手術を……。

「血圧、心拍数、共に安定しています」

不意に声が聞こえた。

「コアとの適合率は？」

「89パーセントです。これなら、大丈夫そうですね」

「そうか……………」

ニヤリと男が笑った。

「いいかい？君はこれを突破するんだ」

見せられたディスプレイには敵の配置、地雷のポイント、目的ポイントの位置座標が表示されている。

「……………わかりました」

俺は感情のない声をだす。
もう慣れっこだった。

「いい子だ。訓練だからって気を抜いちゃダメだぞ？」

毎日朝から晩まで訓練、訓練、訓練……………
その繰り返し。

だが俺の体に傷はない。
その代わり、疲労は蓄積するのだった。

「絶対防御がうまく働いているみたいだね。本当に素晴らしいよ」
男の顔は喜びに満ちていたが、なんだかひどく残酷な笑みだった。

「……本当に続けていていいのだろうか……」
うしろで白衣に身を包んだ老人が話し出す。

「あなたは優しすぎますよ。実験動物に気をつかう必要はありません」

「……あいつとも話したんだ……。やはり、あいつも疑問を持っているようだ」

「……あなたたちは変わった。『残り少ない人生を共に』なのは勝手ですが、他人の人生まで共にさせるのはお門違いでは？……さっ、行こうか」

男に連れられ、外に出る。

「人生……か……。実験を繰り返すだけの日々が連なっているだけで、それは人生なのか？」

老人の声は、爆弾がはぜる音と、砲撃の音にかき消された。

「地雷を踏んだあと、あれだけの爆撃に耐えるなんて……データは確か？」

「ええ。身体的損傷はありません。本当に信じられませんよ」

「これ、何度目の実験？」

「1278回目ですね。すべてにおいて同じ結果です」

先ほど新たに入ってきた男に、女が話しかける。

「次も問題無さそうね」

「次って何をするんですか？」

「自己進化プログラムによる新たな能力の開発。こればかりは私たちがどこまでできる問題じゃないわ」

「くそ！弾が足りない！もっとよこせ！」

「こっちもだ！」

「やつが来るぞ！撃ちまくれ！」

男たちの怒鳴り声が響く。

俺は走って数十メートルほど離れた距離を一気に詰める。

男たちは俺よりも何歳も年上だったが、そんな俺には関係ない。

ババババツツ！！

ダン！ダン！

銃弾が俺めがけてとんでくる。

それが体に『近づく』たび、痛みがはしる。

しかし、『死にはしない』。

「なんなんだこいつは！ガキのくせに！」

「……………」

相変わらず銃弾は俺に『近づく』が、数センチ手前で跳ね返る。

これまでに俺に届いた兵器は一つもない。

その時は、これからもだと思っていた。

今回の任務 初の実戦 はある組織の『殲滅』。

少なくともできるだけ時間を稼げと言われていた。

また、俺は別に『人質を救え』という暗号通信を受け取っていた。

様々な訓練をしてきたためか、実戦よりも訓練のほうが俺にとつては難しいと感じた。

「ひいー！！」

「くっ、来るなっ！化け物！」

俺が目の前まで来ると男たちは逃げ出した。

それを見届けた俺は、数百人が固まって縛られている同じ部屋の奥の区画に移動した。
縛られている紐をほどいてやると、『人質』というらしい人たちは様々な表情を見せた。
ある人は笑い、ある人は泣き、ある人は怒り、ある人は怯えた。

「よし、行

瞬間、俺は爆風に吹き飛ばされた。

それも一回だけでなく、何十回、何百回も。

……。
……。
……。
しばらくして、爆発がおさまった。

(……………何メートル吹き飛んだらうか)

しばらくそんなことを考え、いくらかの瓦礫から這い出すと、辺りには何もなかった。
あるのは平坦な土地と鼻をつく嫌な火薬と人が焼ける臭いだけ。
この分だと恐らく誰も生きていないだろう。
俺以外は。

ピピッ！

すると通信が入った。

『「」苦勞。作戦完了だ』

「……………人質の解放に失敗しました」

『いや、構わん。もともと、組織を潰すためのエサだったからな。それくらい安いものだ』

そして、通信が切れた。

その日は一日中、珍しく考え事をした。

『安い』と言われたあの人たちは、笑ったり、泣いたり、怒ったり、怯えたりしたとき、一体何を思ったのだろうか

ドカツ！

みぞおちに屈強な男の蹴りが入る。
もう何回目だろうか。

すでに顔は赤くはれ、身体中あざだらけだった。

「どうして……なぜ急に？」

「わかりません。昨日からダメージを与え続けているのですが……」

虚ろな目を開くと、女性がしゃがんで自分を覗き込んでいた。

「……………何が、心配なの？」

俺が聞くと、彼女は目を丸くし、後ろの研究員を見た。

「これが、報告にあった……？」

「ええ。『人の心を見抜く力』が絶対防御発動と入れ替わるように発現しました。」

「そう……。どのくらいの精度で当てられるの？」

「100パーセントです。ただ、内容は読み取れないようですが」

女は落胆した。

『期待外れだ』と。

「あまり役に立たなさそうね。……発現の理由は？」

「わかりません……。ただ、絶対防御が切れると同時に発現したことから、コアの持つ自己進化プログラムにより、新たに開発され『こちらが優先』とされた仮説が有力です」

再び女性が俺を覗き込む。

「あなた、間違ってるわ。戦場ではそんなもの、要らない」

「……廃棄？何を……？」

ニヤリと笑うその微笑みは残酷だった。

「内容が読み取れなくて良かったわね」

けたたましいサイレンが鳴り響く。
俺は老人に抱き抱えられていた。

『緊急！ネットワーク内にウイルス！実験体『PT-000』が逃走！』

うるさいくらいの声が俺の耳に響く。

「大丈夫……私が……必ず……！」

息を切らしながら、外に出る。

そこには一台、車が止まっていた。

「うまくいったみたいね。情報は？」

運転席に座った女性 若くはない。どちらかというところ、年寄りだが肩で息をしている男に話しかける。

「ま、まだまだ……ゼエ……わ、若いもんには……」

「それはいいから。情報は？」

車を発車させながら、女性が再び男に聞く。

「わ、私の技術をもってすれば、データのひとつやふたつ……」

「はいはい、私たち二人とこの子の分のデータはきれいさっぱり消したのね」

「そ、それに加えて…ハア、ハア…あ、あいつらには、私たちが逃走に失敗したように見せかけるためにいろいろしてある…安全だろう」

二人が同時に安堵のため息をつく。

「あなた、名前は？」

「PT-0000」

それが俺の名前だった。

「やっぱり……。わかったわ、あとでいい名前をゆっくりつけてあげる。私たちのことは、お父さん、お母さんって呼ぶのよ？」

まだ息が上がっている『お父さん』に抱かれ、眠りに落ちた。

俺はずっとそわそわしていた。

あの部屋と違って、真っ白くない。
狭くない。

なぜか不安だった。

「どうした？そんなにキョロキョロして」

「何もないから困ってるんじゃないの？」

『お父さん』と『お母さん』がクスクスと笑った。

「……………何が面白いんですか？」

俺はちっとも面白く無さそうな声を出した。

「じふ。よそよそしいわよ」

「……………？どうすれば……………？」

とたんに、二人の顔が曇った。

「なにが……………なにが『かわいそう』なんですか？」

すると、優しく『お母さん』が俺を抱き寄せる。

『お父さん』もそっと俺たちを包むようになる。

「ゆっくり、ゆっくりで、いいんだ……………」

「そっね……………時間はまだあるわ。たっくさん……………」

「信、お父さんを起こしてきてくれないかしら？」

「わかりまし わかった、よ……？お母さん……？」

『教えたでしょ！』とにらまれ、怯みながらも何とか言葉を発する。

「ふわぁ……！おはよう」

「あら。今、信に起こしに行かせようと思ったのに」

信。

真宮 信。

それが新しい俺の名前だった。

「なに！？も、もう一回寝てくる！」

「別に構いません べ、別にいいよ……？」

今度は二人からにらまれた。

二人と暮らしはじめてしばらくたつと、俺はよく笑うようになった。楽しいことが多くなったのも確かだが、人の怒りをかわないように気をつけることも多くなった。

夜、トイレに起きたとき、二人の声が聞こえた。

「あの子、学校でうまくいってないみたい……」

「何でだ？あんなに楽しそうに帰ってくるじゃないか」

「私たちが心配させないようにするためよ……！まだ子供なのに……」

「……やっぱり、常人離れしてる、か……」

「違うわ！あの子は必死で普通になろうとしてる！この前だって、一度見せた本なのに、読んでとせがまれたわ！」

「どづいつことだ？」

「あの子、見たものは全部忘れないらしいの……。たまに、うなされていることがあるわ……。きつと、実験のことを思い出してるのよ……」

「……」

「朝に学校から電話があつたの。『飛び級で卒業させませんか。もう教育は必要ないでしょう』って話だったわ。友達もいないし、先生からは煙たがられるし……辛いはず、ないじゃない……」

声がわずかに涙ぐむ。

「それなのに……どうして笑っていられるの？」

「……信が普通になりたいって言ったよな？間違つてないと思うぞ。けどな、どこかで他と違う自分は他を守らなきゃならないと思ってる。それが義務だと思ってる。だから、弱味を見せたらダメだと思ってるんだ、きつと。他人にはない強さを欲している。『自分は強いから、みんな安心してくれ』ってね……」

沈黙が訪れた。

お母さんのすすり泣きが聞こえた。

俺は二人のいる部屋へ入る。

「お母さん……？僕が嘘をついていたことが『悲しい』の……？」

はっと振り返ったお母さんの瞳を見つめる。

「僕が『優しすぎるから』……？優しいと悲しいの？」

二人と暮らして、俺はよく見れば心の内容まで見抜けるようになっていた。

「違うの……違うのよ……信。さあ、もう寝なさい……」

「信。おやすみ……」

お母さんとお父さんの優しい声に促され、寝室に戻った。

ベットに横になり考える。

そして眠りに落ちていった

朝日が部屋に入ってくる。

眩しい。

「信、朝ごはんよ」

「起きろー、信」

俺は首をかしげる。

「誰？」

「どう？思い出した？」

ガバツ！

勢いよく起き上がると、まだ真つ白な空間にいた。

「俺は……自分で……？」

「そうだよ。無理矢理自分の記憶にふたをかけたんだ。他人の笑顔を守るために」

少女が切なそうに笑った。

「そのあと、それらしい記憶を両親の話から再構築して生きてきた。結果、自分の本当の過去は見えないところに押し込んだ……」

「その時に俺は君も……？」

「うん。私が目覚めたのは最近だよ。ほら、あのとき」

『あのとき』がいつかわかっていた。
はじめてESを触ったときだ。

「じめん……」

「いいんだよ…私は君で、君は私。そうでしょ？」

そうだ。

そうだったんだ。

自分のなかで納得がいった。

俺の中には最初から

「ねえねえ！二人だけずるいよー。私も混ぜてー！」

俺の手を握って駄々をこねる少女の頭に手をのせ、優しく撫でる。

「そうだったな。……さあ、もう壁はないよ」

そう言われて、黒い少女は恐る恐る手を伸ばす。

その手が今まで近くににいるのに触れられなかった相手の手と重なる。
とたんに表情が輝いた。

「やったー！お兄ちゃん！ありがとうっ！」

広い空間を走り回る彼女はとてすばしっこかった。

俺は黒い少女が落ち着いて、再び白い少女と手をつないだときに、
ふと、思い出した。

「そういえば……みんなは……?」

「戦ってるよ。敵と」

「みんな頑張ってるんだよ!」

俺の頭に映像が流れる。

福音と皆が必死に戦っていた。

次々と落とされていく仲間たち。

あれは……!

「一夏……!無事だったのか……!」

「ううん。彼も君と同じように重傷だったよ」

「あのお兄ちゃんもね、頑張ってたまた戦ってるんだよ!」

二人の顔を見る。

二人とも穏やかで、優しい笑顔だった。

「……行くの?」

「ああ。でも、今回は俺一人じゃ力が足りない。……助けてくれるか?」

俺が差し出した手を、二人がそつと握り、同時に口を開く。

「もちろん。これからも、ずっと……」

俺は目を閉じた。

仲間を、大切な人たちを、助けるために

27・重要なのは戦う意思(後書き)

福音戦もいよいよ大詰め。

やってやる………やってやるぜ！

28：守るために傷だらけでも立ち上がれるのが強者の証（前書き）

少女の正体が明らか（？）になるのは次回でした。

すみせんm（——）m

今回は専用機持ちVS福音がついに決着！

それではごつぞ！

28・守るために傷だらけでも立ち上がれるのが強者の証

「一夏っ！一夏なのだな！？体は、傷はっ……………！」

「おう。待たせたな」

箒たちは、一度は倒したと思った福音のセカンド・シフトにより窮地に追い込まれた。

次々と仲間が落とされ、絶体絶命。そこへ、一夏が駆けつけてくれた。

「なんだよ、泣いてるのか？」

「なっ、泣いてなどいない！」

一夏が優しく箒を撫でる。

「ほら、これ使えよ。やっぱり、いつもの髪型の方が似合ってるぞ」

「え……………」

一夏の手にはリボンが握られている。

「誕生日、おめでとう」

「あっ……………」

今日は七月七日。

箒の誕生日だ。

そんなことなど頭から吹き飛んでいたから、筈は驚きの声をあげる。

「じゃあ、行ってくる。まだ終わってないからな」

そう言って、白式第二形態・雪羅^{せつら}を纏った一夏が福音の元へと飛び立っていった。

「一夏……」

俺《一夏》は左手に新たな武器を得た。

「雪羅、『シールドモード』に切り替え!!」

左手を突き出すと零落白夜を利用したシールドが展開され、福音の攻撃を防いだ。

これで、福音の攻撃をすべて無効化できる。

俺が福音のあとを追おうとすると、みんなが集結した。

「すまん回復に手間取った」

「さあ、反撃のお時間ですわよ」

「ラウラ、セシリア……」

「一夏さっさと片付けちゃおうよ」

「エネルギーは充分。僕たちの心配はいらないよ」

「鈴、シャルル……………」

頼もしい仲間が、俺にはいるんだ。

これほど心強いことはない。

「よし！行くか！！」

俺たちは決着をつけるべく、福音のもとへ向かっていった。

「一夏……」

飛び立っていく一夏の後ろ姿を見て、筈は願った。

（私は、ともに戦いたい。あの背中を守りたい！）

すると、紅椿の展開装甲から赤い光に混じって黄金の粒子が溢れ出す。

ワンオフ・アビリティー 『けんらんぶたう絢爛舞踏』

ハイパーセンサーに表示されたエネルギーがみるみる回復していく。

「行くぞ！紅椿！」

一夏から渡されたりボンで髪をまとめ、みんなのあとを追う。
もう迷いはなかった。

「うおおおおー！」

「キイイイイー！！！」

俺と福音がぶつかってははなれ、防御しては攻撃しを繰り返す。

エネルギー残量20%。予測稼働時間、三分。

(くそっ！このままじゃ……！)

焦りで俺はじわじわと追い込まれていく。

「一夏！これを受けとれ！」

「箒！？」

「話はあとだ！早く」

箒の手が俺の手に届くというその時。

「キアアア！……！」

「「「「「信!」「「「「「

喜びと驚きと。

感情のままに名前を叫んだ。

「第!一夏のエネルギーを回復させる!俺が福音を止める!」

「信」

「大丈夫だ!任せろ!」

信はそう叫んで福音にぶつかっていった。

俺《信》は体が軽かった。

全ての痛みと不安が消え去っている。

俺の中のモヤモヤしていたものにすべて納得がいった。

それは今回、『伝えられた』ことがいくつもあるからだ。

まず瞬光について。

もともと『第一世代』として開発されたこの機体は『ISの兵器としての完成』をコンセプトにしてあるので、現行のISにはない実験的な装甲、武装、能力がある。

それらは『ある科学者』の興味本位で創られたもので、それにより操縦難度がケタ違いになり、普通の人間には使いこなせなかった。だから『特殊な』俺を待っていたのだ。

そして、朧火がなぜ『種別：その他』の武器なのか。

答えは、ある一定の決まった種類に『分類できないから』ではなく『すべてに分類されるから』だ。

ーは全、全はー。

朧火はすべての武器であり、すべての武器は朧火なのだ。

いつだって、俺のイメージが朧火に反映された。

だから、俺がイメージすれば『なんにだって』なれる。

最後に、自分の視力が極端に上がっていることだ。

今、俺の眼は残像ができるぐらい金色に光っていた。

闇夜を照らすこの眼は、ただ単純に遠くがよく見えるだけじゃなく、動体視力や視野の範囲が大きく広がっている。

そして他人を捉えると数秒で心を読める。

いや、心が『視える』。

コアシンク口率上昇、98.48%

全リミッター解除、エネルギー増大

「全力でいくぞ！出し惜しみはしない！」

了解

「キイイイ！」

福音が獣のような叫び声をあげ、無数のエネルギーの弾丸を飛ばしてくる。

俺はそれがひどく遅く見えた。これならかわせる。

手足のスラスターを使い、弾幕のあいだを縫うようにしてそのすべてをかわす。

「キイアアアアア!!」

「くらえ!!」

隼火から出た斬撃が敵に向かって飛んでいく。

リミッターを解除し、スピードも威力も桁違いだ。

福音は直撃こそ避けたものの、エネルギーでできた翼の片翼を切り落とされてバランスをくずす。

さらに、回避行動を優先したために俺を見失った。

バキッ!!

ふっとわいて出たように、後ろから回し蹴りをくらわす。

「遅いぜ?手加減してんのか?」

「ギ、キ…キアアアア!!」

失った翼が一瞬で生える。

その瞬間、オープンチャネルで通信が入った。

「信!援護する!!」

ラウラの砲撃が福音をかすめる。

「サンキュー！ラウラ！　　ッ！逃げる！」

目標を変更し、ラウラに向かって光弾を飛ばし始める福音。砲撃に集中しているラウラがそれから逃れるのは不可能だ。なら……！

「一夏！箒！福音を頼む！！」

「ああ！」

福音を二人に任せて俺は瞬時加速でラウラの元へ一気に近付く。

ドドドドッ！！！！

弾があたった大地が爆発する。

ラウラを抱えた俺はすでにその場所にいなかった。

「あぶねえ……ラウラ、ありがとな。助かったよ」

「し」

「この目か？お前の右目と一緒に。なっ？こうしてみると綺麗だろ？」

ラウラが口を開く前に話を続ける。

会話をしなくても、考えていることが手に取るように分かった。

「安心しろ。本当に大丈夫だ。なんてったって、俺はお前の『嫁』」

なんだろ？」

ははっと笑って再び戦場を見ると、福音の攻撃がまさに一夏たちに放たれようとしていた。

「力を貸せ！瞬光！」

俺の肩にレールガンの形の朧火が展開される。ふと、束博士の言葉を思い出した。

『霞がかった朧のように変幻自在、そして不透明。燃え上がる火のようにその勢いはとどまるところを知らず、知らぬ間にすべてを焼き尽くす』

「なるほど……改めて納得だ」

ドンドンドン！……！

「全弾命中！じゃ、行ってくる！」

金色の眼光の残像を残して、俺は眼の端に映ったセシリアを助けに向かう。

すでに福音は一夏と箒を退け、新たな攻撃対象としてセシリアを選んだのだった。

そして今、奴がエネルギーのチャージを終えて極太レーザーをセシリアに放つ。

キュイ……バシユウ！

「！？くっ……！！」

「セシリア！」

間一髪、セシリアを抱き抱え、光線の放たれたエリアを離脱する。

「信さ」

「わかってるさ、セシリア。大丈夫だ」

しかしそこへ福音が連続して光弾を撃ち込んできた。どうやら些細な会話も許してくれないようだ。

「ちっ……！セシリア、武器借りるぞ！」

左手でセシリアを抱き寄せ、臙火が空いた右手にスナイパーライフルを、周りに小型ビットを構成する。

ビットによる射撃が福音の反撃の機会を奪うと同時に移動範囲を狭め、機動を予測しやすくする。

俺はスナイパーライフルの引き金を引き、福音を撃ち抜いた。

「キアアアアア……！！！」

怒ったように身を震わせ、福音が最大出力で全方位射撃を行う。

ハイパーセンサーが海上の鈴とシャルをとらえた。

このままでは二人がああ光弾の雨をもろに浴びてしまう。

「させるか……！」

セシリアを離し、すぐさま瞬時加速で二人のもとに駆けつけて、飛んでくる光弾を楯のように変形させた臙火で防いだ。

光弾は隴火のエネルギーで相殺され、ダメージは皆無。

「無事か？二人とも」

「信！僕」

「お前が心配してくれたのはわかってるよ。ありがとな。言っただけで必ず守ってやるって。それに鈴も」

「なんかあたしは」

「ついでみたいだった？そんなわけねえだろ。鈴、お前も守ってやる。あと武器借りるぞ、二人とも」

両肩に衝撃砲、両手にはマシンガンを二丁かまえ、同時に攻撃を始める。

どちらも隴火が形を変えたものだ。

福音の回避先をうまく誘導し、『ポイント』に誘い込む。

この誘導した『ポイント』は別に最初から決めていた訳じゃない。

俺たちの位置関係から最も適切で、有効な一撃を与えられる所を今判断したのだ。

そして、その有効な一撃を与えるのは

「頼むぞ一夏あ！」

「うおおおお！」

俺の呼び掛けに答えて一夏が瞬時加速で福音をとらえる。

だが紙一重で攻撃をかわされ、再び距離が開く。

さすが軍用ISだけあって、機動力がとてつもない。

「はああああ！」

今度は箒が近付き、鋭い一振りを叩き込む。

だが福音はそれを掴み、逆に箒を逃がさないようにした。

福音の羽に集まったエネルギーが青白い光を放つ。

「貫け！ 隴火！」

槍に変形した隴火が福音のもとへ伸びていく。

その途中で何本にも分岐し、360度死角なく福音を襲う。

箒に当たらないよう細心の注意を払い、俺は隴火にイメージを伝え
た。

だが危険を察知したのか、すぐさま箒を離して回避行動した福音は
上昇、俺たちと距離をとった。

「待て！」

一夏がそれを追って行く。

俺も後に続こうとしたその時。

「信！」

振り向くと、鈴、セシリア、シャル、ラウラが空中に立っていた。

「わかっ
」

「ダメ！ 最後まで言わせて！」

シャルの必死な声に少し驚く。

「あんたずるいのよ！いつも！」

「わたくしたちのことはいつも助けてくださいるのに！」

「私たちにはお前を助けさせてくれない！」

「僕たちだって、助けたいんだよ！」

みんな

今だったらわかる。

どれくらいみんなが心配してくれていたのか。
不安だったのか。

「ごめん……………それよりお前は」

「ほら！また自分のことなんて考えないで僕たちのこと心配してる
でしょ！」

「わかったよ……………。そうだな。そうだよな」

織斑先生の言葉が頭に響いた。

『誰かを助ける人間は必ず、誰かに助けられている。お前だけが特
別な存在じゃないんだ』

金色に輝く目でみんなの顔を一人ずつ見る。

俺が助けた人たち。

そして俺を助けてくれる人たちでもある。

俺は

うまく言葉にできなかったが、それでも、言いたかった。

「俺を助けてくれ、支えてくれ、そばにいてくれ。これからも、ずっと。だから、俺も守り続けるよ、ずっと……」

全員がニツコリと微笑む。

今までで一番いい笑顔だった。

「……もちろん!」「……」

俺も微笑みを返し、何度もぶつかり合って火花を散らす銀と白と赤を見つめ、オープンチャネルの回線を開く。

すでに三機のISは、ハイパーセンサーの補助なしではとらえられない距離まで離れていた。

「一夏!俺が隙を作る!お前はとどめの一撃だけに集中してろ!第

一夏の守りは任せた!」

『わかった!』

もう一度、振り返る。

「行ってくる!」

コアシンク口率、100・02%

トランス・バースト
「超越加速発動」

「！」

みんなの目に映ったのは俺の残像。
もしかして、それすら見る事がなかったかもしれない。
発動の瞬間、俺は福音の前にいた。
あの四人があんなに小さく見える。

「!?!」

「お前の相手は俺だ。今はな」

福音と向き合い、にらみ合う。

エネルギー減少大。残り57%から4%まで減少

「……武器、借りるぞ」

俺の背中に隴火の粒子が展開される。
暖かい光を纏ったそれは巨大な翼の形に収束し、まるで最初から生えていたかのように瞬光と調和した。
溢れるエネルギーが光の雪のように翼から落ちる。

「キアアアア!!!」

福音が次々と弾丸を撃ち込んでくる。

「迎え撃つ!!」

俺の意思に答えるように背中の中無数の弾丸が放たれる。

まばゆい光は俺たちを明るく照らした。

ドドドドドドドド！

空中でお互いのエネルギー弾がぶつかり合い、一個一個の爆発が集まり、巨大な爆発になる。

ドオオオオオン！

ピピピッ！

高エネルギー反応検出

「なめんな！」

キュイ…バシユウ！

先程の連射とは異なり、翼から放たれた一本の太いエネルギーの本流が視界を遮っていた爆煙を貫く。ビームの通ったところの爆煙が晴れて、向こう側の福音も同じようにエネルギーの束を発射しているのが見えた。互いの光線がぶつかり合い、再びまばゆい光が空に満ちる。

ドオオオオオン！

「くっ！」

互角。

俺と福音の距離の midpoint で大爆発が起こり、互いに爆風で吹き飛ばされる。

警告、エネルギー残量1%未満。隴火使用限界、武装強制解除。活動限界。

(頼む瞬光！あと一発だけ、あいつに叩き込ませてくれ！)

了解

「鈴！セシリア！」

「任せなさい！」

「了解ですわ！」

衝撃砲とスナイパーライフルから放たれる弾丸がバランスを崩した福音に命中。

福音は攻撃方向に反転し、反撃を試みる。

「ラウラ！シャル！」

「了解！」

「任せて！」

シャルが福音の攻撃から二人を守り、ラウラが攻撃で動きを止めた福音にさらにレールガンの弾丸を撃ち込む。

たまらず福音が上昇し、空域を離脱しようと試みるが

「チェック・メイト！」

すでにその進行ルート上には俺が待機していた。

最高速度で離脱を試みた福音は急には止まれない。

ガキイーン！

かかと落としが炸裂し、福音は真下に飛んでいく。

なんとか体勢を立て直し、俺を睨むように見上げて攻撃を仕掛けようとするが、福音が注意すべきは上ではなく後ろだった。

「はああああ！」

「!?!」

ズバツズバツ！

振り向いたときにはもう手遅れ。

福音の両翼が箒の刃で切り落とされる。

これで、反撃は封じた。

チャンスは今しかない。

あとはあいつ次第。

「外すんじゃねえぞ！一夏あ！」

「任せろおおおお！」

刹那、福音に零落白夜の刃が突き立てられる。

福音が押し返す力と白式が押しきろうとする力が釣り合い、空中で静止する二機。

「うおおおおお！！」

みんなが俺のもとに集まってくる。

一人一人の顔を見渡し、不思議なことに気付く。

「あれ？みんな、なに考えてんだ？」

「は？」

さっきまで何もかも手に取るようにわかったのに、今はその感覚がない。

それどころか、みんなの心が読めない。

おかしいな。

いつもなら内容まではわからないにしろ、何を考えてるかぐらいはわかるのに。

近くにいた鈴に福音の操縦者を手渡し、改めて首をかしげる。

すると、不思議そうな顔をしていたみんなが一斉にため息をついた。

「それぐらいで済んだら安いもんじゃない」

「どうせ、心が読めたって信はどこかずれてるしね」

「本当、信さんには手を焼かされましたもの」

「うむ。自業自得だな」

「何だかんだで良かったのではないか？信」

みんながニヤニヤして口々にそんなことを言う。

……女子ってひどい。

俺は身も心もボロボロですよ、ホント。

「要するに、信はバカだったことだな」

「いや要してねえよ！ただ俺をバカ呼ばわりしたいだけだろ、一夏」
「！」

「さあ？心を読んでみたらどうだ？」

「わかんないって言ってんだろ！なんかみんな俺に冷たくない！？」

俺以外の全員が声をあげて笑う。

しばらくむっとしていた俺も、気付くと笑っていた。

夜の暗い闇を切り裂いて差し込んできた日の光に包まれた世界で、俺たちの笑い声はとて清んで響いていた。

「いてて……一夏、もうちょい丁寧に扱えよ」

信が顔を歪めながら文句を言う。

「充分丁寧だろ？お前の怪我が酷すぎるんだって」

「そうだったな……」

一夏たちは今、旅館へ帰る途中だった。

信はISを解除すると自力では立ってられないほどに怪我が酷く、

疲労もたまっていた。

怪我についてはシャルロットが分かりやすく説明していたが、信はまるで知らなかったようで、全部聞き終えたときには『なんで生きてんだ？俺……』とひきつった笑いを浮かべていた。

「信さんは本当に人に心配をかけるのがお得意ですわね」

「ごめんごめん」

「本当よ！て言うか、あんた脚折れてるんじゃない？なかつた？なんで歩けないのよ？」

「知らん知らん」

「信？腕も折れてるよね？さっき両腕って言ってたと思うんだけど、本当に大丈夫？」

「言った言った」

「驚異的な回復力だな。流石、私の嫁だ」

「違う違う」

「信……？返事が面倒だと思っただけか？」

「ないない」

「そうだ、信！白式がセカンドシフトしたんだ！今度戦うときは負けないからな！」

「すごいすごい」

「「「「「信(さん)!!」「「「「「」

あまりにも適当な返事にみんなが叫ぶ。
でもみんなはとても嬉しそうな顔だった。
いつもの日々がまた戻ってきた気がして。

「悪い悪い……なんかさ……あれ……?川が見える……」

その発言にみんながぎよっとする。

「信!?その川は絶対渡るな!戻ってこい!」

ふっと、目を閉じた信があのだづらっぽい、でも優しさが溢れているあの微笑みを浮かべる。

「冗談だ……」

みんながほっとして胸を撫で下ろすなか、信がまた話し出す。

「……お前らにはもう、充分助けられたよ……ありがとうな……」

「やめろよ。なんか死にかけみたいじゃないか」

「確かに死にかけてるな……ほら、鬼が地獄門の前で仁王立ちしてるぞ……」

信が指差す先には、千冬が立っていた。

確かに旅館の入り口の門の前で腕を組んで立っている。

隣には喜びに満ち溢れた表情をしている山田先生が立っていた。ゆっくりと歩いていき、二人の前に整列する七人。

「……作戦完了……と言いたいところだが、お前たちは重大な違反を犯した。帰ったらすぐ反省文の提出と懲罰用の特別トレーニングを用意してやるから、そのつもりでいろ」

「……はい」

戦士たちの帰還はそれはそれは冷たいものであった。

「特に真宮。お前にはより厳しいものを用意してやる。下手をすれば命が危なかったんだ。それがどれ程のものかわからせてやる」

ふふふつ…と信が目を閉じて笑う。

「そりやないですよ……俺、今も死にかけてるんですよ……」

千冬が全員に背を向ける。

「だが……まあ、よくやった……」

突然誉められたことを、いや、なぜ誉められたのかを理解できず、みんなが顔を見合わせる。

「本当に……素直じゃないですね……」

「信？」

なんだか急に信の声が小さくなった。

みんなが信の顔を覗きこむ。
意識は辛うじてあるようだが、今にもなくなってしまいそうだった。

「真宮？」

「真宮くん？」

千冬と山田先生も異変に気付く。

信の表情は穏やかで、同時にいつになく弱々しかった。

「ま、でも……みんな無事なら……よ……かつ……た……よ……
ははっ……」

ガクン、と信の首が垂れる。

腕の力が抜け、脚からも体重を支える力がなくなる。

一瞬、時が止まったと思うほどの静寂がその場の全員を包んだ。

「信……？おい……おい！！嘘だろ！なあ！」

一夏が必死で信を揺するが、反応がない。

「山田先生！医療班をすぐ呼んできてください！」

「は、はい…」

千冬の指示が出るとすぐに山田先生が飛んでいった。
信を寝かせて、みんなが涙声で名前を呼ぶ。

「信！俺はお前にまだ何にもできてないんだよ！起きろ！」

「まだ言いたいことが私たちにはたくさんあるのだぞ！こんなので…
…こんなはずりではないか……！」

「信…！またあたしの料理食べてよ……ねえ……！」

「目を……目を開けてください…信さん…！」

「僕のこと守ってくれるんでしょ……？お願い……信……！」

「信！私もお前を一人にしない……！私の嫁はお前だけだ……！」

「真宮！起きろ！戻ってこい！……信！」

全員が一声に叫ぶ。

「「「「「信（さん）！！！！」「」「」「」

……。

……。

……。

……。

……ぴくっ！

「え……？」

確かに。

確かに今、手が動いた。

「し……ん……？」

……。

「……………ZZZZ……………」

「へ？」

「……………うるさい……………ムニヤムニヤ……………」

信がふふつと柔らかな笑みを浮かべて寝返りをうつ。
全員がその場にぺたりと座り込む。

「……………」

「せ、先生！織斑先生！呼んできま……………あれ？どうしたんですか？」

山田先生が息も絶え絶え、医療班と共に駆けてきた。

「山田先生……………そのディスプレイを貸して下さい」

「はい？……………これ、ですか？」

千冬は携帯用ディスプレイを受けとると、寝ている信の頭に振りかざす。

そして

……………ぺしっ……………

やさしく頭を撫でるように、それを押し付ける。

「そんなことだろうと思ったぞ……馬鹿者が……」

「……信らしいな……ふふっ、あはは！」

一夏につられてみんなが涙目で笑い出す。
今度は、嬉し泣きだった。

28：守るために傷だらけでも立ち上がれるのが強者の証（後書き）

はい、なんかどっかで見たことあるようなやり取りでしたが気にしないで下さい。

次回、波乱の臨海学校編完結！

ついに信の秘密が……………！？

それでは次回もよろしくお願ひしますm——（ m

29：『ピザって十回言って』とか、気を抜くと引っ掛かるイタズラって数知れ

いよいよ福音編が終了！

長かったよような短かったよような…。

なんか感慨深いです（^^）

それではどっぞ！

29: 『ピザって十回言って』とか、気を抜くと引っ掛かるイタズラって数知れずある。目を覚ますと、俺《信》はまたあの真っ白い場所にいた。

「やあ……」

穏やかな表情をしたあの白い少女が俺のもとに近付いてきた。

「ありがとう。助かったよ」

「ううん。私も助かったから、お互い様だよ」

俺たちはニツコリと笑う。

「あれ？あの子は？」

「ほら、あそこ。……疲れちゃったんだね」

指差された辺りを見ると、黒い少女が身を丸めて静かに眠っていた。

「そういえば」

「記憶力や運動能力がずば抜けているのは元から君の持っていたものだよ。でも、心を読んだり、嘘を見抜いたりするのは私の能力」

「……………そうみたいだな」

ニツコリと互いに笑いあう。

「でも、今は心が視えないんだ。何でだ？俺と君は、一つのはずだろっ？」

「それはね、今は君の怪我の治療に力を使っているからだよ」

「本当に？何から何まで悪いな」

「気にしないで。……そうだ、大事なことを忘れてたね」

少女の顔が真面目になる。

「君は私を受け入れてくれる？」

「もちろん」

即答だった。

いいえ、なんて答える気などさらさらなかった。
少女がとても嬉しそうに微笑む。

「……ありがとう。それなら安心だよ。力のコントロールは君に任せようと思う」

「そっか」

俺はとても落ち着いていた。

この場所は俺を安心させる。

と、ここであらうと女の子が倒れそうになる。

「お、おい！」

とっさに支える。

近くで顔を見ると、とても疲れているのがわかった。

「なんだ。君も疲れてるのか」

「うん……ちょっとだけ……。でも、ここで寝ちゃったら、傷の手当てが」

「大丈夫だ。自力で何とかする。こついうのはなんだ、えっと……ほら、『名誉の負傷』だ」

「そう……？じゃあ、ちょっとだけ寝せてもらうね……」

「ちょっとだけなんて言わないで、疲れがとれるまで寝てろよ。そつだな……一週間ぐらい」

頭を撫でてやると、少女は気持ち良さそうに目を閉じた。

「うん……。優しいね、君は……」

すると、俺も眠くなってきた。

「じゃあ、おやすみ」

「おやすみなさい……」

そして、まばゆい光が辺りを包み込んだ。

パチッ……

「うっーん……」

俺は背伸びをして起き上がった。

「痛………」

両腕と腹部に痛みが走る。

だがそれ以外はどこも痛みを感じなかった。
どれくらい寝ていたのだろうか、辺りは暗くなっていた。

「……なんか動きにくいな……」

俺の腕には包帯がぐるぐるに巻かれていて、脇腹にも同様に包帯が巻かれていた。

拳を握ろうとするが、痛くて力が入らない。
しばらくは他人の助けが要りそうだ。

ぐう〜

「……腹減ったな……」

すると、なんだかいい臭いがしてきた。

「おっ！飯か？よし、食べに行こう」

すっと立ち上がり、窓際にかけてあった浴衣に袖を通し（メチャメ

チヤ痛かつたけど)、何とか着替え終えた。
ふすまを脚で開けると、目の前に思いもしない人が立っていた。

「あれ？織斑先生？」

「『あれ？』じゃないだろう……。お前、怪我は？」

「腕とわき腹以外は治りました」

しれっとそんなことを言う俺になかば呆れ顔の織斑先生が頭を抱える。

「医者が驚いていたぞ……。『こんなデタラメな回復力、ありえない』とな」

「誉められてるんですかね？それともけなされているんですかね？」

織斑先生が『さあ？』と肩をすぼめる。

ぐう〜

「すみません、飯食ってきていいですか？もう腹が減って……」

「ああ、行ってこい」

それじゃあ、と軽くお辞儀をして廊下を歩いていく。

ちらっと横目で見た織斑先生はいつになく嬉しそうだった。

わいわい…

大広間が近付くにつれ、いつもの賑やかな声が大きくなってきた。大広間の扉の前に立つと、一際大きく声が聞こえた。

「おーい!!」

ピタッ……

声が聞こえなくなる。

「一人で開けられないんだ。入れてくれよ」

まあ開けられないこともないが、食事の場所に足を使って入るのは行儀が悪い気がする。

バン!

「うお!」

あまりにも勢いよく扉が開いたんで、一歩二歩後退りしてしまう。

「信……?」

大広間にはキョトンとした大勢の人が座っていた。なんだ、なんだ?

みんなそんな不思議そうな顔して。

みんなもうほとんど食べ終えていたらしく、俺の食事の前に周りを取り囲むようにみんなが座わり、好奇心に満ちた目で俺を見つめている。

「あー……食べづらいんだけど……」

「いちいち細かいこと気にするんじゃないわよ」

そうは言いますが、ね鈴さん。

さすがにじろじろ見られたら……。

「一夏、何とかしてくれ」

「そうしたいのはやまやまなんだが、俺にはそんな力がない。すまん、信……」

と言いつつ顔は楽しそうにニヤニヤしている。

あの野郎、絶対面白がってやがる。

一夏の裏切り者！

「さあ、料理が冷めてしまいますわ」

「信、私たちのことは気にするな」

「ほらほら、早く早く」

んなこと言われてもな……。ふと箸と目が合った。

「往生際が悪いぞ、信。」

おい。
まだなにも言っていないだろうが。
どうやら助けは見込めないらしい。

「……………」

一応周りを見渡すが、みんな自分の席に戻る気配はない。
俺の目の前には鈴、セシリア、シャル、ラウラ。
そしてその後ろに一夏と篤。
あとのみんなは俺を中心に円になって立っていたり座っていたり。

「わかったよ……食べるよ」

それでいいと言っているようににっこりとみんなが微笑む。

「と、言いたいところだが……」

「どうしたの？」

「これじゃあ、箸持てないんだ」

腕が痛くて力が入らないため、箸をうまく扱えないのだ。
どこかにスプーンとフォークはないだろうか？
それだったら何とか……………。

「食べさせてもらえば？」

「は？」

「いや、だから。誰かに食べさせてもらえば？」

なに言ってるんだよ、一夏。

今度はふざけている様子はなく、素で言っている。

そんな馬鹿なこと

「信、箸貸して」

答える暇もなくシャルがお盆に置いてあった箸を取り、料理をひとつまみ、俺の口元に持ってくる。

え？

えええ？

ええええええ！？

「はい、あーん」

「ちょっと、シャルロットさん！？抜け駆けはいけませんわよ！」

「そうよ！信！次はあたしだからね！」

「私は口移しでも構わんぞ」

いや、俺が構うぞラウラ。

その間もシャルがぐいっと俺に箸を押し付けてくる。

「いいなー、私も真宮くんを食べさせたーい」

「私もー」

「じゃあみんな食べさせたら？」

ぱくっ！もぐもぐ……

「信さん、あーん……／＼」

セシリア、お前もか。

ぱくっ！もぐもぐ……

「……………」

「口移しは却下」

ラウラが口にお茶を含んで『飲め』 確証はないが恐らく と前に唇をつきだしている。

「むづ……仕方ない」

「あちっ！俺は猫舌なんだ！」

「そ、そうか、悪かった。冷ましてやろう」

ふー、ふーっ…

「な、なんですって！？あんなのもオツケーなの！？」

「やったもん勝ちよ！ああ！早く早く！私の番、私の番…」

なんだかどんどん窮地に追い込まれるような……。ていつかいつまでかかるんだ、これ。

結局、一人で食べる時の倍以上の時間をかけて完食した信だった。

(は、話って何かな……もしかして……もしかすると……)

鈴は心臓をばくばくさせて信の部屋に向かっていた。
満月の光でその頬が赤みがかっているのがわかる。

(すうー……はあー……。大丈夫、大丈夫！もしものために、その……し、下着だって着替えてきたんだから！)

こんこん

／＼どうぞー／

すっ……

ふすまを開けたとたん鈴の期待は儚く消えた。

何せ専用機持ち全員がこちらを振り返って見ていたからだ。

「……はあー……」

「鈴さん、みんな気持ちは同じですわ……」

どうやらみんな同じ期待を持って扉を開いたらしい。
その先に見当外れな現実があるとも知らずに。

「なんで俺の部屋に来るたびにそんながっかりしてんだ？」

「いいわよ、もう……」

「それより、信。話ってなんだ？」

「一夏の質問ももっともだ。

何を今更かしこまって」話がある。部屋に来てくれ」なんだろうか。

「ああ、俺の過去についてだ。一緒に戦ってくれたお前らには、話しておこうと思ってさ」

信が微笑む。

そして自分の胸に手を当て、静かに口を開いた。

「実は俺、ここに」

「はあゝあ……………白式には驚くなあゝ」

束が崖に腰掛け、ディスプレイを眺めて嬉しそうに呟く。

「まさか操縦者の生体再生まで可能だなんて、まるで」

「まるで、『白騎士』のようだな。コアナンバー001お前が心血を注いだ一番目の機体にな」

束の背後から千冬が姿を現す。
お互いに顔は見えない。
だけど、何を考えているかはわかる。

「やあ、ちーちゃん」

いつもと変わらぬ挨拶。
友にかける穏やかな挨拶。

「今の話だが、白式だけじゃなく瞬光だって操縦者の生体再生が可能だろう？ そうでなければ信があれだけ驚異的な回復をするはずがない」

束はクスクスと控えめに笑った。

「ちょっと違うかな。どっちかっていうと『自己再生』の方が正しいかも」

「……………?」

「ところでなーに？ ちーちゃん。私に話があるんでしょ？」

「……………例えばの話がしたい。とある天才が一人の男子を高校受験の日にISがある場所に誘導できるとする。そこにあったISを、その時だけ動くようにしておく。すると男が使えないはずのISが使えたように見える」

「うーん、それだとその時にしか動かないよね」

ふふふつと面白そうに話す束。

『そんなことできたらすごいよね』とでも言うように。

「実のところ白式』は』どうして動くのか私にもわからないんだよ
ね。」

「……………まあいい、今度は別の話だ。とある天才が大切な妹の晴れ
舞台上でデビューさせたいと考える。そこで用意するのは専用機とど
こかのISの暴走事件だ。暴走事件に際して妹が乗る新型の高性能
機を作戦に加える。妹は華々しくデビューというわけだ」

千冬は静かに話を続ける。

「だが、そこにはひとつ問題がある。他の高スペック機 いや『
実験機』あるいは『試験機』か？それが簡単に事を片付けてしまう
可能性が高い。そこでわざと偵察に向かわせ、通信を絶って足止め
をすると同時に出撃不可能となるまで徹底的に痛めつける。二度と
立ち上がれないほどに」

束は動かない。

静かに耳を傾けているだけだ。

「しいくんはね、すごく面白いんだよ。……………ねえ、ちーちゃん。
ISのコアが、今世の中にある全部のコアが、『一から数えて』の
数だったら、どうする？」

「……………何が言いたい？」

「コアナンバー・+000とコアナンバー・-000。正真正銘、
一番最初のコアにして、限界を無視して作られたプロトタイプ・コ

ア。二つで一つ、そして始まりを現す『000』であり、互いに引き合うプラスとマイナス、すべてのコアの雛型にして、常に自己進化を続けるコア……………」

風が二人を優しく撫でた。

「プロトコア・プラスの方はいろいろあってね、今までずーっと音信不通だったんだけど、最近突然反応が出たんだ。それでね、その反応はなぜかIS学園を『動きまわって』いたんだ。それも、しくんと『全く同じ軌道』で」

二人とも動かない。

音を立てるのは風と、岸壁にぶつかって碎ける波だけ。

「あとね、プロトコアはひとつじゃうまく稼働しないみたい。『二つ同時に』作ったからかな？瞬光にプロトコア・マイナスを使っていて正解だったかな？どうかね？」

「…………お前、真宮をどこまで知っている？」

「彼はね、プロトコアと『一緒に』進化してるんだよ。それ以外にもいろいろされてたりするんだけど、もうわからなくなっちゃった」

ディスプレイをカタカタとたたく。

先程から様々な方法で何とかしようとするのだが、表示されるウィンドウは結局同じ。

アクセス、拒否されました。こちらからプロトコアへのアクセス不能

「まったく、ひどいよね。まさか、この東さんを閉め出しちゃうなんて」

その声は、出てきた言葉のわりにとても嬉しそうだった。

「私を知ってるのは、しーくんがいろんな規格外の兵器　まあ彼自信が規格外だけど　を使いこなすために、実験と改造を繰り返して受けていた過去を持っているってことだけ」

「なんのためにそんなことがされていたんだ？」

「簡単だよ。『最強の兵器』を作るため。なんでかな、人は力を求めるみたい。使い道があやふやだとしても」

さらさらと風に揺られた木々の木の葉たちが音を立てる。

「現最強の兵器はIS。でも、ISは女性にしか使えない。権力を握っていた男の人たちはそれが面白くなって、何とか男にも使えないかと考えたんだよ」

「……………」

「結論はこうだよ、ちーちゃん。『男がISに乗れないのなら、ISが男に乗ればいい』。過去に一度だけ、成功したきりだけだね」

「そんなバカなことが　」

「信じられない？目の前にしーくんがいるのに？体にプロトコア・プラスを埋め込まれた本人がいるのに？」

千冬は言葉がなかった。

束は満月を見上げ、微笑んでいた。

「……………あとね、プロトコアはこの国にもないISたちと通信を行っていたんだ。……………『時空』とか『時間』とか『世界線』を飛び越えて。きつと、操縦者……………ううん、『共同体』の願いを反映して、未来を覗こうとしたんだよ。辛い未来を、みんなが笑って過ごせる未来に変えるために」

「……………なぜだ？何があいつをそうさせるんだ？」

「強さを持ってしまったゆえに抱える、誰かを助けなければいけないという一方的な責任感、かな？それとも、呪縛……………かな」

再び夜の静寂が二人を包む。

沈黙は夜の闇のように深く長く続いた。

もしかしたら、そう感じるだけで、とても短いものだったのかもしれないが。

「信をその呪縛とやらから助けるにはどうすればいい？」

「うふふ、質問ばっかりだね、ちーちゃん。私もわからないよ、そんなことは。でもね、そういう風にしーくんを助けてくれる人がいれば、大丈夫なんじゃないかな」

千冬は足下に視線を落とした。

束はずっと足をぶらぶらとさせている。

「科学者としてはこれほど魅力的な研究対象はないよ。人と機械のハイブリット。常に予想を越える能力。これから楽しみだな」

束が見つめる満月は不吉なほど丸く、明るく、そして美しかった。

「それにしても、すごい天才がいたものだね。」

突然話題が代わる。

意図的なのか、それとも唐突に思い出したのか。だが千冬は全く動じず、落ち着いて答える。

「ああ。すごい天才がいたものだ。かつて十二ヶ国の軍事コンピュータをハッキングした天才がな。」

「……ねえ、ちーちゃん。今の世界は楽しい？」

「そこそこにな。」

「そうなんだ……。」

「」

崖からの風が、少し強く吹き上げた。

束は何かを呟いたが、その言葉は風の中に消えて誰の耳にも届かなかった。

そしてその場所から風が連れ去っていったかのように、束は忽然と姿を消した。

「とまあ、こんな感じ。質問のあるやつは拳手」

俺《信》はみんなにすべてを話した。

俺の過去に何が遭ったか、そしてどうなったか。

そして、俺の中に何かがあるか。

六人全員が口を閉じる方法を知らないように啞然としていた。

「ないみたいだな。じゃあ、解散！お疲れ様でした！」

「ちよつ、ちよつと待て！」

「なんだね織斑くん？」

「そういうのはいいから！真面目か！？真面目に言ってるのか！？」

嘘なわけないだろう。

わざわざついて何になるんだ？

「本当だ」

そう。

これは真実であり、現実。

「し、信さん？どうして、そんなに大事なことを今まで黙っていらつしゃったのですか？」

「忘れてたからだ」

セシリア、俺だって今日思い出したんだ。

「ではあの目も実験で？」

「ああ、多分な。きつと、お前の右目のやつと同じものだ。試作段階で俺に試したんだと思う」

「ラウラは割と落ち着いてるな。さすが軍人。」

「なるほど、だからあれだけISをうまく乗りこなせるのか……」
「箒は納得したようにうなずく。」

「信は今まで何とも無かったの？」

「特に痛いとかは無かったな」

「俺の心配してくれるなんて、シャルは優しいな。」

「で、今は力使い過ぎて休んでるわけね」

「そうだな。だから心も読み取れなくなってるんだ」

「鈴もどうやら理解してくれたいらしい。」

「他にあるか？無いなら終わりだ」

「信、なんで俺たちに話してくれたんだ？」

「俺はみんなに微笑みかける。」

「一つは、怖かったから。誰かに話して安心したかったんだ」

そう、怖かった。

自分が何なのか、見失いそうだったから。でも

「でも一番は、俺も助けて欲しくなった。助けるだけじゃなくて、みんなに助けてもらいたいと思った」

お前らがそれを気付かせてくれた。

いつの間にか俺は助けられていたのだと。

それなのに、今までずっと見て見ぬふりをしてきた。

俺だけが助ける側の人間としてあるべきだと考え続けてきた。でも、違った。

だから今度は『しっかりと』助けられたい。

「よろしくな」

みんなは笑っていた。

それがひどく嬉しかった。

俺が腕を前に出すと、全員がそれにならって拳をつくる。

コンッ…！

「言われずとも」

「最初っから」

「ずっと」

「僕たちは」

「そのつもりだ」

「信、ありがとう。俺たちもお前に負けないように頑張るからな」

俺たちはニヤリと笑った。

ここからだ。

ここからまた、スタートなんだ。

「む？シャルロットではないか」

「あれ？ラウラ？どうしたの？」

旅館の廊下ではったりと出会う二人。

お互いに約束していた訳でもなく、全くの偶然だ。

「あんたたち、なにしてんのよ」

「あら？皆さんおそろいでどうかなさいましたか？」

そこにまた二人、鈴とセシリアが加わる。

四人が出会ったのは偶然なのだが、理由からしたら必然だった。

「嫁の部屋に行こうと思ってな」

「えっ！信の部屋？僕もだよ」

「あたしもよ！」

「わたくしもですわ！」

全員『本当は二人きりで……』と思ったが、ここまで揃ってしまったら隠し通すのは無理だと判断し正直に言う。

「こういつときこそ隣にいてやるのが理想の夫婦だと聞いたからな」

「僕も信に元気を出してほしくて」

「まあ、ね。ほっとくわけにもいかないし」

「信さん、大丈夫かしら」

それぞれが信のことを気にかけて、何とか助けようと頭を働かせた結果『そっだ、信の部屋に行こう』となったのだった。

こんこん

……。

返事がない。

こんこん

……。

「信？入るよ？」

すっ…

だが部屋には信はいなかった。

それどころか、布団すら敷いていない。

どこへ行ったのだろうか。

「探してみる？」

四人には、どうしても信に聞きたいことがあった。

砂浜に立って、空を見上げる。

空には満月がひとつ、眩しいくらいの輝きを放って浮かんでいた。

だが、その光は俺《信》を心地よい気分させた。

俺は右手を見て、握ったり閉じたりしてみる。

もう痛みは無かった。

「……休んでていいって言ったろ？」

わかってるよ。これで最後。

そんな答えが返ってきた気がした。

波の音がとても静かで、ここだけ別世界のようだった。

と、その音に混じって足音が聞こえてきた。

「……どうした？みんな」

振り返ると鈴、セシリア、シャル、ラウラが立っていた。

「あんだ、無理とかしてないでしょうね？」

「夫婦の間に隠し事は許さんぞ」

「気をつかわなくていいんだよ、信」

「わたくしだって力になりたいですもの」

みんながこちらを真っ直ぐに見る。

強い意思のこもった瞳に月光が反射して、とても美しく見えた。

「ありがとう。本当に大丈夫だ。ただ、まだ少し戸惑ってるだけさ」

風がさらさらと全員の髪を揺らして通り過ぎていく。

俺が笑顔を向けると、みんなが照れたように下を向いて赤くなった。

「と、ところでさ、信」

シャルが先程とはうって変わって言いづらそうに目線を泳がせて話し始める。

「その……あの事なんだけど……だ、誰に言ったのかなって……」

あの事？

どの事だ？

変なこと言った覚えは無いのだが。

状況がわからないでいると、今度は鈴が口を開く。

「あ、あんた言っただじゃない……『俺を支えてくれ』って……」

「よくよく、か、考えてみると、信さんがおっしゃったのって……」

「その、あれか？わ、私たちの誰かと……正式に……その……ふ、夫婦になってほしい、ということか？」

セシリアとラウラも顔を赤くしながら鈴に続く。

ラウラの最後の言葉は小さくて聞き取れなかったが。

「ああ、あれか？あれはみんなに言っただぞ？」

きよとんとしている四人に構わず俺は話を続ける。

「だってそうだろ？あのときはみんな揃ってたし……」

「じゃ、じゃあ深い意味は……」

「？深い意味？どゆこと？」

「……」

「そんなことよりさ、見ろよ。スゲーきれいな星空だ。その上、満月だし」

「……『そんなこと……？』……」

バシユン！

突如、青い光が俺をかすめた。
これはあれだ。

そう、セシリアのビーム兵器だ。

……………え？

「へえ……………そう、そうだったんだ……………」

「……………よし、殺そう」

「いくら嫁といえどもこれは少し仕置きがひつようだな」

「うふ、ふふふふ……………」

え？

ちよ、なに？

なんでIS展開してんの？

なんで武器構えてんの？

嫌な予感がする。

「あ、あは、はは……………」

気付くと俺は笑い声を上げていた。
大量の汗と共に。

「ま、待て！お、落ち着け！ど、どうしたんだよ！…」

「別に？普通だよ、僕たちは。ねえ？」

「そつね」

「そつだな」

「うふ、ふふふふふ…」

目が怖いんですけど。

どうする、俺。

まあ、決まってるじゃないか。

「……………じゃ、おつかれ！」

こういうときは逃げるに限る！

古来から人々にはこういう素晴らしい言葉が伝わってきている。

『逃げるが勝ち』……………と。

「……………待てー！！！！！！……………」

でも逃げ切れねえ！

まずいますまずいますまずい！！

あ、当たるって！

当たるって！

うわぁー……………！！！！

翌朝。

俺はバスの備え付けのトレーのようなものに頭を押し付けていた。

「あー……………」

「お、おい、信？大丈夫か？」

「おー、なんとかー……………」

昨日はあの四人に追いかけられて全力疾走だった…………。
俺、怪我人だからね？
みんな覚えてる？

「いーちかー…………飲み物くれ……………」

「悪いな。今持ってないんだ」

なんということでしょう。
辺りを見回すと…………

ぷいっ、ぷいっ、ぷいっ！

セシリア、シャル、ラウラにそっぽを向かれた。

鈴は二組だからいない。

箒は…………。

なんか頼みづらいな。

昨日俺を助けてくれたのは一夏と箒だった。
ただ俺に気付いたとき、二人はいい感じの雰囲気の中、お互いの顔を近付けていた。

(あれって、キス…できたよなあ。悪いことした)

あとで謝つとこう。

今は水、水を下さい。

「か俺はなぜ昨日追い回されたんだ？

そしてなぜみんな機嫌が悪いんだ？

とりあえず機嫌をなおしてもらおう。

「セシリア……」

ぷいっ！

「そんな顔すんなよ……笑ったほうが美人なんだから……眩しい
くらいの美貌だぜ……」

「そ、そんなことで騙されませんわ！／＼」

ぷいっ！

撃沈。

がつくり。

「ラウラ……」

ぷいっ！

「なあ、俺はお前の嫁だろ……ホント、ラウラみたいなかわいい
女の子の嫁でよかったよ……」

「ふ、ふん！調子のいいことを言っな！／＼」

ぷいっ！

撃沈・その二。
がっかり。

「シャル〜……」

ぷいっ！

「怒ってもかわいいな、シャルって……もつずっと見てても飽きないよー……」

「お、おだてたって許さないんだからねっ！／＼」

ぷいっ！

撃沈・その三。
がっかり。

「あー、俺の喉が砂漠化していく……」

みんな、今こそ俺を助けてくれよ。

(うーん、ちょっと可哀想だったかな……?)

さっきはつい冷たく返したものの、シャルロットは信のぐったりと
している様子を横目で見て、良心の呵責を感じていた。

（真剣に考えてたことをあんなに笑われたから怒っちゃったけど、許してあげてもいいかな……。か、かわいって言われたし……。／＼）

荷物からお茶のペットボトルを取り出す。

乗り込む前に自販機で買っておいたのが役に立ちそうだった。

（みんな動かないみたいだし……。よしっ！）

（さすがに冷たかったかしら……。？）

セシリアはため息を吐き、突っ伏している信を見て少しそわそわとしていた。

せっかく優しくするチャンスだったが、ついあんな態度を取ってしまった。

冷静に考えれば、他の女子が非好意的なのだから、千載一遇のチャンスである。

（そうと決まれば　　）

鞆の中で横になっているペットボトルへと手を伸ばす。

元々自分用に用意していたものだったが、思わぬところで使えそうだった。

（善は急げですわね。ここは笑顔で……。コホン）

(か、かわいい……だと……？／＼)

今回のビーチで新しい一步を踏み出したラウラは、照れ隠しで冷たい反応をしてしまった自分を恨めしく思っていた。

あそこで、笑顔を見せてこそいい女というものではないだろうか。そんなことを考えながら、ではどう巻き返すかと考えるラウラ。

(そう……だな。どうも喉が渴いているようだし、朝方に買ったお茶が使えるか)

さっき取り出しておいたペットボトルをもてあそびながら、どう渡したのかと考える。

せっかく他の女子が引っ込んでいる今こそ、チャンスだと見据えながら。

(うむ。さりげなく隣に座って渡すか。……そ、それなら帰りはずっと隣にいられるな)

「うー……水……」

「「「し、信(さん)……!」」」

「へ?」

三人の声が同時に聞こえて、俺《信》は振り向く。それとほぼ同時に見知らぬ女性が車内に入ってきた。

「ねえ、織斑一夏ちゃんと真宮信くんっているかしら?」

「あ、はい。ここにいますけど」

「はい……」

一夏が返事をし、俺は渋々顔を上げる。
ん?

この人って……。

「君たちがそうなんだ。へえ……」

どうやら俺と一夏を見に来たようだ。

その瞳は興味深そうに俺たちを見つめていた。

「怪我、大丈夫ですか?結構堪えたでしょ?」

「あら?私のこと知ってるの?えっと……」

「ああ、俺が真宮信で、こっちが織斑一夏です」

「一夏が?」となっっているが気にしない。

大方、『知り合い?』みたいなこと考えてるんだろう。

「そう。信くん、あなたは心配されるがわの人じゃないかしら？」

俺の左手に巻かれた包帯を指差して面白そうに微笑む。

「ところで、なんで私のこと知ってるの？」

「そりゃ覚えてますよ。あなたを受け止めたのは俺なんですから。
シルバリオ・ゴスベル
『銀の福音』の操縦者さん？」

「えっ！ほ、本当か！？」

一夏が驚きの声を上げた。

俺も落ち着いて見えるが、これでも驚いているのだ。
まさか俺たちにわざわざ会いに来るとは。

「うふふつ。私はナターシャ・ファイルス。あなたの言う通り、
『銀の福音』の操縦者よ」

へえ、ナターシャさんっていつのか。
美人だな。

ISの操縦者はみんな美人なのか？
それならIS学園が美女揃いなのもわかる。

「これはお礼。ありがとう、白いナイトさん」

ときいきなりナターシャさんは一夏にキスした。
おお〜。

一夏、御愁傷様です。

というのも、後ろを振り返ったときに筭から『ゴゴゴゴト……』とい

う淒まじいオーラが出ていたからだ。
心が読めなくなつてわかるくらい、淒まじいやつが。
一夏、墓石は何がいい？

「さてと」

「俺は遠慮しときます」

だろうね。

流れからいくと今度は俺ですよね。

ナターシャさんのキスを阻止しようと両手で顔を隠す。

「なんで？それくらいはいいでしょ？」

「いや、そういうのは照れるんで」

キスとかされたら顔が爆発しかねない。

ラウラの時はいきなりだったから、照れよりも驚きが勝つたが、今回別だ。

今だって近くに女性の匂いがして、心臓の鼓動が早いのがから。

「そう……残念……」

「へっ!？」

「そうよね……私なんか……はあ……」

「ちつ、違いますよ!？ナターシャさんってすごい美人だからキスされたら嬉しいですから!キスされたくないってわけじゃ全然無いんで!むしろされたいんで!」

急にしゅん……と今にも泣き出してしまいそんな悲しい顔をされたので、何とか元気を出してもらおうと焦っている言葉を繋げる。

「そう……嫌なのね……」

「だ、だから違いますって！な、なんかすいませんでした！」

「……あ」

「あ？」

ナターシャさんは窓の外を見て、何かに気づいたような声を出す。俺はつられて窓の外を見るが、何も無い。

まさか……！

「ちょ、ま」

チュツ……

「どう？私女優になれるかしら？」

ニッコリと満面の笑みを浮かべるナターシャさん。
しまった！

こんな古典的な方法に引っ掛かるとは……！
振り返る前に頬にキスされてしまった。

「な、ななな、なにやってるんですか……！」

動揺を隠せず、言葉が震える。
間違いなく顔が真っ赤になってる。

「うふふ、信くんってかわいい ありがとう、漆黒のナイトさん」

「ううう……なんか悔しい……」

「じゃあまたね。バイ」

ひらひらと手を振ってバスから降りるナターシャ

さんを一夏はぼーっと、俺は悔しさで顔を歪めて見送った。

うー、顔が暑い……。

ヒヤリ……

あれ？

なんか一気に寒くなった。

特に背中が。

冷房入れてくれたんですか？

「……そんなわけではないか」

後ろを振り向くとオーラが三つ、増えていた。

「浮気者め」

「信ってモテるねえ」

「本当に、行く先々で幸せいっぱいなのでしょうね」

すたすたと歩いてくる三人。

ああ、なんで俺がこんな冷たい目で見られなければいけないんだ……。

「」「はい、どござー！」「」

「あべしっー！」「」

投げつけられるペットボトル×三。

こいつらはいっつ、機嫌をなおしてくれるのだろうか。

「……………」

バスから降りたナターシャは、目的の人物を見つけてそちらへと向かう。

「おいおい、余計な火種を残してくれるなよ。ガキの相手は大変なんだ」

そう言ってきたのは、千冬だった。

ナターシャは、その言葉に少しだけにはかんで見せる。

「思っていたよりもずっと素敵な男性達だったから、つい」

「やれやれ……。それより、昨日の今日でもう動いて平気なのか？」

「ええ、それは問題なく。 私は、あの子に守られていましたから」

ここで言う『あの子』とは、つまり暴走によって今回の事件を引き起こした福音のことを指していた。

「やはり、そうなのか？」

「ええ。あの子は私を守るために、望まぬ戦いへと身を投じた。強引なセカンド・シフト……………あの子は私のために、自分の世界を捨てた」

言葉を続けるナターシャは、さつきまでの陽気な雰囲気 など微塵も残さず、その体に鋭い気配を纏っていく。

「だから、私は許さない。あの子の判断能力を奪い、全てのISを敵に見せかけた元凶を 必ず追って、報いを受けさせる」

福音は、そのコアこそ無事であったが、暴走事故を招いたことから今日未明に凍結処理が決定された。

「……………何よりも飛ぶことが好きだったあの子が、翼を奪われた。相手が何であろうと、私は許しはしない」

「あまり無茶なことはするなよ。この後も、査問委員会があるんだろっ？しばらくはおとなしくしておいたほうがいい」

「それは忠告ですか、ブリュンヒルデ」

IS世界大会『モンド・グロツソ』、その総合優勝者に授けられる最強の称号・ブリュンヒルデ。千冬はその第一回受賞者であったが、正直その名前で呼ばれることは好きではなかった。

「アドバイスさ。ただのな」

「そうですか。それでは、おとなしくしていきましょう。……しばらくは、ね」

一度だけ鋭い視線を交わしあったふたりは、互いの帰路につく。

「そうそう。信くんって面白い子ね。私、頑張っちゃおうかしら…」

「びくっ………！」

一瞬、ほんのわずかだけ千冬が反応を見せる。ナターシャはそれを見逃さなかった。

「あら？どうしたのかしら？」

「……からかわれるのは嫌いだ」

「うふふ、ごめんなさい。そうよね。あなただって女の子ですものね」

優しい顔を見せたナターシャも、顔を少しだけ朱に染めた千冬も、再びその一步を踏み出したときには険しい表情に戻っていた。

またいずれ。

そんな言葉が、二人の背中にはあった。

29：『ピザって十回言って』とか、気を抜くと引っ掛かるイタズラって数知れ

いかがでしたか？

うーん……とんでもねえ……とんでもねえよ。

なに書いてるんだ、山嵐……。

はい、ということと頭を切り替えて次話の作成に取りかかりたいと思います。

相変わらずご都合主義になりますのでご了承下さい…… m () m

今後ともよろしく願います！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1074x/>

IS ~ world braker ~

2011年12月8日00時49分発行